姫路市

今宿遺跡 I

緊急街路整備事業山吹線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１

平成２０(２００８)年３月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

姫路市

今宿遺跡 I

緊急街路整備事業山吹線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１

平成20(2008)年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本書は兵庫県姫路市西今宿５丁目に所在する、今宿遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は緊急街路整備事業山吹線に伴うもので、兵庫県中播磨県民局姫路土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成 15 年度と平成 16 年度に本発掘調査を実施した。

3．出土品整理は兵庫県中播磨県民局長の依頼を受けて、平成 18 年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、平成 19 年度は兵庫県立考古博物館が実施した。

4．本書に使用した方位は国土座標（第Ⅴ系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。（世界測地系に換算）

5．瓦の胎土分析は、薄片法でパリノ・サーヴェイ株式会社と蛍光 X 線分析で大阪大谷大学三辻利一先生に依頼した。

6．図版１の地図は国土地理院発行 20 万分の１地形図「姫路」を使用した。
図版３の地図は国土地理院発行２万５千分の１地形図「姫路北部」「姫路南部」を使用した。
図版４の地図は兵庫県土木部発行 10 万分の１「兵庫県地質図（南部）」を使用した。
図版５の地図は明治 39 年、陸軍測地部発行２万分の１地形図「姫路」を使用した。
図版６の地図は姫路市基本地形図を使用した。

7．執筆は、第４章を三辻利一、パリノ・サーヴェイ株式会社が行った以外は篠宮　正が行った。

8．編集は篠宮が行った。

9．本書にかかる写真・図面などの記録や出土した遺物などは、兵庫県立考古博物館に保管している。

10. 発掘調査および報告書作成にあたり、
姫路市教育委員会・姫路市史編纂室・姫路市埋蔵文化財センターの各機関および、
秋枝　芳・今里幾次・大谷輝彦・加藤史郎・小柴治子・多田暢久・田中幸雄・中川　猛
松本正信・三辻利一・山本和子・山本博利・義則敏彦
の各氏にご援助・ご指導・ご教示頂いた。記して深く感謝の意を表する。

今　宿　遺　跡　Ⅰ

緊急街路整備事業山吹線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１

本　文　目　次

例　言

目　次

第１章　遺跡をとりまく環境……1
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1

第２章　調査の契機と経過……3
　第１節　調査の契機……3
　第２節　今宿遺跡の発見……3
　第３節　調査経過および体制……4

第３章　調査の成果……7
　第１節　確認調査の成果……7
　第２節　本発掘調査の成果……7

第４章　自然科学的調査の成果……27
　第１節　今宿遺跡出土瓦の胎土分析……27
　第２節　今宿遺跡出土瓦の蛍光Ｘ線分析……39

第５章　まとめ……42
　第１節　出土瓦の検討……42
　第２節　瓦の統計調査……45
　第３節　出土遺物の検討……47
　第４節　今宿遺跡の性格……48

別表１～８……52～60

図　版……１～68

写真図版……１～87

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　丸瓦凸面叩き目分類……13
第２図　平瓦凸面叩き目分類(1)……16
第３図　平瓦凸面叩き目分類(2)……18
第４図　平瓦凸面叩き目分類(3)……20
第５図　平瓦凸面叩き目分類(4)……22
第６図　鴟尾復原および出土部位……23
第７図　孔隙・砂粒・基質の割合および比較資料（赤坂１号窯）の分析結果……30
第８図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)(2)……35・36
第９図　胎土中の砂の粒径組成(1)(2)……37・38
第10図　今宿遺跡出土瓦の両分布図……40
第11図　姫路窯跡群の両分布図……40
第12図　今宿遺跡瓦地区別出土量……42
第13図　瓦製作技法・凸面調整の比率……43
第14図　今宿遺跡軒丸瓦の復原と辻井廃寺・多哥寺遺跡出土軒丸瓦……44
第15図　軒平瓦第２弧線断面形態……45

表　目　次

第１表　胎土分析試料一覧……27
第２表　薄片観察結果(1)(2)(3)(4)(5)……30～34
第３表　今宿遺跡出土瓦の分析データ……41
第４表　今宿遺跡瓦地区別出土量……42
第５表　今宿遺跡出土平瓦分類……46
第６表　遺物からみた今宿遺跡の消長……48

別　表　目　次

別表１　今宿遺跡軒丸瓦一覧……52
別表２　今宿遺跡軒平瓦一覧(1)(2)……53・54
別表３　今宿遺跡丸瓦一覧(1)(2)……54・55
別表４　今宿遺跡平瓦一覧(1)(2)(3)……55～57
別表５　今宿遺跡鴟尾・塼ほか一覧……57
別表６　今宿遺跡近世瓦一覧……57・58
別表７　今宿遺跡土器一覧(1)(2)(3)……58～60
別表８　今宿遺跡石器一覧……60

図　版　目　次

図版1　遺跡　1 兵庫県の位置　2 姫路市の位置　3 今宿遺跡の位置(1/200,000)
図版2　遺跡　今宿遺跡周辺の主要遺跡一覧
図版3　遺跡　4 今宿遺跡周辺の主要遺跡（1/25,000）
図版4　遺跡　5 今宿遺跡周辺の地質（1/100,000）
図版5　遺跡　6 明治39年の今宿遺跡周辺（1/20,000）
図版6　遺跡　7 今宿遺跡周辺の小字と遺跡（1/10,000）
図版7　遺跡　8 山吹線（西今宿工区）調査位置（1/5,000）
　　9 今宿遺跡の確認調査と本発掘調査の位置（1/1,000）
図版8　遺構　10 遺構配置（1/150）
図版9　遺構　11 土層断面（1/150）　12 土坑SK01（1/30）
図版10　遺物　瓦集積　軒丸瓦①（1～16）M1・M2・M3・M4・M5・M6類
図版11　遺物　瓦集積　軒丸瓦②（17～37）M4・M5・M7・M8類
図版12　遺物　瓦集積　軒丸瓦③（38～49）M9・M10・M11類
図版13　遺物　瓦集積　軒平瓦①（50～57）H1・H2・H3・H5類
図版14　遺物　瓦集積　軒平瓦②（58～66）H1・H3・H4・H5・H6類
図版15　遺物　瓦集積　軒平瓦③（67～74）H5・H6・H7類
図版16　遺物　瓦集積　軒平瓦④（75～83）H7・H8・H9類
図版17　遺物　瓦集積　軒平瓦⑤（84～90）H10・H11・H12類
図版18　遺物　瓦集積　軒平瓦⑥（91～93）H12類
図版19　遺物　瓦集積　軒平瓦⑦（94～102）H13・H14・H15・H16・H17類
図版20　遺物　瓦集積　軒平瓦⑧（103～111）H12・H16・H18・H19・H20・H21・H22・H23類
図版21　遺物　瓦集積　軒平瓦⑨（112～125）H20・H24・H25・H26・H27・H28・H29・H30・H31・H32類
図版22　遺物　瓦集積　播磨国府系軒平瓦（126）
図版23　遺物　瓦集積　丸瓦①（127～129）G1類
図版24　遺物　瓦集積　丸瓦②（130～135）G2・T1類
図版25　遺物　瓦集積　丸瓦③（136～139）T1・T2類
図版26　遺物　瓦集積　丸瓦④（140～145）S1・S2・S3類
図版27　遺物　瓦集積　丸瓦⑤（146～149）S3・S4・S5類
図版28　遺物　瓦集積　丸瓦⑥（150～152）S6類
図版29　遺物　瓦集積　丸瓦⑦（153～155）S6類
図版30　遺物　瓦集積　丸瓦⑧（156・157）S6類
図版31　遺物　瓦集積　丸瓦⑨（158・159）S6類
図版32　遺物　瓦集積　平瓦①（160～163）J1類
図版33　遺物　瓦集積　平瓦②（164～170）J2・J3・L1・L2類
図版34　遺物　瓦集積　平瓦③（171～175）K1・K2類
図版35　遺物　瓦集積　平瓦④（176～179）K2・K3・K4・K5類
図版36　遺物　瓦集積　平瓦⑤（180～185）K5・K6・K7・K8・K9類
図版37　遺物　瓦集積　平瓦⑥（186～191）K9・K10・K11・K12類
図版38　遺物　瓦集積　平瓦⑦（192～196）K13類
図版39　遺物　瓦集積　平瓦⑧（197～200）K14類
図版40　遺物　瓦集積　平瓦⑨（201～204）K15類
図版41　遺物　瓦集積　平瓦⑩（205～208）K16類
図版42　遺物　瓦集積　平瓦⑪（209～212）K16・K17類
図版43　遺物　瓦集積　平瓦⑫（213～217）K17・K18類
図版44　遺物　瓦集積　平瓦⑬（218～221）K18・K19類
図版45　遺物　瓦集積　平瓦⑭（222～226）K20・K21類
図版46　遺物　瓦集積　平瓦⑮（227～230）K22・K23・K24類
図版47　遺物　瓦集積　平瓦⑯（231～234）K24・K25・K26類
図版48　遺物　瓦集積　平瓦⑰（235～238）N1類
図版49　遺物　瓦集積　平瓦⑱（239～242）N1・N2類
図版50　遺物　瓦集積　平瓦⑲（243～245）N2類
図版51　遺物　瓦集積　平瓦⑳（246～249）N3類
図版52　遺物　瓦集積　平瓦㉑（250～253）N3・N4類

図版53　遺物　瓦集積　平瓦㉒（254～257）N4・N5類
図版54　遺物　瓦集積　平瓦㉓（258～263）N5・N6・N7類
図版55　遺物　瓦集積　平瓦㉔（264～268）W1・W2・W3類
図版56　遺物　瓦集積　平瓦㉕（269～271）W1・W3類
図版57　遺物　瓦集積　平瓦㉖（272～274）W1類
図版58　遺物　瓦集積　鴟尾（275～284）A類・B類
図版59　遺物　瓦集積　面戸瓦・塼ほか（285～290）E・G類
図版60　遺物　瓦集積　近世瓦（291～297）
図版61　遺物　瓦集積　土器類①（298～326）
図版62　遺物　瓦集積　土器類②（327～347）
図版63　遺物　瓦集積　土器類③（348～360）
図版64　遺物　瓦集積　土器類④（361～377）
図版65　遺物　瓦集積　土器類⑤（378～396）
図版66　遺物　瓦集積　土器類⑥（397～408）
図版67　遺物　瓦集積　土器類⑦（409～416）・SK01（417～423）
図版68　遺物　瓦集積　石器（S1～S4）

写真図版目次

写真図版1　遺跡　1 今宿遺跡 遠景（南西から）　2 今宿遺跡 近景（南西から）
写真図版2　遺跡　3 今宿遺跡調査地 全景（南西から）　4 瓦堆積 断面（西から）
写真図版3　遺物　軒瓦・軒平瓦付着赤色顔料
写真図版4　遺物　鴟尾
写真図版5　分析　土器胎土薄片①
写真図版6　分析　土器胎土薄片②
写真図版7　分析　土器胎土薄片③
写真図版8　分析　土器胎土薄片④
写真図版9　分析　土器胎土薄片⑤
写真図版10　遺構　5 調査前 全景（南から）　6 調査地 全景（南から）
写真図版11　遺構　7 調査地 全景（北東から）
写真図版12　遺構　8 瓦堆積 断面（西から）　9 瓦堆積状況（北西から）　10 瓦堆積状況（北西から）
写真図版13　遺構　11 調査地 全景（北から）　12 土坑SK01（東から）　13 土坑SK01（北から）
写真図版14　遺構　14～21 作業状況
写真図版15　遺構　22 トレンチ2完掘状況（北から）　23 トレンチ5完掘状況（南から）
24 トレンチ4完掘状況（南から）　25 トレンチ7完掘状況（南東から）
26 トレンチ6南端完掘状況（北西から）　27 トレンチ8完掘状況（東から）
28 トレンチ10完掘状況（西から）　29 トレンチ8西側壁の瓦堆積状況（東から）
写真図版16　遺物　軒丸瓦① M1・M2類
写真図版17　遺物　軒丸瓦② M5類
写真図版18　遺物　軒丸瓦③ M1・M2類
写真図版19　遺物　軒丸瓦④ M2・M3・M4・M5・M6・M8類
写真図版20　遺物　軒丸瓦⑤ M4・M5・M7類
写真図版21　遺物　軒丸瓦⑥ M5・M9・M10・M11類
写真図版22　遺物　軒平瓦① H1・H2・M3類
写真図版23　遺物　軒平瓦② H1・H3・H4・H5類
写真図版24　遺物　軒平瓦③ H4・H5・H6・H7・H8・H9類
写真図版25　遺物　軒平瓦④ H8・H9・H10・H11・H12類
写真図版26　遺物　軒平瓦⑤ H12・H14類
写真図版27　遺物　軒平瓦⑥ H12・H13・H14・H15・H16・H17・H18・H19類
写真図版28　遺物　軒平瓦⑦ H20・H21・H22・H23・H24類
写真図版29　遺物　軒平瓦⑧ H25・H26・H27・H28・H29・H30・H31・H32類
写真図版30　遺物　丸瓦① G1・G2類
写真図版31　遺物　丸瓦② G2類
写真図版32　遺物　丸瓦③ T1・T2類

写真図版33　遺物　丸瓦④ T2・S1・S3類
写真図版34　遺物　丸瓦⑤ S2・S3・S5類
写真図版35　遺物　丸瓦⑥ S3・S4・S6類
写真図版36　遺物　丸瓦⑦ S6類
写真図版37　遺物　丸瓦⑧ S6類
写真図版38　遺物　平瓦① J1類
写真図版39　遺物　平瓦② J1・J2・J3類
写真図版40　遺物　平瓦③ L1・L2類
写真図版41　遺物　平瓦④ K1・K2類
写真図版42　遺物　平瓦⑤ K2・K3・K4類
写真図版43　遺物　平瓦⑥ K5類
写真図版44　遺物　平瓦⑦ K6・K7・K8・K9類
写真図版45　遺物　平瓦⑧ K9・K10・K11類
写真図版46　遺物　平瓦⑨ K12・K13類
写真図版47　遺物　平瓦⑩ K13類
写真図版48　遺物　平瓦⑪ K14類
写真図版49　遺物　平瓦⑫ K14・K15類
写真図版50　遺物　平瓦⑬ K15・K16類
写真図版51　遺物　平瓦⑭ K16類
写真図版52　遺物　平瓦⑮ K16・K17類
写真図版53　遺物　平瓦⑯ K17類
写真図版54　遺物　平瓦⑰ K18類
写真図版55　遺物　平瓦⑱ K18・K19類
写真図版56　遺物　平瓦⑲ K19・K20類
写真図版57　遺物　平瓦⑳ K21類
写真図版58　遺物　平瓦㉑ K22・K23・K24類
写真図版59　遺物　平瓦㉒ K24・K25類
写真図版60　遺物　平瓦㉓ N1類
写真図版61　遺物　平瓦㉔ N1類
写真図版62　遺物　平瓦㉕ N1・N2類
写真図版63　遺物　平瓦㉖ N2・N3類
写真図版64　遺物　平瓦㉗ N3類
写真図版65　遺物　平瓦㉘ N3類
写真図版66　遺物　平瓦㉙ N4類
写真図版67　遺物　平瓦㉚ N4・N5類
写真図版68　遺物　平瓦㉛ N5・N6類
写真図版69　遺物　平瓦㉜ N6・N7・W1類
写真図版70　遺物　平瓦㉝ W2・W3類
写真図版71　遺物　平瓦㉞ W1・W3類
写真図版72　遺物　平瓦㉟ W1類
写真図版73　遺物　鴟尾① A類
写真図版74　遺物　鴟尾② B類
写真図版75　遺物　鴟尾③ B類他
写真図版76　遺物　面戸瓦・塼
写真図版77　遺物　近世瓦
写真図版78　遺物　土器①
写真図版79　遺物　土器②
写真図版80　遺物　土器③
写真図版81　遺物　土器④
写真図版82　遺物　土器⑤
写真図版83　遺物　土器⑥
写真図版84　遺物　土器⑦
写真図版85　遺物　土器⑧　SK01出土遺物
写真図版86　遺物　SK01出土遺物
写真図版87　遺物　石器

第１章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境（図版１・２・３・４）

今宿遺跡は姫路市の中心部の姫路市西今宿５丁目に所在している。姫路市は兵庫県の中西部に位置しており、南は瀬戸内海に面し、南東は高砂市、東は加古川市、北東は加西市、北は神崎郡福崎町・市川町・神河町、北西は宍粟市、西はたつの市と揖保郡太子町と接している。

今宿より北側３㎞の地点では標高 300m を越える書写山・広峰山塊の峡谷を流れてきた夢前川が平野に向かって開けている。今宿遺跡の調査地は相生層群伊勢累層のガラス質～流紋岩質多結晶溶結凝灰岩を基盤とする独立丘陵で、西側には舟越山、北側には振袖山など独立山が存在している。東側に位置する名古山や手柄山などは丹波層群の頁岩・砂岩を基盤としており、今宿の西側とは様相が異なる。

今宿遺跡は標高 30.5m の南北 110m、東西 60m（現在西側の削平により40m）の長円形の独立丘の標高 19m から標高 24m の南斜面に位置する。

今宿遺跡は夢前川水系大井川流域に位置している。今宿遺跡周辺の大井川の流れは袖振山東麓を南に向かって流れ、高岳神社前で南西方向に屈折する。今宿遺跡のある丘陵の西側から南側へ大きく迂回し丘陵の南側から南流している。

鉄道は姫路と岡山県新見を結ぶ JR 姫新線の播磨高岡駅が今宿遺跡の南側にあり、道路は今宿遺跡の南側に国道２号が東西に走り、中世山陽道・古代山陽道もすぐ西側を東西に走っており、今宿遺跡周辺は古代より交通の要衝であった。

第２節　歴史的環境（図版２・３・５・６）

今宿遺跡は姫路市南西部の餝磨郡に所在する。今回中心となる遺物は古代の瓦である。したがって、今宿遺跡周辺地域の古代を中心に前後の時代も含めて時代ごとに概観する。

縄文時代は、辻井遺跡・堂田遺跡・船場川東第３地点などで調査が行われている。辻井遺跡では中期から晩期の土器が多量に出土し、中期の屈葬人骨や晩期の土器棺を検出している。

弥生時代の遺跡は、今宿遺跡・今宿丁田遺跡・名古山遺跡・辻井遺跡・岩端町遺跡・千代田遺跡・西延末遺跡・八反長遺跡・仮称大井川区整地内第６地点・英賀保駅周辺遺跡第４地点・書写横江遺跡・六角遺跡などで調査が行われている。弥生時代前期後半から始まる遺跡には千代田遺跡・八反町遺跡がある。英賀保駅周辺遺跡第４地点で竪穴住居を検出している。弥生時代中期は今宿丁田遺跡・辻井遺跡・名古山遺跡などで竪穴住居を検出している。岩端町遺跡では掘立柱建物を検出している。弥生時代後期は今宿遺跡・今宿丁田遺跡・西延末遺跡などで竪穴住居を検出している。書写横江遺跡では円形周溝墓を検出している。

周辺の銅鐸は仮称大井川区整地内第６地点で破片が出土しており、合わせて鋳型や鏡の粗型などが出土している。名古山遺跡と今宿丁田遺跡では袈裟襷文銅鐸の石製鋳型が出土しており、水尾川流域は播磨における青銅器生産の中心地であった。

古墳時代では八反長遺跡で初頭の方形周溝墓を検出している。

前期古墳や中期古墳は周辺では調査が行われていない。後期の古墳は、山崎山群集墳（７基）・手柄山北丘群集墳（12 基）など丘陵上や丘陵斜面に存在する横穴石室の群集墳の調査が行われている。周

辺には舟越山古墳群（４基）・蛤山古墳群（４基）などが山上や丘陵上に存在しているが、実態は明らかになっていない。規模の大きい横穴式古墳は付近には存在していない。

古墳時代の集落遺跡は今宿町田遺跡があるが、そのほかの遺跡は様相が明らかになっていない。

播磨国府が本町遺跡に推定されており、播磨国分寺・国分尼寺は市川左岸にある。餝磨郡の古代寺院には市之郷廃寺、辻井廃寺、見野廃寺があり、姫路市域の揖保郡の古代寺院は下太田廃寺がある。

７世紀末には今宿遺跡で溝を検出している。山吹遺跡では正方位方向の溝と柱穴を調査している。辻井遺跡からは掘立柱建物や井戸を検出しており、墨書土器や木簡が出土している。今宿丁田遺跡では掘立柱建物を検出している。山所遺跡からは瓦や塼が採集されている。英賀保駅周辺遺跡第４地点では唐三彩の弁口瓶が円面硯や石帯などと共に出土している。

古代における須恵器生産をはじめとする窯業は餝磨郡西部から揖保郡東部にかけて群集している。青山窯跡群・桜峠窯跡群・打越窯跡群・大池窯跡群・赤坂窯跡群・峰相口窯跡群などが存在しており、打越窯跡と赤坂１号窯跡からは鴟尾が出土している。

今宿遺跡周辺の条里地割は宅地化などの開発で失われた地区も多いが、広い範囲に古代山陽道を基準とした北から 23° 東に振る条里地割が残る。安室地区には北から 16° 東に振る条里地割が残る。

『播磨国風土記』には餝磨郡は 16 里が記されており、今宿遺跡周辺は草上村が所在する巨智里に比定されている。『播磨国風土記』に匣丘は今宿遺跡の西側に位置する舟越山に比定されている。平安時代の『和名類聚抄』には餝磨郡は 14 郷が記載され、今宿遺跡周辺は巨智郷、草上郷、辛室郷などに比定されている。

『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条には播磨国に９駅が記載され、周辺に草上駅が置かれ駅馬 30 疋が定数であったが、正確な位置は確定していない。『延喜式』神名帳に記載のあるいわゆる式内社は餝磨郡に四座あり、今宿遺跡の北側の蛤山に高岳神社が鎮座している。もとは八丈岩山に鎮座していたが、天長３年（826）に現在地に遷した。

中世前半には今宿遺跡・英賀保駅周辺遺跡第４地点・仮称大井川区整地内遺跡（第１地点・第３地点・第４地点・第５地点）・岩端町遺跡で掘立柱建物を検出している。中世後半には英賀保駅周辺遺跡第４地点・加茂遺跡で掘立柱建物を検出しており、坂本城跡がある。

『太平記』には後醍醐天皇が「山陽道ヲ不経、播磨ノ今宿ヨリ山陰道ニカヽリ」とあるように今宿は山陽道から山陰道方面への分岐地点でもあった。

調査地点は江戸時代初期には今宿村のうちに含まれており、貞享元年（1684）以前に西今宿村と東今宿村・北今宿村に分村した。姫路藩領に含まれており、幕末に至った。明治４年（1871）の廃藩置県により、姫路県となり、同年府県統合で改置姫路県が置かれた。その後、餝磨県と改称し、兵庫県となった。明治９年（1876）に西今宿村は東今宿村・別所村と合併して今宿村となった。明治 22 年の市制町村制施行により、今宿村は周辺の北今宿村・下手野村・上手野村と合併して餝西郡高岡村となり、昭和 10 年には姫路市と合併した。昭和 56 年から西今宿５丁目と住居表示が変更された。

姫路市は平成８年に中核都市となり、播磨の中心となっている。

第２章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機

１．緊急街路整備事業山吹線の概要

今回の今宿遺跡の発掘調査は、緊急街路整備事業山吹線によるものである。

都市計画道山吹線は、姫路市中心市街地を東西に通過する国道２号から北部市街地を結ぶ南北幹線道路で、姫路市中心部に集中する交通を分散させ、渋滞を解消し道路交通の円滑化をはかるとともに、自転車歩行者道を整備することにより歩行者や自転車の安全確保を目的として事業が計画された。

街路山吹線は姫路市西今宿３丁目を起点として姫路市山吹１丁目を終点とする延長 864 m、幅員 16 m の自転車歩行者道付きの２車線である。

事業は平成４年に事業計画がなされ、平成９年度以降、用地買収の進捗に会わせて依頼を受け、埋蔵文化財の対応を実施してきた。平成 18 年度の供用予定で、継続的に調査を実施してきたが、一部は用地買収の遅れにより、平成 19 年度に埋蔵文化財の発掘調査を行った。

２．埋蔵文化財の対応

緊急街路整備事業山吹線の計画に伴い、兵庫県教育委員会と兵庫県姫路土木事務所とが埋蔵文化財調査の取り扱いに関する協議を行った。事業予定用地内には山吹遺跡と今宿遺跡が存在しているため、確認調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確認することとした。確認調査により埋蔵文化財の存在が確認できた地点については、あらためて協議を行った。工法上保存不可能なため、記録保存を前提とした本発掘調査を行った。

埋蔵文化財の対応は用地買収の進捗に会わせて、平成９年度以降に実施した。平成９年には北端に位置する山吹遺跡の一部の確認調査を実施し、遺跡の存在が明らかになったため、平成 10 年度に本発掘調査を実施した。以後、山吹遺跡は平成 13 年度と平成 16 年度に本発掘調査を実施した。

今宿遺跡は平成 13 年度に初めて確認調査を実施し、遺跡の存在が明らかになったため、平成 13 年度に本発掘調査を実施した。引き続き平成 14 年度も本発掘調査を実施した（今宿遺跡Ⅱ）。

本報告書に所収の今宿遺跡は第３節で詳細に触れるが、平成 14 年度に確認調査を実施し、平成 14 年度と平成 15 年度に本発掘調査を実施した。

今回報告の今宿遺跡より南側の地区は平成 13 年度、平成 17 年度と平成 18 年度に確認調査を実施したが、遺物・遺構とも検出できなかったことから、本発掘調査は必要ないとの取り扱いをした。

平成 18 年度には長らく未買収地であった今宿遺跡と山吹遺跡の間の地点において確認調査を実施し、遺跡の存在が明らかになったため、平成 19 年度に本発掘調査を実施した。

第２節　今宿遺跡の発見

１．今宿遺跡

今宿遺跡の発見は、昭和 46 年３月発行、今里幾次の『姫路市辻井遺跡－その調査記録－』の中で辻井遺跡の関連遺跡として「今宿遺跡」が初めて触れられている。同書の中で「22 年３月 23 日に辻井の西隣の今宿遺跡を踏査」とあり、昭和 20 年代にはすでに発見されていたのである。しかし、公表されたのは後の事である。

同書では採集した瓦の写真を掲載して「播磨国風土記にいう巨智里と草上村についても考えてみなければならないし、それにつれて辻井遺跡の西方約１㎞の舟越山東端部南麓にある今宿古瓦出土遺跡についても、注意を払う必要があるであろう。今宿遺跡については、これを寺跡あるいは窯跡と言い、時には単なる土捨て場とも言って、まだ遺跡の性質は明らかにされていないが、辻井遺跡と同文の複弁８葉蓮華文軒丸瓦とともに重弧文軒平瓦の出土が見られるほか、甎も検出されていることを記述しておきたい。」と重要な指摘を行っている。

２．遺跡地図

これに先立つ、昭和40年３月発行の『兵庫県遺跡地名表』には「今宿遺跡」は記載されていない。遺跡地図類に初めて記載されたのは、昭和43年３月発行の『特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』第１分冊である。「今宿遺跡」は「寺院址」として記載され、現状は「山麓の道路脇に古瓦包含ならびに散乱」「古瓦（軒丸瓦２種　軒平瓦１種　甎）」の遺物があることを詳述している。昭和57年３月発行の『全国遺跡地図　兵庫県』には記載されていなかったが、平成12年３月発行の『兵庫県遺跡地図』には昭和43年３月発行の『特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』第１分冊において「今宿遺跡」としていた地点と北側の平地部分も加えて「今宿遺跡」は「散布地」として記載されている。

今宿遺跡は、過去に発掘調査が行われておらず、今回が初めての発掘調査である。なお、瓦の堆積は丘陵東側の未調査地へ続いている。

第３節　調査経過および体制（図版７）

１．発掘調査の経過

事業予定地は、昭和40年代に今宿遺跡が発見された地点にあたり、瓦が出土することが判明していた。このため、緊急街路整備事業山吹線に伴い、兵庫県姫路土木事務所の依頼によって、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が予定地内の埋蔵文化財の有無について、確認調査を実施し判断することとなった。確認調査により遺跡の存在と範囲が明らかになったため、本発掘調査を実施した。

確認調査

確認調査は、平成14年度に実施し、南側に隣接した地点は平成17年度に実施した。

平成14年度（調査番号2002091）

確認調査は、平成14年５月17日から６月５日にかけて実施した。調査地区は１トレンチから10トレンチの10箇所であり、面積は178㎡である。調査はすべて人力で行い、遺構の有無を判断し遺構面までの深さを確認し、遺物を採集した。

平成17年度（調査番号2005110）

平成17年度の調査は、平成14年度と平成15年度に本発掘調査を実施した地点の南側に延長140mの範囲に５箇所の調査区を設定し、確認調査を行った。調査面積は19.5㎡であり、平成17年６月５日に調査を実施した。

本発掘調査

確認調査の成果に基づき、平成14年度に確認調査を実施した地点の一部について、平成14年度と平成15年度の２箇年にわたって本発掘調査を実施した。

平成14年度（調査番号2002200）

平成14年度の調査は確認調査の成果に基づき、平成15年１月31日から３月11日にかけて実施した。

調査は立木の伐採後、除痕と一部表土を機械で行い、それ以下を人力で遺構検出･遺構掘削をしていった。実際は瓦の採集が主であった。調査中あるいは調査後写真や図面などによる記録をとり調査を進めた。調査面積は 238 ㎡である。

平成15年度（調査番号2003142）

平成 15 年度の調査は実施設計に基づき、平成 14 年度に調査を実施した部分の民地との境界部分で若干発掘区域を控えた東側部分に未調査部分が存在することが判明したため調査を実施した。調査面積は 22 ㎡であり、平成 15 年 12 月 17 日に調査を実施した。

２．出土品整理の経過

出土品の整理は、発掘調査時の取り扱いの回答における協議に基づき実施した。兵庫県中播磨県民局長からの依頼により、平成 17 年度から平成 19 年度に実施することとなり、平成 17 年度と平成 18 年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で、平成 19 年度は兵庫県立考古博物館で実施した。

平成17年度

平成 17 年度は、出土遺物の水洗・注記を魚住分館で行った。平成 17 年度末から仁尾を中心に接合・補強を行いながら、分類を行った。分類は瓦類、土器類、石器類に大きく分類した。さらに瓦類は軒瓦、丸瓦、平瓦に分類し、丸瓦、平瓦は調整により分類を行い、破片点数および隅点数、重量などの統計を取った。

平成18年度

平成 18 年度は、仁尾の兵庫県立陶芸美術館への転出に伴い、篠宮が担当した。平成 17 年度に引き続き、接合・補強を行いながら、分類を行った。分類を行った後、実測や拓本・写真撮影するものを選択した。その後、実測・採拓を行った。土器の復原を行い、石器と合わせて遺物の写真撮影・写真整理を行った。併せて、瓦の胎土分析を入札によりパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

平成19年度

平成 19 年度は、瓦の胎土分析を大阪大谷大学三辻利一先生に依頼した。遺物実測図は遺構図と共にトレースを実施し、レイアウトを行った。原稿執筆・編集を行った後、報告書を刊行した。

３．調査の体制

発掘調査

平成14年度

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　藤本修三

主幹　苦瓜一成、総務課　課長　森　俊雄

主幹　輔老拓治、企画調整班　主任調査専門員　井守得男、主査　甲斐昭光

確認調査（調査番号 2002091）

調査第２班　調査専門員　西口和彦

調査担当：主査　山田清朝、技術職員　小川弦太

調査補助員：森崎由起子

本発掘調査（調査番号 2002200）

調査第３班　調査専門員　小川良太

調査担当：主査　篠宮　正、主任　仁尾一人

調査補助員：森崎由起子

平成15年度

本発掘調査（調査番号 2003142）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　平岡憲昭

主幹　苦瓜一成、総務課　課長　織田正博

主幹　輔老拓治、企画調整班　主査　甲斐昭光

調査第２班　調査専門員　山本三郎

調査担当：主査　篠宮　正

出土品整理

平成17年度

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　平岡憲昭

主幹兼総務課長　大西義明

主幹　輔老拓治、整理保存班　主任調査専門員　池田正男、主査　仁尾一人、主査　菱田淳子

担当：調査第２班　主査　篠宮　正、整理保存班　主査　仁尾一人

日々雇用職員：的場美幸、丸岡瑞恵、小谷桂加

平成18年度

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　平岡憲昭

主幹兼総務課長　若生晃彦

主幹　池田正男

整理保存班　主任調査専門員　岡崎正雄、担当課長補佐　岡田章一、主査　菱田淳子

整理担当：調査第２班　主査　篠宮　正

非常勤嘱託員：柏原美音、佐伯純子、柏木明子、眞子ふさ恵、西口由起、島村順子、木村淑子、小野潤子、奥野政子、又江立子、三好綾子、荒木由美子

日々雇用職員：的場美幸、小谷桂加、藤池かづさ、嶺岡美見

平成19年度

兵庫県立考古博物館

館長　石野博信

副館長（総務部長兼務）　松下信一、総務課　課長　若狭健利、主査　橋本弘昭

埋蔵文化財調査部長　若生晃彦、主幹　岡崎正雄

整理保存班　調査専門員　西口和彦、担当課長補佐　岡田章一、主査　菱田淳子

整理担当：調査第２班　主査　篠宮　正

非常勤嘱託員：佐伯純子、島田留里、吉田優子、三好綾子、嶺岡美見

日々雇用職員：的場美幸、小谷桂加、清水幸子

第３章　調査の成果

第１節　確認調査の成果（図版 7）

確認調査は平成 14 年度に実施した。丘陵全体に幅１ｍのトレンチを 10 本入れ、遺構・遺物の有無を確認した。遺構・遺物が存在する場合は遺構の種類や時代、遺構面までの深さや土層の堆積状況などを確認した。

丘陵の頂部や北側に設定したトレンチ１～トレンチ５は少量の遺物が出土したのみで、遺構は検出出来なかった。丘陵の南側に設定したトレンチ８とトレンチ 10 とトレンチ６の南端は瓦が厚く堆積していた。なお、本発掘調査後の平成 16 年度には本発掘調査地の南側の確認調査を実施したが、遺構・遺物ともに確認出来なかった。このため、今回調査の対象とした遺跡は独立丘陵の南側斜面の一角であることが判明した。なお、今回本発掘調査地点の東側の調査範囲外にも遺跡は広がっている。

以上、確認調査により丘陵の南側斜面の一部に瓦が厚く堆積していることが判明した。これらの結果から、トレンチ８とトレンチ 10 の全域とトレンチ６の南端部分の本発掘調査が必要であると判断した。

第２節　本発掘調査の成果

１．概　要

調査は確認調査の成果に基づき、立木の伐木・伐開を行った後、竹や木の根を中心に機械により掘削を行い、それ以下の掘削は人力で行った。本発掘調査は平成 14 年度と平成 15 年度の２回に分けて行い、調査区面積は 260 ㎡である。調査地の基本層序は表土を除去すると瓦の堆積層か瓦混じりの土層であり、最終面は岩盤である。調査前の標高は 19m ～ 25m であり、調査の結果、瓦の集積と江戸時代の土坑を検出した。記録は、遺構検出時および完掘時において、随時、写真撮影や遺物出土状況図・遺構図および断面図を作成した。

２．遺　構（図版 8・9　写真図版 10 ～ 13）

瓦集積と土坑 SK01 を検出した。

⑴　瓦集積

調査区の南端に位置し、標高 18.5m から標高 21m の南面する斜面に位置する。南端を頂点とする約 50 ㎡に瓦の集積を認めた。深さ最深 80 ㎝であり、上部と西側に行くに従って徐々に浅くなっている。岩盤直上から瓦の堆積を認めた。瓦が主体であり、堆積上部に行くに従って土の比率が高い。表層は竹藪のため根が入り込んでいた。堆積している瓦は小片が大半であり、他に石や土器・石器が僅かに出土した。これらの状況から、耕作不可能な岩山に周囲の田畑の耕作時に拾い集めた瓦を中心とした不要物を集積した場所であると言える。

⑵　SK01

調査区北部の４区の標高 23.2m に位置する。基盤層が岩盤であるため、遺構の形状を説明しにくいが、一辺約 1.2 ｍの隅丸方形で、南側は斜面下部のため壁は検出出来なかった。北側の深さは岩盤の節理で割れがあるため、不明確ではあるが、約 0.5 ｍである。中央部に甕の底部を据えており、周囲から瓦などが出土した。

３．遺　物（図版 10 ～ 68　写真図版 16 ～ 87）

⑴　瓦集積

瓦集積からは瓦塼類と土器類が出土した。瓦塼類は古代のものと近世のものがあるが、ほとんどが古代瓦であるため、近世瓦は別に報告する。瓦類の総数は 92,368 点、9,677 kg出土している。

１．瓦塼類

A　軒丸瓦（1 ～ 49）

軒丸瓦は 49 点出土している。しかし、全体の様相が分るものはほとんど無い。軒丸瓦はすべて複弁八弁蓮華文である。

M1類（2・8）

複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は弁端が尖り、強い反転を示し、外縁中央部までの高さがある。子葉は弁端近くまで達しており、盛り上がりも高い。間弁は楔状を呈し、中房まで達する。弁端は外縁中央部までの高さがある。中房は直立し、１＋４＋８の周環を有する蓮子を配する。内側の蓮子は間弁の中心に、外側の蓮子は子葉間に位置する。外縁は斜縁で素文である。接合する丸瓦は不明である。丸瓦の剥離部分には、丸瓦の未加工凹部に存在した布目の転写痕が残る。８は型笵の木目痕が残る。２は外縁を型笵からはずした後、ナデ調整を行っている。焼成は硬質であり、色調は灰色である。

M2類（1・3～7・13）

複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は弁端が尖り、強い反転を示し、外縁中央部までの高さがある。子葉は M1 類に比べて短い。子葉の盛り上がりは高い。間弁は楔状を呈し、中房まで達する。弁端は外縁中央部までの高さがある。中房は直立し、１＋４＋８の周環を有する蓮子を配する。内側の蓮子は間弁の中心に、外側の蓮子は子葉間に位置する。外縁は斜縁で素文であり、型笵からはずした後、ナデ調整を行っている。接合する丸瓦は不明である。６・７は外縁がはずれ、３・６・７は丸瓦の剥離部分に、丸瓦の未加工凹部に存在した布目の転写痕が残る。13 は型笵を二度押ししている。焼成は硬質であり、色調は灰色である。

M3類（9～12）

複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。中房を欠く。蓮弁は弁端が尖り、反転を示す。間弁は楔状を呈する。外縁は斜縁で素文であり、型笵からはずした後、ナデ調整を行っている。接合する丸瓦は不明である。9・12 は型笵を二度押ししている。焼成は比較的硬質で、灰白色を呈する。

M4類（14・17・20～22・24）

複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。中房を欠く。蓮弁は弁端が尖り、反転を示す。間弁は楔状を呈し、中房まで達する。外縁は丸みを帯びた平縁で素文である。接合する丸瓦は不明である。15・17 は型笵を二度押ししている。焼成は 14･17 が比較的硬質で、14 は灰白色、17 は灰色を呈する。15 は焼成不良で、内面は橙色を呈する。

M5類（15・23・25～37）

複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は弁端が尖り、反転を示し、外縁中央部までの高さがある。子葉は M1 類に比べて短い。子葉の盛り上がりは低い。間弁は楔状を呈し、中房まで達する。弁端は外縁の高さに達しない。中房は直立し、１＋４＋８の周環を有する蓮子を配する。内側の蓮子は間弁の中心に、外側の蓮子は子葉間に位置する。外縁は 23 しか残っていないが、平縁で素文である。接合する丸瓦は不明である。28･30･34 は外縁がはずれており、丸瓦の剥離部分に丸瓦の加工凹部の転写痕が残る。

25・28 は型笵を二度押ししている。15・23・34・25・28・30 には型笵の木目痕が残り、23・24 は同一部分であり、木目痕の数から 23 から 24 へ新しくなっている。焼成は瓦質であり、色調は表面が灰色、内面は灰白色である。

M6類（16）

複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。中房を欠く。蓮弁は弁端が尖り、反転を示す。子葉の盛り上がりは外縁より高い。間弁は楔状を呈する。外縁は幅広の平縁で素文である。接合する丸瓦は不明である。焼成は比較的硬質で、灰白色を呈する。

M7類（19）

複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。中房を欠く。蓮弁は弁端が尖り、反転を示す。間弁は楔状を呈する。蓮弁・子葉・間弁の盛り上がりは低い。外縁は斜縁の素文である。接合する丸瓦は不明である。焼成は比較的硬質で、灰白色を呈する。

M8類（18）

複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。中房を欠く。蓮弁は弁端が尖り、反転を示す。間弁は楔状を呈する。蓮弁・子葉・間弁の盛り上がりは低い。外縁は幅広の斜縁で素文である。接合する丸瓦は不明である。焼成は比較的硬質で、灰白色を呈する。

M9類（38～47）

外縁のみの破片を一括した。38 ～ 41 は斜縁の素文であり、焼成は硬質で、色調は灰色であることから M1 類もしくは M2 類の可能性が高い。42・43 は幅広の平縁で素文である。焼成は比較的軟質で、色調は灰白色であり 16 の外縁に似ていることから M6 類の可能性が高い。44 は丸みを帯びた平縁で素文である。軟質で、色調は灰白色であり、M4 類の可能性が高い。45 は平縁で素文である。焼成は瓦質であり、色調は表面が灰色、内面は灰白色であることから M5 類の可能性が高い。46 は丸瓦との接合部が残っているが、丸瓦の類型は明らかでない。47 は焼成不良で、橙色を呈する。

M10類（48）

中房のみの破片である。周環を有する蓮子が５箇残る。内面は焼成不良で、橙色を呈する。

M11類（49）

瓦当面がはずれた丸瓦の広端面に藁状圧痕が残る。凹面には布端部の痕跡が残る。

B　軒平瓦（50 ～ 126）

軒平瓦は全容が分るものは存在していない。軒平瓦は 77 点出土している。ただし、１点の唐草文軒平瓦を除いてすべて重弧文軒平瓦である。弧線の数は三重弧がもっとも多く、四重弧と二重弧が僅かに存在する。

H1類（50～52・61・62）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦で顎を有する。瓦当面の厚さは 50 が 4.1 ㎝、51 が 3.4 ㎝、52・62 が 3.5 ㎝、61 が 3.7 ㎝である。凹線は極めて浅く丸く、弧線の上面に挽き型が当たっていないため、弧線の縁に盛り上がりがある。凹面は枠板痕と布袋の痕跡を残す。50 は瓦当面から 6.5 ㎝のところで、荒い主体布に細かい補足布を縫い足している。凸面は叩き目をナデ消している。

顎は粘土板を貼り付けた段顎である。顎の長さは 50 が 6.0 ㎝、51 が 5.0 ㎝、52 が 5.4 ㎝、61 が 4.8 ㎝、62 が 4.6 ㎝で、顎の厚さは 50 が 1.1 ㎝、51 が 1.0 ㎝、52 が 1.2 ㎝、61 が 1.4 ㎝、62 が 1.3 ㎝である。焼成は硬質で、灰色を呈する。50 の凸面の顎部には赤色顔料が付着している。

H2類（54）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦である。瓦当面の厚さは3.4㎝である。凹線は極めて浅く丸く、弧線の上面に挽き型が当たっていないため、弧線の縁に盛り上がりがある。

凹面は枠板痕と布袋の痕跡を残す。瓦当面から5.5㎝のところで、荒い主体布に細かい補足布を縫い足している。凸面は叩き目をナデ消している。顎は一度、段顎を作り出した後、粘土を重ねて直線顎にしている。焼成は硬質で、灰色を呈する。

H3類（53・55・56・58・59）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは2.9㎝～3.7㎝である。凹線は極めて浅く丸く、弧線の上面に挽き型が当たっていないため、弧線の縁に盛り上がりがある。

凹面は枠板痕と布袋の痕跡を残す。瓦当面から3.5㎝～6.5㎝のところで、荒い主体布に細かい補足布を縫い足している。凸面は叩き目をナデ消している。焼成は硬質で、灰色を呈する。

H4類（64）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦で、直線顎である。瓦当面の厚さは3.2㎝である。凹線は浅く尖り気味で、弧線の上面に挽き型が当たっていないため、弧線の縁に盛り上がりがある。

凹面は枠板痕と布袋の痕跡を残す。瓦当面から6.4㎝のところで、荒い主体布に細かい補足布を縫い足している。凸面は叩き目をナデ消している。焼成はやや硬質で、灰白色を呈する。凸面瓦当面付近には赤色顔料が付着している。

H5類（57・60・63・68）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦で、直線顎である。瓦当面の厚さは3.0㎝～4.3㎝である。凹線は浅く尖り気味で、弧線の上面に僅かに挽き型が当たっており、中央弧線は丸く作っている。

凹面は枠板痕と布袋の痕跡を残す。瓦当面から4.6㎝～6.5㎝のところで、荒い主体布に細かい補足布を縫い足している。凸面は叩き目をナデ消している。焼成は硬質で、灰色を呈する。

H6類（65～67）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは3.4㎝前後である。凹線は浅く、中央弧線の上面に僅かに挽き型が当たっている。

凹面は枠板痕と布袋の痕跡を残す。瓦当面から66は5.0㎝のところで荒い主体布に細かい補足布を縫い足している。凸面は叩き目をナデ消している。焼成は硬質で、灰色を呈する。

H7類（69～75）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは3.5㎝である。弧線・凹線ともに平坦であり、第１凹線の幅が細く、第２凹線の幅が広い。

凹面は枠板痕と布袋の痕跡を残す。凸面は叩き目をナデ消している。焼成は硬質で、灰色を呈する。

H8類（76～78）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは3.0㎝である。中央弧線は台形を呈し、凹線は底が平坦である。第１凹線の幅が細く、第２凹線の幅が広い。焼成は瓦質で、外面は灰色、内面は灰白色を呈する。

H9類（79～83）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦である。瓦当面の厚さは3.5㎝である。中央弧線は台形を呈し、凹線は底が平坦である。いずれも凹面端部に1.7㎝～2.0㎝幅の挽き型痕が残る。焼成は瓦質で、外面

は灰色、内面は灰白色を呈する。

H10類（84・85）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦である。瓦当面の厚さは 3.6 ㎝である。中央弧線は丸く作っており、第１凹線の中央弧線側の変化点は不明瞭である。凹線は平坦であり、第１凹線の幅が細く、第２凹線の幅が広い。

H11類（86～88）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦である。瓦当面の厚さは 3.5 ㎝である。中央弧線は丸く作っており、上下の弧線および凹線は平坦であり、第１凹線の幅が細く、第２凹線の幅が広い。86 は凹面端部に 1.2 ㎝幅の挽き型痕が残る。

H12 類（89 ～ 93・106）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは 3.2 ㎝である。凹線は深く丸く、弧線・凹線ともに丸みがある。３本の弧線の形と幅は揃っており、２本の凹線の形と幅も揃っている。90・92 は凹面端部を弧線に沿ってケズリを行った後、ナデを行っている。106 は凸面に大きくはみ出しがあるが、ケズリとっていない。

H13類（94）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは 3.0 ㎝である。弧線は台形で、凹線は丸みがある。２本の凹線の形と幅は揃っている。凹面と凸面端部は弧線に沿ってケズリを行っている。

H14類（95～97）

型挽きの三重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは 3.2 ㎝である。弧線は丸く、凹線は平坦である。凹面と凸面ともにケズリを行っている。

H15類（98）

型挽きの三重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは 3.3 ㎝である。弧線は中央が丸く、下端は平坦である。中央弧線が下端弧線より突出している。凹線は平坦であり、上側が細く、下側が太い。凹面と凸面ともにケズリを行っている。

H16類（99～101・104）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは 3.0 ㎝である。弧線・凹線ともに丸みがある。2 本の凹線の形と幅は揃っている。凹面と凸面端部は弧線に沿ってケズリを行っている。

H17類（102）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは 3.3 ㎝である。弧線は中央が平坦で、下端は丸みを帯びている。凹線は丸い。

H18類（103）

型挽きの粘土板桶巻作り三重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは 3.3 ㎝である。弧線・凹線ともに丸みを帯びている。凹面は弧線に沿ってケズリを行っている。凹面は枠板痕と布袋の痕跡を残し、凸面はナデにより、叩き目をナデ消している。

H19類（105）

型挽きの三重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは 4.0 ㎝である。中央弧線は断面が三

角形であり、上下端の弧線は平坦である。凹線は丸みを帯びている。

凹面は布袋の痕跡を残す。荒い主体布に細かい補足布を瓦当面から6.4㎝のところで縫い足している。凸面はナデにより、叩き目をナデ消している。焼成は硬質で、灰色を呈する。

H20類（107・108・113）

型挽きの粘土板桶巻作り四重弧文軒平瓦である。瓦当面の厚さは107が4.3㎝、108が4.8㎝と厚い。弧線・凹線ともに三角形で、深く太い。凹面は枠板痕と布袋の痕跡を残す。凸面は唯一格子叩目を残しK9類の可能性が高い。

H21類（109）

型挽きの三重弧文軒平瓦である。中央弧線は三角形で、下端弧線は丸みを帯びている。凹線は深くＶ字形である。

H22類（110）

型挽きの三重弧文もしくは四重弧文軒平瓦である。中央弧線と下端弧線は台形である。凹線はＶ字形である。凸面端部は弧線に沿ってケズリを行っている。

H23類（111）

型挽きの三重弧文軒平瓦である。中央弧線と下端弧線は丸みを帯びている。凹線は太く丸い。凹面と凸面端部は弧線に沿ってケズリを行っている。凹面は布袋の痕跡を残す。

H24類（112）

型挽きの三重弧文軒平瓦である。上下の弧線は欠いている。中央弧線は幅広の不定形であり、凹線は深い。凹面は布袋の痕跡を残す。

H25類（114）

型挽きの粘土板桶巻作り二重弧文軒平瓦で、顎は直線顎である。瓦当面の厚さは1.8㎝である。凹線は深く丸く、弧線・凹線ともに丸みがある。２本の弧線の形と幅は揃っている。弧線・凹線の形と胎土からH12類と同じ類型の可能性がある。

H26類（115）

型挽きの粘土板桶巻作り二重弧文軒平瓦であり、顎を有する。瓦当面の厚さは2.0㎝である。凹線は極めて浅く丸く、弧線の上面に挽き型が当たっていないため、弧線の縁に盛り上がりがある。

凹面は枠板痕と布袋の痕跡を残す。瓦当面から5.3㎝のところで、荒い主体布に細かい補足布を縫い足している。凸面は叩き目をナデ消している。

顎は段顎で、顎の長さは6.0㎝、厚さは0.6㎝である。焼成は硬質で、灰色を呈する。

H27類（116）

型挽きの二重弧文軒平瓦である。凹線は丸みがあり、途中で、凸面に抜けている。凹面は布袋の痕跡を残し、凸面はナデを行っている。

H28類（117）

型挽きの二重弧文軒平瓦である。凹線は浅く、弧線と凹線は平坦であり、他と異なって荒い作りである。凹面は縦方向の荒い調整を行い、凸面はナデを行っている。色調は橙色である。

H29類（118）

型挽きの三重弧文軒平瓦である。上端弧線は欠けている。中央弧線は三角形で、下端弧線は丸みを帯びている。凹線は深く、丸みがある。凹面は細かい布袋の痕跡を残し、凸面はナデを行っている。

H30類（119）

型挽きの三重弧文軒平瓦である。上端と下端の弧線は欠けている。中央弧線は台形で、凹線は深く、丸みがある。凹面には布袋の痕跡を一部残している。

H31類（120～124）

瓦当面の一部が剥離しているため、弧線の数は不明であるが、三重弧文軒平瓦であると考えられる。

H32類（125）

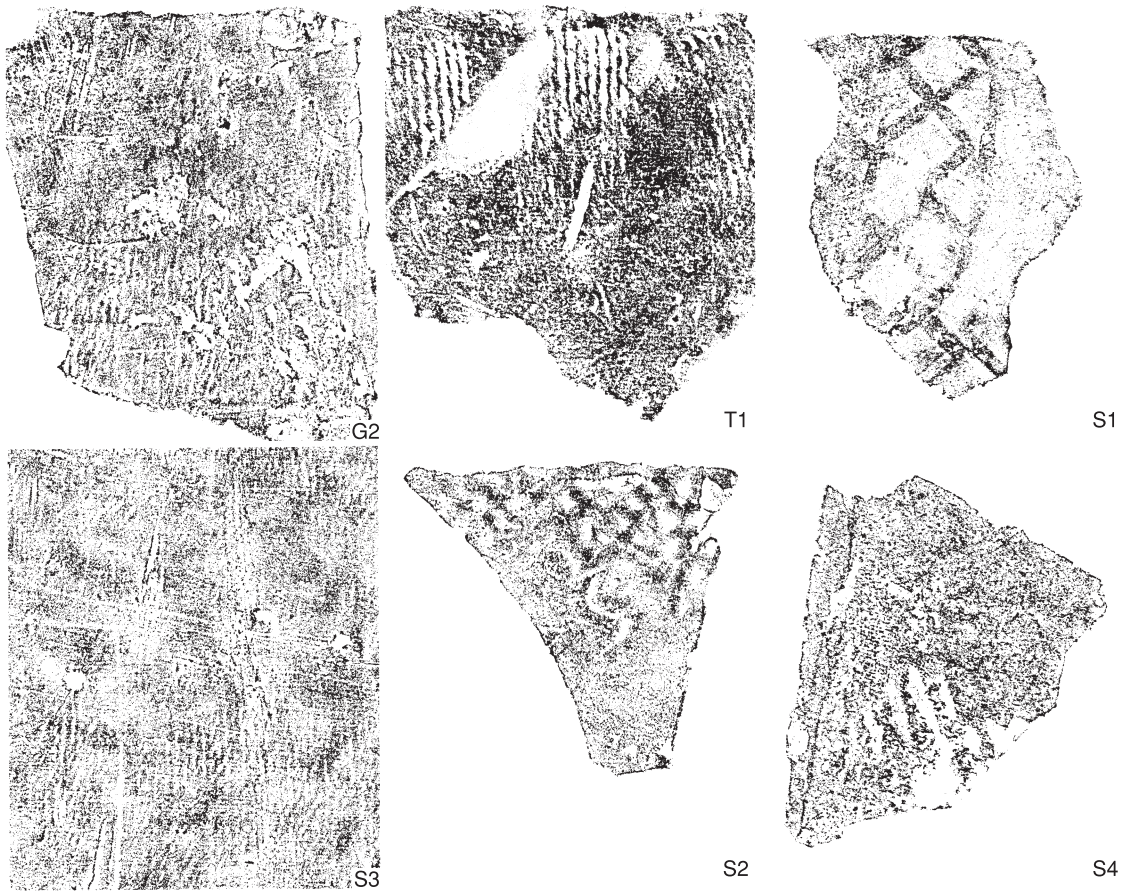
型挽きの四重弧文軒平瓦である。凹線は極めて細く、浅い。凹面は布袋の痕跡を残す。凸面は縦方向の縄目叩き目を残す。磨滅が著しいため詳細な類型は不明である。

播磨国府系瓦（126）（図版 22）

１点のみ出土している。均整唐草文軒平瓦である。外区に珠文帯、内区に唐草文を配する。顎は曲線顎である。播磨国府系瓦のいわゆる古大内式軒平瓦である。

C　丸瓦（127 ～ 159）

丸瓦の総数は 27,142 点、2,407 kg出土している。しかし、瓦全体の様相が分るものはほとんど無く、小破片が多いため､狭端部の形態を基準に分類した。狭端部の形態は行基式と玉縁式の２形態があるが、ほとんど個体は区別が困難である。成形技法は行基式と玉縁式ともにすべて粘土板巻きつけ技法を用いており、粘土紐巻きつけ技法によるものは無い。凸面の叩き目はナデ等により残存が確認出来るものは少ないが、平行叩き目、格子叩き目、縄叩き目が存在している。ここでは、凸面の成形手法が判別するものを中心に報告することにした。なお、側面整形手法・端面整形手法の分類は市之郷遺跡の山田の分



第1図　丸瓦凸面叩き目分類

類（兵庫県教育委員会 2005）にしたがった。

行基式（127 ～ 133）

G1類（127～129）

行基式の丸瓦の中で、ナデにより叩き痕跡が不明なものである。127・129 の狭端部は未調整である。128 の狭端部凸面はケズリを行っている。

G2類（130～133）

行基式の丸瓦の中で、凸面に縄叩き目の痕跡を残すものである。細かい縄目叩きの後、回転を利用した強いナデを行っているため、縄叩き目の痕跡は弱い。

玉縁式（134 ～ 139）

T1類（134～136）

玉縁式の丸瓦の中で、凸面に縦位の縄叩き目の痕跡を残すものである。縄叩き目は縦もしくは斜め方向であり、G2 類に比べて荒い。凹面は布目痕が残る。玉縁の長さは 134 が 4.4 ㎝、135 が 6.2 ㎝である。焼成は軟質で灰黄色もしくは灰色を呈する。

T2 類（137 ～ 139）

玉縁式の丸瓦の中で、ナデにより叩き痕跡が不明なものである。玉縁の長さは 137・139 が 6.2 ㎝、138 が 5.8 ㎝である。焼成は軟質で灰黄色を呈する。

その他（140 ～ 159）

狭端部の形態が不明なものをその他として一括して扱う。

S1類（140～143）

狭端部の形態が不明なもので、凸面に正格子叩き目を施すものである。格子一辺 1.2 ㎝の正格子で浅く、瓦の軸に対して斜交している。

S2類（144）

狭端部の形態が不明なもので、凸面に詳細な叩き目は不明であるが、細かい格子叩き目を施した後、強くナデを行っている。

S3類（145～147）

狭端部の形態が不明なもので、凸面に縦位の縄叩き目を施し、回転を利用した強いナデを行っているものである。技法と胎土などから G2 類と同一であると考えられ、行基式の可能性が高い。145 の凹面は粘土板の張り合わせ痕と布袋の綴じ合わせ痕が重なっている。

S4類（148）

狭端部の形態が不明なもので、凸面に斜位の平行叩き目を施し、強いナデを行っているものである。細かい布目痕跡も残っている。

S5類（149）

狭端部の形態が不明なもので、凸面に回転ナデ調整を行っており、一部に布目が残る。凹面は荒い布目痕跡が残っている。

S6類（150～159）

狭端部の形態が不明なもので、凸面はいずれもナデ調整を行っている。150 ～ 154・156 ～ 159 は広端部が残っている。凹面は布目痕跡が残り、151・153・157 は粘土板製作時の切り離し痕跡が明瞭に残っている。159 は凹面の布綴じが明瞭に残る。154 は布袋端部の痕跡が残る。

D　平瓦（160 ～ 274）

平瓦の総数は 64,943 点、7,245.47 kg出土している。しかし、瓦全体の様相が分るものはほとんど無く、小破片が多いため、凸面の叩き目などの最終成形手法を基準に分類した。最終成形手法は平行条線・平行叩き目・格子叩き目・縄目叩き目・無文叩き・ナデに大別して、それぞれ細分した。なお、側面整形手法・端面整形手法の分類は市之郷遺跡の山田の分類（兵庫県教育委員会 2005）に従った。

平行条線

J1類（160～163）

粘土板桶巻作りである。凸面は幅約７㎝に 10 本の条線がある工具で施文している。横方向を中心に、160・161 は斜めにも施文している。凹面は布袋の痕跡が残り、一部ナデ消している。163 は枠板痕が残る。161・162 は粘土板製作時の切り離し痕跡が残っている。

J2類（164・165）

粘土板桶巻作りである。凸面は幅約 2.5 ㎝に８本の条線がある工具で横方向に施文している。凹面は布袋の痕跡が残り、一部ナデ消している。164 は枠板痕が残る。

J3類（166）

粘土板作りである。凸面は幅約６㎝以上に６本以上の条線がある太い工具で斜め方向に施文している。凹面は布袋の痕跡が残っている。

平行叩き目

L1類（167・168）

粘土板一枚作りである。凸面は右上がりの平行叩き目を残す。叩き目は、幅 3.6 ㎝あたり７本の密度の工具で叩いている。凹面は布の痕跡が残っている。167 は側面まで布目が残り、広端部には布端部の痕跡が残る。一隅を僅かに切り落としている。

L2類（169・170）

粘土板一枚作りである。凸面に乱れた布目痕の上に右上がり、あるいは縦位の平行叩き目を施す。叩き目は、幅 3.6 ㎝あたり７本の密度の工具で叩いている。凹面は荒い乱れた布目が残り、170 の広端部の一部にも布目痕が残る。

格子叩き目

K1類（171）

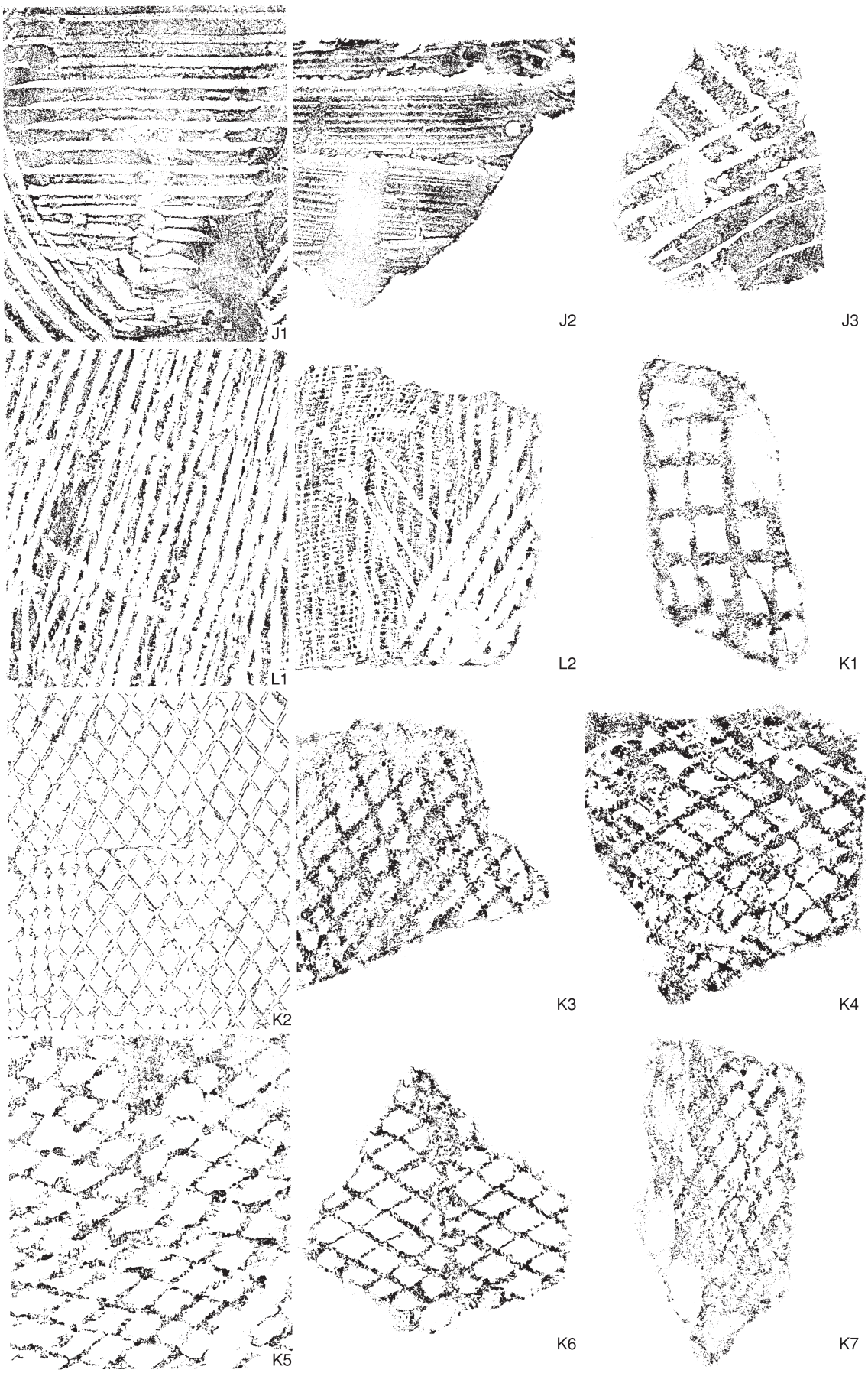
凸面は唯一の正格子叩き目である。一辺 1.3 ㎝× 1.0 ㎝の長方形で、長辺が縦位に平行している。深さは３㎜程度と深い。凹面の布目は磨滅のため残っていない。

K2類（172～176）

粘土板桶巻作りである。凸面は斜格子叩き目で叩き板の幅は６㎝程度である。斜格子は菱形で対角は長軸 1.0 ㎝程度×短軸 0.7 ㎝程度で、長軸が縦位に平行している。凹面は布目が残り、176 は明瞭な枠板痕が、172・173 は布綴じ痕と粘土板製作時の切り離し痕が残っている。

K3類（178）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、叩き目は不明瞭である。斜格子は平行四辺形で対角は長軸 1.1 ㎝程度×短軸 0.7 ㎝程度で、長軸が縦位に平行している。格子底部は凹凸がある。凹面および側面には布目が残っている。



第2図　平瓦凸面叩き目分類(1)

K4類（177）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、叩き目は不明瞭である。斜格子は大小の菱形や平行四辺形が混じっており対角は長軸 1.6 ㎝～ 1.2 ㎝程度×短軸 1.2 ㎝～ 0.8 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。凹面の布目は乱れている。

K5類（179～181）

粘土桶巻作りである。凸面は斜格子叩き目で、叩き目は不明瞭である。斜格子は大小の平行四辺形が混じっており対角は長軸 1.8 ㎝～ 1.4 ㎝程度×短軸 0.9 ㎝～ 0.8 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。凹面は布目が乱れている。179 は粘土板貼り付けの剥離痕が存在している。

K6類（182）

粘土板桶巻作りである。凸面は斜格子叩き目で、叩き目は深い。斜格子は菱形で対角は長軸 1.4 ㎝程度×短軸 0.8 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。凹面は布目を一部残し、ナデ消している。

K7類（183）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、叩き目は重複が著しい。斜格子は菱形で対角は長軸 1.2 ㎝程度×短軸 0.8 ㎝程度で、長軸が縦位に平行している。凹面は布目が残る。

K8類（184）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は不定形で揃っていない。対角は長軸 1.3 ㎝～ 0.9 ㎝程度×短軸 1.1 ㎝～ 0.7 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。凹面は隅に布端部が残り、布目が存在していない部分が残る。

K9類（185～188）

粘土桶巻作りで比較的厚い。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は大小の菱形・平行四辺形や不定形など混じっており揃っていない。対角は長軸 0.9 ㎝～ 0.5 ㎝程度×短軸 0.7 ㎝～ 0.4 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。凹面は布目と枠板痕が存在している。

K10類（189）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は右上がりの平行四辺形である。対角は長軸 1.8 ㎝程度×短軸 1.2 ㎝程度で、長軸が縦位に平行している。凹面は布目が存在している。

K11類（190）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は正方形・長方形や不定形など混じっており揃っていない。対角は長軸 1.7 ㎝～ 1.4 ㎝程度×短軸 1.2 ㎝程度で、長軸は左上がりである。凹面は布目が磨滅している。

K12類（191）

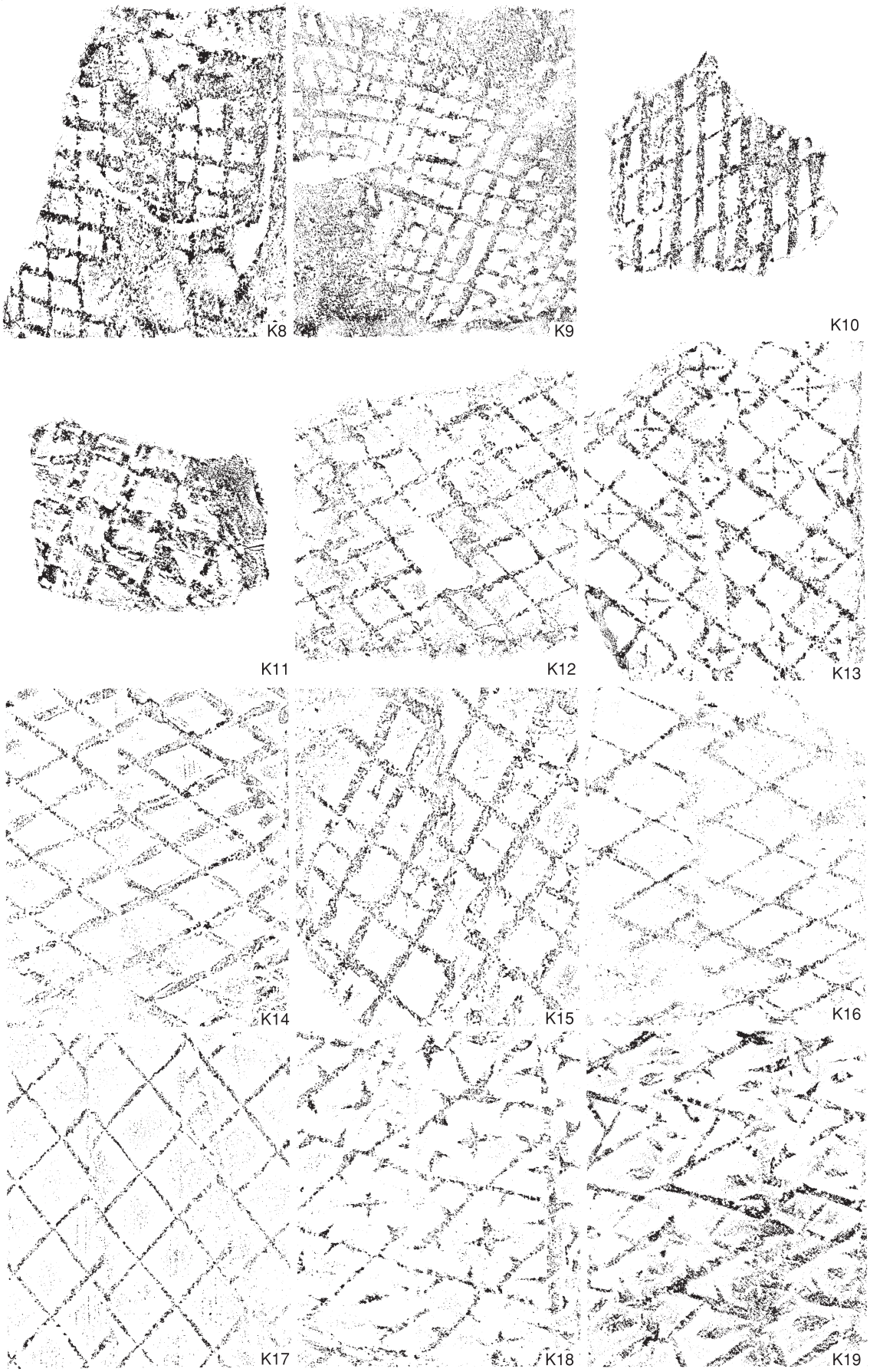
粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は菱形である。一辺 1.1 ㎝程度、対角は長軸 1.8 ㎝程度×短軸 1.3 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。凹面は布目が存在している。

K13類（192～196）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は平行四辺形である。一部の格子内には対角をつなぐ「＋」文がある。一辺 1.1 ㎝程度、対角は長軸 1.9 ㎝程度×短軸 1.6 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。凹面は布目が存在している。

K14類（197～200）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は大小の平行四辺形で揃っていない。対角は



第3図　平瓦凸面叩き目分類(2)

長軸 2.5 ㎝～ 2.1 ㎝程度×短軸 1.6 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。197・199 の格子内の一部には木目が存在している。凹面は布目が存在しており、197 ～ 199 は広端面あるいは狭端面にも布目が存在している。

K15類（201～204）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は大小の右上がりの平行四辺形で揃っていない。一部の格子内には短辺をつなぐ「I」文と「T」文がある。対角は長軸 2.9 ㎝～ 1.9 ㎝程度×短軸 2.4 ㎝～ 1.8 ㎝程度で、長軸が縦位に平行している。201・202 は端部側に叩き残し部分が存在する。凹面は布目が存在しており、201 は狭端面に布目が存在しており、側面側には布目が存在しない部分がある。

K16類（205～210）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は大小の平行四辺形で揃っていない。対角は長軸 3.6 ㎝～ 2.8 ㎝程度×短軸 2.0 ㎝～ 1.5 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。205・206・208・209・210 は端部側に叩き残し部分が存在する。凹面は布目が存在しており、205 は広端面に布目が存在している。

K17類（211～214）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は菱形である。一辺２㎝前後で、対角は長軸 3.1 ㎝程度×短軸 2.7 ㎝程度で、長軸が縦位に平行している。いずれも縦位の木目が存在している。213 の凸面には粘土板製作時の切り離し痕が残っている。凹面は布目が存在しているが、214 の端部側には布目が存在しない部分がある。211 の側面部および端面には布目が存在している。

K18類（215～219）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は大小の平行四辺形で揃っていない。叩き板の端部は三角形になっている。格子内には棘が存在し、中央部に「＋」文がある。対角は長軸 4.7 ㎝程度×短軸 3.9 ㎝～ 3.5 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。216・217 は端部側に、218 は側面部側に叩き残し部分が存在する。凹面は布目が存在している。

K19類（220・221）

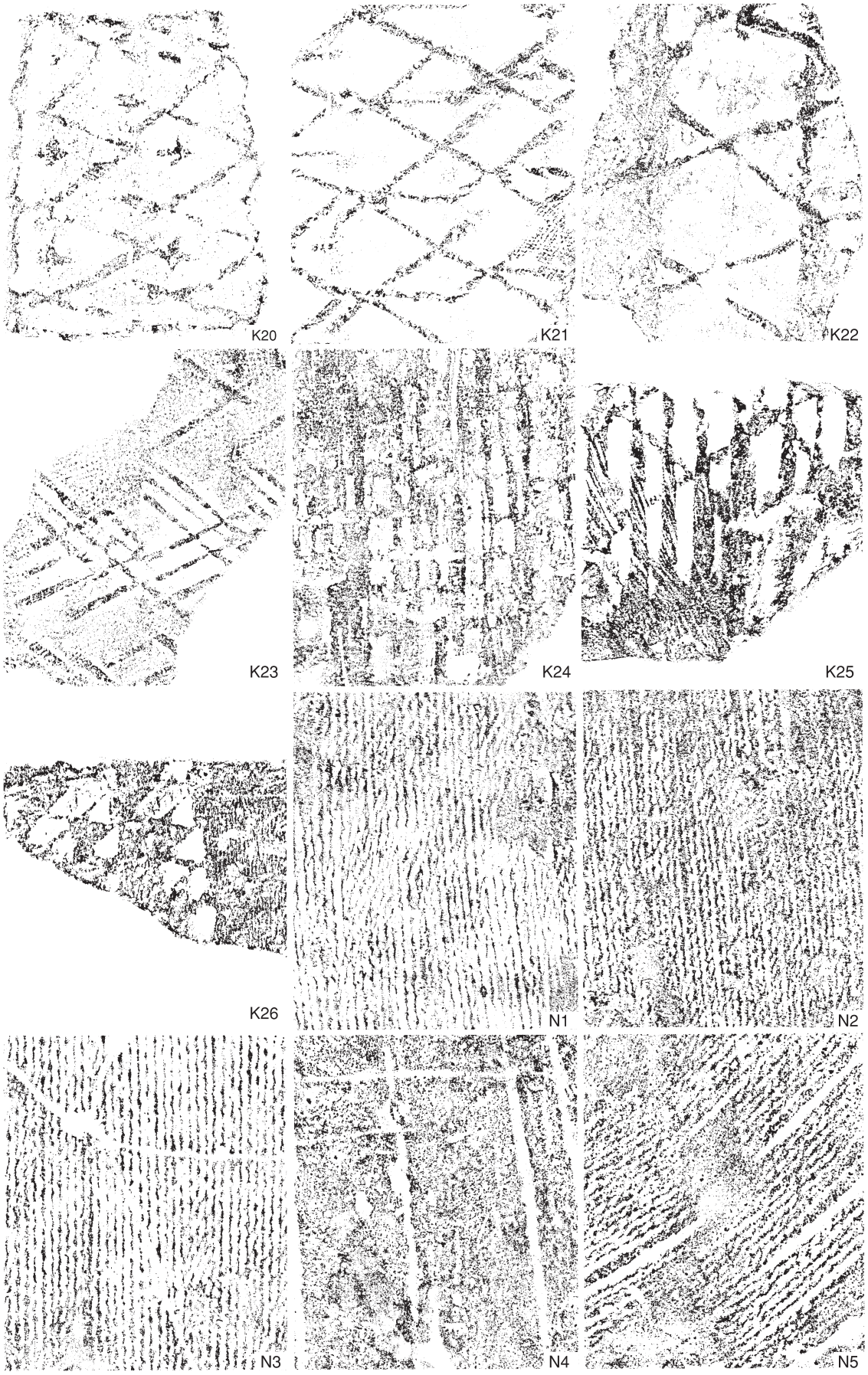
粘土板一枚作りである。凸面は不定形九角形や三種類以上の三角形の叩き目である。九角形の対辺は 2.7 ㎝程度である。九角形の内部には「＋」文が存在している。三角形の一辺は 3.3 ㎝から 0.8 ㎝まで大小あり、大きいものには棘が存在する。凹面は布目が存在しており、220 は端部に、221 は側面部にも布目が存在している。

K20類（222・223）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は平行四辺形で、叩き板の端部は三角形になっている。格子内の中央部に「＋」文がある。対角は長軸 4.8 ㎝程度×短軸 3.1 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。側面部側に叩き残し部分が存在し、盛り上がっている。凹面は布目が存在している。

K21類（224～226）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は平行四辺形である。このうち縦一列には格子内の長軸を結ぶ「I」文がある。対角は長軸 4.3 ㎝程度×短軸 3.1 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。225 は端部側に叩き残し部分が存在する。凹面は布目が存在しており、224 は狭端面に布目が存在している。



第4図　平瓦凸面叩き目分類(3)

K22類（227）

粘土板一枚作りである。凸面は斜格子叩き目で、斜格子は平行四辺形で、叩き板の端部は三角形になっている。対角は長軸 6.8 ㎝程度×短軸 4.5 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。凹面はナデている。

K23類（228）

粘土板一枚作りである。凸面は布目痕の上に斜格子等の叩き目を施す。斜格子等は平行四辺形であり、１本と３本の組合わせで描いており、幅の狭い文様帯と三角形を作っている。対角は長軸 6.8 ㎝程度×短軸 4.5 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。凹面は布目である。

K24類（229～231）

粘土板一枚作りである。凸面は格子叩き目で、格子は長方形である。長辺 1.6 ㎝程度×短辺 0.6 ㎝程度で、長軸が縦位に平行している。格子内面は凹凸が著しい。凹面は布目である。

K25類（232・233）

粘土板一枚作りである。凸面は格子叩き目で、格子は台形である。幅 0.9 ㎝～ 0.5 ㎝の平行線に斜行する直線で台形を作っている。長辺の最大は 3.5 ㎝程度ある。凹面は布目である。

K26類（234）

粘土板一枚作りである。凸面は格子叩き目で、格子は平行四辺形である。叩き板の端部は三角形になっている。対角は長軸 2.2 ㎝程度×短軸 1.2 ㎝程度で、長軸が横位に平行している。格子内は木目が残る。凹面は布目である。

縄叩き目

N1類（235～241）

粘土紐桶巻作りである。凸面は縄叩き目で縦方向である。縄叩き目は細かい。凹面にはいずれも幅４㎝前後の粘土紐接合痕が残り、236・237・239 ～ 241 は枠板痕が残る。235・238 は縦方向の布の縫い跡が残り、236 は縦方向の布の綴じ跡が残る。236・237・239 ～ 241 は隅を切っている。

N2類（242～245）

粘土板桶巻作りである。凸面は縄叩き目で縦方向である。縄叩き目は細かい。凹面は布目が存在し、枠板痕はケズリあるいはナデにより消している。いずれも隅を切っている。

N3類（246～252）

粘土板一枚作りである。凸面は縄叩き目で縦方向である。縄叩き目はやや荒い。凹面は布目が存在し、248 は側面部にも布目が存在している。252 は凹面に赤色顔料が付着している。251 は隅を切っている。

N4類（253～256）

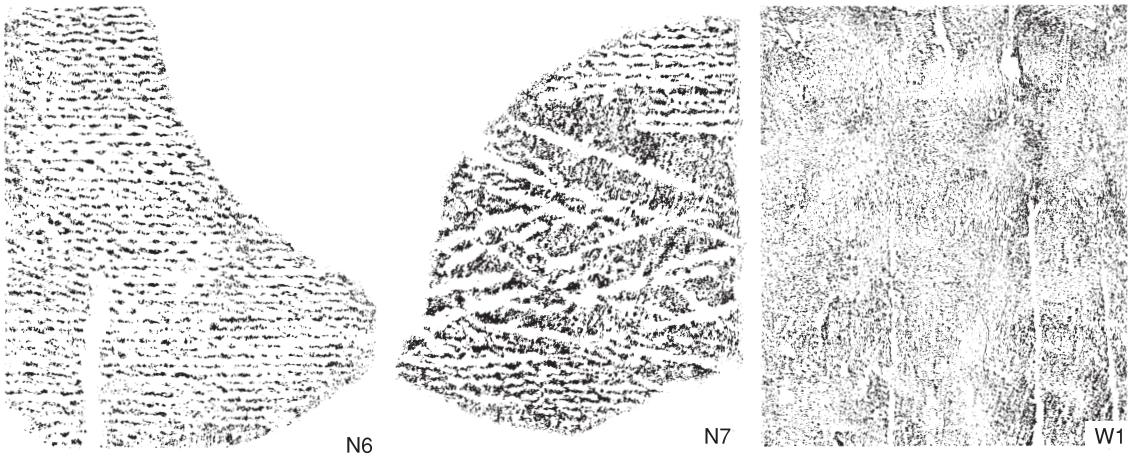
粘土板一枚作りである。凸面は縄叩き目で縦方向である。縄叩き目は荒く、深い縄目の単位が明瞭である。単位の幅は 4.2 ㎝程度である。凹面は布目が存在している。255 は隅を切っている。

N5類（257～260）

粘土板一枚作りである。凸面は縄叩き目で右上がりの斜め方向である。縄叩き目は荒く、深い縄目の単位が明瞭である。単位の幅は 3.8 ㎝程度である。凹面は布目が存在している。257・258 は隅を切っている。

N6類（261・262）

粘土板一枚作りである。凸面は縄叩き目で横方向である。縄叩き目は荒い。端部側に叩き残し部分が存在する。凹面は布目が存在している。



第5図　平瓦凸面叩き目分類(4)

N7類（263）

粘土板一枚作りである。凸面は縄叩き目で横方向と格子である。縄叩き目は荒い。格子は方向を変えて装飾的に叩いている可能性がある。凹面は布目が存在し、側縁部にも布目が残っている。

無文叩き

W1類（264・271～274）

粘土板一枚作りである。271 は唯一、平瓦の全容が判る個体である。全長 33.0 ㎝、幅 27.2 ㎝である。凸面は縦方向の無文叩き目で、一部に布目が存在する。叩き板の幅は 6.6 ㎝程度である。端部側には叩き残し部分が存在する。凹面は布目が存在している。

W2類（265・266）

粘土板一枚作りである。凸面・凹面ともに荒い布目が存在する。明瞭な叩き痕は存在しない。布目や胎土の状況から H2 類に似ている。

W3類（267～270）

粘土板桶巻作りである。凸面はナデを行っている。凹面は布目が存在し、267 は枠板痕が残っている。焼成は精緻である。270 は粘土板製作時の痕跡がある。

E　面戸瓦（285）（図版 59・写真図版 76）

両端部は欠損している。側面は焼成前に成形しており、ヘラで切り取った痕跡がある。厚さは 2.4 ㎝～ 2.8 ㎝である。

F　鴟尾（275 ～ 284）（第 6 図・図版 58・写真図版 73 ～ 75）

鴟尾は破片で 10 点出土した。文様・整形・胎土・色調から、Ａ類とＢ類の２種類に分類出来る。

Ａ類（275 ～ 278）

いわゆる蓮華文帯鴟尾で、同様の胎土・調整のものが４点出土している。275 は蓮華文帯の頂部に近い部分で稜の無い断面の縦帯の突帯と蓮華文を２箇所、貼り付けた痕跡の一部が残る。粘土紐が水平に剥離していることから、頂部であると考えた。体部の厚さは 2.0 ㎝～ 2.5 ㎝である。276 は左側面の縦帯の突帯と鰭部の破片である。鰭部は幅 2.4 ㎝、高さ 0.5 ㎝の正段を削り出している。277 は左側面の蓮華文帯と鰭部の破片である。縦帯は稜が無く、蓮華文は周縁の一部のみである。かろうじて面違鋸歯文であることが分る。外縁の外側には笵傷が存在する。鰭部は正段を削り出しており、削り出す前の割

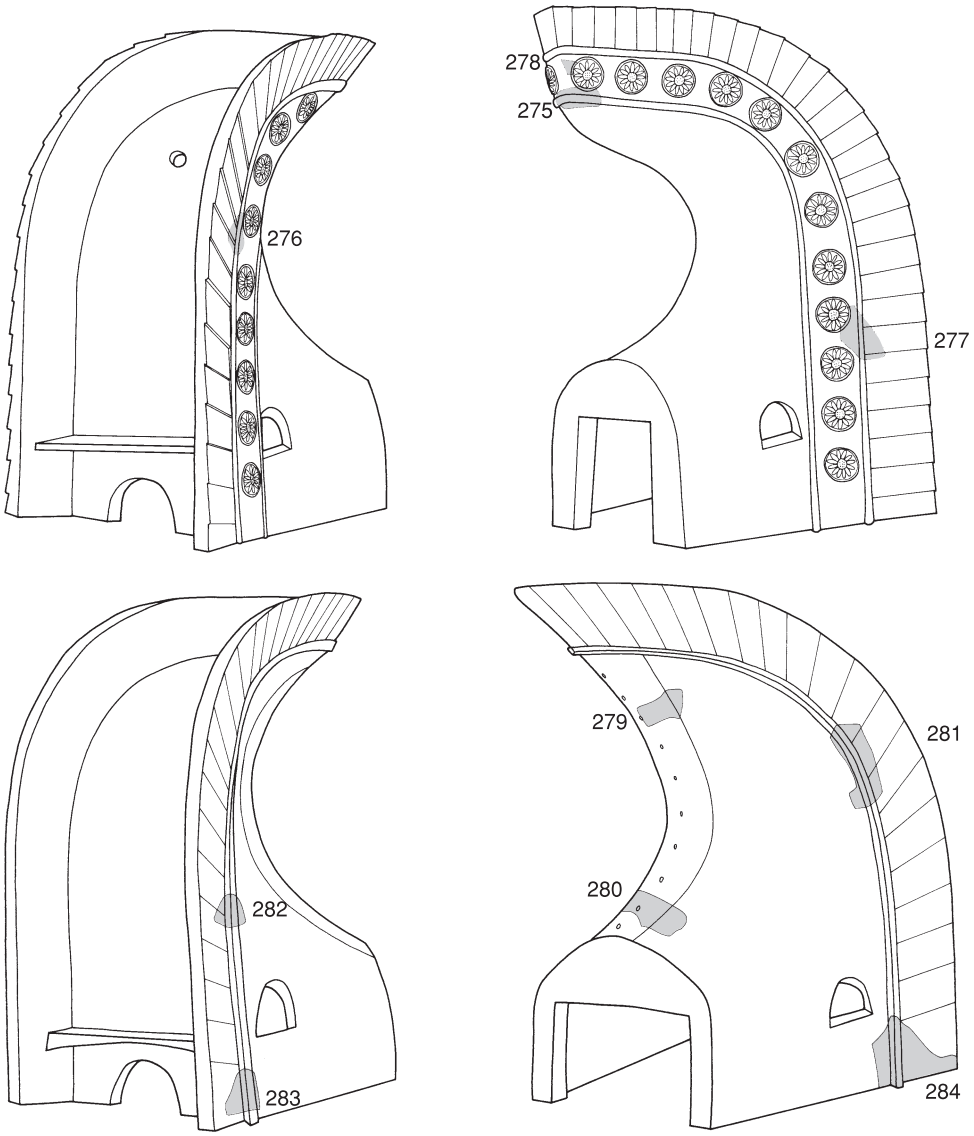
付線の一部が残っている。裏面には腹部の一部が残る。278 は蓮華文の破片で周縁が面違鋸歯文であることが明瞭に分る。蓮華文の推定直径９㎝である。外縁の外側には 277 と同一の笵傷が存在する。

以上、蓮華文帯鴟尾のⅠ型である。

Ｂ類（279 ～ 284）

同様の胎土・調整のものが５点出土している。胴部の脊稜部の破片（279・280）、縦帯を挟んだ胴部と鰭部の破片（281・282）、基底部の破片（283・284）に分類出来る。胴部の脊稜部の破片は脊稜に直径５㎜の孔を穿っている。脊稜脇 6.7 ㎝には平行する幅５㎜の沈線を描いている。脊稜の角度から 279 は頂部に近い部分の破片で、280 は頭部に近い破片であると考えた。

縦帯を挟んだ胴部と鰭部の破片は 281 が右側面の破片、282 が左側面の破片である。281 は幅 1.2 ㎝、高さ 1.4 ㎝の長方形の縦帯を貼り付け、強いナデを行っている。鰭部には斜め上方へ向かう幅５㎜の沈線で鰭の表現し、沈線間隔は９㎝である。鰭部の裏側には腹部が接合する。282 は斜め上方へ向かう鰭部の沈線が１本残る。基底部の破片は鰭端部が存在する 284 があり、鰭部の幅は７㎝である。縦帯の突帯は断面形が長方形で、幅 1.2 ㎝、高さ 1.4 ㎝である。底面は調整していない。



第6図　鴟尾復原および出土部位

G　塼ほか（286 ～ 290）（図版 59・写真図版 75・76）

塼は３点(286 ～ 288)出土しているが、全容が分るものは無い。上面と側面はナデを行い仕上げており、下面は布目痕が残る。厚さは 286 が 4.5 ㎝、287 が 3.8 ㎝、288 が 4.2 ㎝を測る。

289・290 は用途不明の瓦製品である。289 は丁寧なナデと荒いナデの違いにより、明瞭に表裏が判別出来る不定型な破片である。側面はヘラによる切り取りの痕跡が残る。表面には箆による蓮華文の一部を描いている。290 は凸面に平行沈線を描く平瓦の破片である。凹面は磨滅のため不明な点が多い。平瓦 J3 類の可能性もある。

H　近世瓦（291 ～ 297）（図版 60・写真図版 77）

近世瓦は軒丸瓦、丸瓦、平瓦が僅かに存在する。このうち軒丸瓦すべてと丸瓦１点を報告する。

291 ～ 296 は軒丸瓦で、291 ～ 294 は巴瓦である。291 は左巻三巴文で珠文は５個残る。これのみ、灰黄色を呈し、292 ～ 297 は灰色から黒色を呈する燻瓦である。

292 は周縁と珠文２箇しか残っていない。293 は周縁と珠文１箇しか残っていない。凹面は荒い布目痕が残り、凸面は良く磨いている。294 は左巻三巴文で珠文は７個残り、推定で 15 に復原出来る。

295 は一部分しか残っていないが、姫路藩主酒井家の家紋である剣酢漿文である。

296 は周縁のみしか残っていない。丸瓦 297 は玉縁である。凸面は良く磨いている・

２．土器類（298 ～ 416）

弥生土器（298・299）

弥生土器には壺がある。298 は口縁端面を下方に拡張し直径９㎜の竹管文を刺突する。299 は底部を厚く作り、体部は薄く横に張り出す。

土師器（300 ～ 302）

土師器には坏・把手・高坏がある。坏 300 は椀形の底部で、ケズリ後ミガキを行っている。把手 301 は偏平な舌状で、上方を向いている。高坏 302 は脚部の破片で縦方向のケズリで面と稜を作っている。

須恵器（303 ～ 326）

須恵器には坏・高坏・椀・坏Ｂ蓋・坏Ｂ・椀・甕・二面硯がある。坏Ｈ蓋 303・304 は小振りで口縁部から天井部にかけて稜を作らずに丸く仕上げる。坏 H305・306 は小振りである。306 は口縁部を欠くが、305 は短く立ち上がるかえりを持つ。坏 I307 ～ 310 は底部の破片で、いずれも右回転ロクロでヘラ切り後ナデを行っている。高坏 311 ～ 314 は坏部と脚部の接合部分の破片である。311 ～ 313 は低脚で、314 は長脚である。いずれも透かしは持たない。高坏 315・316 は脚端部の破片である。坏Ｂ蓋 317 は偏平で小振りのつまみを付ける。坏 B318 は底部の破片で低く内傾する高台を付ける。椀 B319 は底部の破片で低く外傾する高台を付ける。高坏 320 は坏部の破片で、屈折する稜を持つ口縁である。甕 321 は短く外反する口縁部を持つ。甕 322 は外反する口頸部の破片で、口縁端部は拡張する。甕 323 ～ 325 は直線的に外傾する口頸部外面に櫛描波状文を施す。口縁端部は上方に面を作る。

二面硯 326 は中央突帯部分の破片で、硯面の端部は残存していない。表面を丁寧に磨いているが、底面は荒いナデで仕上げている。墨擦の磨滅は著しいが墨痕は残っていない。

土師器（327 ～ 329）

土師器には椀と坏がある。椀 327 は底部の破片であり、平高台で糸切りある。坏 328・329 は底部の破片で、背が高い平高台である。底部は糸切り痕が残る。

須恵器（330 ～ 346）

須恵器には東播系須恵器（330 ～ 339・342・343）とそれ以外のもの（340・341・344 ～ 346）がある。東播系須恵器には椀・鉢・甕・壺があり、東播系須恵器以外のものには坏と甕がある。

東播系須恵器椀 330 ～ 333 は、口縁部（332）と底部（330・331・333）とがある。332 は口縁部が直線的に外傾し、口縁端部は丸く作る。330・331 は底部が平高台で糸切り痕を残す。見込みは僅かに段が残る。333 は底部に糸切り痕を残すが、丸底気味である。

東播系須恵器鉢 334 ～ 337 は小形の 334・335 と中形の 336 と大形の 337 がある。334・336・337 は口縁端部を上方に拡張する。335 は口縁端部を上下に拡張する。東播系須恵器甕 338・339 は小形品の口頸部の破片で、短く外反している。口縁部は上端が尖っており面を作る。外面は平行叩きを行った後、ヨコナデを行っている。東播系須恵器壺 342・343 は底部の破片で突出した平底で糸切り痕を残す。

坏 344 は器高が低く体部を丸く作り、ロクロ痕が明瞭に残る。底部の調整はナデのため不明である。甕 340 は大形品の口頸部から肩部の破片である。頸部は大きく外反し、口縁端部は上下に拡張し面を作る。外面は縦方向のハケ調整を行った後、口頸部はヨコナデを行っている。口縁部内面は横方向のハケ調整を行っているが、剥離が著しい。壺 341 は底部から体部下半の破片で底部はナデ調整を行っている。体部下半は回転ケズリを行っている。甕 345・346 は胎土と調整痕から同一個体の可能性がある。底部 345 は平底で内外ともナデ調整を行っている。体部は 346 と同様に外面は格子叩き、内面は同心円当て具の痕跡が残る。亀山焼の可能性がある。

無釉陶器（347 ～ 369・397 ～ 408）

無釉陶器には常滑焼（347）、備前焼（348 ～ 362・364 ～ 366・397 ～ 400）、丹波焼（401・402）、明石・堺産（403・404）、その他（405 ～ 408）がある。

常滑焼 347 は口頸部の破片で、口縁断面をＮ字形に折り曲げており口縁端部を欠くが縁帯部は幅広い。

備前焼（348 ～ 362・364 ～ 366・397 ～ 400）には擂鉢・壺・甕がある。擂鉢（348 ～ 360・397 ～ 400）はいずれも口縁部の破片である。口縁端部が丸みを持つ（348）と、口縁端部を強いナデを行って面を作る（349）と、口縁部を上下に拡張し、内傾する狭い端面を作る（350 ～ 352）と、口縁部を上下に拡張し、内傾する幅広の端面を作る（353 ～ 359）と、直立し幅広の口縁端面を作る（360・397）と、直立し幅広の浅い凹線を持つ口縁部の（398・399）と、底部（400）とがある。350・354・399 には片口が残る。356・358・360 には重ね焼きの融着痕跡がある。壺 361・362 は小形壺の口縁部で、361 は丸みを帯びた玉縁で、362 は扁平な玉縁である。甕は口縁部（364 ～ 366）と底部（368・369）がある。364・365 は丸みを帯びた玉縁で、366 は扁平な玉縁である。368 は小形甕の底部で、底部は調整をしていない。369 は大形甕の底部の破片で、体部は縦方向のナデ調整を行っている。367 は瓶類の底部で底部周縁に細く低い高台を作り出している。内面は降灰が無く、ロクロ痕跡が明瞭である。

丹波焼甕 401・402 は口縁の破片で、401 は口縁断面がＴ字形を呈し、濃緑色の釉がかかっている。402 は口縁断面がΓ字形で、上面に凹線を４条巡らしている。

明石・堺産の擂鉢 403・404 は直立する口縁部外面に２条の凹線を巡らせ、内傾する口縁端部に１条の凹線を巡らしている。口縁部は擂目の施文後、ヨコナデを行っている。

小壺 405 は球形の体部から底部にかけての破片で、底部は糸切り痕跡が残る。壺 406 は肩部に３本の突帯を巡らしている。甕 407 は大甕の体部で外面はハケ調整を行っている。甕 408 は小形の甕の底部で、内面に降灰の痕跡があり、底部は離砂の痕跡が残る。

青磁（370 ～ 374）

青磁碗 370 ～ 374 は龍泉窯系青磁の底部である。370 は高台内部にも釉がかかる。蓮弁のヘラ描きは高台まで伸びる。371 は底部のみの破片である。372 は蓮弁のヘラ描きが僅かに残る。373 は灰オリーブ色の釉がかかり、浅い蓮弁の溝が残る。374 は見込みに草花文を印刻する。高台内部は荒く仕上げている。

土師器（375 ～ 377・394）

土師器は鍋がある。375 は甕形の鍋で、体部外面は横位の平行叩きである。376 は羽釜形の鍋で内傾する口縁下を強くナデ、鍔を付ける。377 は口縁部が内傾する鍋で体部に格子叩きを行う。

瓦質土器（378 ～ 396）

瓦質土器は鍋・火鉢・火舎がある。378 は瓦質の鍋で、受け口状の口縁タイプである。379 ～ 393 は瓦質の三足鍋である。379 ～ 385 は小片のため脚接合部分を欠く。379 は口縁部が外傾し、幅の狭い鍔を貼り付ける。380 ～ 382 は小形で、口縁部が直線的に内傾する。383 ～ 385 は大形で、口縁部が内弯する。383・385 は鍔の幅が狭く、384 は鍔の幅が広い。386・387 は三足を付ける。386 は口縁部を欠き、387 は口縁部が直立する。388 ～ 393 は瓦質の三足鍋類の体部から脚の破片である。ヘラ状工具で面取している。395 は瓦質の火鉢で、体部は球形であり、ミガキ調整している。396 は瓦質の火舎で、口縁直下に２条の突帯を貼り付け、間に珠文を貼り付けている。内面に約８㎝×約１㎝の張出を付け、体部外面に抜ける２個の穿孔が存在する。394 は火鉢で口縁直下に沈線を巡らす。

陶磁器（409 ～ 416）

磁器（409 ～ 412）と陶器（413 ～ 416）とがある。409 は肥前の染付磁器の碗で、畳付けに砂が付着している。外面は呉須で草花文を描いている。410 は染付磁器鉢で青磁を施釉後、印刻を行い赤絵と金泥で草花文を描く。411 は染付磁器碗で見込を荒い蛇目釉ハギしており、砂が付着している。412 は東山焼の染付磁器小碗である。外面は呉須で唐草文を描き、高台は誤須で塗りつぶしている。高台内に「東山」の銘がある。

椀 413 は底部の破片で、高台は削り出している。内面に鉄釉がかかる。灯明皿 414 の底面は透明釉がかかり、外面の無釉部分の一部に煤が付着している。備前焼の灯明皿 415 はかえりがあり、底面は回転ケズリを行っている。鉢 416 は口縁部が内弯しており、透明釉がかかり、貫入が入っている。

３．石製品（S1 ～ S4）

石製品は砥石が４点出土している。S1 は砂岩製で両端が欠損している。偏平な長方形の断面に４面の砥面を作る。S2 は泥岩製で折れと剥離で、表面と２側面の３面に砥面を残している。裏面は剥離、小口は鑿の加工痕跡が残る。S3 は片端を欠損しており、長方形の断面に４面の砥面を作る。砥ぎ減りが著しい。S4 は片端を欠損しており、平行四辺形の断面に４面の砥面を作る。砥ぎ減りが著しく、１面には溝状の砥ぎ痕が残る。

⑵　SK01（417 ～ 423）

陶器甕・鉢、瓦がある。丹波焼甕底部 417 は体部外面に釉の垂れ痕が残る。底部には焼成後の穿孔が存在している。匣鉢 418 は円筒形をなし、口縁端部の対する面に２箇所の抉りがある。砂粒の目立つ胎土で作っている。軒平瓦(419)の文様は大小の三重円の青海波文を交互に繰り返している。軒平瓦(420)の文様は唐草文であり、外縁左幅は 4.8 ㎝と幅広になっている。軒平瓦（421）は瓦周縁のみで文様部分を欠いている。丸瓦（422・423）は玉縁部分の破片である。

第４章　自然科学的調査の成果

第１節　今宿遺跡出土瓦の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
矢作健二・石岡智武

はじめに

姫路市に所在する今宿遺跡は、播磨平野北部縁辺に分布する独立した小丘陵南側の山裾に位置する。発掘調査によって、白鳳時代とされる瓦片が大量に出土している。調査区内では厚さ 0.6m の瓦の層が確認され、その状況などから、周辺の山裾一帯には多量の瓦が廃棄されていることが推定されている。調査地周辺では瓦窯跡は確認されておらず、出土遺物からも窯跡を想定させるような遺物が認められなかったことから、出土した瓦は、調査地に近接して存在した白鳳時代創建の寺院の廃絶による廃棄物と考えられている。

本報告では、今宿遺跡より出土した瓦について、その材質（胎土）の特性を明らかにすることにより、ほとんど資料のない廃絶されたとされる寺院に関する基礎資料を提供する。

１．試　料

試料は、出土した瓦片 20 点である。そのうち、平瓦が 17 点、丸瓦は３点である。試料には、資料 No.1 ～ 20 が付されている。試料の一覧を第１表に示す。

第1表　胎土分析試料一覧

資料No.	種別	器種	分類	凸面	時期
1	瓦	平瓦	J1類	平行条線	古代
2	瓦	平瓦	K9類	格子叩き目	古代
3	瓦	平瓦	K16類	格子叩き目	古代
4	瓦	平瓦	K15類	格子叩き目	古代
5	瓦	平瓦	K19類	格子叩き目	古代
6	瓦	平瓦	N5類	縄叩き目	古代
7	瓦	平瓦	N2類	縄叩き目	古代
8	瓦	平瓦	K18類	格子叩き目	古代
9	瓦	平瓦	K21類	格子叩き目	古代
10	瓦	平瓦	L2類	平行叩き目	古代
11	瓦	平瓦	K2類	格子叩き目	古代
12	瓦	平瓦	K16類	格子叩き目	古代
13	瓦	平瓦	K13類	格子叩き目	古代
14	瓦	平瓦	N4類	縄叩き目	古代
15	瓦	平瓦	W3類	無文叩き	古代
16	瓦	平瓦	W3類	無文叩き	古代
17	瓦	平瓦	W3類	無文叩き	古代
18	瓦	丸瓦	S3類	縄叩き目	古代
19	瓦	丸瓦	S6類	ナデ	古代
20	瓦	丸瓦	S1類		古代

２．分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。このことは、今回の試料である瓦についても適用できると考える。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03 ㎜の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

３．結　果

観察結果を第２表、第７～９図に示す。検出された鉱物片および岩石片の種類をみると、全点ともにほぼ同様の状況を呈する。すなわち、鉱物片では、石英、斜長石、カリ長石および角閃石が認められ、岩石片では凝灰岩、流紋岩･デイサイト、珪化岩および火山ガラスが含まれる。また、チャートや頁岩、砂岩などの堆積岩類も半数を超える13点の試料に認められる。他に微化石である植物珪酸体もほとんどの試料に認められる。これら各鉱物片・岩石片の量比までみると、いずれの試料も石英と斜長石の鉱物片および火山ガラスの多い傾向は共通するが、ばらつきがあり、まとまった組成は見出せない。

基質に対する砂粒の量比は、10～30%の範囲にあり、これについても、特に集中する量比は認められない。砂粒の粒径組成については、粗粒シルトにモードのある試料が７点、極細粒砂にモードのある試料が５点、細粒砂にモードのある試料が５点、中粒砂にモードのある試料が３点となっている。ヒストグラムの形は、それぞれモードの粒径をピークとする単独峰形であるが、ピークの明瞭な試料とピークが不明瞭でありなだらかな岡状の形を呈する試料とが、ほぼ半数ずつ認められる。

４．考　察

⑴　胎土の地質学的背景

胎土中に含まれる鉱物片と岩石片の組成は、土器の材料となった粘土や砂が採取された場所の地質学的背景を示唆している。今回の試料20点は、ほぼ同様の鉱物片・岩石片の種類が検出されたことから、少なくとも同一の地質学的背景を有する地域内で生産された瓦である可能性が高い。その鉱物片・岩石片の種類構成から想定される地質学的背景は、凝灰岩と流紋岩・デイサイトの岩石片を主体とすることから、流紋岩あるいはデイサイト質の火砕岩や凝灰岩が広く分布し、チャートや砂岩などからなる堆積岩類の分布が、広くはないが、接しており、さらに、花崗岩類の局地的な分布も推定される。また、鉱物片では、角閃石が主要な鉱物の１つとなっていることから、上述の流紋岩・デイサイト質の火砕岩および凝灰岩は、角閃石を主要な斑晶として含む岩質であることも考えられる。なお、岩石片の中では、珪化岩も全試料に認められるが、これは顕微鏡下で認められた岩石組織上の特徴から、流紋岩またはデイサイトが珪化作用を受けて変質したものと考えられ、上述の流紋岩・デイサイトの地質に由来すると考えられる。今回の試料において、流紋岩・デイサイトと並んで主要な岩石片である火山ガラスは、顕微鏡下の観察により、平板状のいわゆるバブルウォール型と呼ばれる形態のものが多く、スポンジ状に発泡した軽石型の形態も混在する。これらは、おそらく、第四紀の段丘構成層などに狭在する未固結のテフラ層に由来するものであろう。今回の瓦試料から、以上のような複数の地質が推定される。このことから、瓦の材料となった土（おそらく粘土・シルト・砂の混合物）は、複数の地質分布域を流れてきた河川流域の堆積物に由来する可能性があると考えられる。

ここで、今宿遺跡の位置する播磨平野北部の地質学的背景を概観してみたい。周辺の地質については、山元ほか（2000）に詳細な記載があることから、以下の記述は、これに従うものである。播磨平野には、西から揖保川、林田川、菅生川、夢前川、市川などの河川が南へ流下しており、これらの河川によりもたらされた砕屑物が播磨平野を構成していると考えられる。これらの河川が流れている平野北側の山地

は、後期白亜紀の火山岩から構成されている。火山岩は、当時の複数のカルデラ火山群から噴出した火砕流堆積物であるとされており、その岩質は、黒雲母流紋岩を主体とするが、上位の火砕流堆積物では角閃石デイサイトとされている。また、これらに付随して多くの貫入岩が分布しており、その岩質は花崗閃緑岩や花崗斑岩、安山岩など多様である。さらに、後期白亜紀火山岩の周囲には、超丹波帯と呼ばれるペルム紀の堆積岩からなる地質や丹波帯と呼ばれる三畳紀～ジュラ紀の堆積岩からなる地質が分布している。ここまでの記載により、前述した瓦の胎土から推定される地質のほぼ全てが揃っていることがわかる。

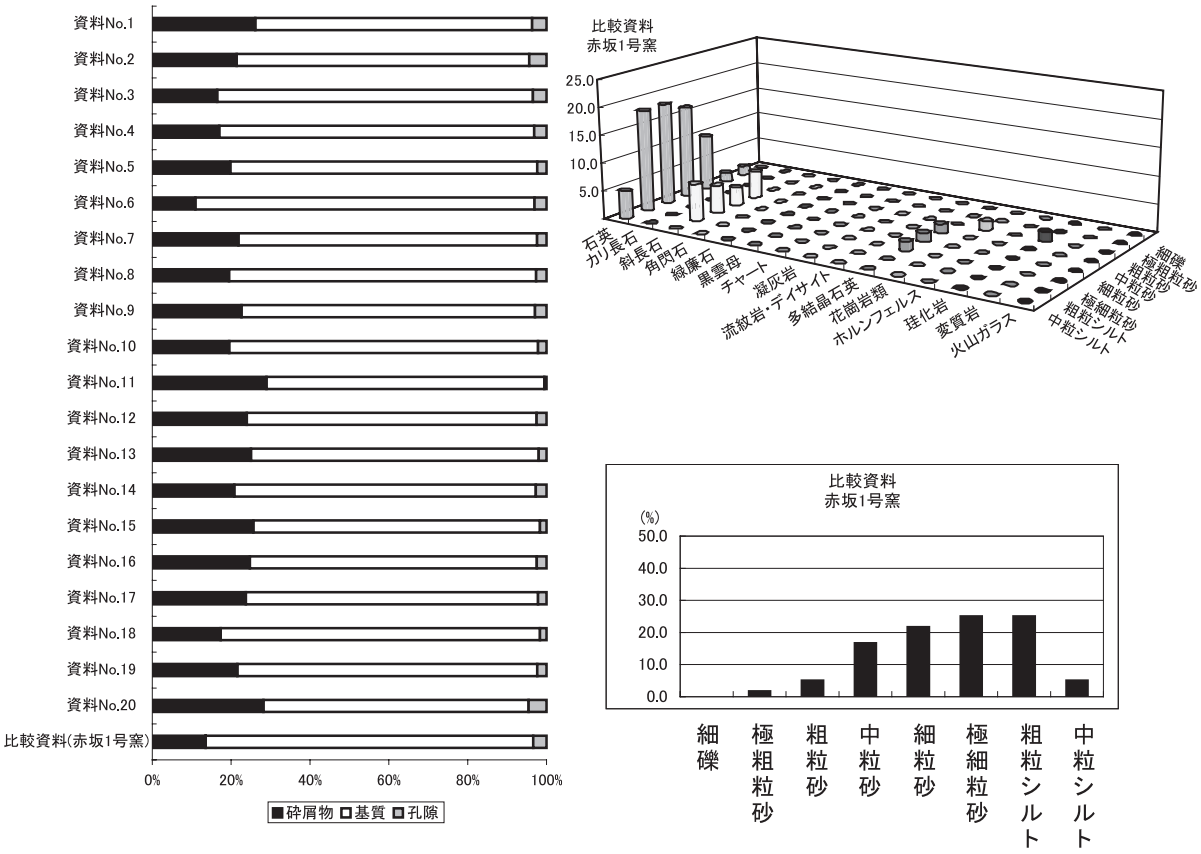
ただし、前述した胎土中の主要な岩石片のうち、火山ガラスについては、山元ほか（2000）による記載に見出すことはできない。同文献では、高位、中位、低位に分けられた段丘堆積物の記載もあるが、いずれも礫層であり、シルト層などの狭在はない。また、段丘上に土壌が発達しているのは中位段丘以上とされているが、中位段丘や高位段丘は、至近では今宿遺跡から北東方の香寺町香呂付近やその上流の市川町付近に非常に限定的に分布するにすぎない。現時点では、文献記載のみによる調査であるため、播磨平野北部にテフラ層の狭在するような段丘堆積物や土壌が存在しないとは言い切れないが、火山ガラスの多量の含有ということのみにおいて、今宿遺跡出土瓦の胎土は、播磨平野北部の地質学的背景とやや異質であるといえる。今後、瓦の材料の採取地を追求する場合には、火山ガラスの由来が課題になると考えられる。

なお、当社による土器の胎土分析例では、播磨平野東部の加古川下流域左岸に位置する溝之口遺跡から出土した土師器において、今回の瓦胎土と類似した鉱物片・岩石片種類構成が得られている（矢作・石岡,2006）。この地域では、その地質学的背景の中に、更新世の海成層である大阪層群を基盤とする台地や丘陵が広がっている（太田ほか編,2004）。もちろん、ここで、今宿遺跡出土の瓦の産地を加古川流域に求めるものではないが、播磨平野北部から至近にある、瓦胎土から推定される地質学的背景と一致する地域として、留意する必要はあると考える。

⑵　胎土の多様性について

今回の瓦試料では、胎土中に含まれる鉱物片・岩石片の種類はほぼ一様であったが、個々の砕屑物の量比までみると一様ではなく、また、いくつかのグループに分けられるという傾向も見出せない。砂全体の粒径組成をみても、結果で述べたように、モードとなる粒径やダイアグラムの形にばらつきが認められ、グループ分けするほどの試料間の類似性は認められない。このことは、多数の窯から集められた状況を示唆している可能性もある。しかし、一般的に、瓦を構成している「土」は、土器に比べればその原料となる粘土や砂の条件の幅が広いことを考慮すれば、あるいは、１つの窯においてもこの程度のばらつきがあるのかもしれない。また、両者の複合によって、ばらつきが一層顕著になっていることも考えられる。いずれにしても、現時点では、膨大な出土量における 20 点のみの分析であり、前述した材料の採取地域の問題も含めて、周辺地域における類例の分析事例を蓄積することが必要と考えられる。

なお、今回の比較資料として、今宿遺跡の北西方約６㎞に位置する赤坂窯跡より出土した須恵器について同様の分析を行った（第２表・第７図）。須恵器という土器の特性から、含有される砂粒自体が少なく、また、高温焼成のためにカリ長石などはガラス化してしまうこともあり、認められた鉱物片は石英と斜長石のみであり、岩石片は花崗岩と珪化岩およびこれらに由来すると考えられる多結晶石英が微量認められるのみであった。この試料からは今宿遺跡出土瓦との関連性は見出せないが、今後、瓦の試料における分析例が得られれば、今宿遺跡出土瓦の産地について検討を進められることが期待される。



第7図　孔隙・砂粒・基質の割合および比較資料（赤坂１号窯）の分析結果

第2表　薄片観察結果(1)

資料No	砂粒区分		砂粒の種類構成																																合計
			鉱物片												岩石片																				
			その他	石英	カリ長石	斜長石	単斜方輝石	角閃石	酸化角閃石	アクチノ閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	片状花崗岩	花崗斑岩	石英斑岩	珪長岩	千枚岩	ホルンフェルス	粘板岩	珪化岩	変質岩	火山ガラス	植物珪酸体	
比較資料	砂	細礫																																	0
		極粗粒砂	1																																1
		粗粒砂	1																			1								1					3
		中粒砂	6		3																1														10
		細粒砂	10		2																1														13
		極細粒砂	11		3																1														15
		粗粒シルト	11		4																														15
		中粒シルト	3																																3
	基質																																		368

引用文献

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.

太田陽子・成瀬敏郎・田中真吾・岡田篤正編,2004,日本の地形6　近畿・中国・四国.　東京大学出版会,383p.

矢作健二・石岡智武,2006,溝之口遺跡出土土器の胎土分析.兵庫県文化財調査報告第309冊　溝之口遺跡　東播都市計画都市高速鉄道JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ,兵庫県教育委員会,43-53.

山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和,2000,龍野地域の地質.地域地質研究報告（5万分の1図幅）,地質調査所,66p.

第2表　薄片観察結果(2)

資料No	砂粒区分		砂粒の種類構成																								合計
			鉱物片										岩石片										その他				
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	破砕状花崗岩	珪化岩	植物片	火山ガラス	珪藻	植物珪酸体	
1	砂	細礫															1										1
		極粗粒砂	1												1		1	2				3					8
		粗粒砂	1		1								1	2		1	3	12				8					29
		中粒砂	9	1									2				2	11				3		1			29
		細粒砂	15	4	6								2					10						1			38
		極細粒砂	24	5	16								1					7									53
		粗粒シルト	19	1	9																						29
		中粒シルト	9		4																						13
	基質																										538
	孔隙																										28
2	砂	細礫																									0
		極粗粒砂															3										3
		粗粒砂	1	2	1														1			3					8
		中粒砂	6		9		2							1			3	2				2		3			28
		細粒砂	5	3	9		2							1			2	2	1					11			36
		極細粒砂	10	6	13		4					2					1	1	2					8			47
		粗粒シルト	13	4	19		1		1															2		8	48
		中粒シルト	11	2	12		1																			4	30
	基質																										694
	孔隙																										41
3	砂	細礫															1										1
		極粗粒砂	1		1												1				1						4
		粗粒砂	1	2										3		3	2	2		1				1			15
		中粒砂	3	2									1		1	1	7	3						4			22
		細粒砂	7	3	5		3						2	1		2	4	2				1		14			44
		極細粒砂	6	3	19		4				1	2				1		4						13			53
		粗粒シルト	6	4	20		2					3												2		8	45
		中粒シルト	3	3	8																					2	16
	基質																										973
	孔隙																										42
4	砂	細礫																									0
		極粗粒砂	2													1											3
		粗粒砂	3													1	5			1				1			11
		中粒砂	4	4	10		2							1		6	7	3	1			1		1			40
		細粒砂	7	3	14		8									3	2	2				1		5			45
		極細粒砂	12	3	5		4											1						2			27
		粗粒シルト	10	6	20																					8	44
		中粒シルト	7	5	16																					2	30
	基質																										940
	孔隙																										37
5	砂	細礫															2										2
		極粗粒砂	1													2											3
		粗粒砂		1												5	1					1					8
		中粒砂	3	5	1											6	4		1				1				21
		細粒砂	5	4	7		2									1		3						2			24
		極細粒砂	10	7	15		1		1									4						4			42
		粗粒シルト	24	9	23																					4	60
		中粒シルト	22	4	12																					2	40
	基質																										788
	孔隙																										24

第2表　薄片観察結果(3)

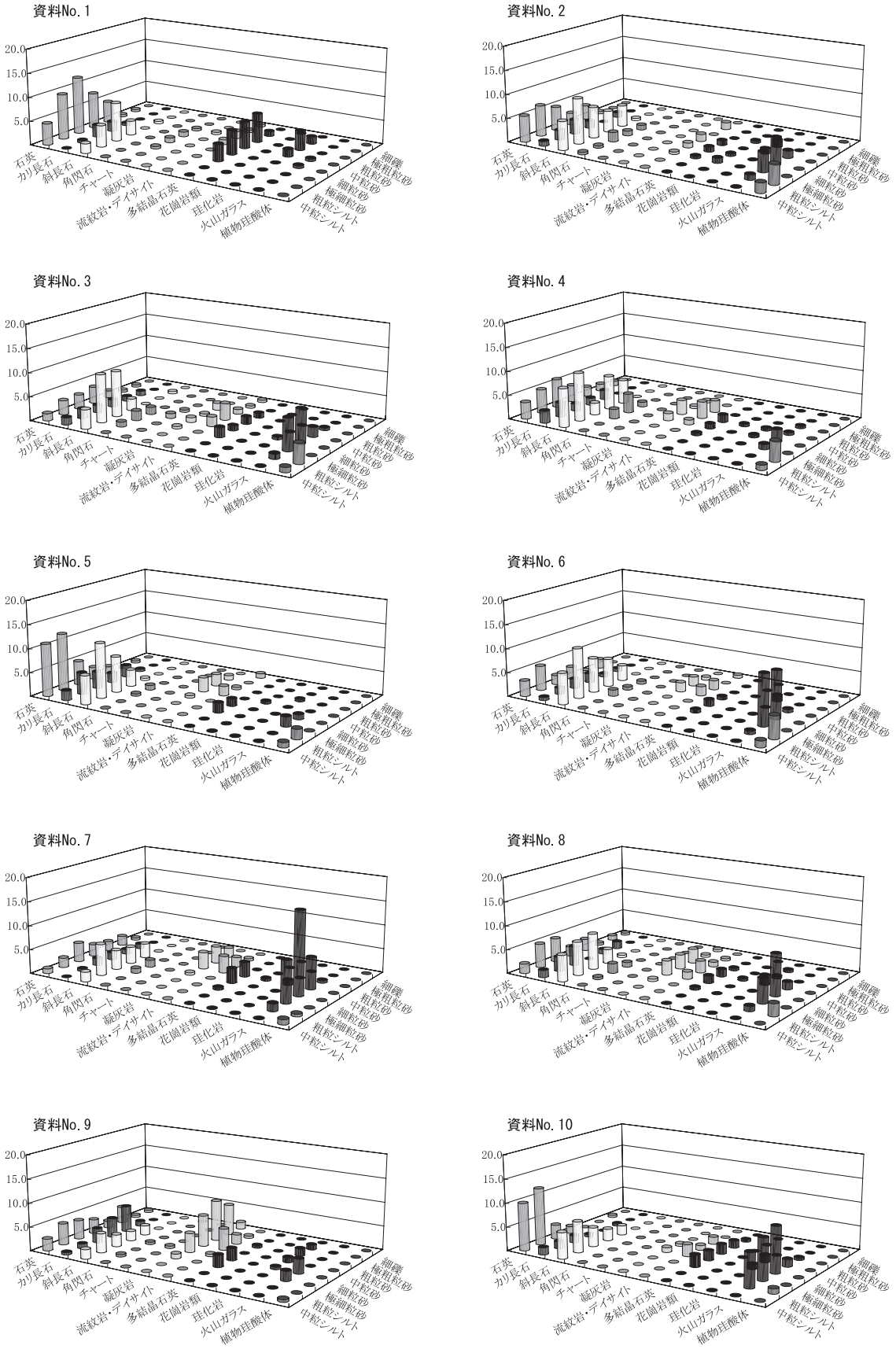
資料No	砂粒区分		砂粒の種類構成																								合計
			鉱物片										岩石片										その他				
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	破砕状花崗岩	珪化岩	植物片	火山ガラス	珪藻	植物珪酸体	
6	砂	細礫															1										1
		極粗粒砂														1											1
		粗粒砂	3	1												3	3					2					12
		中粒砂	1	1	5		1									3	3	1						1			16
		細粒砂	4	3	9		1	1			1							2						15			36
		極細粒砂	3	3	11		2											1						16			36
		粗粒シルト	8	2	16																			1		7	34
		中粒シルト	5	1	10																					2	18
	基質																										1212
	孔隙																										43
7	砂	細礫																									0
		極粗粒砂	1													4	1										6
		粗粒砂	4	2												7	4							1			18
		中粒砂	4	2	6											7	7	6	1			2		13			48
		細粒砂	5	3	7		3									1		6						34			59
		極細粒砂	8	3	8		2											1						17			39
		粗粒シルト	4	1	13																			3		1	22
		中粒シルト	2		4																					2	8
	基質																										694
	孔隙																										22
8	砂	細礫	1													1											2
		極粗粒砂	2													1	1					1					5
		粗粒砂	1	3												6	2	1				1					14
		中粒砂	5	2	1											6	5	3	1			4		3			30
		細粒砂	4		6		2							1		6	3	3						17			42
		極細粒砂	10	8	15		4				1					1		1						10			50
		粗粒シルト	10	6	14		1					1												2		5	39
		中粒シルト	4	3	11																						18
	基質																										801
	孔隙																										27
9	砂	細礫	1													3											4
		極粗粒砂	1													13	1					2					17
		粗粒砂	7	2												17	4	1				3					34
		中粒砂	3	11	4											13	9					2					42
		細粒砂	6	8	4		1						1			8	1	5				1		6			41
		極細粒砂	8	6	5						1					2		5						4			31
		粗粒シルト	9	2	8		1																				20
		中粒シルト	5	1	4																					1	11
	基質																										658
	孔隙																										26
10	砂	細礫																									0
		極粗粒砂	1															1									2
		粗粒砂		1													3	3						1			8
		中粒砂			4											1	2	4				3		3			17
		細粒砂	3	1	5											2	5	4				2		19			41
		極細粒砂	6	3	8													5						17			39
		粗粒シルト	24	3	13							3												14		2	59
		中粒シルト	20	3	11																						34
	基質																										804
	孔隙																										22

第2表　薄片観察結果(4)

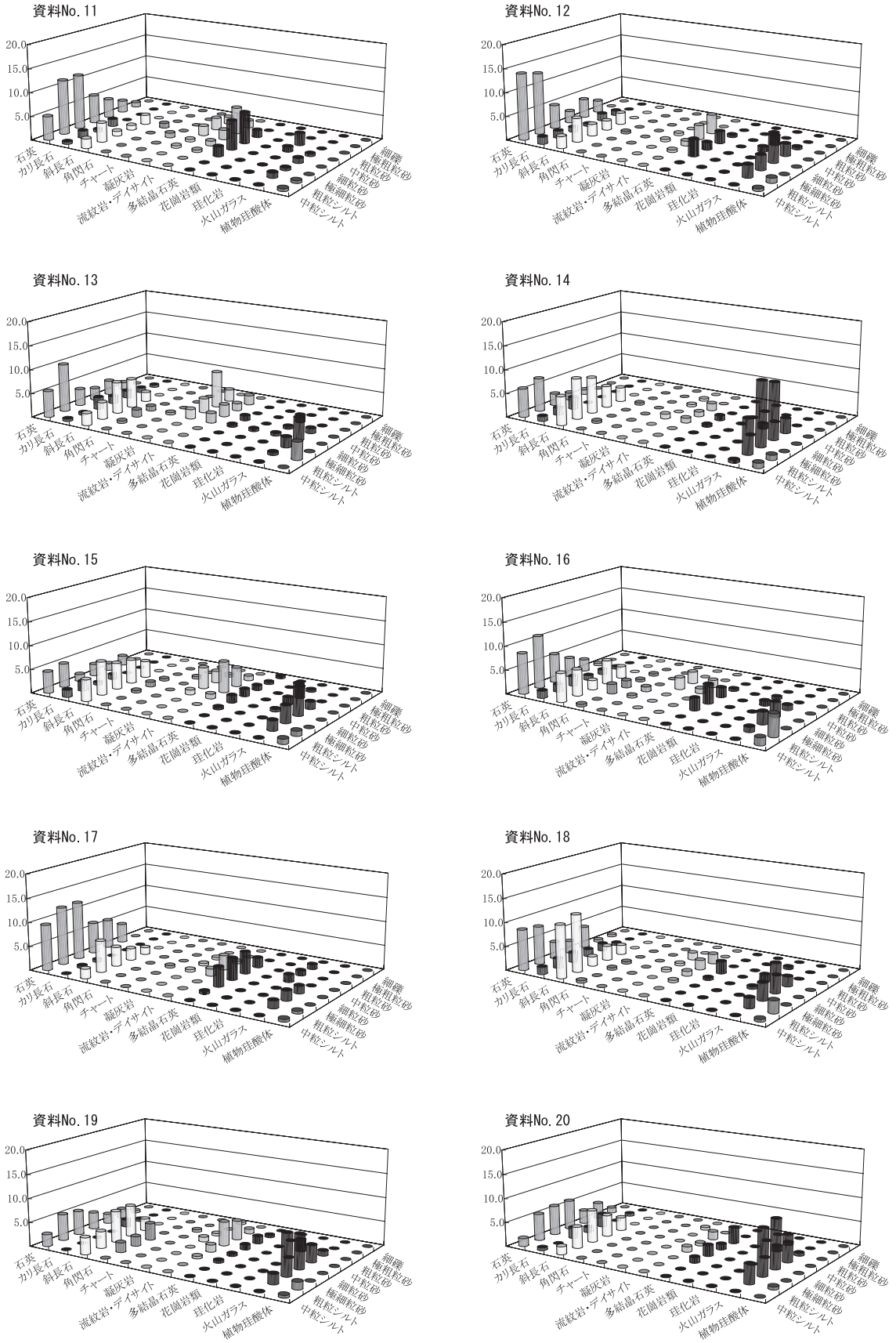
資料No	砂粒区分		砂粒の種類構成																								合計
			鉱物片										岩石片										その他				
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	破砕状花崗岩	珪化岩	植物片	火山ガラス	珪藻	植物珪酸体	
11	砂	細礫														1											1
		極粗粒砂	2													3	3										8
		粗粒砂	5												1	5	11	3				5					30
		中粒砂	8		4		2									4	4	13				2		1			38
		細粒砂	12	3	2								2			1	2	12						2			36
		極細粒砂	23	1	2											1	1	4						1			33
		粗粒シルト	23	3	8							1												2		1	38
		中粒シルト	10	1	4																					1	16
	基質																										487
	孔隙																										4
12	砂	細礫																									0
		極粗粒砂																									0
		粗粒砂	5	2													8	1				4		1			21
		中粒砂	8	3	5											1	6	5				2		5			35
		細粒砂	5	1	4		1									1	2	3						12			29
		極細粒砂	10	2	5												1	7						6			31
		粗粒シルト	26	3	10							1												5		2	47
		中粒シルト	28	3	5																					1	37
	基質																										614
	孔隙																										21
13	砂	細礫																									0
		極粗粒砂		1												5	4										10
		粗粒砂	3	2						1						15	3					3					27
		中粒砂	6	3	4											6	5	2				1		2			29
		細粒砂	5	3	12		2				1		1			4	4	1	1			1		9			44
		極細粒砂	7	5	13		3				1													4			33
		粗粒シルト	20	1	7		1		1			2												1		7	40
		中粒シルト	11	1	5																						17
	基質																										583
	孔隙																										16
14	砂	細礫																									0
		極粗粒砂														1											1
		粗粒砂														1	3										4
		中粒砂	2		6		1	1									2	2				2		6			22
		細粒砂	3		9											2	2	1						23			40
		極細粒砂	5	5	15																			26			51
		粗粒シルト	14	3	17		1					1												14		2	52
		中粒シルト	12	2	12							1												1		2	30
	基質																										736
	孔隙																										26
15	砂	細礫																1									1
		極粗粒砂														1	2	1				1					5
		粗粒砂	4										1	1	1	5	8	2				5					27
		中粒砂	3		7		1								1	9	13	3				3		3			43
		細粒砂	5	2	10		2									2	2	3				1		13			40
		極細粒砂	3	1	11		1		1			1						1						7			26
		粗粒シルト	10	4	14							1												4		2	35
		中粒シルト	9	3	9																					2	23
	基質																										567
	孔隙																										13

第2表　薄片観察結果(5)

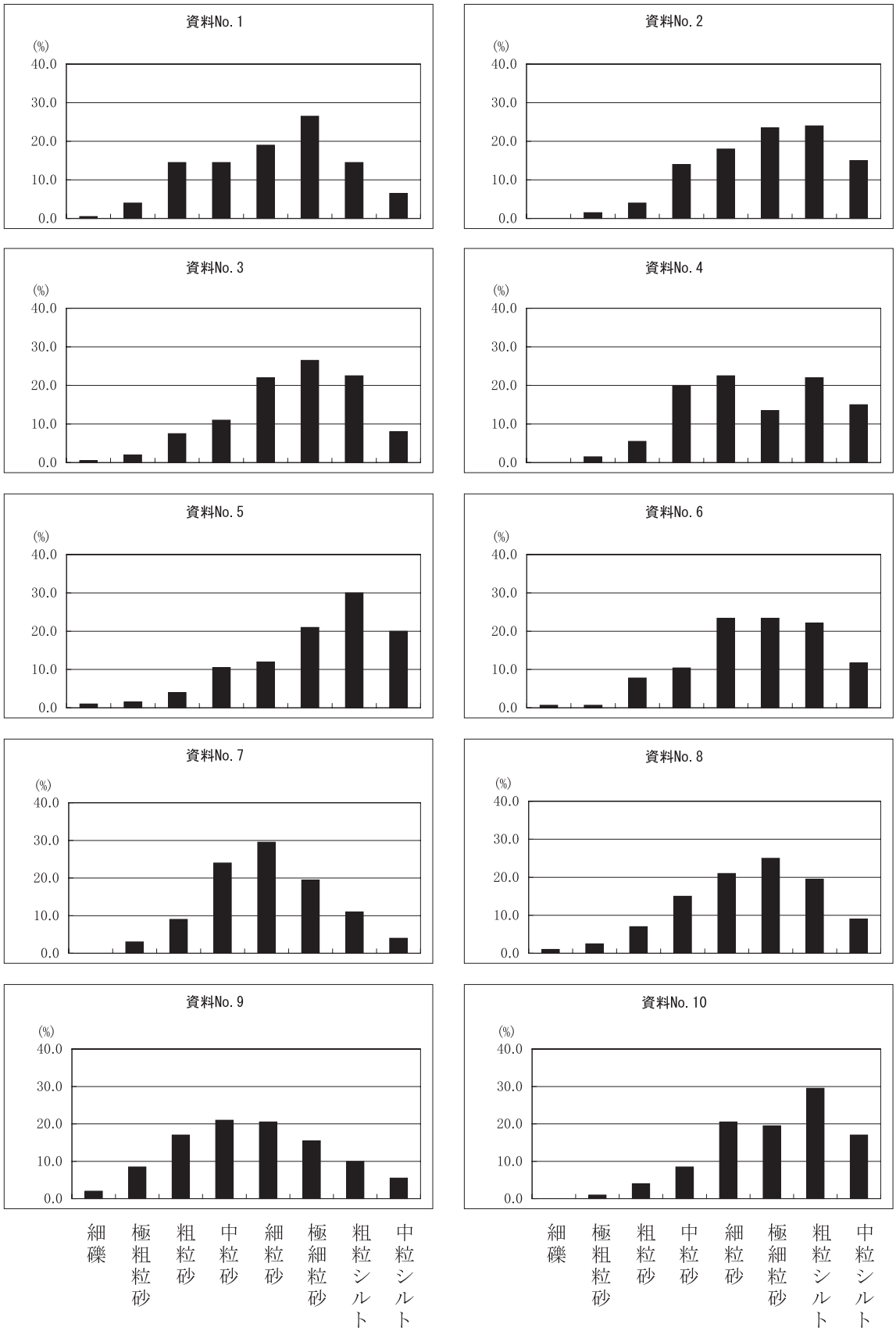
資料No	砂粒区分		砂粒の種類構成																								合計
			鉱物片										岩石片										その他				
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	破砕状花崗岩	珪化岩	植物片	火山ガラス	珪藻	植物珪酸体	
16	砂	細礫																									0
		極粗粒砂																									0
		粗粒砂	1	1			1									5	3	1				1					13
		中粒砂	5	2	5		1								1	5	2	4				2		2			29
		細粒砂	8	2	10		3						2					8						6			39
		極細粒砂	12	4	4		4						1					5						5			35
		粗粒シルト	22	3	11							1												2		9	48
		中粒シルト	17	3	12		1																			3	36
	基質																										588
	孔隙																										20
17	砂	細礫																									0
		極粗粒砂																				2					2
		粗粒砂	8													1	1	4				2					16
		中粒砂	12		3											1	6	9				3					34
		細粒砂	13		5								1			1	3	9						3			35
		極細粒砂	24	1	8													8						4			45
		粗粒シルト	24	1	13							1						1						3		1	44
		中粒シルト	19		4																					1	24
	基質																										625
	孔隙																										18
18	砂	細礫																									0
		極粗粒砂	1																			1					2
		粗粒砂	1	1										1		3	4										10
		中粒砂	9	3	4											1	4	5				3		4			33
		細粒砂	5	3	6		1									1	2	1				1		12			32
		極細粒砂	7	4	4		1					1					1							7			25
		粗粒シルト	16	4	24							1												4		5	54
		中粒シルト	17	3	22		1																			1	44
	基質																										935
	孔隙																										19
19	砂	細礫														1											1
		極粗粒砂	1														2	1									4
		粗粒砂	4	1									1			1	8	3				5		2			25
		中粒砂	4	3	5										1	2	10	2						7			34
		細粒砂	7		13		7										3	1						14			45
		極細粒砂	10		13		4					1					1	1						17			47
		粗粒シルト	11		7		4					1												4		3	30
		中粒シルト	5		7																				1	1	14
	基質																										705
	孔隙																										22
20	砂	細礫																									0
		極粗粒砂	2	1							1					1						1					6
		粗粒砂	6														3	6				2		1			18
		中粒砂	5	5	5						1						1	2						10			29
		細粒砂	11	2	8	2											2	4						18			47
		極細粒砂	11	4	12													2						17			46
		粗粒シルト	10		8							1												7		1	27
		中粒シルト	3	1	3																						7
	基質																										430
	孔隙																										29



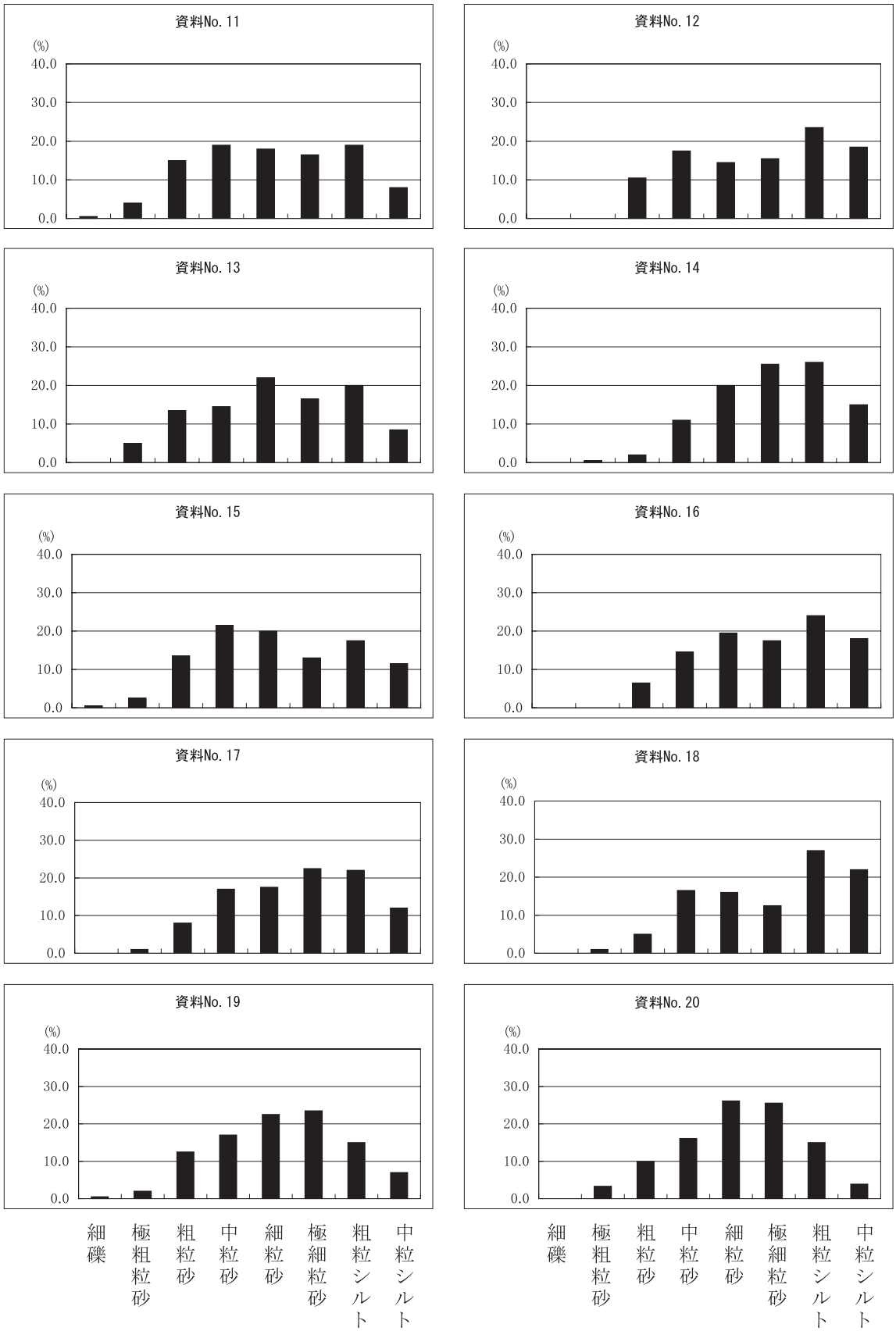
第8図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)



第8図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)



第9図　胎土中の砂の粒径組成(1)



第9図　胎土中の砂の粒径組成(2)

第２節　今宿遺跡出土瓦の蛍光Ｘ線分析

大阪大谷大学
三 辻　利 一

粘土鉱物は岩石が風化して溶解した溶液中から再結晶して生成したものであるが、粘土中には母岩中に含まれていた造岩鉱物の微粒子も包含されている。雲母、角閃石などの粗い粒子が多数含まれていると、混和剤といわれる場合もある。粘土は岩石に比べて均質化しているが、それでも不均質系であることには代わりはない。したがって、粘土を素材としている土器類も不均質系である。不均質系試料の分析データにはバラツキがあり、そのため、多数の試料の分析データから試料集団の化学特性を把握することになる。溶液のように均質系ではない点に土器類試料の特徴がある。この認識は土器類を分析する分析化学者には必要である。

今宿遺跡からは大量の瓦片が出土している。今回はこれらの瓦片中から任意に選択した 17 点の平瓦と３点の丸瓦の蛍光Ｘ線分析の結果について報告する。

瓦片試料は表面を研磨してのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で 100 メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして、10 トンの高圧をかけてプレスし、内径 20 ㎜、厚さ５㎜の錠剤試料を作成し、蛍光Ｘ線分析を行った。

理学電機製 RIX2100（波長分散型）の完全自動式の分析装置を使用した。完全自動式の装置を使用する理由は土器類の産地問題の研究には従来の常識を破る大量の土器試料の分析が必要だからである。本装置には、TAP、Ge、LiF の３枚の分光結晶と、ガスフロー比例計数管、シンチレーションカウンターの２種類の検出器が装填されている。高度の機能をもつ分析装置である。Ｘ線管球は Rh 管球であり、50kV、50mA の条件で使用した。

分析値は同時に測定された岩石標準試料 JG-1 の各元素の蛍光Ｘ線強度を使って標準化した値で表示した。硬質の土器類の素材粘土は花崗岩類に由来する場合が多く、JG-1（群馬県産の花崗岩類）が最適の標準試料となる。JB、JA などの玄武岩、安山岩系の岩石標準試料は標準試料としては不適当である。

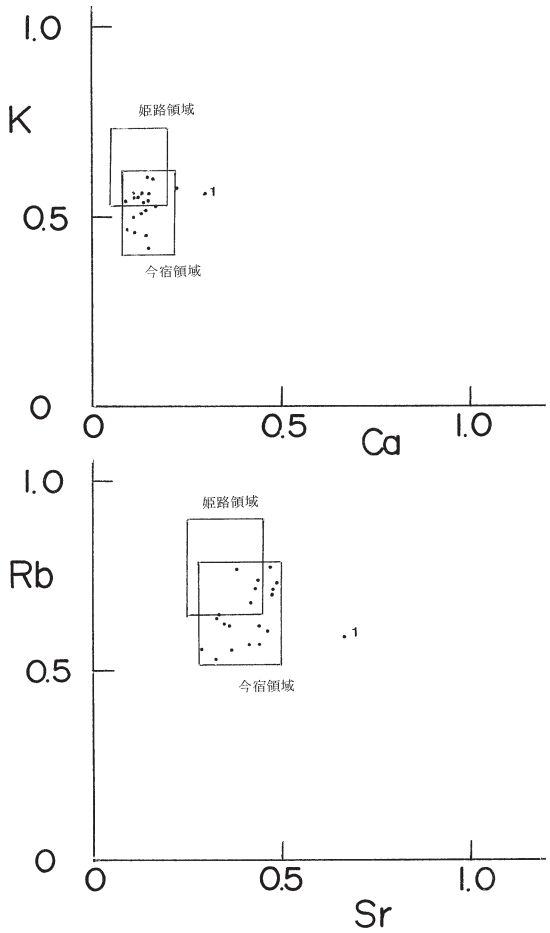
分析値は第３表にまとめている。この結果を理解するには、K-Ca、Rb-Sr の両分布図を作成することである。全国各地の窯跡出土須恵器の分析データから、両分布図が有効に地域差を表すことが実証されている。両分布図の縦軸は粘土の母岩中に含まれていたカリ長石、横軸は斜長石に関連があることがわかっている。長石類は造岩鉱物の６割を占める最も重要な鉱物である。これに対して、雲母、角閃石などの有色鉱物は元素分析の Fe 因子に対応する。土師器などの軟質土器では粘土中に含まれる鉱物形が残されている場合が多いが、1000℃を越える高温で焼成する硬質土器では鉱物形が破壊されて残っていない場合が多く、顕微鏡による胎土観察は有効ではない。胎土の元素分析に頼らざるをえない。

今回分析した試料の両分布図を第 10 図に示す。No.1 の試料を除いて他の試料はまとまって分布したので、これらを包含するようにして、仮の今宿領域を描いてある。両分布図でまとまって分布するということは、これらの瓦片は同じ窯で焼成された可能性があることを示唆する。No.18・No.19・No.20 の３点は丸瓦であり、分析データから平瓦との区別ができないところから、同じ素材粘土で作られた瓦であると推察される。このことはさらに多くの瓦片（平瓦、丸瓦）試料を分析することによって確かめられよう。なお、No.1 の平瓦は他の試料集団から離れて分布するところから、別場所で別の素材粘土で

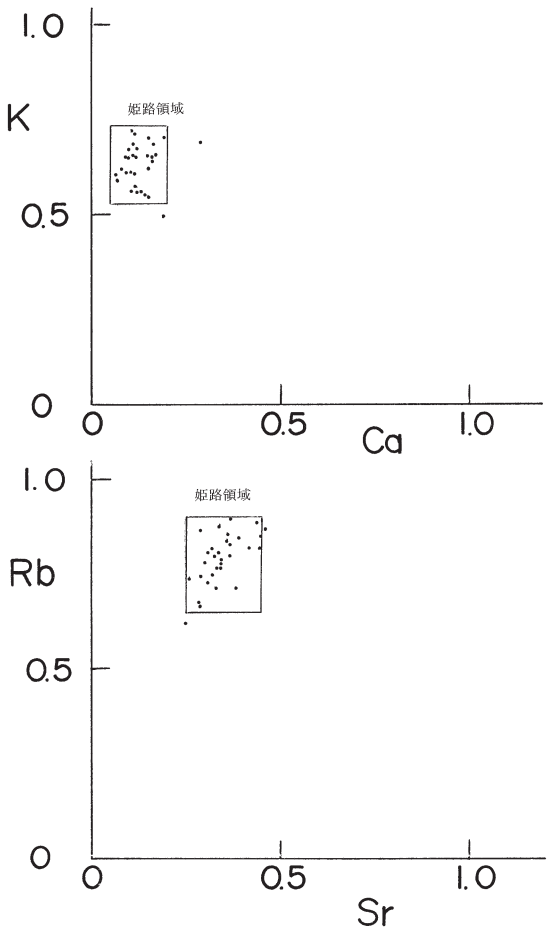
作られた可能性がある。今後、今宿遺跡から出土する瓦片をさらに多く分析すると、No.1 と同じ胎土をもつ瓦片が検出される可能性がある。

軒瓦も今宿遺跡から大量に出土しているという。今回の分析試料中には、軒瓦は含まれていないが、今後、軒瓦片も大量に分析することによって、平瓦、丸瓦と同じ素材粘土で作られた瓦であるかどうかがわかるであろう。また、数点ではあるが、軒丸瓦も出土しているという。その胎土も平瓦、丸瓦と同じであるかどうかが注目される。

念のために、第 11 図には姫路市周辺の窯跡出土須恵器の両分布図を示してある。青山４号窯、青山稲荷神社裏窯、桜峠１号窯の須恵器片試料を分析した。これらを包含するようにして姫路領域を描いてある。この結果に基づいて、第 10 図には姫路領域と今宿領域を比較してある。類似はするが、一致しないことがわかる。ただし、余程の理由がない限り、今宿遺跡の瓦も姫路市周辺で作られたものと推察される。このことを実証しようとすると、今後、姫路市周辺の白鳳時代の瓦片を大量に分析する必要がある。今後の課題である。このように、胎土分析のデータを考古学に有効に役立てようとすると、従来の常識を破る大量の土器類試料の分析が必要であり、そのために、有効に活躍する分析装置が完全自動分析装置なのである。



第10図　今宿遺跡出土瓦の両分布図



第11図　姫路窯跡群の両分布図

第3表　今宿遺跡　出土瓦の分析データ

資料No	分析No	種別	器種	分類	凸 面	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
No.1	19-2759	瓦	平瓦	J1類	平行条線	古代	0.552	0.296	1.27	0.594	0.673	0.184
No.2	19-2760	瓦	平瓦	K9類	格子叩き目	古代	0.540	0.149	1.24	0.605	0.461	0.183
No.3	19-2761	瓦	平瓦	K16類	格子叩き目	古代	0.554	0.110	1.13	0.652	0.335	0.181
No.4	19-2762	瓦	平瓦	K15類	格子叩き目	古代	0.450	0.139	1.53	0.573	0.441	0.142
No.5	19-2763	瓦	平瓦	K19類	格子叩き目	古代	0.465	0.093	1.31	0.640	0.330	0.107
No.6	19-2764	瓦	平瓦	N5類	縄叩き目	古代	0.500	0.108	1.15	0.624	0.358	0.141
No.7	19-2765	瓦	平瓦	N2類	縄叩き目	古代	0.531	0.171	1.29	0.621	0.439	0.254
No.8	19-2766	瓦	平瓦	K18類	格子叩き目	古代	0.562	0.127	1.19	0.630	0.350	0.219
No.9	19-2767	瓦	平瓦	K21類	格子叩き目	古代	0.539	0.089	1.24	0.560	0.289	0.184
No.10	19-2768	瓦	平瓦	L2類	平行叩き目	古代	0.549	0.122	1.11	0.737	0.418	0.223
No.11	19-2769	瓦	平瓦	K2類	格子叩き目	古代	0.455	0.114	1.54	0.531	0.325	0.080
No.12	19-2770	瓦	平瓦	K16類	格子叩き目	古代	0.562	0.113	1.20	0.772	0.381	0.158
No.13	19-2771	瓦	平瓦	K13類	格子叩き目	古代	0.514	0.129	1.30	0.569	0.416	0.171
No.14	19-2772	瓦	平瓦	N4類	縄叩き目	古代	0.599	0.171	1.03	0.736	0.493	0.267
No.15	19-2773	瓦	平瓦	W3類	無文叩き	古代	0.558	0.149	1.25	0.716	0.479	0.167
No.16	19-2774	瓦	平瓦	W3類	無文叩き	古代	0.537	0.140	1.30	0.677	0.422	0.156
No.17	19-2775	瓦	平瓦	W3類	無文叩き	古代	0.414	0.149	1.42	0.564	0.368	0.155
No.18	19-2776	瓦	丸瓦	S3類	縄叩き目	古代	0.523	0.137	1.34	0.733	0.431	0.141
No.19	19-2777	瓦	丸瓦	S6類	ナデ	古代	0.605	0.149	1.23	0.776	0.466	0.180
No.20	19-2778	瓦	丸瓦	S1類		古代	0.573	0.226	1.43	0.173	0.484	0.267

第５章　まとめ

第１節　瓦の統計調査（第 12 図・第４表）

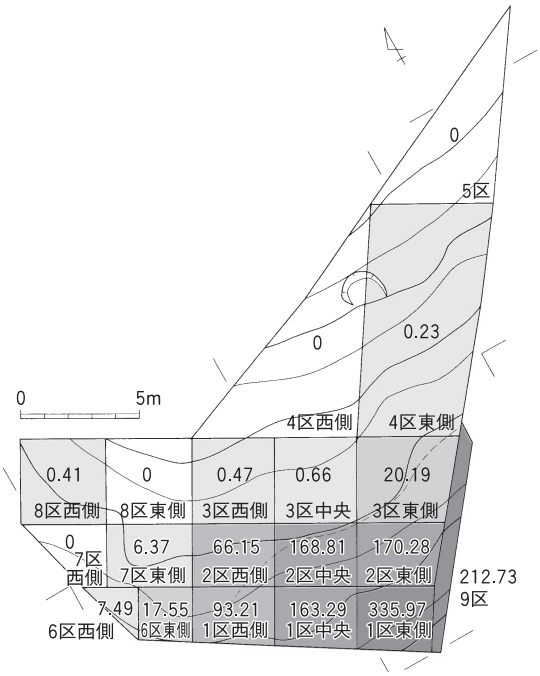
総出土数はコンテナ約 1,000 箱であり、非常に多量であった。しかも、瓦集積という遺構の性格上、小破片のものが大多数であった。このため遺物整理では瓦の分類基準を設け、重量および点数、隅数の統計を実施した。なお、当初の分類基準から変更が生じたが、随時遡って再分類を行った。ただし、一部は時間の制約で再分類ができなかった。

１．瓦の出土地区

発掘調査の実施にあたり、調査区を設定して遺物を取り上げた。ただし、調査区輪郭の変化点や道路センターを基準としたため、規則正しい調査区ではない。平成 14 年度は、道路センターの調査区の輪郭の変化点を基準に南北を５分割した。道路センターより東側は１～５区の５地区に、道路センターより西側は６～８区の３地区の合計８地区とし、平成 15 年度の調査区を９区とした。さらに、１～３区は東側・中央・西側の３地区に細分した。４・６～８区は東側・西側の２地区に細分して遺物を取り上げた。

これを元に瓦を取り上げた結果は、第 12 図と第４表のとおりである。先に述べたように面積が一定ではないため、１㎡あたりの重量密度を計算した。これによると１区東側が 335.97kg/ ㎡ともっとも密度が高く、次に２区東側・２区中央・１区中央が続き、１区西側・９区・２区西側が続き、さらに３区東側・６区東側と続いている。以上、調査区の南東端部分を中心に密度が濃く出土しており、西北に行くに従って密度が薄くなっていることが数字の上からも確認できた。

調査区の東隣については未調査ではあるが、断面に瓦が堆積していることから更に濃密な状態で瓦が堆積していることが推測できる。このことから瓦は南東部分からもたらされた可能性が指摘できる。



第12図　今宿遺跡瓦地区別出土量

No.	地　区		重量(kg)	面積(㎡)	密度(kg/㎡)
1	1区	東側	2993.48	8.91	335.97
2	1区	中央	1436.97	8.80	163.29
3	1区	西側	787.63	8.45	93.21
4	2区	東側	1571.68	9.23	170.28
5	2区	中央	1514.21	8.97	168.81
6	2区	西側	593.38	8.97	66.15
7	3区	東側	294.33	14.58	20.19
8	3区	中央	8.14	12.42	0.66
9	3区	西側	5.81	12.42	0.47
10	4区	東側	10.46	46.08	0.23
12	4区	西側	0	33.43	0
13	5区	東側	0	21.84	0
16	6区	東側	92.86	5.29	17.55
18	6区	西側	19.78	2.64	7.49
19	7区	東側	59.65	9.36	6.37
21	7区	西側	0	6.11	0
22	8区	東側	0	12.96	0
24	8区	西側	5.25	12.96	0.41
25	9区		468.36	2.20	212.73
	他				
	合　計		9862	245.62	38.73

第4表　今宿遺跡瓦地区別出土量・密度

２．出土遺物の比率（第 13 図）

丸瓦と平瓦

今宿遺跡から出土した瓦の総重量は 9,677.0 kg、破片の総点数は 92,368 点である。このうち近世瓦が 19.3 kg、266 点存在するため、古代瓦の重量は 9,657.7 kg、点数は 92,102 点である。古代瓦のうち、丸瓦と平瓦のどちらか不明なものを除いて、丸瓦は 2,407.0 kg、27,142 点、平瓦は 7,250.7 kg、64,960 点であり、丸瓦と平瓦の比率はおよそ重量で１：３、点数で１：2.4 になる。丸瓦と平瓦の重量比率を２：３と仮定して比率を求めるとおよそ１：２になる。隅数計算法では丸瓦 622 点、平瓦 1,109 点に復原でき、比率はおよそ１：1.8 になる。これらの方法では面戸瓦や熨斗瓦などの道具瓦などが混入している可能性があり、若干構成比が変わる可能性が残るが、重量と隅数計算法の二方法で丸瓦と平瓦の比率はおよそ１：1.8 から１：2.4 となり、平瓦が丸瓦のおよそ２倍であることが分かった。

丸瓦

丸瓦は行基式と玉縁式が存在している。行基式と玉縁式の比率は破片が小さいことから正確な比率は出せなかったが、残存している個体数から判断すると圧倒的に行基式丸瓦のほうが多い。

平瓦

平瓦は第３章で行った分類別に重量・点数・隅数を第５表にまとめた。詳細の数値と比率を一覧にしたが、統計方法が異なってもそれほど大きな違いは現れなかった。すなわち平行条線・平行叩き目は重量比 2.5％、点数比 2.0％、隅点数比 2.4％であり、格子叩き目は重量比 37.7％、点数比 33.4％、隅点数比 38.7％であり、縄叩き目は重量比 23.3％、点数比 22.9％、隅点数比 19.6％であり、無文叩き目・撫で消しは重量比 31.3％、点数比 33.7％、隅点数比 34.3％である。このため重量を代表して凸面調整と製作技法を元に比率を求め、円グラフを作った。これらから格子叩き目が一番多く、無文叩き目･撫で消し、縄叩き目と続き、平行条線・平行叩き目は非常に少ないことが分かる。

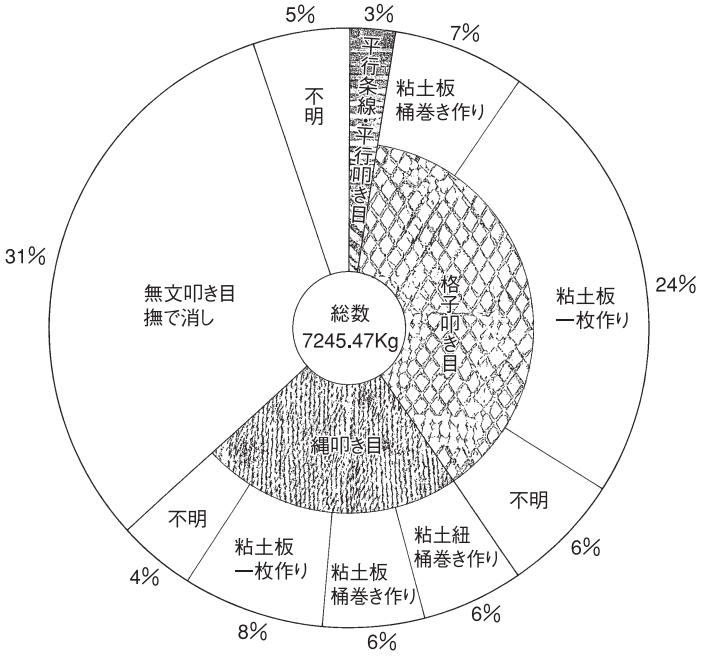
軒瓦の比率

軒瓦と軒瓦以外の比率はどうであろうか。

軒丸瓦破片数：丸瓦破片数は 49 点:27,142 点であり、比率は１：554 であり、小犬丸中谷廃寺で統計を取っている１：21.4 と大きく比率が異なっており、軒瓦が極端に少ないことが分かる。

軒平瓦破片数：平瓦破片数は 76 点:64,960 点であり、比率は１：855 であり、小犬丸中谷廃寺で統計を取っている１：37.5 と大きく比率が異なっており、軒瓦が極端に少ないことが分かる。

このように軒丸瓦・軒平瓦、いずれもが軒以外の瓦に比べて極端



第13図　平瓦製作技法・凸面調整の比率

に少ないことが分かった。これは、今宿遺跡の軒丸瓦・軒平瓦のバリエーションが少なく、短期間に位置付けられるのとは反対に平瓦は製作技法の観察から比較的長期にわたって作られ続けられたためであると考えられる。

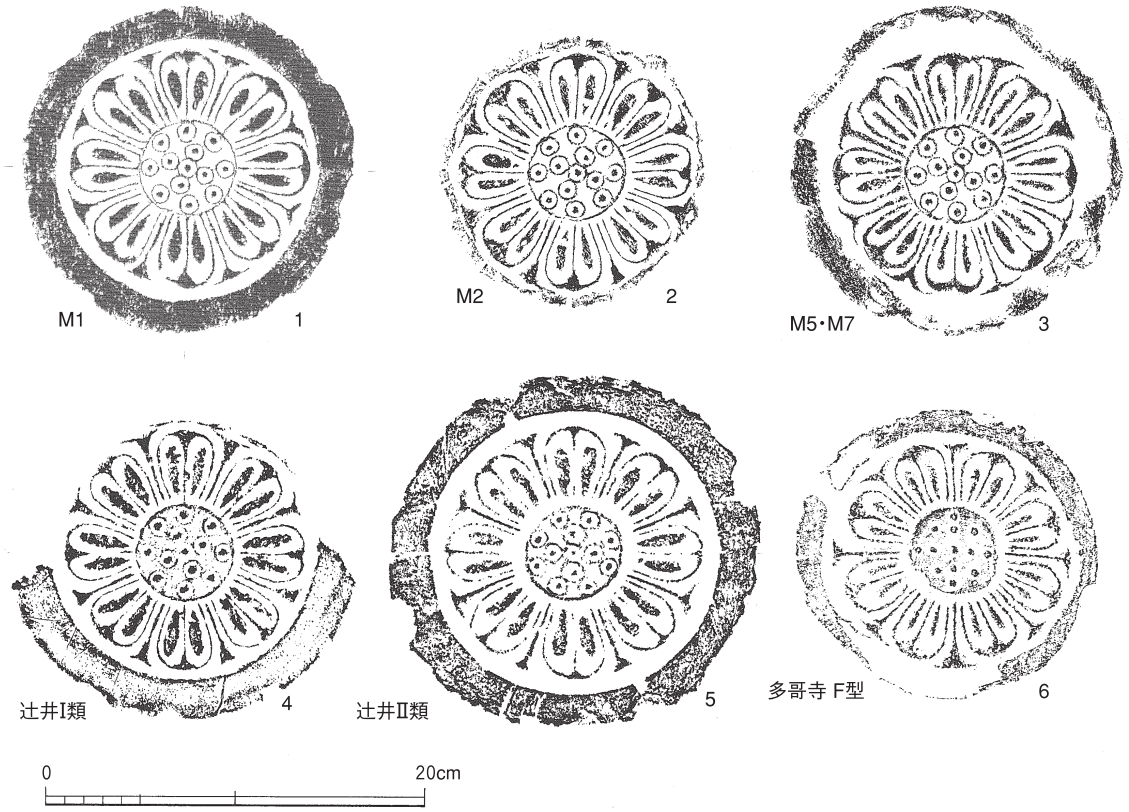
第２節　遺物の検討

１．軒丸瓦（第14図）

今宿遺跡出土軒丸瓦はすべて、川原寺系の複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。この瓦は今里幾次により素文縁のものをＢ種として分類し、中房の蓮子周環の有無と蓮子の数によりＢ①・Ｂ②・Ｂ③に細分している。今宿遺跡の軒丸瓦は蓮子が１＋４＋８で、周環が存在することからＢ①に位置付けられる。さらに、蓮子と花弁との位置関係から、辻井廃寺の軒丸瓦を子葉間に外周蓮子が位置する辻井Ⅰ類と間弁間に位置する辻井Ⅱ類に分類しており、辻井Ⅰ類から辻井Ⅱ類への時間的変遷を考えている。

この今里の分類に従うと今宿遺跡の軒丸瓦は、すべてＢ①であるとともに、すべて辻井Ⅰ類に位置付けられる（註1）。

そこで、今宿遺跡の軒丸瓦の詳細を検討する。第３章で述べたとおり、外縁の形態や子葉の形態から細分が可能である。外縁は斜縁と平縁とがあり、子葉は立体的なものと平面的なものとが存在する。これらは相関関係があり、外縁が斜縁で子葉は立体的なM1類・M2類と外縁が平縁で子葉が平面的なM5類とに大別できる。焼成は前者が硬質で灰色の色調を呈し、後者は焼成がやや軟質で灰白色の色調あるいは焼成が不良で橙色の色調を呈する。



第14図　今宿遺跡軒丸瓦復原と辻井廃寺・多哥寺遺跡出土軒丸瓦

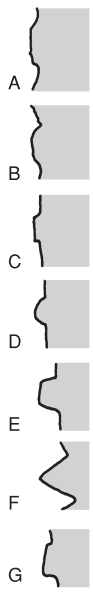
すなわち、今里分類の辻井Ⅰ類とした川原寺系の複弁八弁蓮華文軒丸瓦は今宿遺跡の検討で､外縁や子葉の形態などから M1 類･M2 類から M5 類へ時間的推移が想定できる。

２．軒平瓦（第 15 図）

今宿遺跡出土軒平瓦は三重弧文を中心とし、四重弧文と二重弧文がわずかに存在している。三重弧文のものには段顎が存在するものとしないものがある。ただし、平瓦部分との組み合せが明らかなものは少ない。この中で先後関係を見ると、弧線の上面に挽き型が当たっていない H1 類・H2 類・H3 類・H4 類が灰色の色調で焼成が硬質であり、古相を呈する。これらの中では段顎を持つ H1 類が古く、段顎を一度作って粘土を貼り付けている H2 類がこれに続き、直線顎の H3 類・H4 類が新しい。

弧線や凹線の断面が方形の H5 類・H6 類・H7 類・H8 類・H9 類は直線顎であるとともに、灰白色の色調で焼成がやや軟質であり、新相を呈する。

今宿遺跡では軒平瓦の変遷は三重弧文から四重弧文あるいは二重弧文への変遷が考えられる。



第15図
軒平瓦第2弧線
断面形態

３．平　瓦（第５表）

第３章で詳細を述べたように今宿遺跡の平瓦は、製作技法と凸面調整により分類を行った。製作技法は粘土板桶巻き作り技法と粘土紐桶巻き作り技法と粘土板一枚作り技法とがあり、凸面調整は並行条線・平行叩き目、格子叩き目、縄叩き目、無文叩き目、ナデ消しなどに分けられる。

格子叩き目は粘土板桶巻き作り技法と粘土板一枚作り技法があり、粘土板一枚作り技法が約 3.5 倍と多い。粘土板桶巻き作り技法は K2 類・K5 類・K6 類・K9 類と、すべて格子の小さな叩き目である。このことから格子の小さな叩き目は古い様相を表していることが分かる。粘土板一枚作り技法は K3 類･K4 類・K7 類・K8 類など格子の小さな叩き目は僅かであり、K10 類・K24 類・K25 類など長形のものや K11 類・K12 類・K13 類・K14 類・K15 類・K16 類・K17 類など中程度の叩き目や K21 類・K22 類・K23 類など大きな叩き目や K18 類・K20 類など大きな叩き目に星があるものなどがある。

縄叩き目は桶巻き作り技法と一枚作り技法とがあり、桶巻き作り技法が多い。桶巻き作り技法には N1 類の粘土紐桶巻き作り技法と N2 類の粘土板桶巻き作り技法とがあり、ほぼ同数である。またいずれも縦方向の縄叩き目の痕跡を残し縄叩きの目の中では古相を表す。粘土板一枚作り技法には N3 類の縦方向の縄叩き目が多く、N5 類の斜め方向の縄叩き目や N6 類の横方向の縄叩き目は非常に少ない。

４．鴟　尾

今宿遺跡から出土した鴟尾は A 類と B 類の２種類が存在している。A 類はいわゆる蓮華文帯鴟尾である。蓮華文帯鴟尾は今里によりⅠ型からⅣ型の４型に分類するとともに時間的変遷を考えている。今宿遺跡の蓮華文帯鴟尾の蓮華文飾板は周縁のみで、蓮華文様を欠損しているため周縁のみでしか判断できない。周縁の文様は面違鋸歯文縁であり、復原直径は 9.0 ㎝であり、今里分類の最古層であるⅠ型に位置付けることができる。このⅠ型の面違鋸歯文縁複弁六葉蓮華文の笵型には花弁および周縁外に笵傷が存在しており、周縁外の笵傷の同一性からもⅠ型に位置付けることができる。

５．軒丸瓦・軒平瓦の組み合せ

今宿遺跡出土の軒丸瓦と軒平瓦の組み合せを考えてみる。出土状況が瓦集積であり、遺構からのまとまった資料ではないため難しい。このため、それぞれの中での先後関係と焼成や色調などを考慮して考

第5表　今宿遺跡出土平瓦分類

分　類	凸面調整	製作技法		重量(kg)	%	数(点)	%	隅(点)	%	報　　告
J1・L1・L2	平行条線・平行叩き目	粘土板桶巻き作り・一枚作り		175.14	2.4	1214	1.9	99	2.2	160～163・167～170
J2	平行叩き目	粘土板桶巻き作り		9.17	0.1	67	0.1	6	0.1	164・165
	平行条線・平行叩き目	**桶・一枚**	**小計**	**184.31**	**2.5**	**1281**	**2.0**	**105**	**2.4**	
K1	格子叩き目　中	不明		5.27	0.1	38	0.1	2	0.0	171
K2	格子叩き目　小	粘土板桶巻き作り		246.76	3.4	1652	2.5	95	2.1	172～176
K5	格子叩き目　小	粘土板桶巻き作り		138.56	1.9	815	1.3	88	2.0	179～181
K6	格子叩き目　小	粘土板桶巻き作り		2.05	0.0	11	0.0	2	0.0	182
K9	格子叩き目　小変形	粘土板桶巻き作り		126.60	1.7	916	1.4	56	1.3	185～188
	格子叩き目	**桶**	(小計)	**513.97**	**7.1**	**3394**	**5.2**	**241**	**5.4**	
K3・K4・K8	格子叩き目　小	粘土板一枚作り		6.40	0.1	31	0.0	11	0.2	177・178・184
K7	格子叩き目　小	粘土板一枚作り		21.89	0.3	135	0.2	18	0.4	183
K10	格子叩き目　長	粘土板一枚作り		5.00	0.1	33	0.1	6	0.1	189
K11	格子叩き目　中	粘土板一枚作り		0.65	0.0	6	0.0	1	0.0	190
K12	格子叩き目　中	粘土板一枚作り		29.76	0.4	229	0.4	22	0.5	191
K13	格子叩き目　中	粘土板一枚作り		275.82	3.8	2013	3.1	135	3.0	192～196
K14	格子叩き目　中	粘土板一枚作り		616.60	8.5	5179	8.0	426	9.6	197～200
K15	格子叩き目　中	粘土板一枚作り		178.78	2.5	1161	1.8	106	2.4	201～204
K16	格子叩き目　中	粘土板一枚作り		202.03	2.8	1464	2.3	93	2.1	205～210
K17	格子叩き目　中	粘土板一枚作り		54.59	0.8	426	0.7	34	0.8	211～214
K18	格子叩き目　大星	粘土板一枚作り		109.27	1.5	731	1.1	51	1.2	215～221
K20	格子叩き目　大星	粘土板一枚作り		45.84	0.6	236	0.4	26	0.6	222・223
K21	格子叩き目　大	粘土板一枚作り		147.13	2.0	1041	1.6	77	1.7	224～226・252
K22	格子叩き目　大	粘土板一枚作り		1.60	0.0	10	0.0	0	0.0	227
K23	格子叩き目	粘土板一枚作り		18.68	0.3	119	0.2	23	0.5	228
K24	格子叩き目	粘土板一枚作り		40.96	0.6	286	0.4	35	0.8	229～231
K25	格子叩き目	粘土板一枚作り		6.44	0.1	43	0.1	3	0.1	232・233
K26	格子叩き目	粘土板一枚作り		0.44	0.0	3	0.0	1	0.0	234
	格子叩き目	**粘土板一枚作り**	(小計)	**1761.88**	**24.3**	**13146**	**20.2**	**1068**	**24.1**	
不明	格子叩き目			452.08	6.2	5172	8.0	408	9.2	
	格子叩き目		**小計**	**2727.93**	**37.7**	**21712**	**33.4**	**1717**	**38.7**	
N1	縄叩き目　縦	粘土紐桶巻き作り		413.74	5.7	3932	6.1	147	3.3	235～239
N2	縄叩き目　縦	粘土板桶巻き作り		404.61	5.6	2802	4.3	182	4.1	240～245
	縄叩き目	**桶**	(小計)	**818.35**	**11.3**	**6734**	**10.4**	**329**	**7.4**	
N3	縄叩き目　縦	粘土板一枚作り		470.17	6.5	4086	6.3	319	7.2	246～250
N4・N5	縄叩き目　縦・斜	粘土板一枚作り		83.68	1.2	485	0.7	33	0.7	253～260
N6	縄叩き目　横	粘土板一枚作り								261・262
N7	縄叩き目	粘土板一枚作り		4.34	0.1	29	0.0	0	0.0	263
	縄叩き目	**粘土板一枚作り**	(小計)	**558.19**	**7.7**	**4600**	**7.1**	**352**	**7.9**	
不明	縄叩き目	不明		308.89	4.3	3526	5.4	189	4.3	
	縄叩き目		**小計**	**1685.43**	**23.3**	**14860**	**22.9**	**870**	**19.6**	
W1・W2・W3	無文叩き目	桶・一枚		2269.82		21888		1519		
	無文叩き目		**小計**	**2269.82**	**31.3**	**21888**	**33.7**	**1519**	**34.3**	
	不明			377.98	5.2	5202	8.0	222	5.0	
			総計	**7245.47**	**100.0**	**64943**	**100.0**	**4433**	**100.0**	

えてみる。灰色で硬質の焼成を呈する軒丸瓦 M1 類・M2 類と軒平瓦 H1 類・H2 類・H3 類とは焼成や色調がにかよっているため、組み合せとして製作・焼成が行われた可能性が高い。また、灰白色でやや軟質の焼成を呈する軒丸瓦 M5 類と軒平瓦 H8 類・H9 類は焼成や色調がにかよっているため、組み合せとして製作・焼成が行われた可能性が高い。

前者が古相の組み合わせであり、後者が新相の組合せである。

６．自然科学的分析から

出土した瓦の一部を蛍光Ｘ線分析法と岩石学的・堆積学的薄片法との二種類の方法により分析を行った。蛍光Ｘ線分析法では今宿遺跡の１点の瓦を除いた19点がまとまりをもち、姫路市の青山４号窯・青山稲荷神社裏窯・桜峠１号窯の須恵器片で設定した姫路領域とは類似しているが一致していないことが判明した。このことからこれらとは別の地点の窯の可能性が高く、複数の窯からの供給を示唆するものである。岩石学的・堆積学的薄片法ではほぼ同様の鉱物片、岩石片の種類を検出したことから同一の地質的背景を有する場所で生産されたことが判明した。なお具体的な場所は不明であるが、段丘性堆積物のようである。いずれにしても、出土総数に対する分析資料が少なすぎることや比較資料が十分でないことから、今後の比較資料の増加を待って生産地を検討したい。

７．土　器

今宿遺跡から出土した瓦以外の遺物には、少ないながらも土器類と砥石が存在する。このうち所属時期が判明するものに土器がある。第３章で述べたとおり、弥生時代後期、７世紀中頃・７世紀後半・10世紀・11世紀・12世紀・13世紀・14世紀・15世紀・16世紀・江戸時代の土器が出土している。

第３節　今宿遺跡と周辺遺跡（第６表）

１．今宿遺跡と今宿遺跡Ⅱ

第２節で出土遺物の大半を占める瓦の検討を行った。少数ではあるが、今宿遺跡の性格を理解する上で重要であるため、ここでは瓦以外の遺物の検討を行う。

今宿遺跡から出土した瓦以外の出土遺物は第３章で述べたとおり、弥生時代後期、７世紀中頃・７世紀後半・10世紀・11世紀・12世紀・13世紀・14世紀・15世紀・16世紀・江戸時代の土器が出土している。

本報告の調査地点の北側で調査を実施した今宿遺跡Ⅱの平成13度の調査では７世紀後半の溝（SD01～SD03）、12世紀～13世紀の土坑（SK11・SK12・SK14）、13世紀～14世紀の掘立柱建物（SB01～SD05）、14世紀～15世紀の土坑（SK01･SK03･SK05･SK10）、14世紀後半～15世紀前半の井戸（SE01）を検出している。SD03は７世紀後半に開削が行われているが、埋没過程で上層が弥生時代後期と12世紀後半～15世紀、中層が８世紀～10世紀、下層が弥生時代後期と７世紀後半～10世紀の遺物が出土している。

平成14度の調査では弥生時代後期の竪穴住居、12世紀～13世紀の掘立柱建物（SB07）、13世紀～14世紀の掘立柱建物（SB09）、13世紀～14世紀の土坑（SK17・SK20・SK22・SK23・SK28・SK29・SK30・SK31）、13世紀～14世紀の土坑墓（SX01・SX02）、15世紀の土坑（SK21・SK27・SK05・SK10）、15世紀の溝（SD01～SD03）、16世紀の土坑（SK18・SK03・SK05・SK10）を検出している。

以上のように今宿遺跡Ⅱでは弥生時代後期の竪穴住居、７世紀後半の溝、12世紀～14世紀の掘立柱建物・土坑、13世紀～14世紀の土坑墓、14世紀～15世紀の土坑・井戸、15世紀の溝、16世紀の土坑を検出しており、溝の埋土から８～10世紀の遺物が出土している。すなわち、弥生時代後期、７世紀後半～10世紀、12世紀～16世紀の遺構・遺物を検出していることになる。

今宿遺跡Ⅱでは瓦が使用されていた建物等の遺構は検出していないが、今回の報告する調査で出土した瓦と同様の瓦が出土している。丘陵の北端から約40m離れた溝SD03と井戸SE01から瓦が出土している。溝SD03の開削時期は７世紀後半と推定されており、第２層と第３層から出土している。第２層からは弥生時代後期から鎌倉時代の遺物が出土しており、第２層から出土している瓦はN3類の平瓦で

第6表　遺物・遺構から見た今宿遺跡Ⅰと今宿遺跡Ⅱの消長

	弥生後	古墳前	古墳中	古墳後	7C	8C	9C	10C	11C	12C	13C	14C	15C	16C
今宿Ⅰ														
今宿Ⅱ	住居				溝					建物 土坑	建物 土坑	建物 土坑	溝 土坑	土坑

ある。第３層からは奈良時代から平安時代の遺物が出土しており、第３層から出土している瓦はK2類とK8類とK17類の平瓦と丸瓦である。第４層以下は７世紀後半を中心として弥生時代後期から奈良時代の遺物が出土している。井戸SD01はSD03を切っており、鎌倉時代を中心とした遺物が出土しており、瓦は丸瓦が出土している。

このように本書で報告する今宿遺跡Ⅰから出土している遺物の時期は、本報告の調査地点の北側で調査を実施した今宿遺跡Ⅱで出土した遺物・時代と重なっている。ただし、今宿遺跡Ⅱでは瓦の出土量はわずかである。このことから、土器類などの出土遺物は、広義の今宿遺跡から集積されたものである一つの証拠と考えることができる。また今宿遺跡Ⅰの北側に位置している今宿遺跡Ⅱでは瓦の出土量が少なかったことから、瓦が本来あった場所は今宿遺跡Ⅰの北側ではなく、今宿遺跡Ⅰの東側あるいは南側である可能性が高い。これは瓦の集積場所の方向と一致する。

２．辻井廃寺ほか周辺寺院との比較（第14図）

軒丸瓦の比較

今宿遺跡から出土した軒丸瓦は、前節で検討したようにすべて川原寺系の素文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、すべて今里分類の辻井Ⅰ類の範疇である。細部の検討により古相と新相に細分した。ただし、今宿遺跡で細分した辻井Ⅰ類新相と辻井Ⅱ類の先後関係は現状では不明である。

辻井遺跡の軒丸瓦は今里幾次により中房の外周蓮子と花弁との位置関係から子葉間に外周蓮子が位置する辻井Ⅰ類と間弁間に位置する辻井Ⅱ類に分類しており、Ⅰ類からⅡ類への時間的変遷を考えている。今宿遺跡の軒丸瓦は辻井廃寺で出土している古相の一部が出土していると言える。

鴟尾の比較

今宿遺跡から出土した鴟尾はＡ類とＢ類の２種類が存在している。Ａ類はいわゆる蓮華文帯鴟尾であり、前節で検討したように今里分類のⅠ型に位置付けることができた。

蓮華文帯鴟尾は西播磨地域を中心に分布しており、周辺では市之郷廃寺・下太田廃寺・辻井廃寺で出土している。市之郷廃寺の鴟尾は今里分類のⅠ型であり、下太田廃寺の鴟尾は今里分類のⅠ型・Ⅲ型・Ⅳ型であり、辻井廃寺の鴟尾は今里分類のⅢ型である。このことから今宿遺跡出土の鴟尾は隣接する辻井廃寺より古相を示していることが分かる。

今宿遺跡と辻井廃寺の比較

以上、今宿遺跡と辻井廃寺から出土している軒丸瓦・軒平瓦・鴟尾を比較してみる。

軒丸瓦は両者とも川原寺系の素文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦が出土しているが、今宿遺跡はその中でも古相に、辻井遺跡は古相と新相に位置付けられる。軒平瓦は今宿遺跡では三重弧文が中心で、段顎を持つものが存在しているが、辻井遺跡は四重弧文が中心で、段顎が存在するものはない。蓮華文帯鴟尾は今宿遺跡がⅠ型と古相を示し、辻井廃寺がⅢ型と新相を示す。

以上、今宿遺跡から出土している軒丸瓦・軒平瓦・鴟尾のいずれもが、辻井廃寺より古相を示していることが明らかになった。

第４節　今宿遺跡の性格

１．今宿遺跡の性格

今宿遺跡は発見当初から、今里幾次は『姫路市辻井遺跡－その調査記録－』の中で「今宿遺跡については、これを寺跡あるいは窯跡と言い、時には単なる土捨て場とも言って、まだ遺跡の性質は明らかにされていないが､辻井遺跡と同文の複弁８葉蓮華文軒丸瓦とともに重弧文軒平瓦の出土が見られるほか、甎も検出されていることを記述しておきたい。」と記述しており、遺跡の性格を①寺跡、②窯跡、③単なる土捨て場の可能性を指摘するとともに、④辻井遺跡との関係も述べている。

今回、今宿遺跡の一部の発掘調査を実施したことにより、遺跡発見時には明らかにされていなかった今宿遺跡の性格について検討する。

①寺跡説については、今宿遺跡の今回調査を行った地点に限って言えば、地形が岩山の傾斜地であり、直接、寺院に関係する遺構は検出できなかった。しかし、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鴟尾・甎など瓦葺き建物の存在が想定できる遺物が出土している。特に赤色顔料が付着した軒平瓦の存在は寺院の存在を窺わせる。このことから付近に寺院があったことが想定できる。

②窯跡説については、窯自体が発見されなかったうえに、通常窯跡から出土する焼成失敗品や窯体付着品、窯体そのものや灰、炭などが出土していないことから、窯跡説には肯定的な資料はない。さらに軒平瓦には赤色顔料が付着したものが存在しており、実際に建物に使用された瓦であると考えられる。

③単なる土捨て場説については、土より瓦の比率が高く、土捨て場と言うよりは瓦捨て場であると言える。ただし、瓦がほとんどであるが、瓦ばかりではなく、土器や石器とともに石も出土している。このことから畠の耕作に伴って不要になった邪魔な石や瓦などを耕作に不適な岩山に集積したものと考えられる。

④辻井遺跡との関係は前節でも述べたとおり、多種類の瓦が存在している辻井遺跡（辻井廃寺）にもかかわらず、今宿遺跡は古相の限定的な瓦しか出土していない。また土器類も辻井遺跡では縄文土器や弥生中期の土器、奈良時代の土器が多く出土しているにもかかわらず、今宿遺跡では出土していない。また、今宿遺跡の瓦集積地は岩山の南東に面した場所であり、辻井遺跡の東北東の方角とは異なる。このことから、今宿遺跡は辻井廃寺の瓦あるいは辻井遺跡の土器などを運んで集積したものでない。

２．今宿遺跡の範囲

今宿遺跡の当初発見の場所は今回の調査地点の一角であると考えられる。その後、今宿遺跡は今回の調査地点の北側の今宿遺跡も含めて今宿遺跡として登録されている。

決して近代や近世など新しい時代に遠くから運ばれてきて集積した瓦ではないことが判明した。

以上、今宿遺跡は今回調査地の周辺に位置する広義の今宿遺跡の瓦をはじめとする遺物を集積した遺跡であると結論付けた。また瓦の検討により、今宿遺跡の瓦の集積は、赤色顔料が付着した軒平瓦が存在している事などから窯跡に由来するものではないことが判明した。また、辻井遺跡出土瓦を構成する一部のみしか存在しない事、今宿遺跡Ⅱの古代の遺構から同類の瓦が出土していることから、近世や近代に遠くから運ばれてきたものではないことが明らかになった。

３．「今宿廃寺」

したがって、今宿遺跡の瓦は比較的近くに存在する古代寺跡の瓦が耕作などにより邪魔になり、近くの岩山である調査地点周辺に集積したものと考えた。古代寺院の推定存在場所は瓦の集積が岩山の南東

部分に位置することからから考えて、調査地点の南東側の比較的近くに存在すると想定できる。ただし、この推定場所は住宅が建て込んでおり、現在その痕跡を残していない。今後、推定地の発掘調査によってその存在が明らかになるであろう。この古代寺院の推定存在場所は推定古代山陽道の北側約 300m の場所に位置することになり、古代山陽道沿いに位置する寺院であったと言えよう。また諸説あるが、古代山陽道草上駅および古代美作道の分岐が今宿丁田遺跡に比定する説もあり、古代山陽道草上駅や古代美作道に近いことも指摘できる。

ここで、未発見の古代寺院跡を「今宿廃寺」（註 2）と命名したい。従来、餝磨郡に存在する白鳳創建寺院は市之郷廃寺・見野廃寺・辻井廃寺の三箇寺が知られており、今回、今宿廃寺を加えることにより、四箇寺になった。辻井廃寺と今宿廃寺とは約 800 m しか離れておらず、近接する寺院として位置付けられる。なお寺院造営氏族については、今宿遺跡や今宿廃寺の所在する『里』の比定とともに重要であるが、今後の課題としたい。

註

註１　なお、今里は今宿遺跡採集の瓦を辻井Ⅱ類と同笵であるとしているが、写真から判断する限り中房が存在していないため判断できないが、子葉の状況から辻井Ⅰ類に位置付けられる。

註２　栗山一夫「播磨における初期仏教文化」（『歴史』４　1937 年）および「播磨国分寺」（『国分寺の研究』下巻　1938 年）の中に記載のある「今宿廃寺」は今里幾次氏が『姫路市辻井遺跡－その調査記録－』（1971 年）で述べているように辻井廃寺のことであり、ここで言う今宿廃寺とは異なる。

参考文献

足利健亮「山陽道の歴史地理的考察」『山陽道（西国街道）』歴史の道調査報告書　第２集　兵庫県教育委員会　1992 年
今里幾次『姫路市辻井遺跡－その調査記録－』　1971 年
今里幾次「龍野市奥村廃寺の古瓦」『奥村廃寺』龍野市文化財調査報告 18　龍野市教育委員会　1997 年
今里幾次『播磨古瓦の研究』　1995 年
今里幾次「播磨国風土記と古代寺院」『風土記研究』第 24 号　1999 年
今里幾次「播磨の古代寺院と壇越」『古代寺院からみた播磨』　2003 年
大谷輝彦「餝磨 , 神崎 , 揖保郡東部の古代寺院」『古代寺院からみた播磨』　2003 年
大脇　潔「古代寺院の造営と工人の移動－蓮華文帯鴟尾を中心として」『文化財論叢』　1983 年
大脇　潔「鴟尾の変遷」『瓦塔・鴟尾』東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書　2002 年
垣内　章「播磨国餝磨郡安相里考」『風土記研究』第 24 号　1999 年
鎌谷木三次『播磨上代寺院阯の研究』成武堂　1942 年
高橋美久二「古代の山陽道の駅家」『山陽道（西国街道）』歴史の道調査報告書　第２集　兵庫県教育委員会　1992 年
高橋美久二「古代の美作道」『美作道』歴史の道調査報告書　第４集　兵庫県教育委員会　1994 年
菱田哲郎「鴟尾の生産地と地域性－東播系と西播系－」『古代文化』第 40 巻５号　1988 年
姫路市『姫路市史』第十二巻　1989 年
姫路市史編集室『姫路市小字図』　1999 年
姫路市教育委員会『辻井遺跡発掘調査報告書』　1971 年
姫路市教育委員会『本町遺跡』　1984 年
姫路市教育委員会「辻井遺跡（第 22 次）」『TSUBOHORI 平成６年度姫路市文化財調査略報』　1999 年
姫路市教育委員会「辻井遺跡〔辻井廃寺〕（第 23 次調査）」『TSUBOHORI 平成７年度姫路市文化財調査略報』　1997 年
姫路市教育委員会「辻井遺跡〔辻井廃寺〕（第 24 次調査）」『TSUBOHORI 平成９年度姫路市文化財調査略報』　1999 年
姫路市教育委員会「辻井遺跡（第 25 次・第 26 次）」『TSUBOHORI 平成 12 年度姫路市文化財調査略報』　2002 年
姫路市教育委員会「今宿丁田遺跡（第８次）」『TSUBOHORI 平成 12 年度姫路市文化財調査略報』　2002 年
姫路市教育委員会「山吹遺跡（第１次）」『TSUBOHORI 平成 13 年度姫路市文化財調査略報』　2003 年
兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』　1965 年

兵庫県教育委員会『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表』１　1968 年
兵庫県教育委員会『堂田・八反長発掘調査報告』兵庫県文化財調査報告第 108 冊　1992 年
兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』　2000 年
兵庫県教育委員会『市之郷遺跡』兵庫県文化財調査報告第 286 冊　2005 年
兵庫県教育委員会『小犬丸中谷廃寺・中谷遺跡・中谷古墳』兵庫県文化財調査報告第 306 冊　2006 年
兵庫県教育委員会『岩端町遺跡』兵庫県文化財調査報告第 307 冊　2006 年
兵庫県土木地質図編纂委員会『兵庫の地質』兵庫県土木部　1996 年
文化庁文化財保護部『全国遺跡地図　兵庫県』　1982 年
水口富夫「古代美作道の遺跡」『美作道』歴史の道調査報告書　第４集　兵庫県教育委員会　1994 年
水口富夫「『播磨国風土記』成立時代の寺院と集落」『風土記の考古学』２　同成社　1994 年
山下史朗「古代山陽道とその駅家」『風土記の考古学』２　同成社　1994 年
山本博利・秋枝　芳「辻井遺跡（主要伽藍確認調査）」『兵庫県埋蔵文化財年報　昭和 58 年度』兵庫県教育委員会　1986 年
山本博利・秋枝　芳「兵庫・辻井遺跡」『木簡研究』第８号　木簡学会　1986 年
山本博利・秋枝　芳「辻井遺跡（市道幹線第 47 号線）」『兵庫県埋蔵文化財年報　昭和 59 年度』兵庫県教育委員会　1987 年
山本博利・秋枝　芳「辻井遺跡」『兵庫県埋蔵文化財年報　昭和 60 年度』兵庫県教育委員会　1988 年
秋枝　芳「今宿丁田遺跡」『兵庫県史　考古資料編』兵庫県　1992 年
秋枝　芳「名古山遺跡」『兵庫県史　考古資料編』兵庫県　1992 年
山本博利「辻井廃寺跡」『兵庫県史　考古資料編』兵庫県　1992 年
山本博利「赤坂一号窯跡」『兵庫県史　考古資料編』兵庫県　1992 年

別表１　今宿遺跡軒丸瓦一覧

（径が１／８以下は（）付）

報告No.	実測No.	瓦当型式	分類	焼成	瓦当径(mm)	縁幅(mm)	縁厚(mm)	中房径(mm)	縁残	縁形態	子葉盛上	端部	複弁数	中房蓮子数	蓮弁		子葉		図版	写真図版	備考
															幅(mm)	長(mm)	幅(mm)	長(mm)			
1	K017	複弁8弁蓮華文	M2	良好	172.0	21.0	6.0	(50.0)	残	斜	大	残	2	(0)+(1)+(2)	欠	37.5	8.0	25.5	10	17･19	
2	K005	複弁8弁蓮華文	M1	良好	(180.0)	24.0	6.5	欠	残	斜	大	残	1	-	欠	欠	欠	欠	10	19	
3	K019	複弁8弁蓮華文	M2	良好	192.0	21.0	7.0	欠	残	斜	大	欠	4	-	30.5	37.0	8.5	24.5	10	17･19	
4	K018	複弁8弁蓮華文	M2	良好	(172.0)	20.0	8.0	50.0	残	斜	大	欠	4	1+(3)+(4)	31.5	37.0	8.5	26.0	10	19	
5	K030	複弁8弁蓮華文	M2	良好	(182.0)	19.0	8.0	欠	欠	斜	大	欠	2	-	欠	37.0	8.5	26.5	10	19	
6	K029	複弁8弁蓮華文	M2	良好	欠	欠	欠	(50.0)	欠	欠	大	欠	2	(0)+(1)+(2)	31.5	37.0	8.0	25.5	10	20	
7	K025	複弁8弁蓮華文	M2	良好	欠	欠	欠	50.0	欠	欠	大	欠	4	(0)+(2)+(4)	31.5	36.5	8.0	26.0	10	19	
8	K026	複弁8弁蓮華文	M1	良好	欠	欠	欠	49.0	欠	欠	大	欠	5	(0)+(2)+(4)	30.0	35.0	8.5	28.0	10	17･19	木目
9	K002	複弁8弁蓮華文	M3	軟	172.0	16.5	6.0	欠	残	斜	中	欠	1	-	32.5	欠	7.0	25.5	10	20	
10	K096	複弁8弁蓮華文	M3	不良	180.0	15.5	6.0	欠	残	斜	中	欠	2	-	32.0	欠	8.5	欠	10	20	
11	K103	複弁8弁蓮華文	M3	軟	(204.0)	14.0	7.5	欠	残	斜	中	欠	1	-	欠	31.5	欠	欠	10	20	
12	K129	複弁8弁蓮華文	M3	不良	(186.0)	20.5	6.5	欠	残	斜	中	欠	2	-	欠	欠	8.0	欠	10		
13	K133	複弁8弁蓮華文	M2	良好	(172.0)	21.0	6.0	欠	残	斜	中	欠	2	-	欠	欠	欠	欠	10	20	
14	K001	複弁8弁蓮華文	M4	軟	(172.0)	16.5	9.5	欠	残	平	中	欠	2	-	32.5	38.5	7.5	27.5	10	20	
15	K131	複弁8弁蓮華文	M5	軟	180.0	16.0	8.5	50.0	残	平	中	残	3	摩滅0+0+0	31.5	38.5	6.5	24.5	10	18	
16	K021	複弁8弁蓮華文	M6	軟	186.0	23.0	7.0	欠	残	平	中	欠	2	-	32.0	欠	8.3	欠	10	20	
17	K089	複弁8弁蓮華文	M4	良	飛鳥わずか(不明)	(16.5)	(8.0)	欠	残	欠	中	欠	2	-	31.0	欠	8.0	26.0	11	20	
18	K014	複弁8弁蓮華文	M8	軟	180.0	21.0	6.5	欠	残	斜	小	欠	2	-	欠	欠	欠	欠	11	20	
19	K028	複弁8弁蓮華文	M7	軟	(166.0)	16.0	7.5	欠	残	斜	小	欠	2	-	欠	欠	8.0	欠	11	21	
20	K016	複弁8弁蓮華文	M4	軟	(160.0)	14.0	8.5	欠	残	平	小	欠	2	-	欠	欠	8.0	欠	11	21	
21	K040	複弁8弁蓮華文	M4	軟	190.0	17.0	8.0	欠	残	平	小	欠	3	-	32.0	38.5	7.0	26.0	11	20	
22	K052	複弁8弁蓮華文	M4	良	(18.0)	15.5	7.5	欠	残	平	小	欠	2	-	32.0	38.0	7.0	26.0	11	21	
23	K102	複弁8弁蓮華文	M5	良	186.0	17.0	8.0	欠	残	平	小	欠	2	-	欠	欠	7.5	欠	11	21	
24	K132	複弁8弁蓮華文	M4	良	180.0	17.0	7.5	欠	残	平	小	残	1	-	31.0	38.0	7.5	26.5	11		
25	K092	複弁8弁蓮華文	M5	不良	欠	欠	欠	欠	欠	欠	中	欠	2	-	欠	欠	9.0	26.0	11	22	
26	K135	複弁8弁蓮華文	M5	不良	欠	欠	欠	欠	欠	欠	中	欠	1	-	欠	欠	7.5	27.0	11	22	
27	K003	複弁8弁蓮華文	M5	不良	欠	欠	欠	欠	欠	欠	小	欠	2	-	欠	39.0	7.0	25.5	11	22	
28	K124	複弁8弁蓮華文	M5	不良	欠	欠	欠	52.0	欠	欠	小	欠	3	0+(1)+(2)	32.0	41.5	7.5	26.0	11	21	
29	K010	複弁8弁蓮華文	M5	不良	(166.0)	21.0	欠	欠	残	欠	小	欠	1	-	欠	欠	8.0	欠	11	22	
30	K013	複弁8弁蓮華文	M5	軟	欠	欠	欠	52.0	欠	欠	小	欠	2	(0)+(0)+(1)	32.5	欠	7.0	27.0	11	22	
31	K015	複弁8弁蓮華文	M5	軟	欠	欠	欠	(50.0)	欠	欠	小	欠	1	1+(3)+(4)	欠	38.0	7.5	26.0	11	22	
32	K094	複弁8弁蓮華文	M5	不良	欠	欠	欠	(50.0)	欠	欠	小	欠	2	摩滅0+0+0	欠	欠	欠	欠	11	22	
33	K125	複弁8弁蓮華文	M5	不良	欠	欠	欠	52.0	欠	欠	小	欠	1	0+(2)+(2)	欠	欠	7.5	28.0	11	22	
34	K020	複弁8弁蓮華文	M5	軟	192.0	欠(13.0)	欠	52.0	欠	欠	小	欠	3	1+(3)+(4)	32.0	38.0	7.5	25.5	11	18・21	木目
35	K022	複弁8弁蓮華文	M5	軟	欠	欠	欠	52.0	欠	欠	小	欠	4	1+4+(5)	32.5	欠	7.0	26.0	11	21	
36	K117	複弁8弁蓮華文	M5	不良	(180.0)	(17.0)	欠	欠	残	欠	小	欠	2	-	32.5	38.0	7.3	26.0	11	21	
36	K023	複弁8弁蓮華文	M5	不良	欠	欠	欠	52.0	欠	欠	小	欠	4	1+(2)+(5)	33.5	39.0	7.0	26.0	11	21	
37	K027	複弁8弁蓮華文	M5	不良	172.0	欠(13.0)	欠	52.0	欠	欠	小	欠	3	1+4+(6)	32.5	38.5	7.0	26.0	11	21	
38	K136	不明（縁のみ）	M9	良好	(180.0)	20.0	7.5	欠	残	平	欠	残？	欠	-	欠	欠	欠	欠	12	22	
39	K095	不明（縁のみ）	M9	良好	(172.0)	21.0	6.5	欠	残	平	欠	残	欠	-	欠	欠	欠	欠	12	22	
40	K109	不明（縁のみ）	M9	良	186.0	20.0	7.5	欠	残	平	欠	欠	欠	-	-	-	-	-	12	22	
41	K099	不明（縁のみ）	M9	良	(186.0)	20.5	7.5	欠	残	平	欠	欠	欠	-	-	-	-	-	12	22	
42	K093	不明（縁のみ）	M9	不良	186.0	23.5	7.8	欠	残	平	欠	欠	欠	-	-	-	-	-	12	22	
43	K097	複弁8弁蓮華文	M9	不良	186.0	23.5	7.0	欠	残	平	欠	欠	欠0	-	欠	欠	欠	欠	12	22	
44	K006	複弁8弁蓮華文	M9	不良	186.0	17.0	8.0	欠	残	平	欠	欠	欠0	-	欠	欠	欠	欠	12	22	
45	K123	不明（縁のみ）	M9	不良	176.0	16.5	6.5	欠	残	平	欠	欠	欠	-	-	-	-	-	12	22	
46	K112	不明（縁のみ）	M9	軟	(186.0)	(17.0)	7.5	欠	残	平	欠	欠	欠	-	-	-	-	-	12	22	
47	K120	不明（縁のみ）	M9	不良	(192.0)	欠13.0+	6.0	欠	残	斜	欠	欠	欠	-	-	-	-	-	12	22	
48	K134	蓮弁(中房のみ)	M10	不良	欠	欠	欠	52.0	欠	欠	欠	欠	欠	0+(1)+(3)	欠	欠	欠	欠	12	22	
49	K009	不明(瓦当剥離面)	M11	軟	(164.0)	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	-	-	-	-	-	12	22	

別表２　今宿遺跡軒平瓦一覧(1)

報告No.	実測No.	弧数	分類	顎	成形方法模骨痕	凸面	布袋縫目	凹布目とじあと	焼成	弧文 1幅(mm)	弧文 2幅(mm)	弧文 3幅(mm)	2弧文高さ(mm)	2弧文形態	1凹線A幅(mm)	2凹線B幅(mm)	3凹線C幅(mm)	上端削り有無	下端削り有無	端部 残存	端部 側	端部 角	瓦当厚(mm)	全長(cm)	幅(cm)	残存瓦当部	図版	写真図版	備考
50	K024	3	H1	段顎	有	ナデ	有	○	良好		7.0丸		1.5	A	7.8丸	7.0		無	無	欠	×	×	39.0	10.0+	14.5+	1/2弱	13	23	赤色顔料付着
51	K047	3	H1	段顎	有	ナデ	有	×	良		3.3丸		2.0	A	8.5丸	7.5		無	無	残	○	○	33.5	7.2+	10.1+	1/4	13	23	
52	K053	3	H1	段顎	有	ナデ	有	○	良		4.5丸		2.0	A	5.0丸	8.0		無	無	欠	×	×	34.5	9.4+	9.6+	1/4	13	24	
53	K057	3	H3	直線顎	有	ナデ	有	○	良好		4.5丸		2.5	A	7.5丸	8.5~10.0		無	無	欠	×	×	36.0	8.6+	6.5+	1/6	13	24	
54	K070	3	H2	直線顎	有	ナデ	有	○	良好		4.3丸		2.3	A	10.0丸	9.5		無	有	残	○上面取り	×	34.5	13.0+	13.5+	1/3	13	23	
55	K104	3	H3	欠・不明	無	ナデ	有	×	良好		5.0丸		1.0	A	8.0丸	8.0		有？	無	欠	×	×	36.5	3.2+	4.2+	若干	13	24	
56	K137	3	H3	直線顎	有	ナデ	有	○	良好		7.0		3.5	A	7.5丸	7.0		無	無	残	○ケズリ	○	38.5	10.0+	6.8+	1/5	13	24	
57	K069	欠.3+	H5	欠・不明	有	欠	有	○	良好		4.0丸		欠2.0+	A	9.5丸	8.5		無	欠	欠	×	×	欠32.5+	4.5+	6.4+	1/8	13	24	
58	K068	3	H3	直線顎	有	ナデ	有	○	良好		3.8丸		2.0	A	8.0丸	7.5		有	無	残	○上面取り	○	32.0	7.6+	12.2+	1/3	14	23	
59	K063	3	H3	直線顎	有	ナデ	有	○	良好		2.5丸		1.0	A	7.0丸	5.5		無	無	残	○ヘラ切り	○	29.0	9.5+	8.0+	1/4	14		
60	K083	3	H5	直線顎	有	ナデ	有	○	良好		5.0丸		3.0	A	8.5丸	10.0		無	無	欠	×	×	41.0	11.7+	9.2+	1/6	14	24	
61	K061	3	H1	段顎	有	ナデ	有	○	良好		5.5丸		1.3	A	6.0丸	5.5		無	無	欠	×	×	38.0	5.7+	8.5+	1/4	14	24	
62	K060	3	H1	段顎	有	ナデ	有	○	良好		7.0		2.5	B	6.0丸	7.0		無	無	残	○上面取り	○	36.0	5.8+	8.4+	1/5・角残	14	24	
63	K076	3	H5	直線顎	有	ナデ	有	×	良好		3.8丸		1.5	A	5.5丸	4.5		無	無	残	○	○	31.0	7.7+	7.3+	1/4	14	24	
64	K118	3	H4	直線顎	有	ナデ	有	○	軟		3.5丸		1.5	A	6.8丸	7.5		無	無	欠	×	×	31.5	9.1+	11.2+	1/4	14	24	赤色顔料付着
65	K075	3	H6	直線顎	有	ナデ	有	○	良		6.5丸		0.5	A	5.0丸	5.0		無	無	欠	×	×	34.0	8.0+	10.7+	1/4	14	25	
66	K072	3	H6	直線顎	有	ナデ	有	○	良好		5.5丸		0.5	A	5.5丸	6.0		無	無	欠	×	×	35.0	8.1+	6.6+	1/8	14	25	
67	K077	3	H6	直線顎	無	ナデ	有	×	良好		4.3丸		1.5	A	5.3丸	3.0		無	無	欠	×	×	31.0	5.2+	4.8+	1/8	15	25	
68	K090	欠.3+	H5	直線顎	有	ナデ	有	○	良好		5.0		2.0	B	7.0	6.5		無	欠	欠	×	×	欠31.0+	6.4+	9.7+	若干	15	25	
69	K037	3	H7	直線顎	有	ナデ	有	×	良好		7.3		1.0	C	4.8	7.8		無	無	欠	×	×	36.5	11.3+	12.8+	1/5	15	25	
70	K071	3	H7	直線顎	有	ナデ	有	×	良好		7.5		1.5	C	5.0	7.5		無	無	欠	×	×	36.0	5.7+	8.1+	1/6	15	25	
71	K056	3	H7	直線顎	無	ナデ	有	×	良好		7.5		2.0	C	欠4.0+	7.5		無	無	欠	×	×	34.0	7.5+	7.0+	1/5	15	25	
72	K101	欠.2+	H7	直線顎	有	ナデ	有	×	良好		6.5		1.0	C	欠6.0+	8.5		無	無	残	○	○	35.0	10.0+	9.0+	1/4	15	25	
73	K087	3	H7	直線顎	無	ナデ	有	×	軟		6.8		1.0	C	欠5.5+	7.5		無	無	欠	×	×	36.5	6.7+	6.5+	1/6	15	25	
74	K108	欠.2+	H7	直線顎	有	ナデ	有	×	軟		6.5		0.5	C	5.0	8.0		無	無	残	○	×	33.5	7.9+	7.6+	1/4・幅残ア・角ナシ	15	25	
75	K044	欠.2+	H7	直線顎	有	ナデ	有	×	軟		7.5		1.5	C	欠5.0+	8.0		無	無	欠	×	×	32.5	7.9+	7.4+	1/10	16	25	
76	K141	欠.1+	H8	直線顎	有	ナデ	有	×	不良		7.5		2.0	C	欠5.0+	欠7.8+		無	無	残	○	×	30.0	16.0+	14.5+	1/4	16	26	
77	K079	欠.2+	H8	直線顎	無	ナデ	有	×	軟		8.0		2.5	C	5.0	欠7.0+		無	無	欠	×	×	31.0	9.5+	7.6+	1/8	16	25	
78	K041	欠.2+	H8	直線顎	無	ナデ	有	×	不良		7.5		1.5	C	欠4.0+	7.5		無	欠	欠	×	×	欠26.0+	7.2+	7.7+	1/5	16	25	
79	K086	欠.1+	H9	直線顎	有	ナデ	有	×	軟		6.5		2.0	C	欠5.0+	欠7.5+		有？	無	残	○ヘラ切り	○	32.5	9.0+	8.5+	1/4	16	25	
80	K066	欠.2+	H9	欠・不明	無	欠	有	×	不良		5.5		2.5	C	5.5	欠8.0+		有	欠	残	○	○	欠25.5+	5.1+	6.6+	1/8	16	26	
81	K138	3	H9	直線顎	無	ナデ	有	×	不良		6.0		2.0	C	5.5	8.0		有	無	欠	×	×	36.0	8.3+	7.2+	1/6	16	26	
82	K121	欠.1+	H9	欠・不明	無	欠・不明	有	×	不良		6.0		2.5	C	欠5.0+	欠8.0+		有	欠	欠	×	×	欠27.0+	6.8+	5.4+	1/8	16	26	
83	K113	欠.2+	H9	欠・不明	無	ナデ	有	×	不良		7.0		1.0	C	5.5	欠2.0+		有	欠	残	○ケズリ	○	欠22.0+	8.4+	8.6+	1/4・角若干	16	25	
84	K088	3	H10	直線顎	無	ナデ	有	×	良		7.5丸		2.5	D	4.0	7.0		無	無	欠	×	×	35.0	7.8+	7.3+	1/8	17	26	
85	K051	3	H10	直線顎	有	ナデ	有	○	良		7.5丸		2.0	D	4.5	7.3		無	無	欠	×	×	38.5	6.7+	8.7+	1/5	17	26	
86	K127	3	H11	直線顎	無	ナデ	有	×	不良		7.5		2.0	D	5.0丸	8.0		有	無	残	○ヘラ切り	○	35.5	10.3+	6.4+	若干・幅残若干・角	17	26	
87	K140	欠.1+	H11	直線顎	摩滅.不明	ナデ	有.瓦釘の痕跡	不明摩滅	軟		8.0丸		2.5	D	欠2.5+	欠2.5+		欠	無	欠	×	×	欠31.0+	10.9+	9.1+	若干	17	26	
88	K058	3	H11	直線顎	有	ナデ	有	×	軟		7.5丸		2.5	D	4.3丸	7.3		無	無	欠	×	×	29.5	10.9+	8.2+	1/5	17	26	
89	K081	3	H12	直線顎	無	ナデ	欠.不明	×	良		7.5		3.5	E	5.0	5.0		有	無	残	○ケズリ	○	33.0	6.9+	12.8+	側面から1/3	17	26	
90	K064	3	H12	直線顎	有	ナデ	有.一部ケズリ	×	軟		8.0		4.0	E	5.0	欠3.5+		有	無	残	○ケズリ	○	33.5	11.5+	14.8+	1/3	17	26	
91	K073	3	H12	直線顎	有	ナデ	有.一部ケズリ	×	軟		7.5		4.0	E	4.8	欠3.5+		欠	無	残	○ケズリ	○	欠29.5+	9.2+	9.7+	1/4	18	27	
92	K078	3	H12	直線顎	有	ナデ	有	×	軟		8.0		4.0	E	5.0	4.5		有	無	残	○上ケズリ	○	34.0	12.9+	9.6+	1/4	18	27	
93	K080	3	H12	直線顎	有	ナデ	有.一部ケズリ	×	軟		7.5		3.8	E	5.0	4.5		有？	無	残	○ケズリ	○	32.5	21.8+	22.6+	1/2	18	27	
94	K033	3	H13	直線顎	有	ナデ	有.一部ケズリ	×	軟		7.0		3.5	C(面とり)	5.0	5.0		有	有	欠	×	×	32.5	12.5+	17.2+	1/3	19	28	
95	K111	欠.2+	H14	直線顎	無	ケズリ	無	×	不良		7.8		4.0	E	欠3.5+	6.8		無	無	残	○ケズリ	○	32.5	9.7+	9.3+	1/6	19	27	
96	K116	欠.2+	H14	欠・不明	無	欠・不明	有	×	不良		6.5丸		3.0	E	4.5丸	欠2.5+		無	欠	欠	×	×	欠22.0+	4.3+	6.6+	1/6	19	27	
97	K169	3	H14	直線顎	無	ナデ	無	×	不良		7.0		4.0	E	欠3.0+	欠5.0+		有	無	欠	×	×	欠27.0+	−	−	1/5	19	28	
98	K139	3	H15	直線顎	無	ケズリ	無	×	良		6.5		3.5	E	3.5	7.0		有	無	残	○ケズリ	○	34.0	9.2+	9.3+	1/5	19	28	
99	K085	3	H16	直線顎	無	ナデ	欠.不明	欠不明	良		8.8		2.0	E	3.6	3.3		有	有	残	○上ケズリ	○	31.5	4.8+	9.3+	1/6	19	28	
100	K074	欠.2+	H16	直線顎	有	ナデ	有.一部ケズリ	×	軟		8.8丸		3.5+	E	欠3.5+	4.3		無	有	残	○ケズリ	○	28.5	7.7+	9.6+	1/4	19	28	
101	K105	3	H16	直線顎	無	ナデ	有.一部ケズリ	×	軟		9.0		2.8	E	欠3.5+	3.8		無	無	欠	×	×	32.5	8.5+	10.1+	1/8	19	28	
102	K050	3	H17	直線顎	有	ナデ	有.一部残存	×	不良		8.5		3.0	C	欠3.5+	4.0		無	無	残	○ヘラ切り	×	34.5	9.9+	9.3+	1/4	19	28	
103	K048	3	H18	直線顎	有	ナデ	有.一部ケズリ	×	良好		8.0丸		3.3	D	5.5丸	5.5		有	無	欠	×	×	32.5	9.6+	9.5+	1/5	20	28	

別表２　今宿遺跡軒平瓦一覧(2)

報告No.	実測No.	弧数	分類	顎	成形方法模骨痕	凸面	布袋縫目	凹布目とじあと	焼成	弧文 1幅(mm)	弧文 2幅(mm)	弧文 3幅(mm)	2弧文高さ(mm)	2弧文形態	1凹線A幅(mm)	2凹線B幅(mm)	3凹線C幅(mm)	上端削り有無	下端削り有無	端部 残存	端部 側	端部 角	瓦当厚(mm)	全長(cm)	幅(cm)	残存瓦当部	図版	写真図版	備考
104	K091	3	H16	直線顎	無	ナデ	有	×	良		7.5丸		3.0	D	5.0丸	欠4.5+		有	無	残	○ヘラ切り	○	欠25.0+	5.8+	7.3+	1/6	20	28	
105	K062	3	H19	直線顎	無	ナデ	有	○?	良		3.5丸		5.0	A	9.5丸	10.0		無	無	欠	×	×	40.0	8.6+	5.7+	1/8	20	28	
106	K049	4	H12	直線顎	無	ナデ	欠.不明	×	軟			7.5	4.5	E	5.0	4.0	4.5	有?	無	欠	×	×	欠38.5+	6.9+	9.0+	1/4	20	28	
107	K084	4?	H20	直線顎	有	格子タタキ	有.一部ナデ孔	○?	不良		11.0		9.0	F		9.0	10.5	有?	有	残	○ケズリ	○	43.0	15.0+	14.0+	1/4	20	29	
108	K043	欠.2+	H20	直線顎	無	格子タタキ	不明(摩滅)	不明(摩滅)	不良	12.5			8.0	F	欠	欠9.5+		無	有	欠	×	×	47.5	13.0+	13.6+	1/3	20	29	
109	K046	欠.2+	H21	直線顎	無	ナデ	有	×	不良		11.0		7.0	F	欠	8.0		無	不明(摩滅)	残	○	○	34.0	7.2+	11.0+	側面から1/4	20	29	
110	K039	欠.2+	H22	直線顎	無	ナデ	有	×	軟		6.0丸		2.5	A	欠4.5+丸	4.0		欠	有	残	○ケズリ	○	欠28.0+(摩滅)(剥落)	12.0+	7.8+	外縁1/6	20	29	
111	K054	3	H23	直線顎	無	ナデ	有	×	不良		6.0丸		3.5	A	欠8.0+丸	8.5		有?	有	欠	×	×	欠30.0+	10.1+	7.9+	1/10	20	29	
112	K082	2	H24	直線顎	無	ナデ	有	×	不良		16.5~21.0		8.0	E	2.5+	5.0+		無	無	欠	×	×	欠42.0+	13.2+	8.9+	1/8	21	29	
113	K067	4	H20	欠・不明	不明	摩滅.不明	不明(摩滅)	不明(摩滅)	不良		11.5		5.5	F	10.0丸	9.5		有?	不明(摩滅)	×	×	×	47.5	3.4+	5.8+	若干	22	29	
114	K106	2	H25	直線顎	無	ナデ	有.ナデ孔	×	軟		5.5	7.0	5.0	E		5.5		無	無	欠	×	×	23.0	7.9+	7.8+	1/6	23	30	
115	K110	2	H26	段顎?	無	ナデ	有	○	軟		8.5							無	無	残	○ヘラ切り	○	21.0	6.9+	9.9+	1/6	24	30	
116	K122	2	H27	直線顎	有	ナデ	有	×	軟		8.0							無	無	欠	×	×	25.0	4.0+	6.3+	1/8	25	30	
117	K168	2	H28	直線顎	無	ナデ	無	×	軟		8.0							無	無	欠	×	×	26.0	4.8+	5.6+	1/8	26	30	
118	K128	欠.2+	H29	直線顎	有	ナデ	有	×	良好	11.0			5.0	F	欠	10.5		欠	無	欠	×	×	欠32.0+	8.1+	7.2+	若干	27	30	
119	K055	3	H30	直線顎	無	ナデ	有.一部ナデ孔	×	軟		7.5丸		5.0	A	欠7.8+丸	9.0		無	無	残	○上面取り	○	39.0	8.2+	6.0+	1/6	28	30	
120	K119	欠.2+	H31	欠・不明	無	ナデ	有	○	軟		4.3		1.0	C	4.0	欠4.5+		無	欠	欠	×	×	欠22.0+	12.5+	10.3+	1/4	29	30	
121	K065	欠.2+	H31	欠・不明	無	欠	有	×	不良		6.0丸		2.0	B	6.5丸	欠4.0+		無	欠	残	○ヘラ切り	○	欠24.0+	5.7+	6.0+	1/8	30	30	
122	K100	欠.2+	H31	欠	無	欠	不明	不明	軟		8.0		1.5	G	5.0	欠2.5+		無	欠	残	○	×	欠29.0+	5.7+	6.6+	若干	31	30	
123	K098	欠.2+	H31	欠・不明	無	欠	有	×	良	2.5	6.8		6.0	F	5.5	-		無.面取り	欠	欠	×	×	欠21.0+	3.0+	3.5+	若干	32	30	
124	K107	欠.2+	H31	欠	欠	ナデ	欠	欠不明	軟		欠4.0+		2.5	A	-	9.0		欠	無	欠	×	×	欠20.0+	4.8+	6.0+	1/8	33	30	
125	K059	4	H32	直線顎	無	ナデ	有	×	軟		3.5		0.5	C	1.0	1.5		無	無	欠	×	×	28.0	6.0+	7.9+	1/5	34	30	
126	K038	-	欠顎瓦	曲線顎	無	ナデ	有.一部残存	×	軟		-		-	-	-	-		有	有	残	○面取り	×	53.0	10.8+	10.1+	1/5・側面若干	欠顎瓦1		

別表３　今宿遺跡丸瓦一覧(1)

報告No.	実測No.	器種	分類	全長(cm)	玉縁長(cm)	幅 実寸(cm)	幅 推定(cm)	厚さ(cm)	内径(cm)	残存	端面の整形 玉縁/狭端	端面の整形 広端	端面の整形 側面	図版	写真図版	備考
127	K1021	丸瓦（行基）	G1	18.0+		11.3+	13.4	2.3	9.0	広端面欠・狭端面2/3・左側縁1/4・角欠	D		B	22		
128	K1003	丸瓦（行基）	G1	17.7+		9.7+	13.4	2.2	10.0	狭端面1/2・右側縁1/3・角1	F変形		C	22	31	
129	K1001	丸瓦（行基）	G1	18.9+		8.6+	12.5	2.3	8.2	狭端面1/2・右側縁1/2・角1	E		E+	22	31	
130	K1015	丸瓦（行基）	G2	16.7+		11.9+	14.8	2.6	9.6	狭端面1/2・左側縁1/4・角1	D	A	C	23	32	
131	K1016	丸瓦（行基）	G2	11.3+		12.6+	14.6	2.2	9.5	狭端面1/2・右側縁1/4・角1	E+		C	23	31	
132	K1032	丸瓦（行基）	G2	12.1+		8.1+	16.2	1.7	10.7	狭端面・側面全体の1/5	D+		C	23	32	
133	K1035	丸瓦（行基）	G2	12.9+		7.5+	11.8	1.5	9.2	狭端面1/2・側面2/5・全体の1/5	E		未	23	32	
134	K1018	丸瓦（玉縁）	T1	10.2+	4.4	2.7+		1.7		玉縁端面若干・玉縁長完存・左側縁若干・角1	A		C	23	33	
135	K1019	丸瓦（玉縁）	T1	8.4+	6.5	6.5+		2.5	9.4	玉縁長完・右側縁若干・角1	A		C	23	33	
136	K1017	丸瓦（玉縁）	T1	12.8+		11.5+		1.9		玉縁欠・狭端面1/3				24	33	
137	K1008	丸瓦（玉縁）	T2	27.3+	6.3	14.8+	15.9	2.4	11.4	玉縁長完・幅1/2・胴部右側縁2/3・幅2/3	A		D	24	34	
138	K1012	丸瓦（玉縁）	T2	6.0	6.0	16.0		2.8	玉縁6.4	玉縁ほぼ完存	A		A	24	33	
139	K1024	丸瓦（玉縁）	T2	13.6+	6.1	8.9+	14.2	2.7	9.0	玉縁端面若干・右側縁1/5・角欠	C?		C	24		
140	K1006	丸瓦	S1	9.7+		3.8+	18.5	2.0	(14.8)	広端面1/4・左側縁1/4・角1		J	C	25	34	
141	K1031	丸瓦	S1	10.4+		4.3+	19.6	2.2	15.0	狭端？若干・一方の側縁7cmほど	D		E	25	34	
142	K1030	丸瓦	S1	5.7+		5.3+	15.0	1.6	11.0	広端・狭端欠・側面若干			B	25	34	
143	K1007	丸瓦	S1	6.1+		4.2+	12.6	1.9	(9.2)	右側縁若干			E	25	34	
144	K1005	丸瓦	S2	9.5+		8.6+		2.0		狭端面1/4・角欠	D			25	37	
145	K1013	丸瓦	S3	33.8+		15.2		1.8	11.8	広端面1/2・狭端面欠・右側縁3/4・左側縁1/2・角1		J	C	25	34	
146	K1014	丸瓦	S3	24.4+		11.0+	15.0	1.5	12.0	広端面欠・狭端面欠・左側縁1/3			C	26	37	
147	K1036	丸瓦	S3	13.5+		7.0+	15.2	1.5	12.2	側面・胴部若干・端面欠			C	26	38	
148	K1033	丸瓦	S4	10.8+		5.2+	15.4	1.9	11.0	側縁と胴部若干			E	26	38	
149	K1009	丸瓦	S5	24.9+		14.0		2.0	9.6	玉縁欠・胴部右側縁1/4・左側縁1/8			C	26	37	
150	K1028	丸瓦	S6	22.9+		14.3+		2.9	(11.0)	狭部・右側縁欠		K	C?	27	35	
151	K1023	丸瓦	S6	18.5+		11.6+	19.0	3.1	12.2	広端面1/5・狭端面欠・左側縁1/3・角欠		C	C	27		
152	K1004	丸瓦	S6	23.5+		15.3		2.4	12.6	広端面1/4・右側縁1/2・左側縁1/3・角1		A	C	27	35	

別表３　今宿遺跡丸瓦一覧(2)

報告No.	実測No.	器種	分類	全長(cm)	玉縁長(cm)	幅		厚さ(cm)	内径(cm)	残存	端面の整形			図版	写真図版	備考
						実寸(cm)	推定(cm)				玉縁/狭端	広端	側面			
153	K1011	丸瓦	S6	22.0+		15.8+	18.2	3.2	12.4	玉縁欠・広端面1/6・角1・胴部左側縁1/2		A	C変形	28	35	
154	K1020	丸瓦	S6	11.4+		12.4+	18.0	3.1	12.7	広端面1/2・左側縁1/5・角1		E	E+	28		
155	K1010	丸瓦	S6	18.7+		9.3+	18.6	2.5	14.8	玉縁欠・角欠・胴部左側縁若干			E+	28	36	
156	K1002	丸瓦	S6	17.4+		11.3+	18.8	1.9	(15.0)	広端面1/2・左側縁1/2・角1		A	E	29	36	
157	K1022	丸瓦	S6	23.5+		13.1+	15.6	1.9	11.8	広端面1/4・狭端面欠・右側縁2/3・角欠		A	C	29		
158	K1034	丸瓦	S6	15.3+		11.4+	20.1	1.6	16.5	広端面1/3・左側縁若干		C	C	30	38	
159	K1029	丸瓦	S6	20.0+		11.2+		1.6	(10.3)	狭・広端面・左側縁全欠			C	30	36	

別表４　今宿遺跡平瓦一覧(1)

報告No.	実測No.	器種	分類	製作技法	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	残存	端面の整形			凸面叩き調整	図版	写真図版	備考
									狭端	広端	側面				
160	K190	平瓦	J1	桶作り	24.8+	25.5+(29.0)	2.8	広端部2/3・左側縁1/2・角1	-	D	c	ハケ	31	39	
161	K196	平瓦	J1	桶作り	14.3+	12.9+	2.7	左側縁1/4	-	-	d	ハケ	31	39	
162	K191	平瓦	J1	桶作り	17.1+	14.5+	2.8	広端部1/3・左側縁1/4・角欠	-	K	j?	ハケ	31	39	
163	K195	平瓦	J1	桶作り	11.0+	11.4+	2.7	右側縁1/8	-	-	c	ハケ	31	40	
164	K192	平瓦	J2	桶作り	9.5+	12.6+	2.5	狭端部1/4・右側縁1/8・角1	A	-	o	ハケ	32	40	
165	K194	平瓦	J2		8.9+	15.9+	2.1	右側縁1/8	-	-	u	ハケ	32	40	
166	K193	平瓦	J3		9.8+	9.0+	2.9	端面すべて欠　長）9.8+　幅）9.0+	-	-	-	ハケ	32	40	
167	K147	平瓦	L1	一枚作り隅切	15.1+	15.4+	1.9	広端部1/2・右側縁1/2・角1	-	D+	布目+	平行	32	41	
168	K226	平瓦	L1	一枚作り	15.7+	10.5+	1.9	広端部1/3・右側縁1/2・角1	-	D	布目+	平行	32	41	
169	K227	平瓦	L2	一枚作り	11.1+	9.2+	2.1	右端部1/4	-	-	r	平行	32	41	
170	K228	平瓦	L2	一枚作り	9.8+	8.3+	2.1	広端部1/4・右側縁1/4・角1	-	J	n	平行	32	41	
171	K254	平瓦	K1		10.6+	5.3+	2.2	体部のみ・端部欠	-	-	-	格子	33	42	
172	K161	平瓦	K2		25.6+	16.1+	3.1	狭端部1/3・右側縁2/3	A	-	b	格子	33	42	
173	K212	平瓦	K2		15.7+	15.1+	2.7	狭端部1/3・右側縁1/3・角1	A	-	b	格子	33	42	
174	K211	平瓦	K2		12.3+	9.8+	2.1	狭端部1/4・右側縁1/4・角1	G	-	c	格子	33	42	
175	K213	平瓦	K2		12.0+	13.4+	1.9	広端部1/3・左側縁1/4・角1	-	A	b	格子	33	43	
176	K162	平瓦	K2	桶作り	13.7+	19.8+	1.8	右側縁1/3・角欠	-	-	q	格子	34	43	
177	K271	平瓦	K4	一枚作り	10.2+	10.4+	2.3	狭端部1/3・左側縁1/4・角1	J	-	n		34	43	
178	K270	平瓦	K3	一枚作り	10.1+	10.0+	2.2	狭端部1/4・右側縁1/4・角1	摩滅	J	q		34	43	
179	K166	平瓦	K5	桶作り	36.0+	27.5+	2.4	全体の1/2・広端部、狭端部若干・左側縁1/3	A	A	l	格子	34	44	
180	K216	平瓦	K5	桶作り	16.4+	14.6+	2.0	左側縁1/3	-	-	l	格子	35	44	
181	K149	平瓦	K5	桶作り	14.2+	13.6+	1.5	狭端部若干・角欠	G	-	-	格子	35	44	
182	K252	平瓦	K6	桶作り	8.8+	9.0+	1.9	体部のみ・端部欠	-	-	-	格子	35	45	
183	K251	平瓦	K7	一枚作り	11.5+	5.9+	2.0	体部のみ・端部欠	-	-	-	格子	35	45	
184	K272	平瓦	K8	一枚作り	16.9+	11.7+	2.0	狭端部1/3・左側縁1/2・角1	C	-	c		35	45	
185	K154	平瓦	K9	桶作り	12.5+	18.5+	3.0	広端部1/2・左側縁1/4・角1	-	A	l	格子	35	45	
186	K153	平瓦	K9	桶作り	15.5+	17.2+	2.8	広端部1/2・右側縁1/3・角1	-	E	m+	格子	36	46	
187	K262	平瓦	K9	桶作り	12.9+	15.0+	1.9	左側縁1/5	-	-	m	格子	36	46	
188	K263	平瓦	K9	桶作り	12.4+	13.6+	2.7	狭端部1/2・右側縁1/5・角1	A		j	格子	36	46	
189	K255	平瓦	K10	一枚作り	8.7+	7.7+	2.1	体部のみ・端部欠				格子	36	46	
190	K256	平瓦	K11	一枚？	6.5+	7.2+	2.1	左側縁若干			f		36	46	
191	K249	平瓦	K12	一枚作り	9.9+	14.6+	2.2	右側縁若干			o?	格子	36	47	
192	K233	平瓦	K13	一枚作り	19.2+	11.7+	2.4	狭端部1/6・左側縁1/2・角1	J		d	格子	37	47	
193	K258	平瓦	K13	一枚作り	17.8+	12.6+	2.4	狭端部若干・左側縁1/2・角1	A		m	格子	37	47	
194	K261	平瓦	K13	一枚作り	21.5+	16.4+	2.6	広端部若干・左側縁1/5		A	m	格子	37	48	
195	K260	平瓦	K13	一枚作り	13.0+	12.7+	2.5	広端部1/3・左側縁1/4		G	c	格子	37	48	
196	K259	平瓦	K13		11.4+	10.2+	2.3	狭端部1/4・右側縁1/4・角1	A		f	格子	37	48	
197	K234	平瓦	K14	一枚作り	17.1+	11.8+	2.3	狭端部1/3・左側縁1/3・角1	布目		n	格子	38	49	
198	K235	平瓦	K14	一枚作り	16.3+	17.8+	1.9	狭端部1/2・右側縁1/6・角1	布目+		d	格子	38	49	
199	K157	平瓦	K14	一枚作り	14.8+	15.5+	2.3	広端部1/2・左側縁1/3・角1		布目	q	格子	38	49	
200	K236	平瓦	K14	一枚作り	17.3+	12.9+	2.3	広端部1/6・右側縁1/2・角1		J	s	格子	38	50	
201	K240	平瓦	K15	一枚作り	18.4+	14.3+	2.3	狭端部1/4・左側縁1/3・角1	布目+		u	格子	39	50	

別表４　今宿遺跡平瓦一覧(2)

報告No.	実測No.	器種	分類	製作技法	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	残存	端面の整形			凸面叩き調整	図版	写真図版	備考
									狭端	広端	側面				
202	K247	平瓦	K15	一枚作り	12.4+	13.8+	2.2	狭端部1/3	H			格子	39	50	
203	K242	平瓦	K15	一枚作り	12.3+	14.5+	2.6	広端部1/2・左側縁1/6・角1		J	s	格子	39	51	
204	K241	平瓦	K15	一枚作り	14.0+	12.4+	2.4	広端部1/3・右側縁1/3・角1		G	s	格子	39	51	
205	K243	平瓦	K16	一枚作り	12.4+	13.4+	2.1	広端部1/3・左側縁1/4・角1		布目	j	格子	40	51	
206	K244	平瓦	K16	一枚作り	15.6+	10.0+	2.1	広端部1/3・左側縁1/3・角1		J	n	格子	40	52	
207	K248	平瓦	K16	一枚作り	19.1+	14.4+	2.1	体部のみ・端部欠				格子	40	52	
208	K239	平瓦	K16	一枚作り	20.3+	16.3+	2.2	広端部1/2・右側縁1/4・角1		A	n	格子	40	52	
209	K164	平瓦	K16	一枚作り	17.5+	15.7+	2.8	広端部若干・右側縁1/3・角欠		I	u	格子	41	53	
210	K238	平瓦	K16	一枚作り	18.1+	16.3+	2.2	広端部1/3・右側縁1/3・角1		J	n	格子	41	53	
211	K223	平瓦	K17	一枚作り	17.2+	10.8+	2.3	狭端部1/6・左側縁1/2・角1	布目		布目+	格子	41	53	
212	K165	平瓦	K17	一枚作り	14.4+	15.7+	2.3	広端部1/2・左側縁1/3・角1		J	t布目	格子	41	54	
213	K144	平瓦	K17	一枚作り	13.6+	13.0+	2.1	広端部1/3・側縁,角欠		A		格子	42	54	
214	K224	平瓦	K17		13.5+	14.5+	2.1	広端部1/3		A		格子	42	54	
215	K209	平瓦	K18		11.6+	12.3+	2.4	広端部1/3・左側縁1/4・角1		J	t	格子	42	55	
216	K205	平瓦	K18		14.3+	10.0+	2.0	広端部1/3・左側縁1/3・角1		J	u	格子	42	55	
217	K206	平瓦	K18		17.0+	13.8+	2.3	広端部1/3・右側縁1/8・角1		A	t	格子	42	55	
218	K210	平瓦	K18		12.9+	10.7+	2.8	右側縁1/4			o	格子	43	56	
219	K207	平瓦	K18		15.9+	14.4+	2.7	右側縁1/4			x +	格子	43	56	(少し磨滅している)
220	K146	平瓦	K19	一枚作り	24.3+	19.0+	1.9	狭端部1/4.右側縁1/6・角1	布目+		u	格子	43	57	
221	K159	平瓦	K19	一枚作り	15.0+	14.4+	2.5	狭端部1/4・右側縁1/3・角1	J		g	格子	43	56	
222	K208	平瓦	K20	一枚作り	11.2+	9.2+	2.3	狭端部1/4・右側縁1/3・角1	J		u	格子	44	57	
223	K245	平瓦	K20	一枚作り	16.1+	10.0+	2.4	狭端部1/6・右側縁1/2・角1	T布目		o	格子	44	57	
224	K214	平瓦	K21		14.2+	12.5+	2.0	狭端部1/4・左側縁1/3・角1	J		n	格子	44	58	
225	K160	平瓦	K21	一枚作り	12.7+	14.7+	2.4	広端部1/3・左側縁1/4・角1		J	n	格子	44	58	
226	K215	平瓦	K21		17.4+	15.7+	2.0	狭端部若干	摩滅			格子	44	58	
227	K250	平瓦	K22	一枚作り	13.3+	10.0+	2.4	左側縁若干				格子	45	59	
228	K145	平瓦	K23	一枚作り	14.5+	12.2+	2.2	右側縁若干・角欠			q	格子	45	59	
229	K158	平瓦	K24	一枚作り	9.6+	11.7+	2.4	狭端部1/3・左側縁1/8・角1	G		b	格子	45	60	
230	K225	平瓦	K24	一枚作り	16.6+	16.8+	2.2	広端部1/2・右側縁1/2・角1		A	m	格子	45	59	
231	K148	平瓦	K24		15.5+	15.0+	2.4	左側縁1/3・広、狭端部欠・角欠			b	格子	46	60	
232	K269	平瓦	K25		10.2+	13.5+	2.5	広端部1/4		J			46	60	
233	K268	平瓦	K25		10.5+	9.7+	2.4	広端部1/3・左側縁1/4・角1		C	n		46	60	
234	K253	平瓦	K26	一枚作り	8.0+	12.4+	2.0	狭端面1/2・右角側面若干	J?			格子	46		
235	K171	平瓦	N1	桶作り	16.6+	18.5+	2.4	狭端部1/3・左側縁1/2・角1	G		b	縄目	47	61	
236	K170	平瓦	N1	桶紐作り	18.7+	15.4+	2.0	広端部1/2・左側縁1/2・角1		A	c	縄目	47	61	
237	K218	平瓦	N1	隅切紐作り	15.0+	14.5+	2.4	広端部1/2・左側縁1/3・角1		J +	n	縄目	47	61	
238	K232	平瓦	N1	桶紐作り	10.7+	15.3+	2.5	広端部1/2・左側縁1/6		C +	v +	縄目	47	62	
239	K198	平瓦	N1	隅切桶紐作り	14.8+	17.6+	2.0	広端部1/3・角1		J	u	縄目	48	62	
240	K267	平瓦	N1	桶紐作り	20.8+	15.3+	2.3	広端部1/2・左側縁1/2・角1		J	n	縄目	48	62	
241	K202	平瓦	N1	隅切桶紐作り	15.2+	16.5+	2.4	広端部1/3・左側縁1/3・角1		J	d	縄目	48	63	
242	K203	平瓦	N2	隅切桶作り	12.1+	9.4+	2.0	広端部1/3・左側縁1/3・角1		J +	u	縄目	48	63	
243	K173	平瓦	N2	隅桶作り	14.0+	17.5+	2.6	広端部1/2・左側縁1/3・角1		J	n	縄目	49	63	
244	K155	平瓦	N2	隅切	18.2+	14.7+	1.9	広端部1/4・左側縁1/2・角1		A	n	縄目	49	64	
245	K163	平瓦	N2	隅切	20.0+	17.3+	2.4	広端部1/3・右側縁1/2・角1		J	n	縄目	49	64	
246	K266	平瓦	N3	一枚作り	14.0+	25.6	2.1	狭端部ほぼ完存・右側縁1/4・左側縁1/4・角2	A		d	縄目	50	64	
247	K199	平瓦	N3		15.3+	12.6+	2.0	狭端部1/4・左側縁1/3・角1	E		f +	縄目	50	65	
248	K217	平瓦	N3		18.4+	12.3+	2.1	広端部1/6・左側縁1/2・角1		A	その他	縄目	50	65	
249	K204	平瓦	N3	紐作り	21.0+	15.8+	2.1	狭端部1/2・右側縁1/2・角1	C		o	縄目	50	65	
250	K156	平瓦	N3	一枚作り	20.9+	22.9+	2.0	広端部2/3.右側縁1/2・角1		J	h	縄目	51	66	
251	K264	平瓦	N3	一枚隅切り	14.6+	13.2+	2.0	広端部1/2・右側縁1/2・角1		J	d	縄目	51	66	
252	K265	平瓦	N3		10.2+	10.5+	2.5	体部のみ・端部全欠				縄目	51	66	赤色顔料付着
253	K172	平瓦	N4	一枚作り	19.8+	17.8+	2.4	広端部1/2・左側縁1/2・角欠		J	c	縄目	51	67	
254	K197	平瓦	N4	一枚作り	19.3+	11.9+	2.4	広端部1/3・左側縁1/2・角1		J	h	縄目	52	67	
255	K219	平瓦	N4	隅切一枚作り	17.2+	17.7+	2.7	広端部1/4・右側縁1/2・角1		J	d	縄目	52	67	

別表４　今宿遺跡平瓦一覧(3)

報告No.	実測No.	器種	分類	製作技法	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	残存	端面の整形			凸面叩き調整	図版	写真図版	備考
									狭端	広端	側面				
256	K220	平瓦	N4	一枚作り	27.0+	16.9+	2.2	広端部1/4・右側縁1/5		G	n	縄目	52	68	
257	K221	平瓦	N5	隅切一枚作り	16.9+	17.5+	2.4	広端部1/2・左側縁1/3・角1		J	c	縄目	52	68	
258	K186	平瓦	N5	隅切	13.4+	21.8+	2.0	広端部2/3・左側縁1/3・角1		A	d	縄目	53	68	
259	K222	平瓦	N5	一枚作り	17.7+	11.5+	2.1	狭端部1/3・右側縁1/2・角1	G		d	縄目	53	69	
260	K200	平瓦	N5		13.2+	14.8+	2.2	狭端部1/2・右側縁1/3・角1	J		d	縄目	53	69	
261	K201	平瓦	N6		13.9+	10.2+	2.1	右側縁1/3			j		53	69	
262	K187	平瓦	N6		18.3+	10.3+	2.0	狭端部若干・右側縁1/2・角1	H		布目		53	70	一部に布目の痕跡
263	K257	平瓦	N7	一枚作り	11.3+	9.1+	2.0	左側縁1/5			布目+		53	70	
264	K231	平瓦	W1		13.4+	11.1+	1.9	広端部1/3・右側縁1/4・角1		A	b		54	70	
265	K230	平瓦	W2		12.9+	7.5+	1.8	左端部1/4			j		54	71	
266	K229	平瓦	W2		7.2+	7.0+	1.4	右端部1/5			d		54	71	
267	K152	平瓦	W3	桶作り	25.0+	17.0+	1.6	狭端部1/2・左側縁2/3・角1	A		b		54	71	
268	K151	平瓦	W3		13.0+	14.9+	2.0	狭端部1/3・左側縁1/3・角1	A		j		54	71	
269	K188	平瓦	W3		17.6+	12.3+	2.0	狭端部1/3・右側縁1/2・角1	B		e		55	72	
270	K189	平瓦	W3		15.0+	16.9+	1.6	狭端部1/2・左側縁1/3・角1	A		e		55	72	
271	K246	平瓦	W1		33.0	27.2	2.0	狭端部1/2・広端部1/3.右側縁1/2.左側縁1/3・角1	A	A	c		55	73	唯一4辺有
272	K167	平瓦	W1	一枚作り	28.4+	25.5+	2.6	狭端部2/3・右側縁2/3・左側縁1/3・角2		A	b		56	73	
273	K150	平瓦	W1		26.7+	23.9+	2.4	広端部2/3・右側縁2/3・角1	J		c		56	72	
274	K237	平瓦	W1		14.1+	18.5+	2.3	広端部1/2・左側縁若干・角1		A	b		56	73	

別表５　今宿遺跡鴟尾・塼ほか一覧

報告No.	実測No.	器種	分類	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	残存	図版	写真図版	備考
275	K174	蓮花文帯鴟尾Ａ	Ａ類	14.7+	6.1+	2.2～2.3	一部	57	74	A-1
276	K177	蓮花文帯鴟尾Ａ	Ａ類	9.4+	7.3+	2.4～3.0	一部	57	75	A-4
277	K175	蓮花文帯鴟尾Ａ	Ａ類	14.6+	10.5+	2.5	一部	57	76	A-2
278	K176	蓮花文帯鴟尾Ａ	Ａ類	6.0+	5.1+	欠損（2.1）	一部	57	77	A-3
279	K183	鴟尾Ｂ	Ｂ類	6.2+	9.0+	2.3～3.8	一部	57	75	
280	K184	鴟尾Ｂ	Ｂ類	15.0+	7.7+	3.4～5.5	一部	57	76	
281	K180	鴟尾Ｂ	Ｂ類	20.9+	12.1+	2.4	一部	57	77	B-3
282	K181	鴟尾Ｂ	Ｂ類	9.6+	8.5+	2.7～2.9	一部	57	78	B-4
283	K179	鴟尾Ｂ	Ｂ類	12.2+	12.1+	2.5～2.7	一部	57		B-2
284	K178	鴟尾Ｂ	Ｂ類	15.8+	13.4+	2.7～3.3	一部	57	76	B-1
285	K130	面戸瓦					1/3	58		
286	K143	塼		5.5+	10.3+		若干	58		
287	K114	塼		-	-		瓦当部1/4・角	58		
288	K142	塼		4.8+	5.6+		角若干	58		
289	K185	平瓦？		12.2+	11.0+	2.4	一部	58	76	
290	K182			-	5.1+	2.6	一部	58		

別表６　今宿遺跡近世瓦一覧(1)

報告No.	実測No.	器種	瓦当型式	遺構	焼成	瓦当径(mm)	縁幅(mm)	縁厚(mm)	図版	写真図版	備考
291	K031	軒丸瓦	三巴	瓦集積	軟	136.0	18.0	6.5	59	78	
292	K008	軒丸瓦		瓦集積	燻	(136.0)	20.0	3.5	59	78	
293	K115	軒丸瓦		瓦集積	燻	(166.0)	25.0	6.5	59	78	
294	K032	軒丸瓦	三巴	瓦集積	燻	136.0	21.0	5.5	59	78	
295	K004	軒丸瓦	剣酢漿	瓦集積	燻	140.0	22.0	6.0	59	78	
296	K126	軒丸瓦		瓦集積	燻	136.0	23.0	5.0	59	78	

別表６　今宿遺跡近世瓦一覧(2)

報告No.	実測No.	器　種	瓦当型式	遺 構	焼　成	全長(cm)	幅(cm)	瓦当厚(cm)	図版	写真図版	備考
419	K034	軒平瓦	青海波	4区 SK01	燻	4.2＋	10.8＋	4.1	66	87	
420	K035	軒平瓦	唐草	4区 SK01	燻	8.5＋	10.2＋	4.1	66	87	
421	K036	軒平瓦	不明	4区 SK01	燻	2.2＋	6.0＋	欠2.7＋		87	

報告No.	実測No.	器　種	瓦当型式	遺 構	焼　成	全長(cm)	幅(cm)	厚　さ(cm)	図版	写真図版	備考
297	K1025	丸瓦	玉縁	瓦集積	燻	21.6＋	12.9	1.6	59	78	
422	K1027	丸瓦	玉縁	4区 SK01	燻	13.8＋	9.6＋	1.5	66	87	
423	K1026	丸瓦	玉縁	4区 SK01	燻	13.4＋	12.6	1.5	66	87	

別表７　今宿遺跡土器一覧(1)

報告No.	実測No.	遺構	種別	器種	産地等	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	腹径(cm)	残存			図版	写真図版	備考
											口縁径	底部	そ　の　他			
298	1	瓦集積	弥生	壺		口縁	(25.8)	2.1＋			1/12			60	79	
299	2	瓦集積	弥生	壺		底部		3.2＋	6.0			1/4		60	79	
300	3	瓦集積	土師器	坏			9.0	2.3＋			1/6			60	79	
301	5	瓦集積	土師器	把手				5.5＋					把手のみ1個完存	60	79	
302	4	瓦集積	土師器	高坏		脚		3.7＋					脚若干残存	60	79	
303	58	瓦集積	須恵器	坏蓋			(12.8)	2.9＋			1/8			60	80	
304	57	瓦集積	須恵器	坏蓋			(11.1)	2.7＋			1/8			60	80	
305	61	瓦集積	須恵器	坏身			(11.5)	3.0＋			1/10			60	80	
306	59	瓦集積	須恵器	坏		底部		1.7＋	7.3			1/2		60	80	
307	66	瓦集積	須恵器	坏		底部		1.9＋	6.1			1/4		60	80	
308	63	瓦集積	須恵器	坏				1.9＋	6.2			1/4		60	80	
309	65	瓦集積	須恵器	坏		底部		2.0＋	6.4			1/4		60	80	
310	62	瓦集積	須恵器	坏				2.0＋	7.0			1/4		60	80	
311	64	瓦集積	須恵器	高坏		脚		2.3＋					脚付け根3/4	60	80	
312	68	瓦集積	須恵器	高坏		脚		2.7＋					脚付け根完存	60	80	
313	60	瓦集積	須恵器	高坏		脚		2.6＋					脚部若干	60	80	
314	52	瓦集積	須恵器	高坏		脚		7.3＋					脚部上半分	60	80	
315	50	瓦集積	須恵器	高坏		脚		0.9＋	9.4			1/6		60	80	
316	67	瓦集積	須恵器	高坏		脚		2.7＋	(15.6)			1/12		60	80	
317	46	瓦集積	須恵器	坏Ｂ蓋				2.2＋					天井部若干・つまみ1/3	60	80	
318	47	瓦集積	須恵器	坏Ｂ		底部		1.3＋	9.4			1/6		60	80	
319	51	瓦集積	須恵器	椀		底部		1.9＋	6.8			1/2		60	80	
320	48	瓦集積	須恵器	皿			(18.0)	2.4＋			1/16			60	80	
321	49	瓦集積	須恵器	短頸壺		口縁	(15.2)	2.5＋			若干			60	80	
322	53	瓦集積	須恵器	甕		口縁	(25.8)	6.9＋			1/12			60	80	
323	55	瓦集積	須恵器	甕		口縁		5.5＋			若干			60	80	
324	54	瓦集積	須恵器	甕		口縁		8.2＋			若干			60	80	
325	56	瓦集積	須恵器	甕		口頸部							体部若干	60	80	
326	101	瓦集積	須恵器	硯			長4.8＋	2.3＋	幅6.9＋				体部若干	60	80	
327	6	瓦集積	土師器	椀		底部		2.2＋	7.4			1/2		61	79	
328	7	瓦集積	土師器	坏		底部		1.9＋	5.8			完存		61	79	
329	8	瓦集積	土師器	坏		底部		2.6＋	5.0			1/2		61	79	
330	19	瓦集積	須恵器	椀		底部		1.7＋	4.4			2/3		61	86	
331	20	瓦集積	須恵器	椀		底部		1.6＋	5.5			完存		61	86	
332	18	瓦集積	須恵器	椀		口縁	(18.0)	3.4＋			1/12			61	86	
333	24	瓦集積	須恵器	椀		底部		1.8＋	5.0			完存		61	86	
334	17	瓦集積	須恵器	鉢		口縁	(20.4)	4.3＋			1/12			61	86	
335	16	瓦集積	須恵器	鉢		口縁	(23.9)	3.0＋			1/12			61	86	
336	15	瓦集積	須恵器	鉢		口縁	(32.7)	3.3＋			1/18			61	86	
337	14	瓦集積	須恵器	鉢		口縁	(43.0)	3.0＋			若干			61	86	

別表７　今宿遺跡土器一覧(2)

報告No.	実測No.	遺構	種別	器種	産地等	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	腹径(cm)	残存			図版	写真図版	備考
											口縁径	底部	その他			
338	13	瓦集積	須恵器	甕		口縁	(18.6)	3.3＋			1/12			61	86	
339	12	瓦集積	須恵器	甕		口縁	(24.0)	4.2＋			1/8			61	86	
340	26	瓦集積	須恵器	甕		口縁	(39.0)	8.0＋			1/12			61	81	
341	21	瓦集積	須恵器	甕		底部		6.1＋	13.0			1/6		61	86	
342	23	瓦集積	須恵器	壺		底部		2.9＋	10.6			1/6		61	86	
343	22	瓦集積	須恵器	壺		底部		6.1＋	(13.2)			1/12		61	86	
344	25	瓦集積	須恵器	坏			(9.4)	3.0	5.1		若干	1/3		61	81	
345	28	瓦集積	須恵器	甕		底部		4.7＋	19.0			1/4		61	81	
346	27	瓦集積	須恵器	甕		体部		8.3＋					破片	61	81	
347	111	瓦集積	陶器	甕	常滑	口縁		5.9＋			若干			61	83	
348	30	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁	(31.7)	3.9＋			1/28			62	82	
349	29	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁	(28.7)	4.2＋			1/12			62	82	
350	33	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁	(29.0)	3.7＋			若干			62	82	
351	31	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁	(34.0)	5.15＋			1/16			62	82	
352	32	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁					若干			62	82	
353	34	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁					若干			62	82	
354	39	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁		5.1＋			若干			62	82	
355	35	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁	(36.6)	4.8＋			1/16			62	82	
356	40	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁	(28.8)	4.8＋			1/12			62	82	
357	36	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁	(27.6)	6.6＋			若干			62	82	
358	41	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁	(25.4)	5.5＋			1/12			62	82	
359	38	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁	(26.7)	4.2＋			若干			62	82	
360	37	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁	(31.6)	4.3＋			1/16			62	82	
361	102	瓦集積	陶器	壺	備前	口縁	(26.6)	6.9＋			若干			63	83	
362	104	瓦集積	陶器	壺	備前	口縁	(19.6)	3.3＋			1/10			63	83	
363	103	瓦集積	陶器	壺		口縁	(19.8)	4.4＋			1/10			63	83	
364	107	瓦集積	陶器	甕	備前	口縁	(35.8)	4.4＋			1/12			63	83	
365	105	瓦集積	陶器	甕	備前	口縁	(39.4)	3.9＋			1/16			63	83	
366	106	瓦集積	陶器	甕	備前	口縁	(44.0)	6.4＋			1/20			63	83	
367	109	瓦集積	陶器	壺		底部		3.6＋	(15.7)			1/8		63	83	
368	108	瓦集積	陶器	甕		底部		3.5＋	(19.8)			1/10		63	83	
369	110	瓦集積	陶器	甕		底部		5.4＋	(53.8)			若干		63	83	
370	69	瓦集積	青磁	碗	龍泉窯系	底部		1.8＋	5.4			1/4弱		63	85	
371	70	瓦集積	青磁	碗	龍泉窯系	底部		1.9＋	5.4			2/3弱		63	85	
372	71	瓦集積	青磁	碗	龍泉窯系	底部		2.4＋	5.9			1/2弱		63	85	
373	72	瓦集積	青磁	鉢	龍泉窯系			4.0＋	6.0			1/3		63	85	
374	73	瓦集積	青磁	鉢	龍泉窯系	底部		2.4＋	6.0			1/2		63	85	
375	9	瓦集積	土師器	鍋			(21.8)	4.8＋			1/12			63	79	
376	10	瓦集積	土師器	鍋			22.8	3.1＋			1/2			63	79	
377	11	瓦集積	土師器	鍋			(26.0)	3.5＋			若干			63	79	
378	94	瓦集積	瓦器	鍋		口縁	(35.0)	3.0＋			若干			64	84	
379	93	瓦集積	瓦器	羽釜			(27.8)	4.0＋			1/12			64	84	
380	89	瓦集積	瓦器	羽釜			(18.0)	3.4＋			1/8			64	84	
381	90	瓦集積	瓦器	羽釜			(18.5)	2.8＋			若干			64	84	
382	88	瓦集積	瓦器	羽釜			(22.3)	4.4＋			1/8			64	84	
383	85	瓦集積	瓦器	羽釜			(33.1)	3.9＋			1/18			64	84	
384	86	瓦集積	瓦器	羽釜				4.6＋					鍔1/10	64	84	
385	87	瓦集積	瓦器	羽釜			(34.8)	3.1＋			若干			64	84	
386	92	瓦集積	瓦器	羽釜・三足器				2.5＋					鍔1/18	64	84	
387	91	瓦集積	瓦器	羽釜			(24.7)	4.8＋			1/16			64	84	
388	95	瓦集積	瓦質土器	鍋		脚のみ		8.0＋					脚部上半分	64	84	
389	97	瓦集積	瓦質土器	鍋		脚のみ		8.9＋					脚部上半分	64	84	
390	96	瓦集積	瓦質土器	鍋		脚のみ		7.7＋					脚部上半分	64	84	
391	100	瓦集積	瓦質土器	鍋		脚のみ		10.2＋					脚部上半分	64	84	

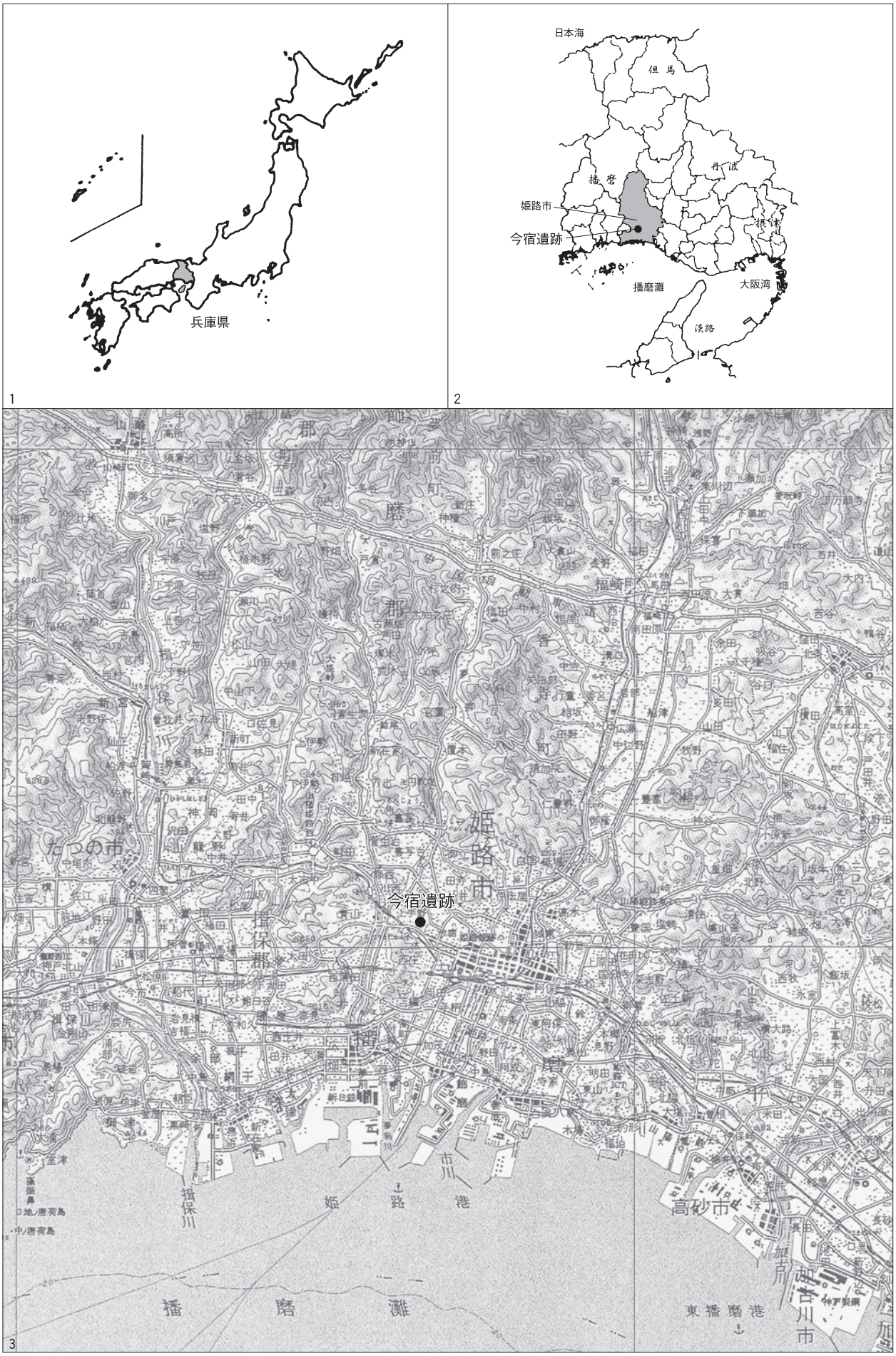
別表７　今宿遺跡土器一覧(3)

報告No.	実測No.	遺構	種別	器種	産地等	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	腹径(cm)	残存			図版	写真図版	備考
											口縁径	底部	その他			
392	99	瓦集積	瓦質土器	鍋		脚のみ		10.3＋					脚部上2/3	64	84	
393	98	瓦集積	瓦質土器	鍋		脚のみ		12.4＋					脚部完存	64	84	
394	83	瓦集積	土師器	鍋		三本脚	(24.0)	4.4＋			1/8			64	84	
395	84	瓦集積	瓦質土器	火鉢				8.1＋					体部1/8	64	84	
396	82	瓦集積	瓦質土器	火舎			(44.2)	5.4＋			1/18			64	84	
397	42	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁	(29.3)	5.4＋			1/14			65	81	
398	44	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁	(23.8)	7.1＋			1/20			65	81	
399	43	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	口縁					若干			65	81	
400	45	瓦集積	陶器	擂鉢	備前	底部		6.1＋	13.0			1/5		65	81	
401	116	瓦集積	陶器	甕	丹波	口縁	(33.8)	3.0＋			1/20			65	83	
402	113	瓦集積	陶器	甕	丹波	口縁	(39.0)	4.9＋			1/16			65	83	
403	119	瓦集積	陶器	擂鉢	堺・明石	口縁	(30.4)	5.7＋			1/8			65	83	
404	117	瓦集積	陶器	擂鉢	堺・明石	口縁		3.5＋			1/20			65	83	
405	115	瓦集積	陶器	壺		底部		2.8＋	5.1			1/4		65	83	
406	118	瓦集積	陶器	壺		体部		4.1＋					体部若干	65	83	
407	114	瓦集積	陶器	甕		体部		10.2＋					体部破片	65	83	
408	112	瓦集積	陶器	甕		底部		3.4＋	(13.9)			1/8		65	83	
409	77	瓦集積	施釉磁器	碗			(10.3)	5.0＋	3.8		1/9	完存		66	85	
410	80	瓦集積	染付磁器	鉢			8.9	4.6＋			1/6			66	85	
411	79	瓦集積	染付磁器	皿				1.9＋	4.2			1/2弱		66	85	
412	81	瓦集積	染付磁器	小碗	東山焼		(6.5)	4.5	3.7		若干	1/2		66	85	
413	74	瓦集積	施釉陶器	椀		底部		1.9＋	4.4			1/2		66	85	
414	76	瓦集積	施釉陶器	灯明皿			10.6	2.4＋	3.2		1/5	若干		66	85	
415	78	瓦集積	無釉陶器	灯明皿			(7.8)	0.9＋			1/9			66	85	
416	75	瓦集積	施釉陶器	鉢			(10.2)	3.6＋				1/9		66	85	
417	120	SK01	施釉陶器	甕				9.4＋	18.9			一部欠		66	86	
418	121	SK01	土師器	匣鉢			24.5	13.4	26.4		一部欠	一部欠		66	86	

別表８　今宿遺跡石器一覧

報告No.	実測No.	種　別	器　種	全　長	幅(mm)	厚　さ(mm)	重　さ(g)	図版	写真図版	備　考
S1	S4	石器	砥石	40.5	33.5	15.5	34.9	67	88	
S2	S1	石器	砥石	58.5	57.5	30.5	177.0	67	88	
S3	S2	石器	砥石	71.0	38.0	36.5	132.7	67	88	
S4	S3	石器	砥石	103.5	54.5	43.0	270.1	67	88	

図版



1 兵庫県の位置　2 姫路市の位置　3 今宿遺跡の位置（1/200,000）

図版2　遺跡

図版3	遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の所在地	時代	種類
1	020129	引照廃寺	姫路市実法寺	中世	寺院
2	020130	天神山10号墳	姫路市実法寺	古墳	古墳
3	020833	天神山11号墳	姫路市実法寺	古墳	古墳
4	020131	天神山窯跡	姫路市実法寺	古墳	生産
5	020133	天神山城跡	姫路市書写	中世	城館
6	020824～020832	天神山古墳群	姫路市書写台2丁目	古墳	古墳
7	020134・020814	坂本城跡・書写構江遺跡	姫路市書写	中世・弥生	城館・集落・墳墓
8	020132	町田池遺跡	姫路市町田	縄文～弥生	散布地
9	020141	蓑尾山5号墳	姫路市町田	古墳	古墳
10	020137～020140	蓑尾山古墳群	姫路市書写台3丁目	古墳	古墳
11	020143	蓑尾山中世墳墓群	姫路市町田～書写	平安～中世	墳墓
12	020144	蓑尾山遺跡	姫路市町田		散布地
13	020142	蓑尾山弥生墳墓群	姫路市書写	弥生	墳墓
14	020148	飾西東山遺跡	姫路市飾西～書写	弥生	集落
15	020145～020147	東山古墳群	姫路市飾西～書写	古墳	古墳
16	020149	川西弥生墳墓群	姫路市飾西～上手野	弥生	墳墓
17	020115	稲岡山古墳	姫路市青山	古墳	古墳
18	020204～020211	馬瀬古墳群	姫路市御立北3丁目	古墳	古墳
19	020203	馬瀬遺跡	姫路市御立北3丁目	弥生	散布地
20	020212・020213	大谷古墳群	姫路市御立北3丁目	古墳	古墳
21	020202	檜尾遺跡	姫路市御立東6丁目	弥生	散布地
22	020195	山田古墳	姫路市御立東4丁目	古墳	古墳
23	020847	前山遺跡	姫路市御立東2丁目	弥生	散布地
24	020201	大池古墳	姫路市御立東2丁目	古墳	古墳
25	020200	河野遺跡	姫路市田寺4丁目	弥生	散布地
26	020199	番留遺跡	姫路市田寺東2丁目	弥生	散布地
27	020198	下橋遺跡	姫路市田寺2丁目～田寺東2丁目	弥生	散布地
28	020197	岸の下遺跡	姫路市田寺2丁目～田寺東2丁目	弥生	散布地
29	020196	大谷口遺跡	姫路市田寺東2丁目～田寺山手町	縄文～弥生	散布地
30	020859～020865	山崎山古墳群	姫路市辻井9丁目	古墳	古墳
31	020162	辻井遺跡	姫路市辻井1丁目～7丁目	縄文～弥生・奈良	集落
32	020163	辻井廃寺	姫路市辻井1丁目～5丁目	奈良～平安	寺院
33	020150	秩父山古墳	姫路市下手野2丁目	古墳	古墳
34	020151	秩父山遺跡	姫路市下手野2丁目	弥生	散布地
35	020152～020155	船越山古墳群	姫路市下手野2丁目	古墳	古墳
36	020156～020159	蛤山古墳群	姫路市山吹2丁目	古墳	古墳
37	020160	山吹遺跡	姫路市山吹2丁目	古墳～奈良	
38	020161	今宿遺跡	姫路市西今宿5丁目	奈良	散布地
39	020165	今宿丁田遺跡	姫路市東今宿1丁目～4丁目	縄文～奈良	集落
40	020164	名古山遺跡	姫路市名古山町	弥生	集落
41	020572	岩端町遺跡	姫路市岩端町	弥生	集落
42	020377	蒲田遺跡	姫路市広畑区蒲田	奈良	散布地
43	020378～020385	山所群集墳	姫路市広畑区蒲田	古墳	古墳
44	020386	山所遺跡	姫路市広畑区蒲田	弥生	散布地
45	020387	山所廃寺	姫路市広畑区蒲田	奈良	寺院
46	020388	山所南遺跡	姫路市広畑区蒲田2丁目	弥生	散布地
47	020389	山崎城跡	姫路市飾磨区山崎	中世	城館
48	020390・020391	稚児ヶ淵古墳群	姫路市飾磨区山崎	古墳	古墳
49	020452	土山遺跡	姫路市西庄	弥生	散布地
50	020451	町田遺跡	姫路市岡田	古墳	散布地
51	020446	八反長遺跡	姫路市岡田	弥生	集落
52	020445	堂田遺跡	姫路市岡田	縄文	散布地
53	020453	千代田遺跡	姫路市千代田町	縄文～弥生	散布地
54	020456	南畝町遺跡	姫路市南畝町	弥生	集落
55	020455	君田遺跡	姫路市東延末	弥生	集落
56	020454	村淵遺跡	姫路市延末1丁目	弥生	散布地
57	020441	橋詰遺跡	姫路市延末	縄文～古墳	集落
58	020440	黒表遺跡	姫路市東延末	弥生～古墳	散布地
59	020439	小山遺跡	姫路市延末	弥生～古墳	集落
60	020444	西延末遺跡	姫路市西延末	弥生	集落
61	020442・020873～020883	手柄山北丘群集墳	姫路市西延末	古墳	古墳
62	020443	手柄山北丘頂上古墳	姫路市西延末	古墳	古墳
63	020872	手柄山北丘遺跡	姫路市西延末	旧石器～古墳	散布地・集落
64	020884	手柄山南丘遺跡	姫路市西延末	弥生	集落
65	020885～020888	手柄山南丘群集墳	姫路市西延末	古墳	古墳
66	020438	生矢神社裏遺跡	姫路市手柄	弥生	散布地
67	020436	浜田遺跡	姫路市手柄	弥生	散布地
68	020435	竹の前遺跡	姫路市手柄	弥生～古墳	散布地
69	020437	古屋敷遺跡	姫路市手柄1丁目	弥生～古墳	散布地
70	020432	仮称　船場川東区整遺跡　第6地点	姫路市飯田	縄文～中世	集落
71	020414	長越遺跡	姫路市飯田	弥生～古墳	集落
72	020415	邨東遺跡	姫路市中地	弥生	集落
73	020413	東久保遺跡	姫路市中地南町	弥生	散布地
74	020416	西久保遺跡	姫路市中地南町	弥生	散布地
75	020417	中地天神遺跡	姫路市中地南町	弥生～中世	集落
76	020412	大町遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	弥生	散布地
77	020447	丁田遺跡	姫路市町坪～中地	弥生～古墳	集落
78	020419	中ノ町遺跡	姫路市玉手	弥生	散布地
79	020420	仮称　大井川区整地内遺跡　第1地点	姫路市玉手	弥生～中世	集落
80	020421	仮称　大井川区整地内遺跡　第2地点	姫路市玉手	中世	集落
81	020575	英賀保駅周辺遺跡第2地点	姫路市玉手	中世	集落
82	020449	村前遺跡	姫路市井ノ口	弥生	散布地
83	020448	法輪寺山遺跡	姫路市井ノ口	弥生	散布地
84	020576	英賀保駅周辺遺跡第3地点	姫路市町坪	平安～中世	集落
85	020450	四ツ池遺跡	姫路市苫編～町坪	古墳	散布地
86	020578	英賀保駅周辺遺跡第4地点	姫路市苫編、町坪、飾磨区高町	平安～中世	集落
87	020392～020395・020765～020768	付城山群集墳	姫路市苫編	古墳	古墳

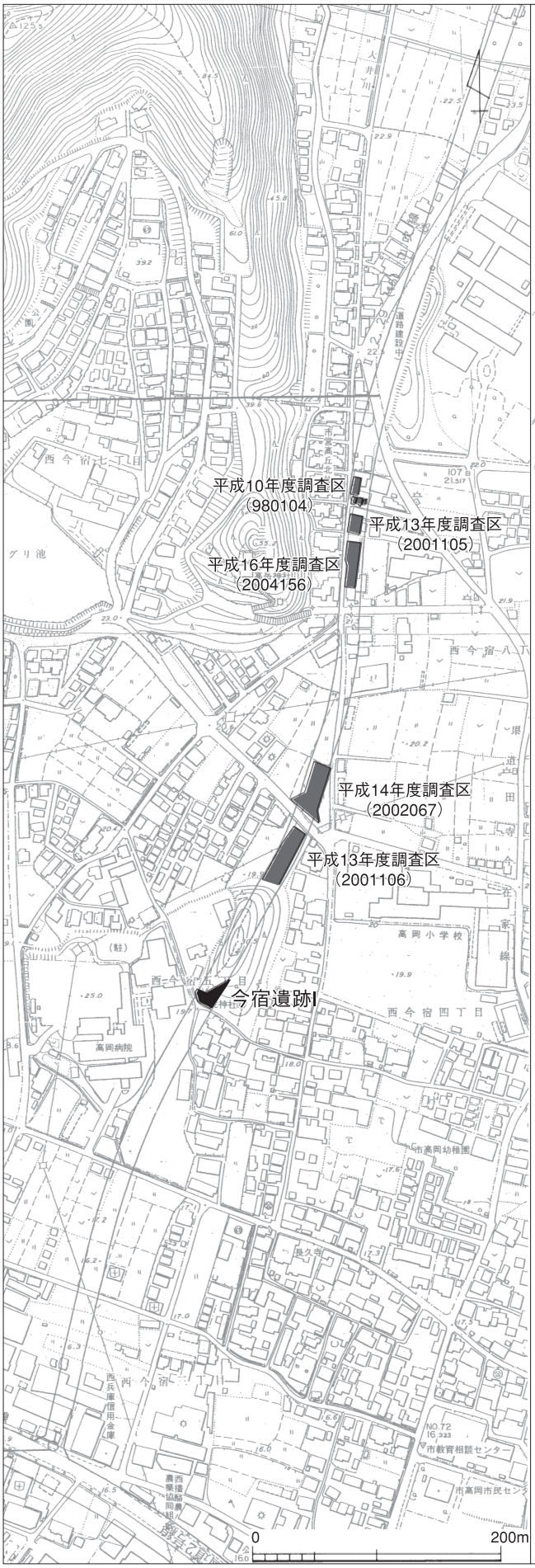
今宿遺跡周辺の主要遺跡一覧

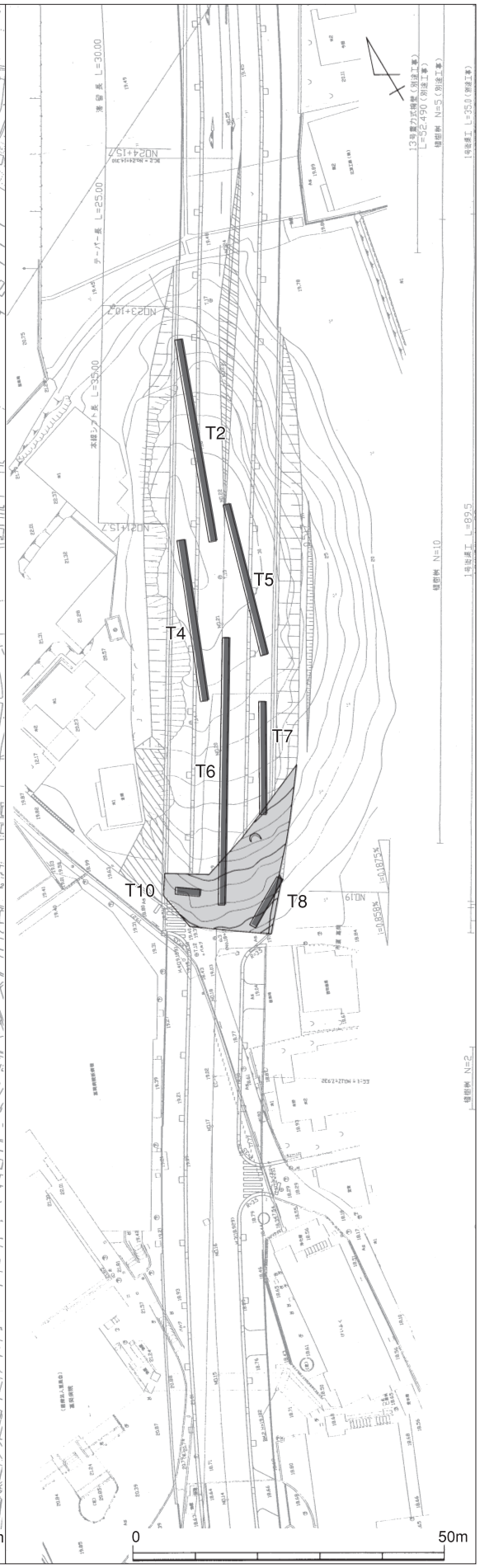
4 今宿遺跡周辺の主要遺跡（1/25,000）

5 今宿遺跡周辺の地質（1/100,000）

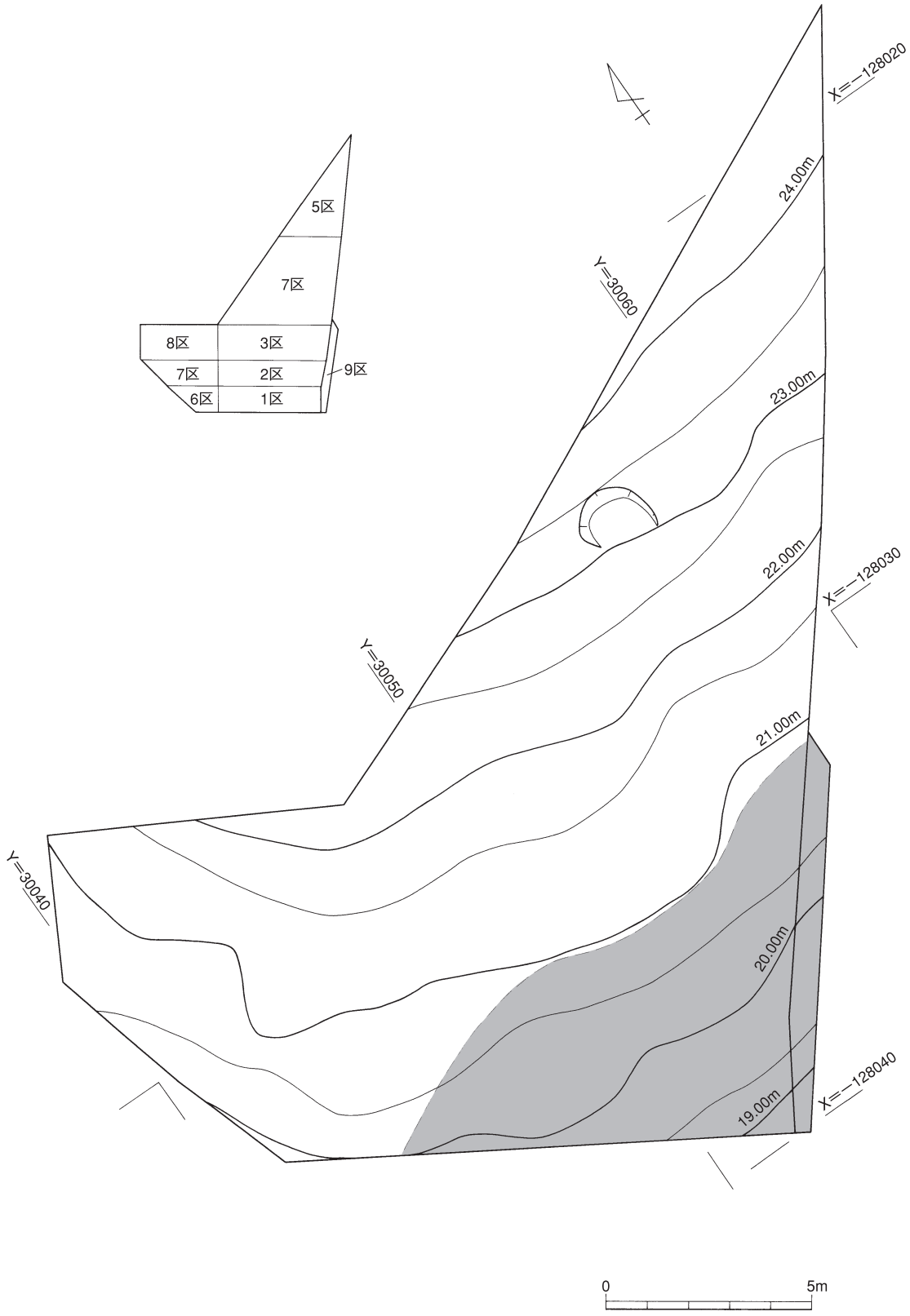
6 明治39年の今宿遺跡周辺（1/20,000）

7 今宿遺跡周辺の小字と遺跡（1/10,000）

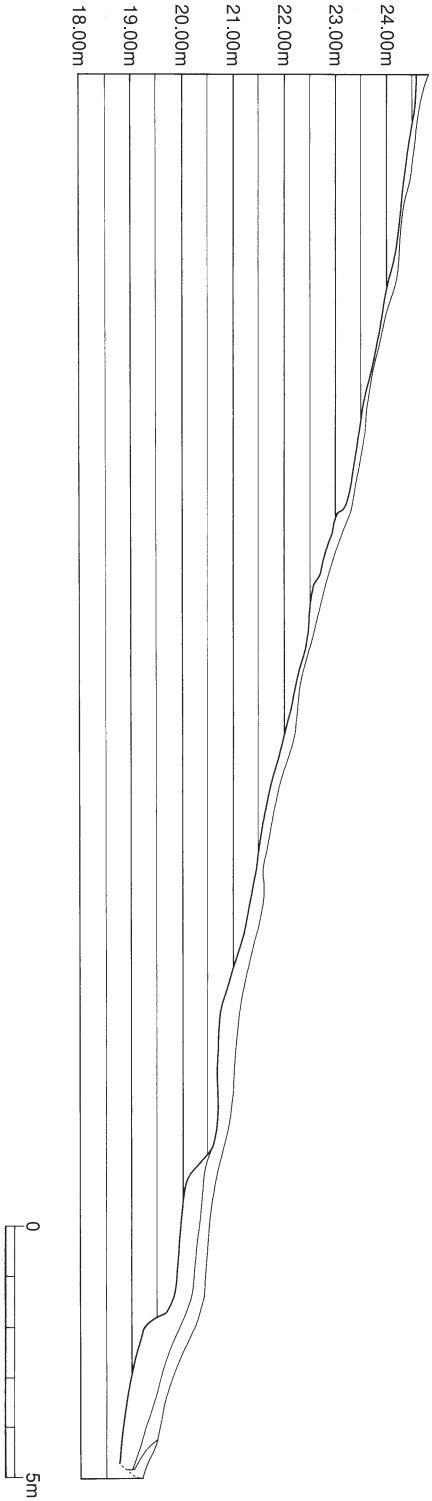




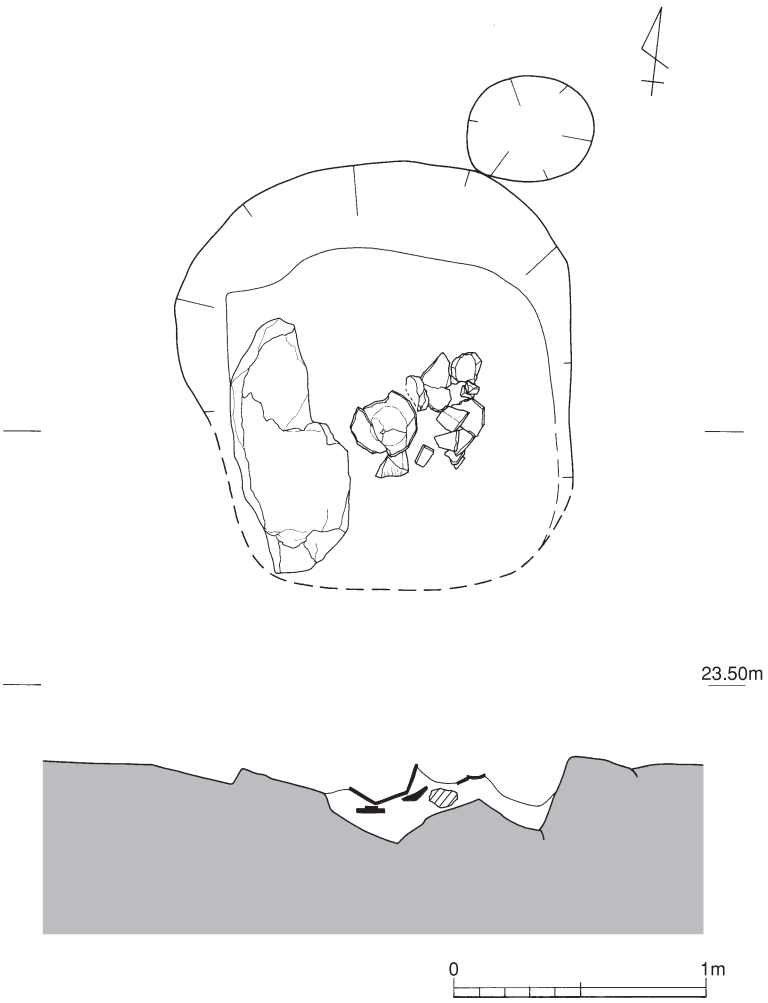
8 山吹線（西今宿工区）調査位置（1/5,000）　　9 今宿遺跡の確認調査と本発掘調査の位置（1/1,000）


5区
7区
8区
3区
7区
2区
9区
6区
1区
X=−128020
24.00m
Y=30060
23.00m
22.00m
X=−128030
Y=30050
21.00m
Y=30040
20.00m
19.00m
X=−128040
0
5m

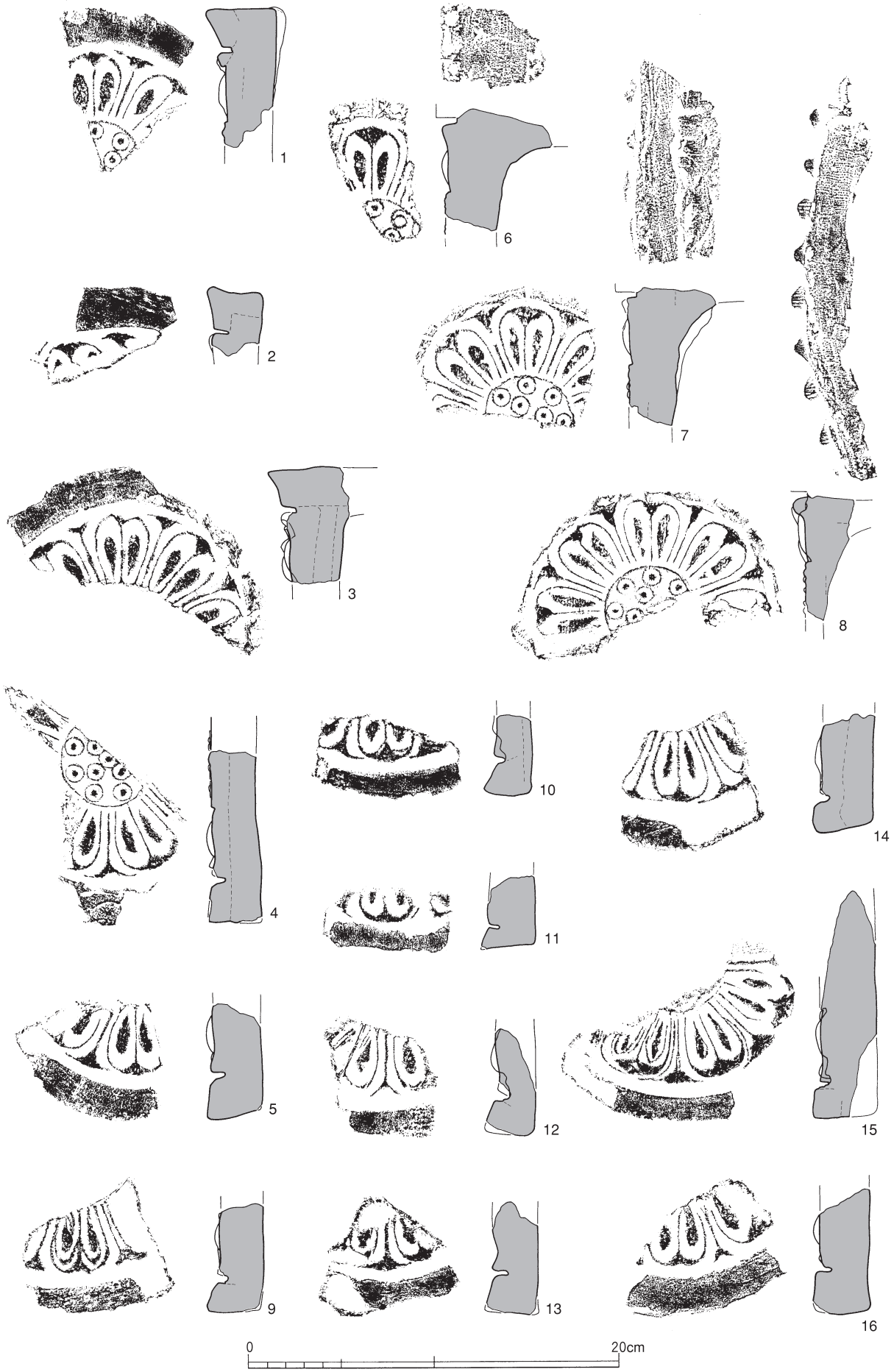
10 遺構配置（1/150）



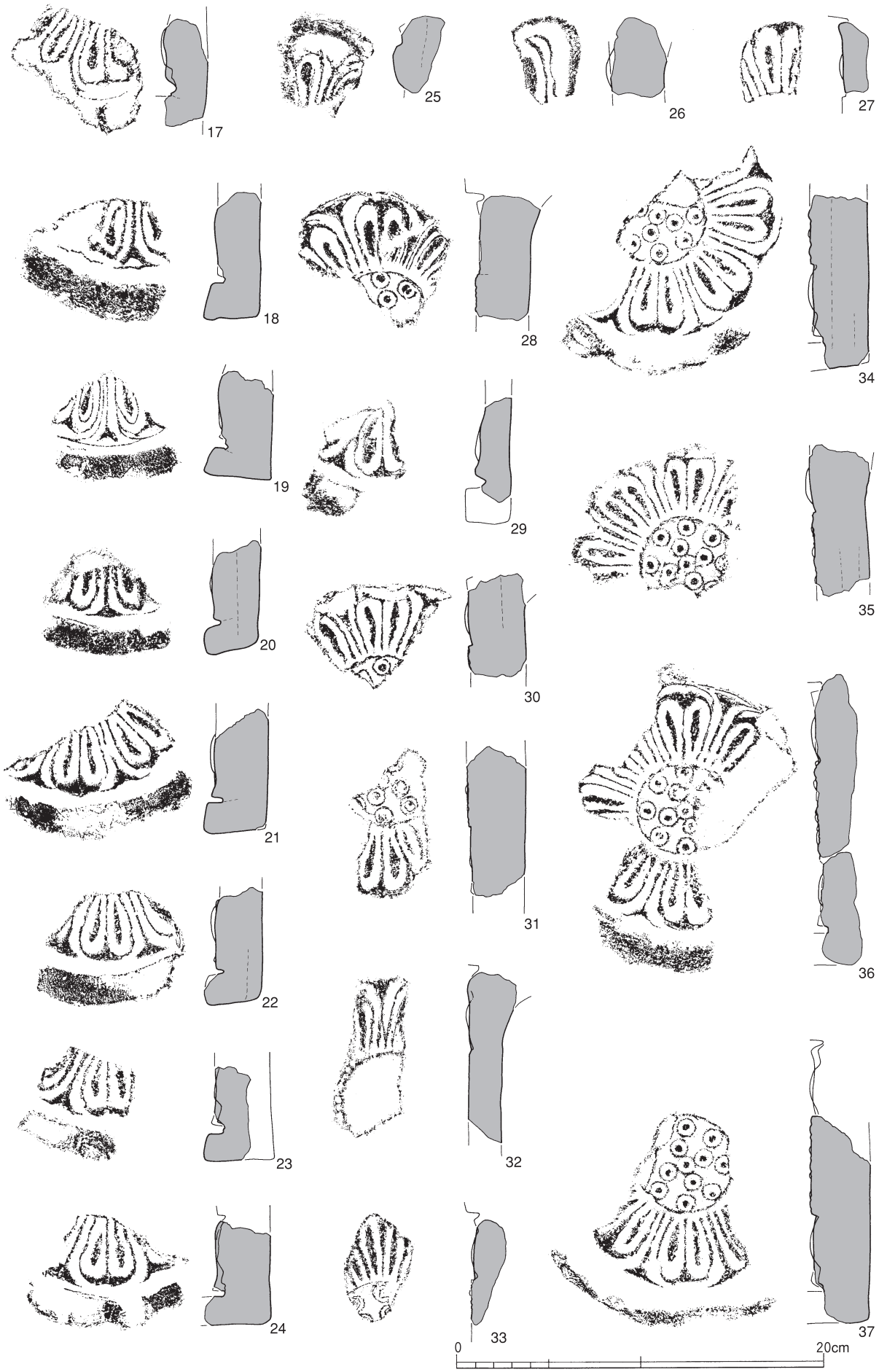
11 土層断面（1/150）



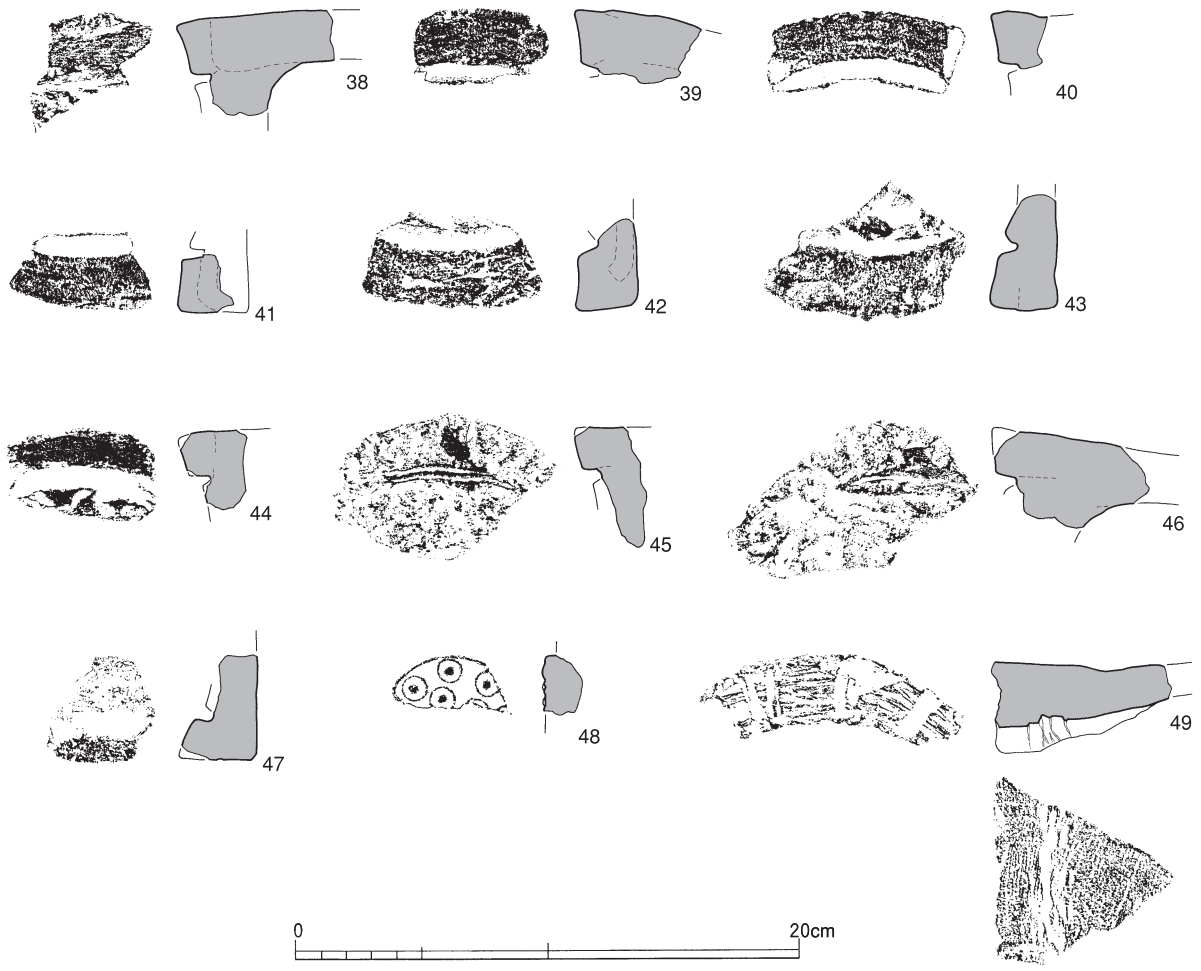
12 土坑SK01（1/30）



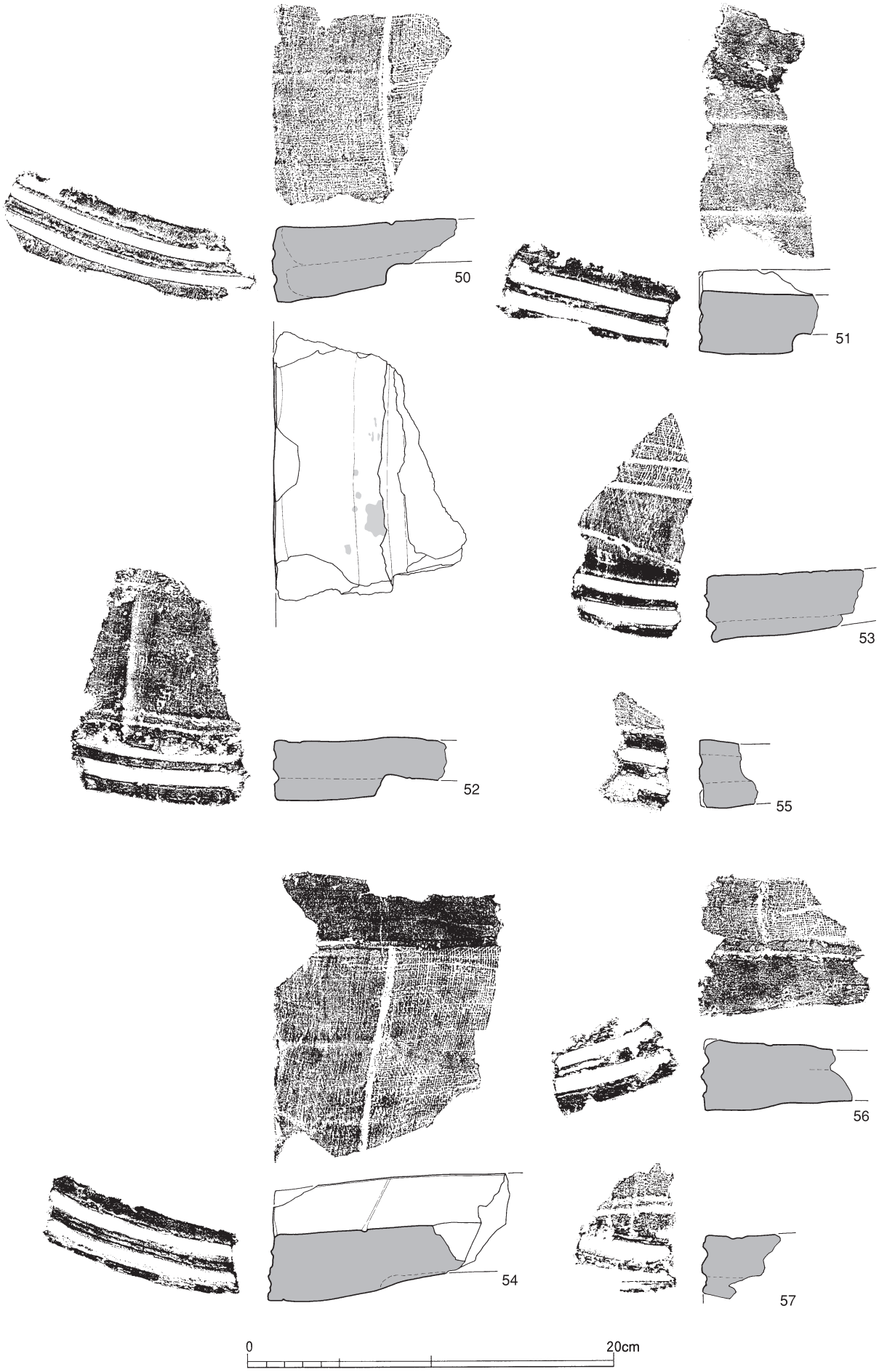
瓦集積　軒丸瓦①（1～16）M1・M2・M3・M4・M5・M6類



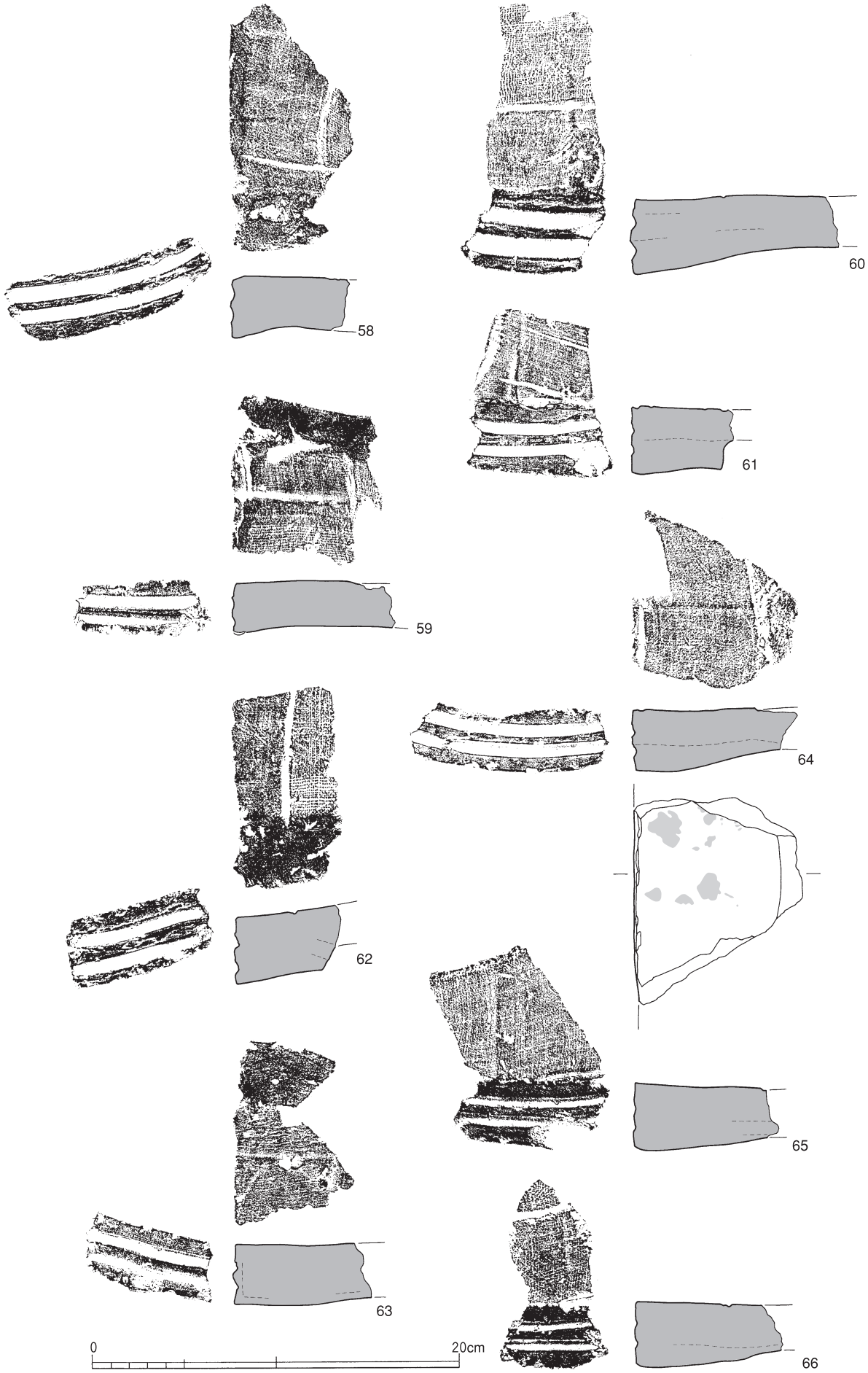
瓦集積　軒丸瓦②（17～37）M4・M5・M7・M8類



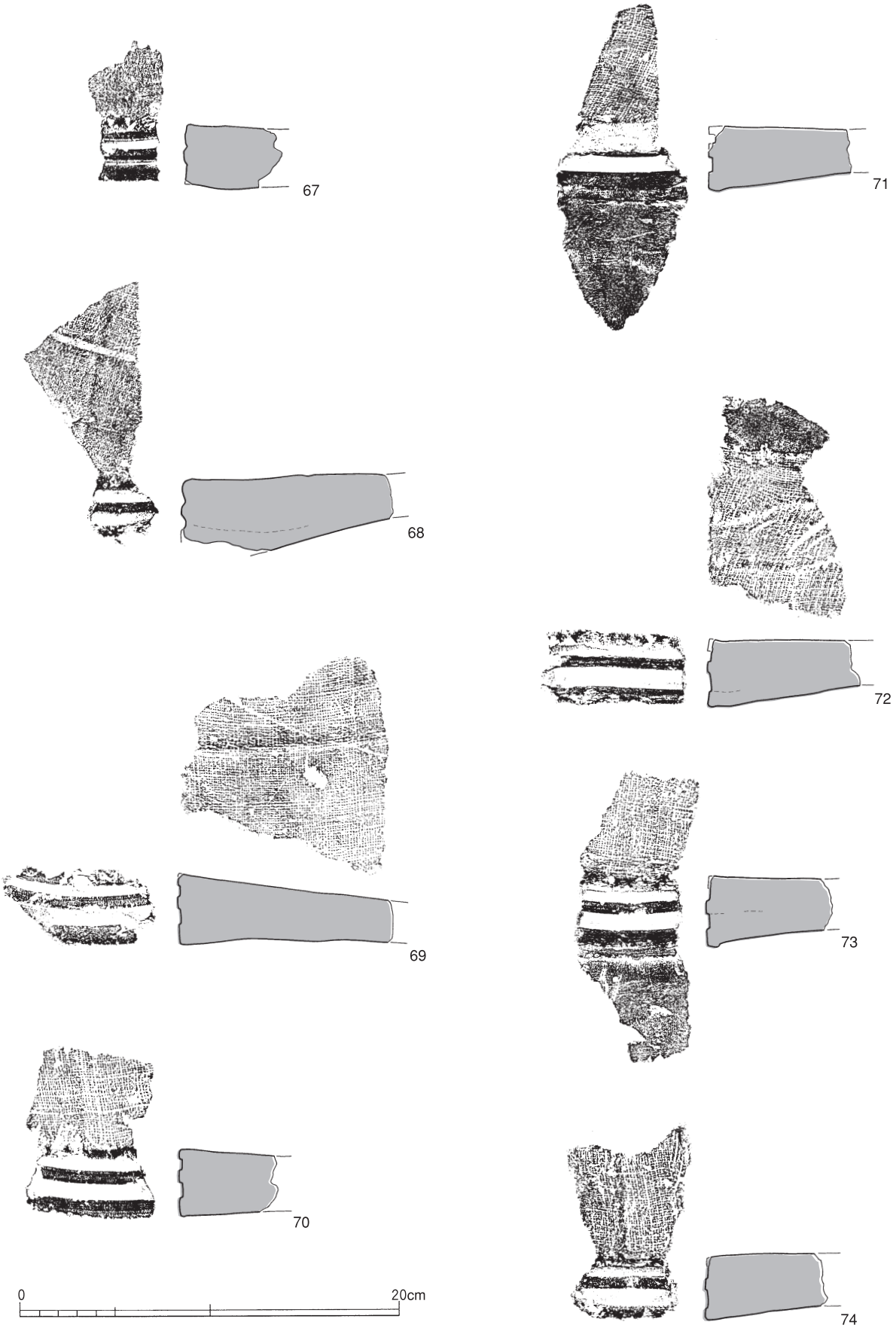
瓦集積　軒丸瓦③（38～49）M9・M10・M11類



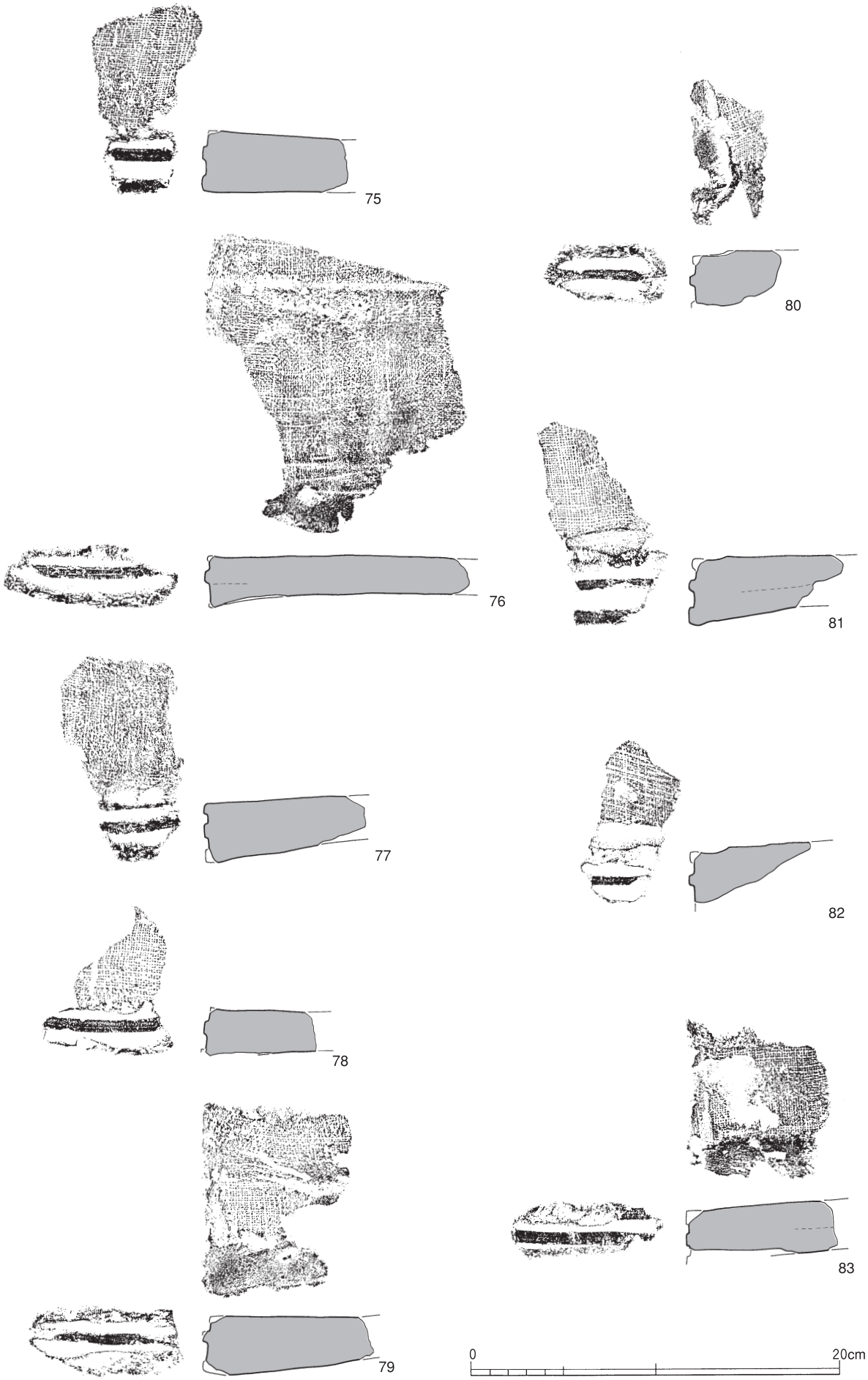
瓦集積　軒平瓦①（50～57）H1・H2・H3・H5類



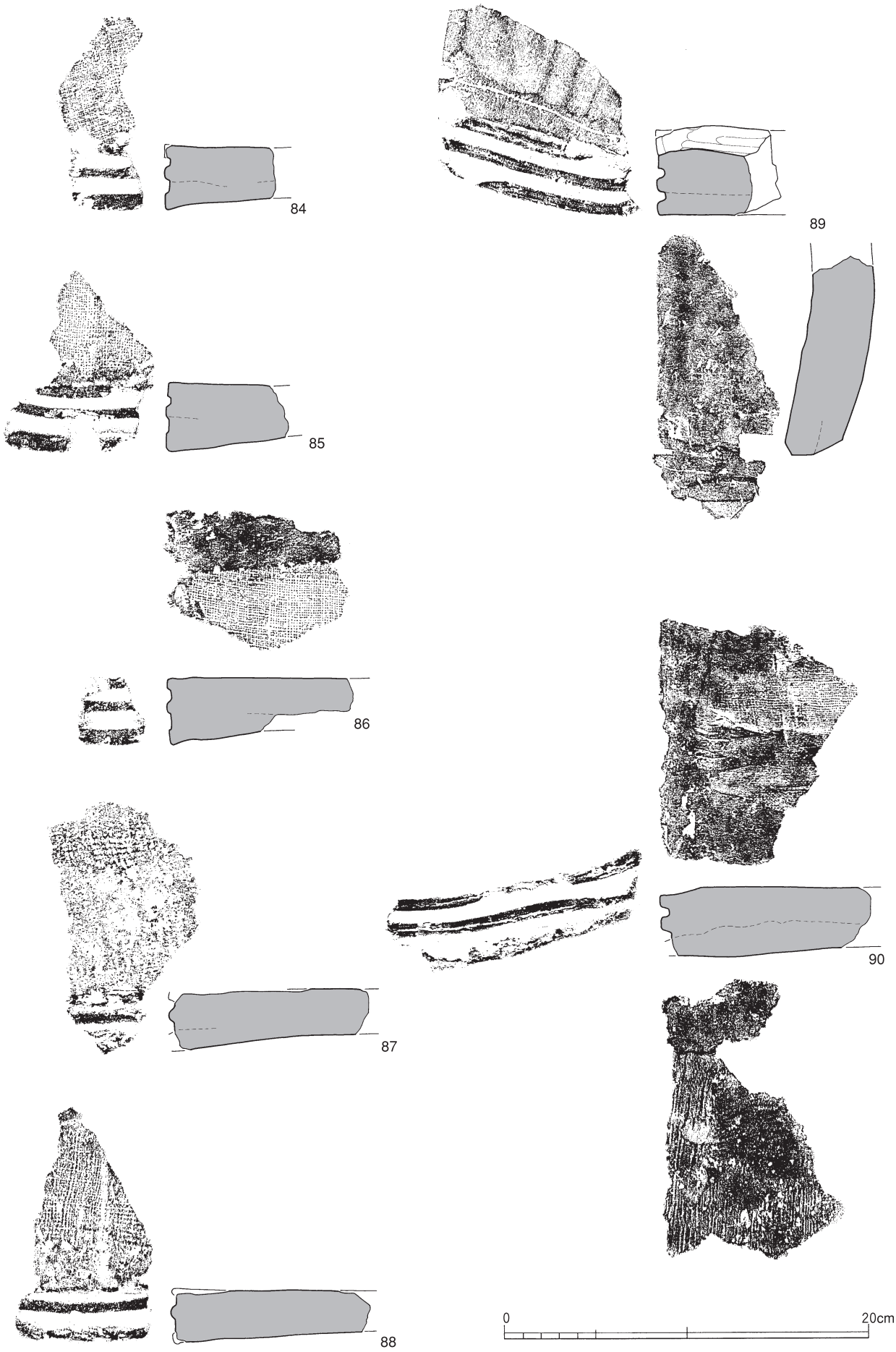
瓦集積　軒平瓦②（58～66）H1・H3・H4・H5・H6類



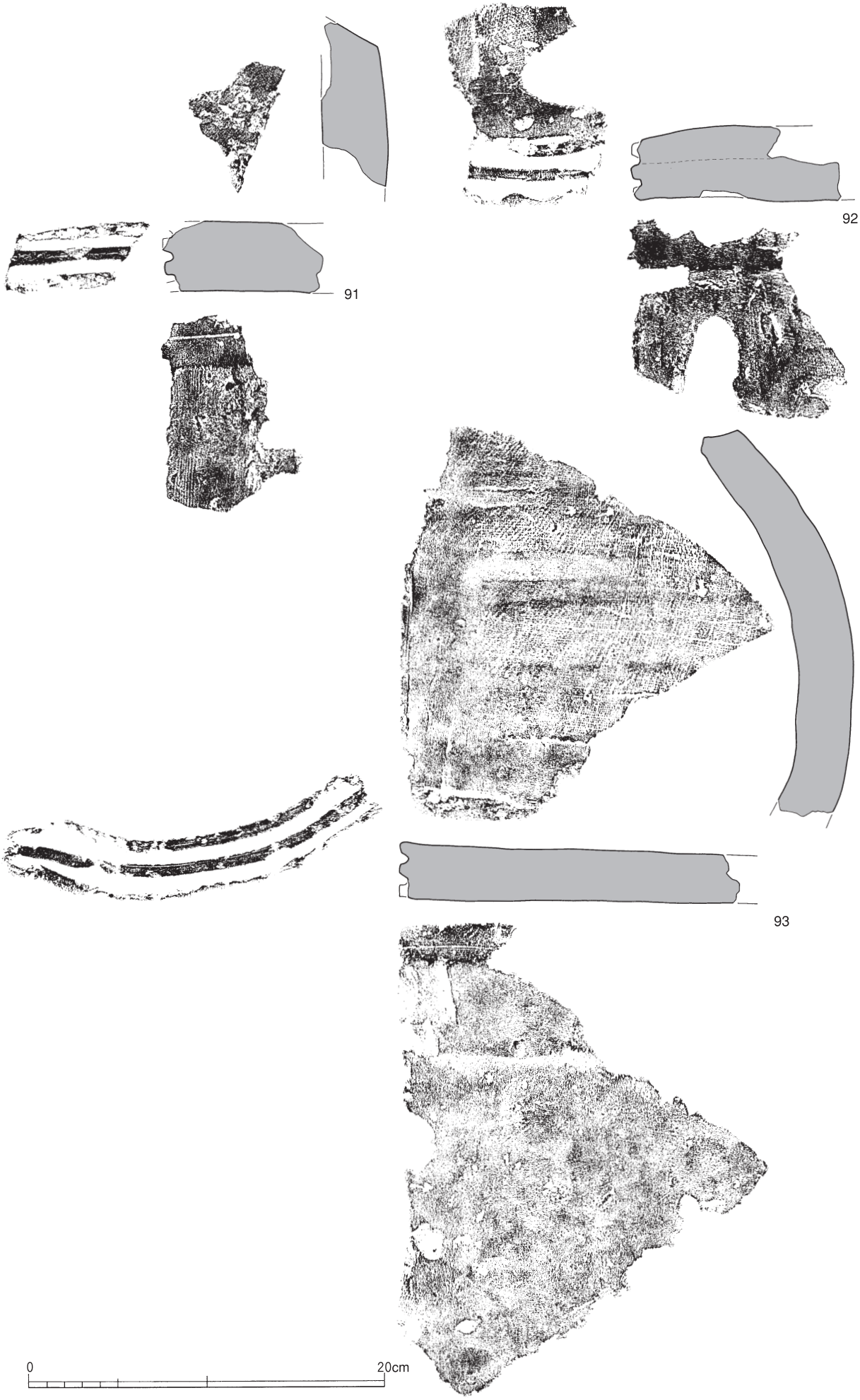
瓦集積　軒平瓦③（67～74）H5・H6・H7類



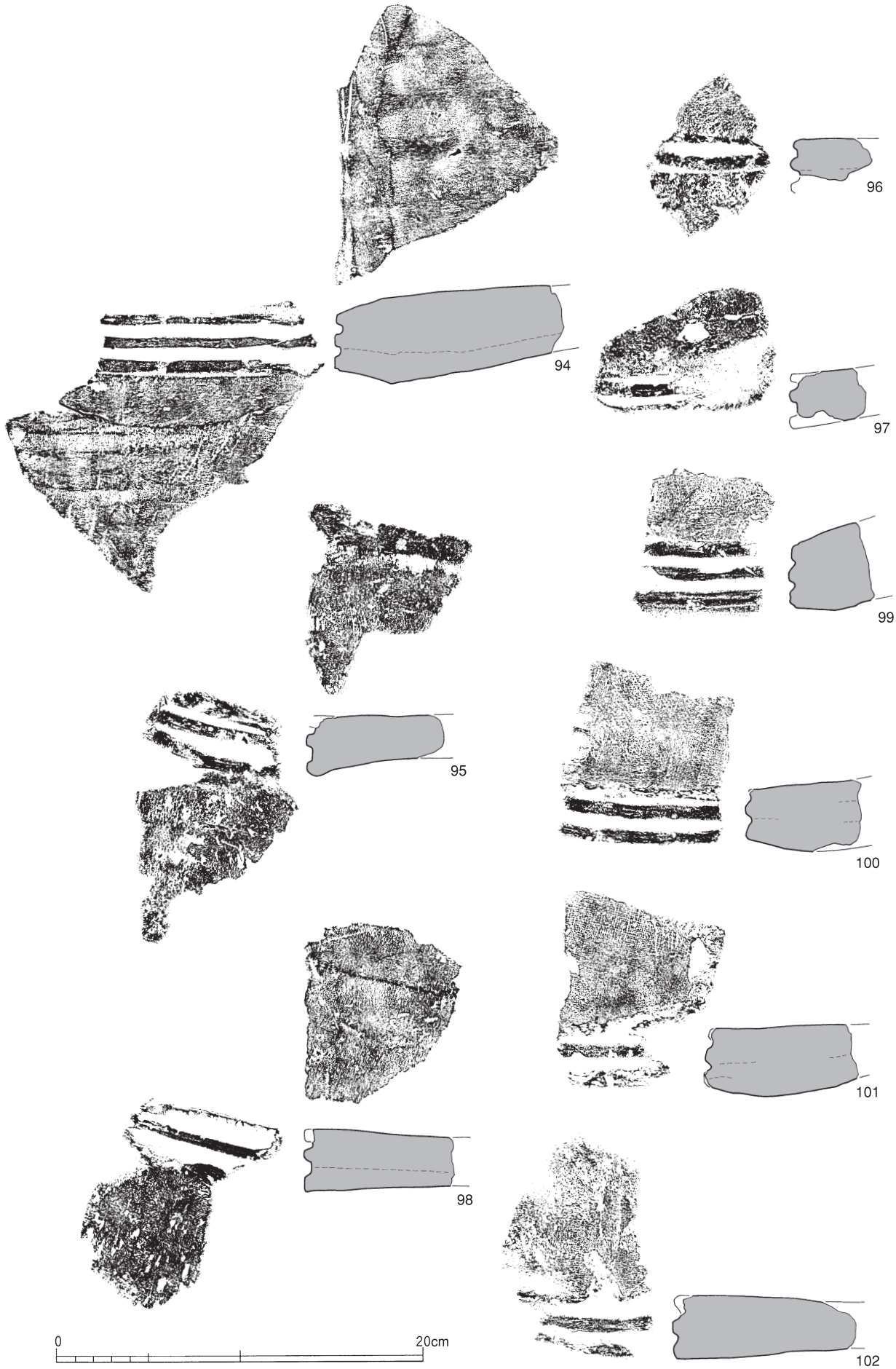
瓦集積　軒平瓦④（75～83）H7・H8・H9類



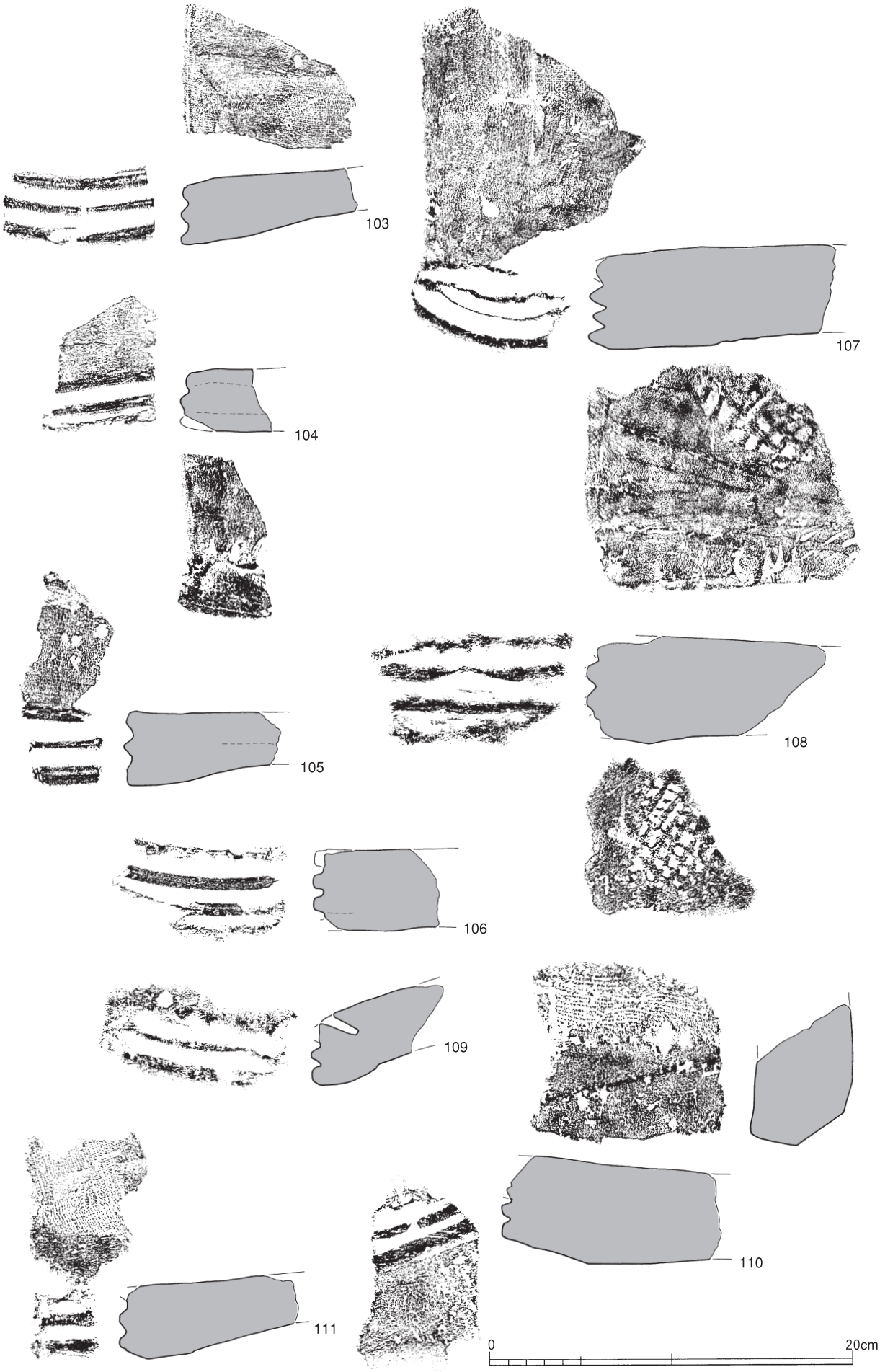
瓦集積　軒平瓦⑤（84～90）H10・H11・H12類



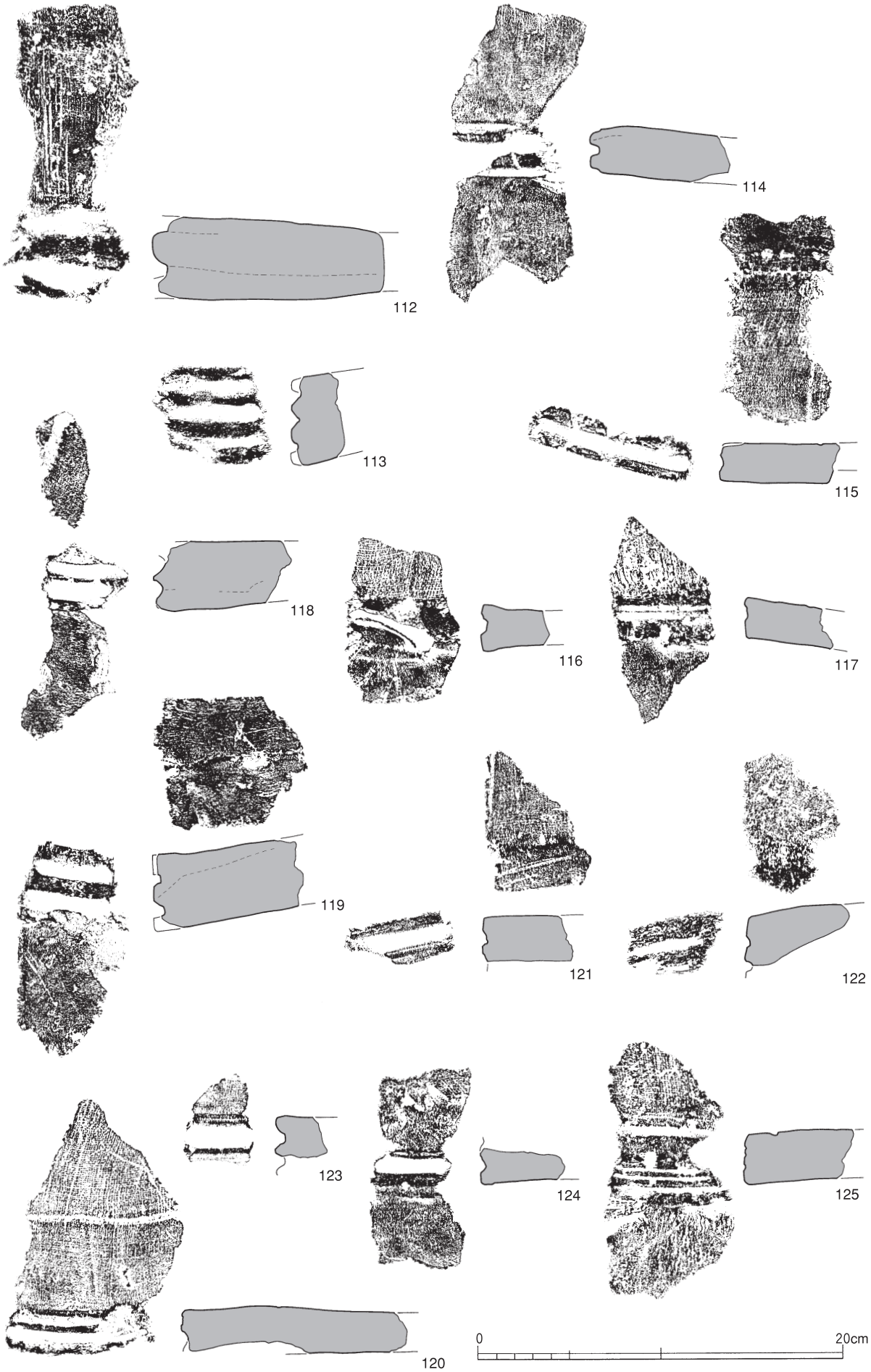
瓦集積　軒平瓦⑥（91～93）H12類



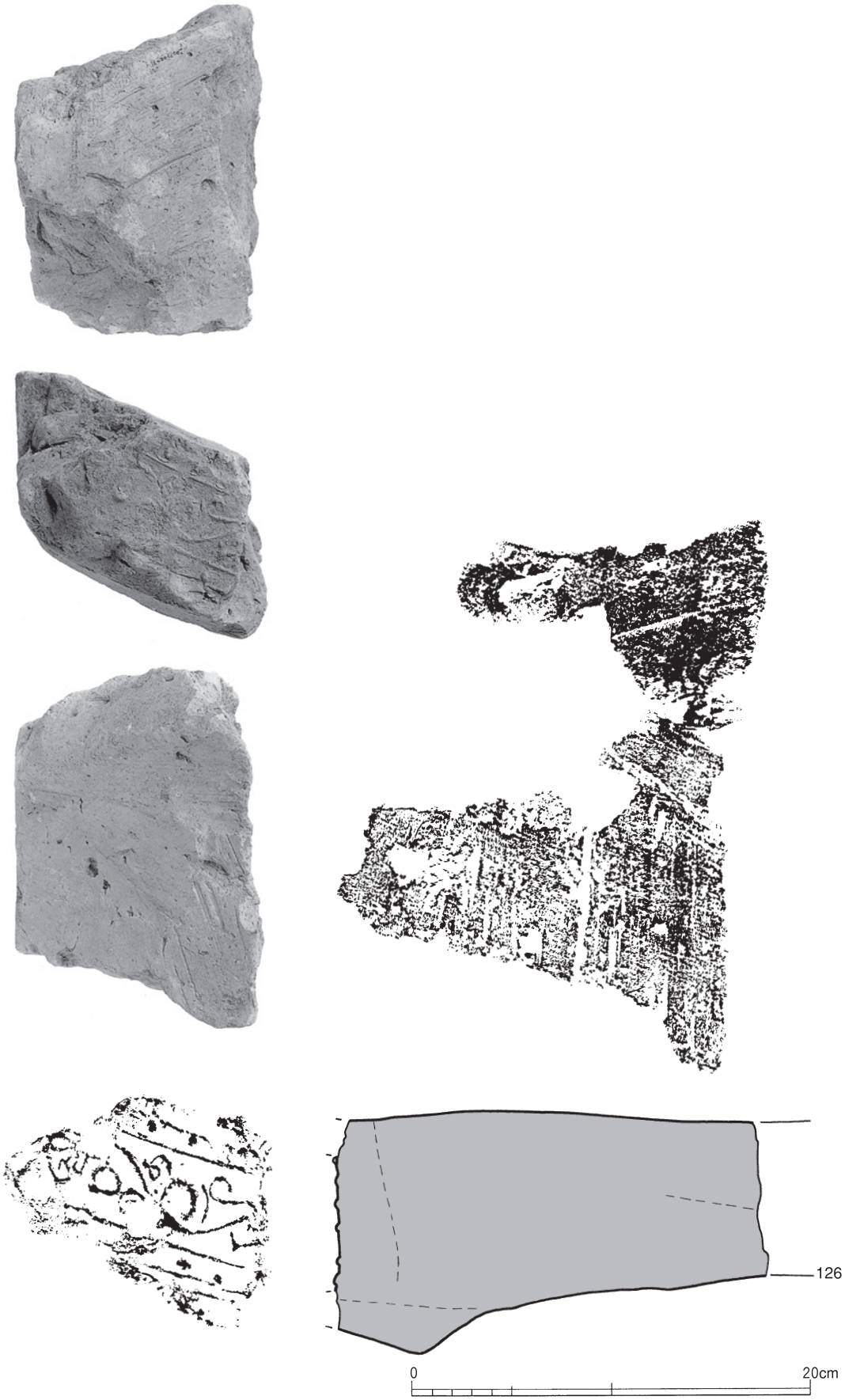
瓦集積　軒平瓦⑦（94～102）H13・H14・H15・H16・H17類



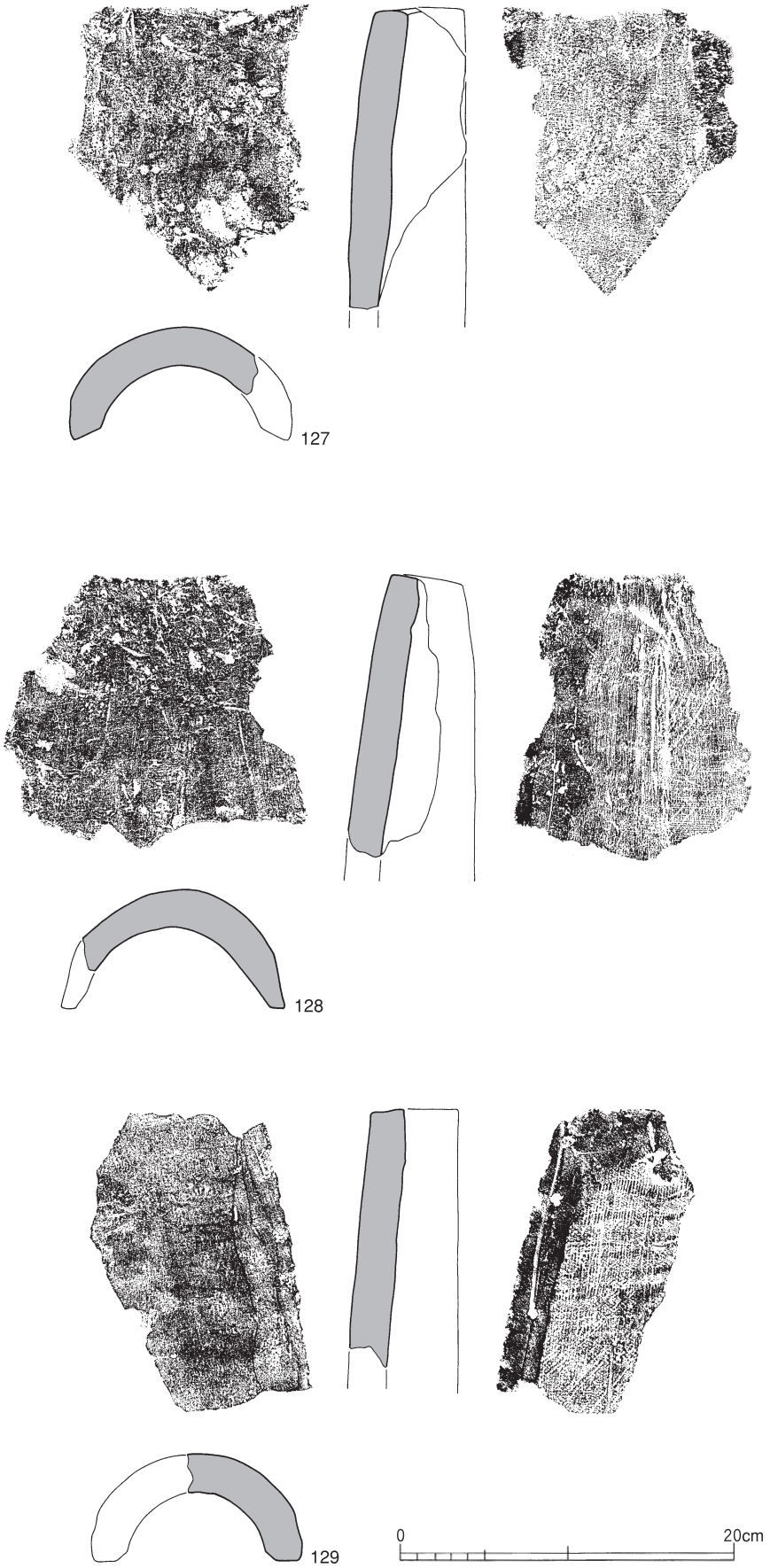
瓦集積　軒平瓦⑧（103～111）H12・H16・H18・H19・H20・H21・H22・H23類



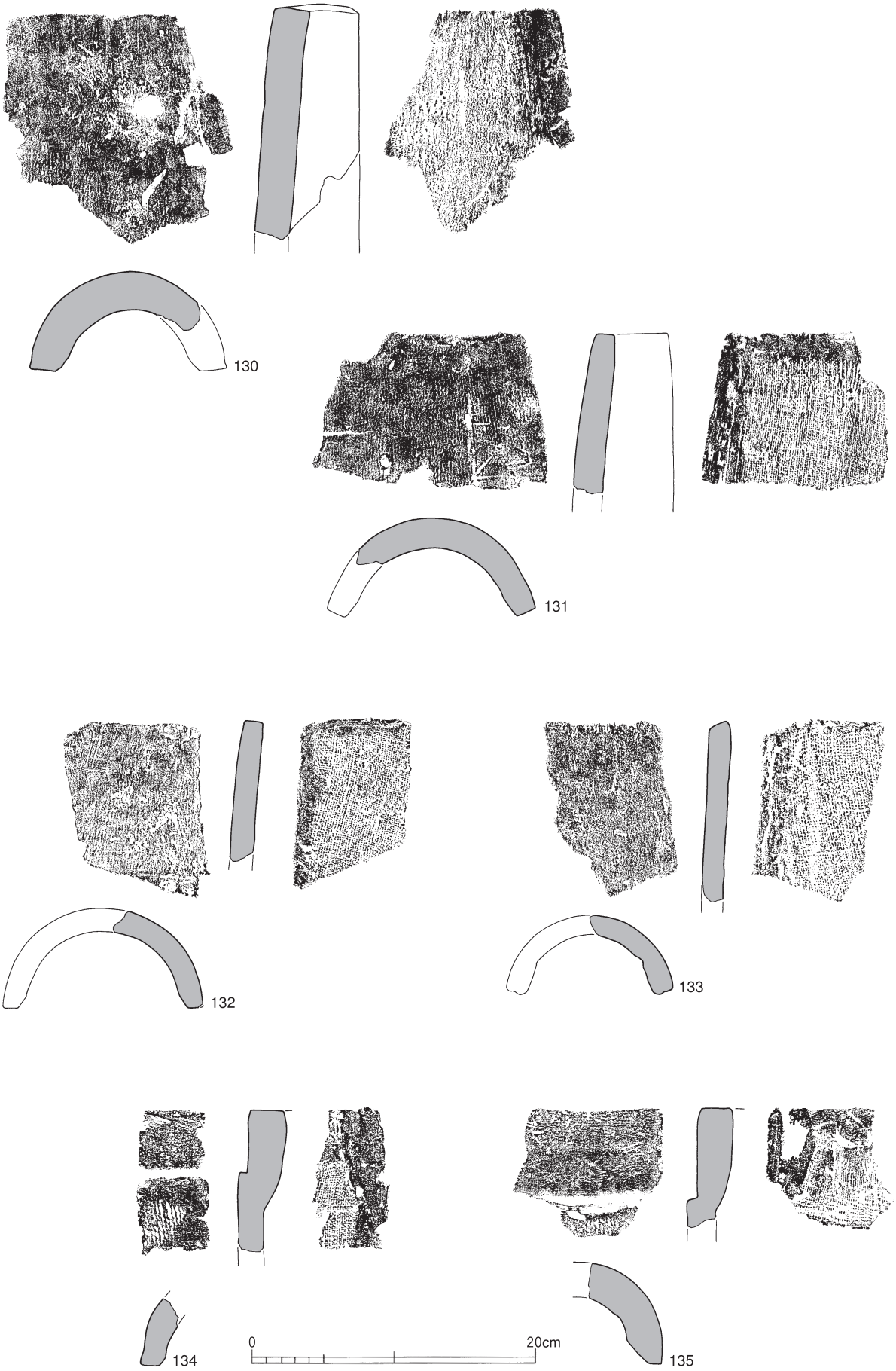
瓦集積　軒平瓦⑨（112～125）H20・H24・H25・H26・H27・H28・H29・H30・H31・H32類



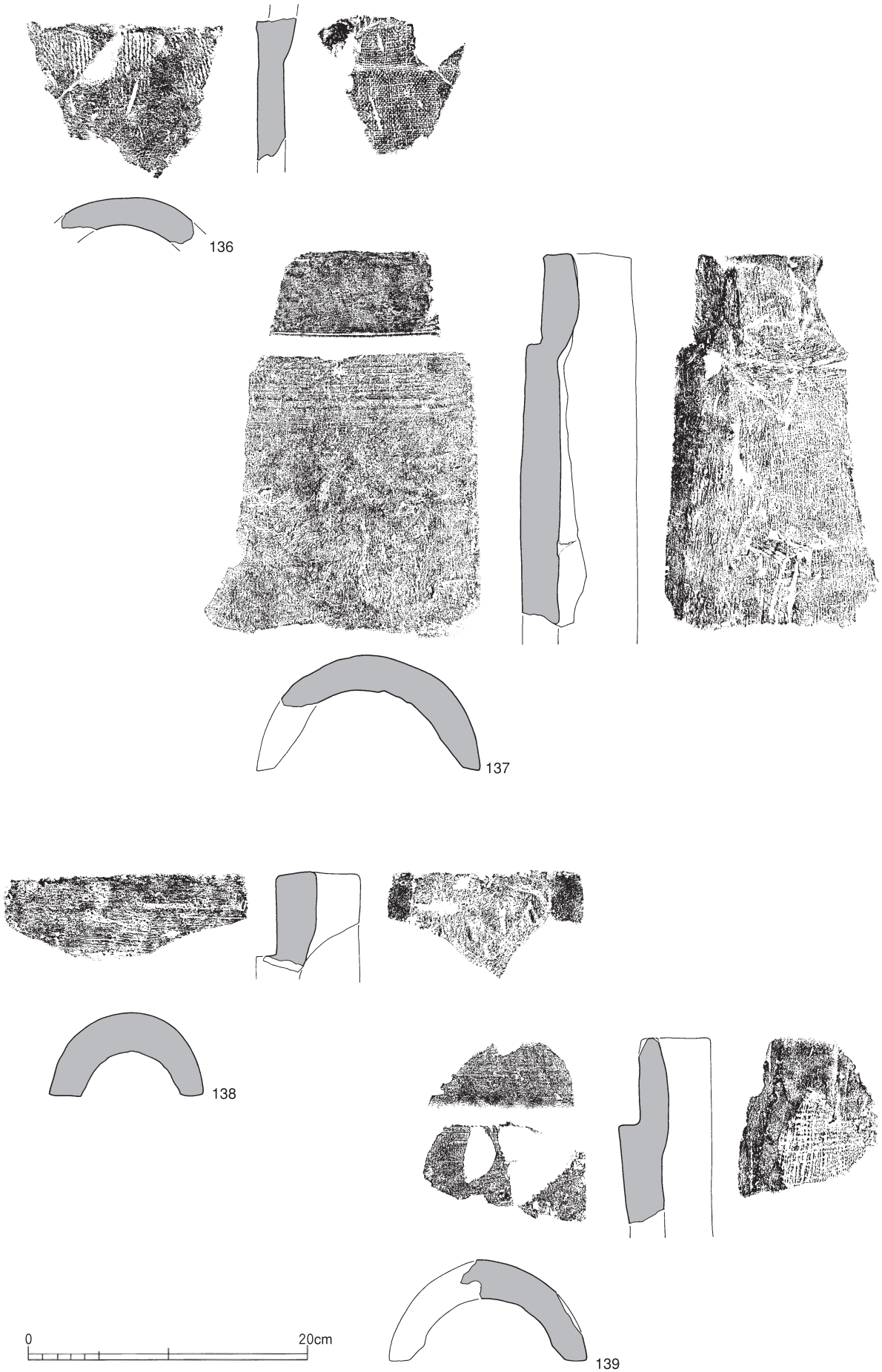
瓦集積　播磨国府系軒平瓦（126）



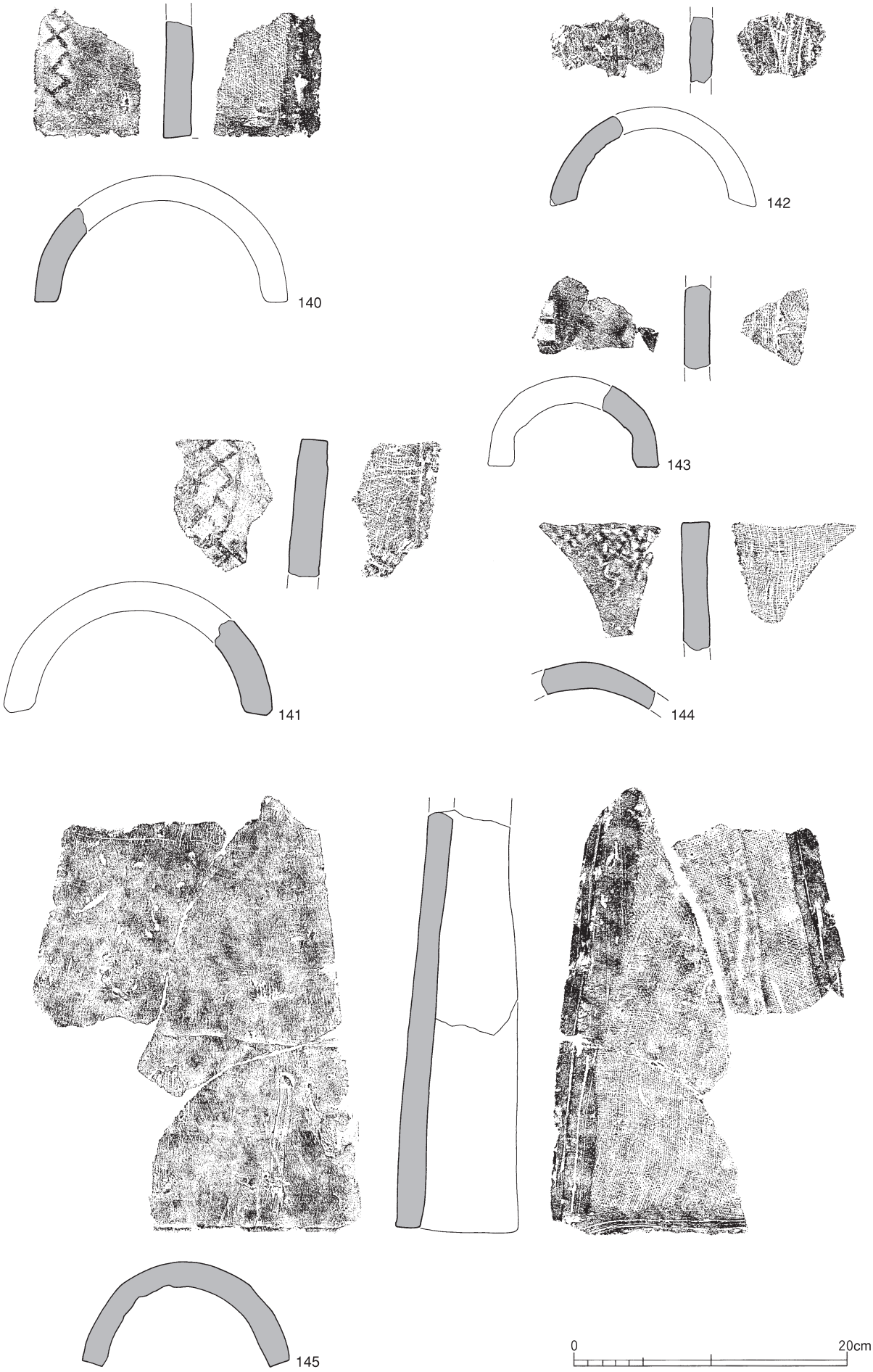
瓦集積　丸瓦①（127～129）G1類



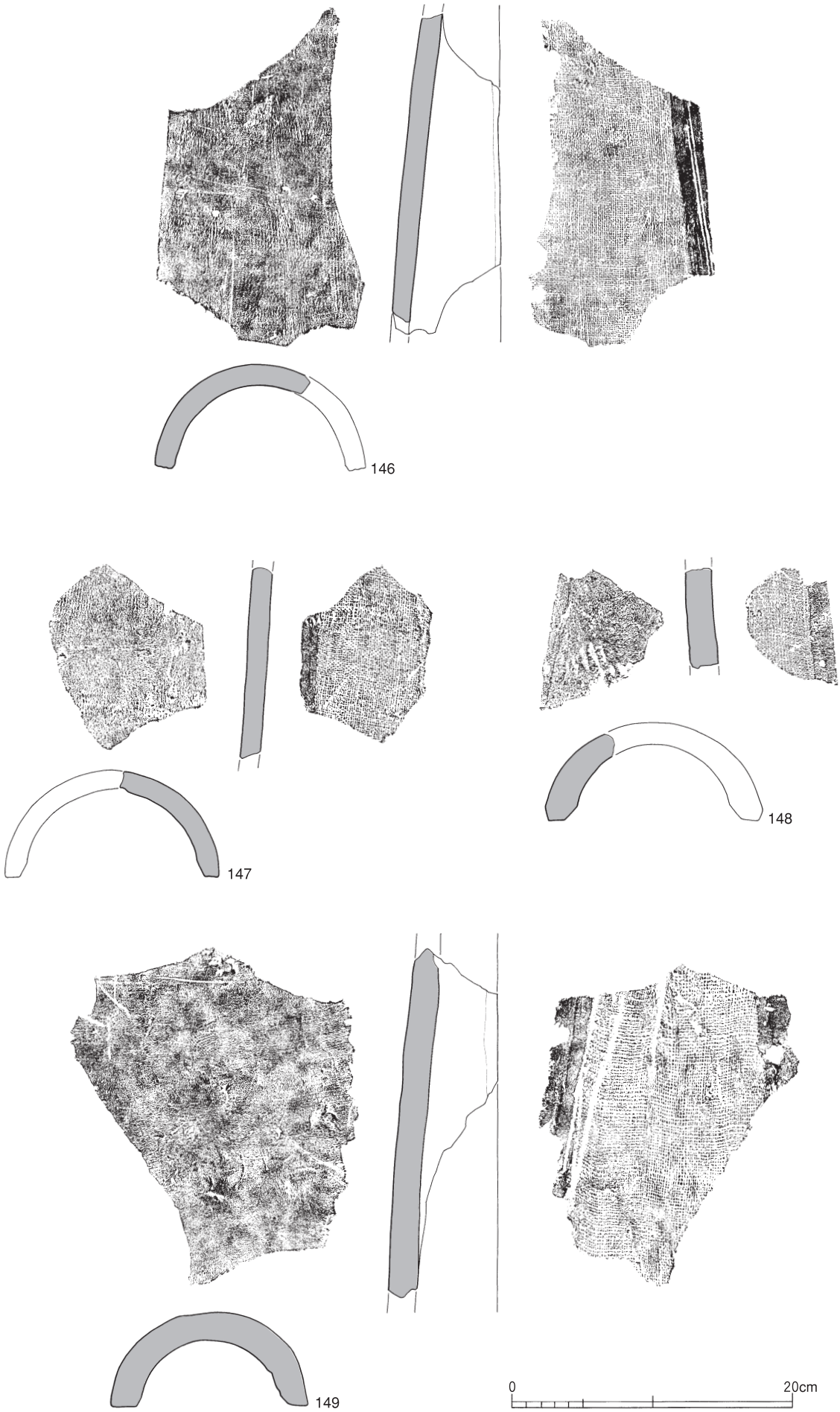
瓦集積　丸瓦②（130～135）G2・T1類



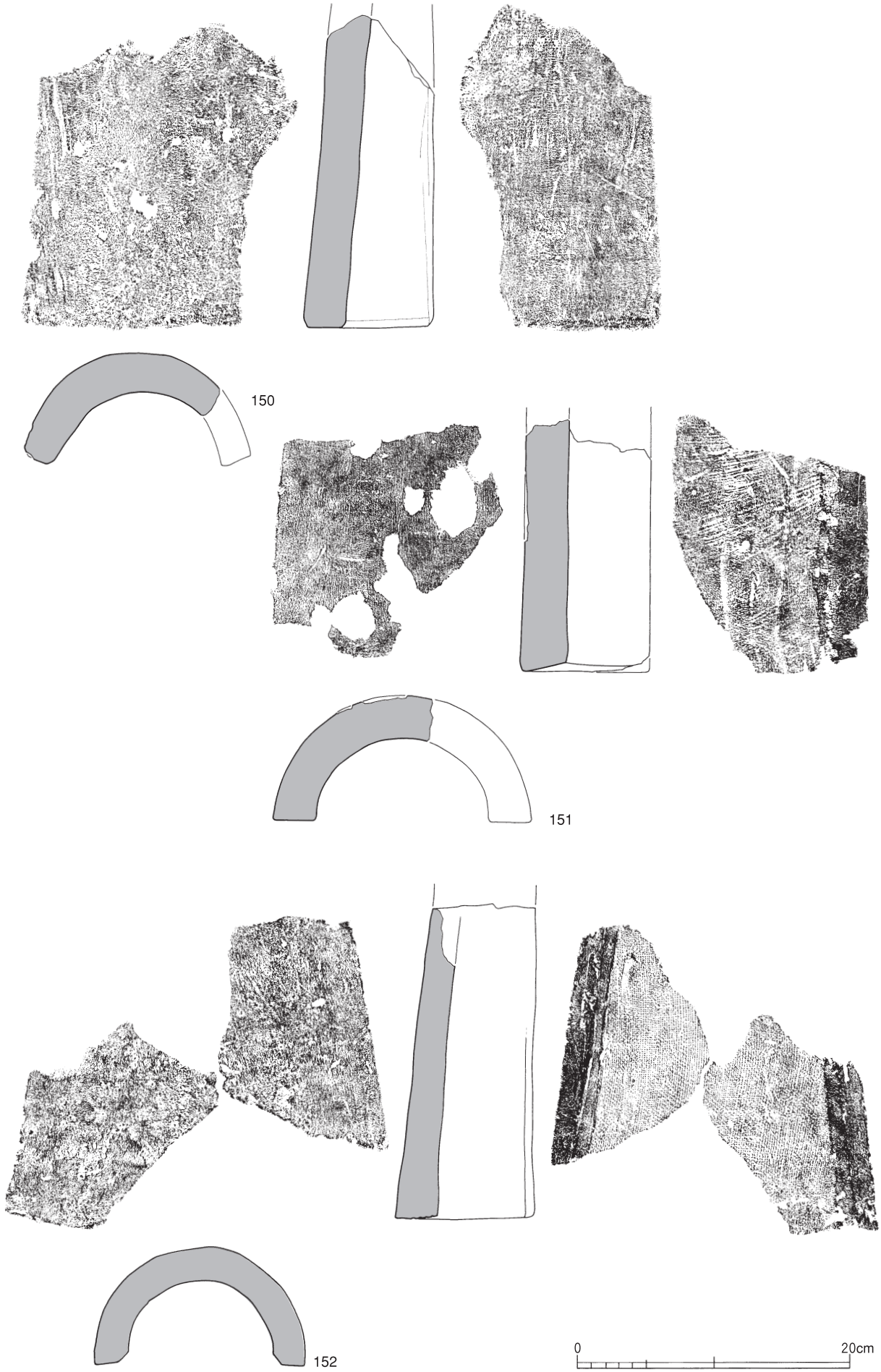
瓦集積　丸瓦③（136～139）T1・T2類



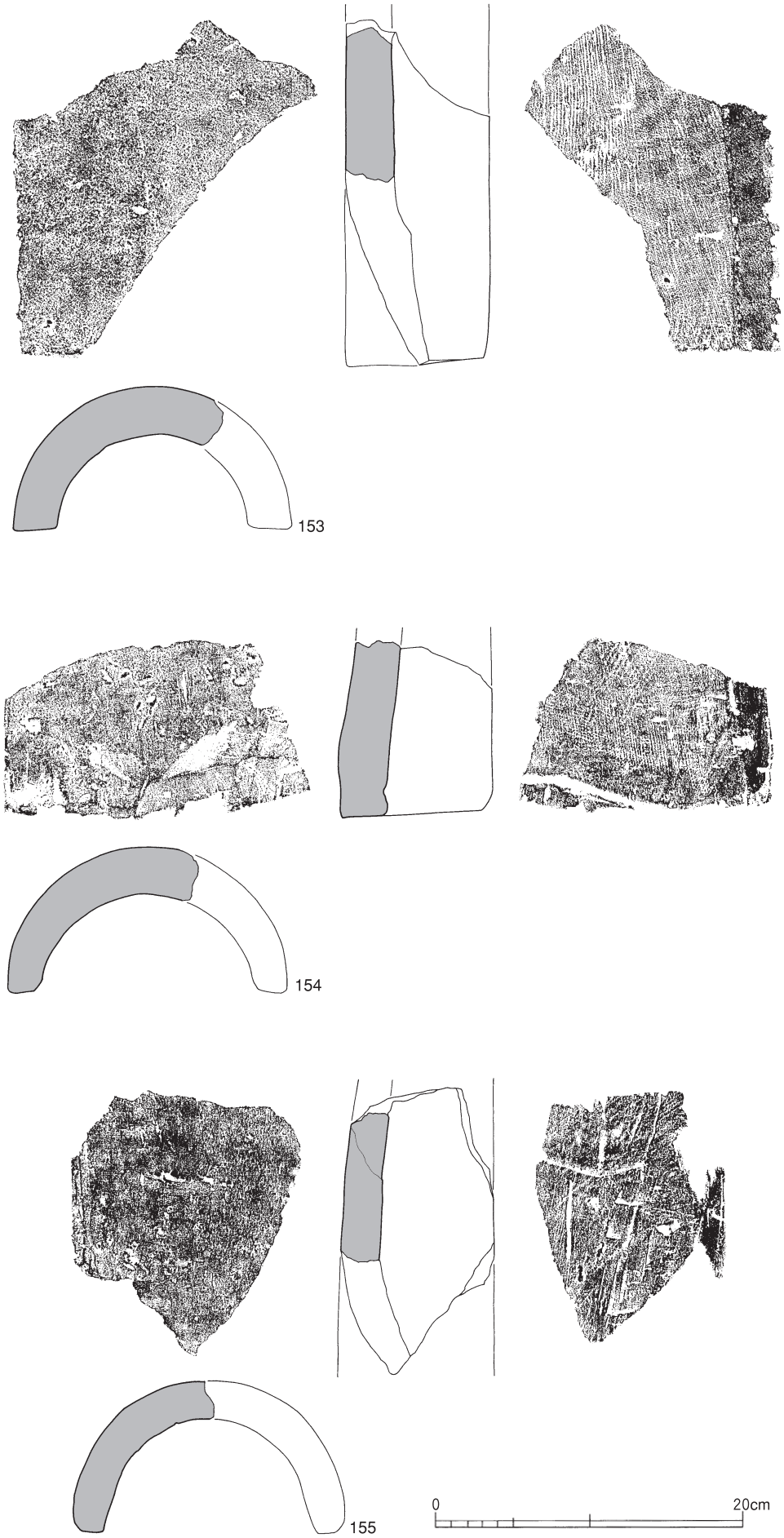
瓦集積　丸瓦④（140～145）S1・S2・S3類



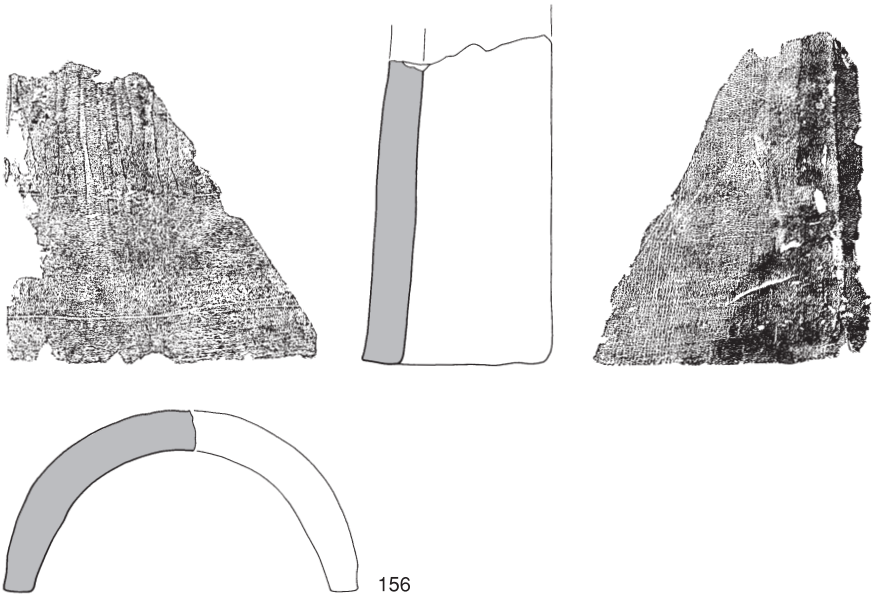
瓦集積　丸瓦⑤（146～149）S3・S4・S5類



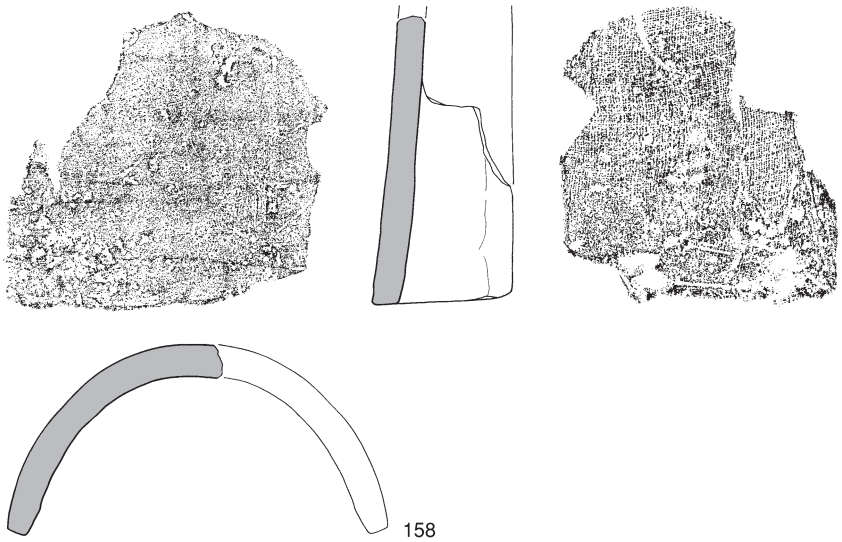
瓦集積　丸瓦⑥（150～152）S6類

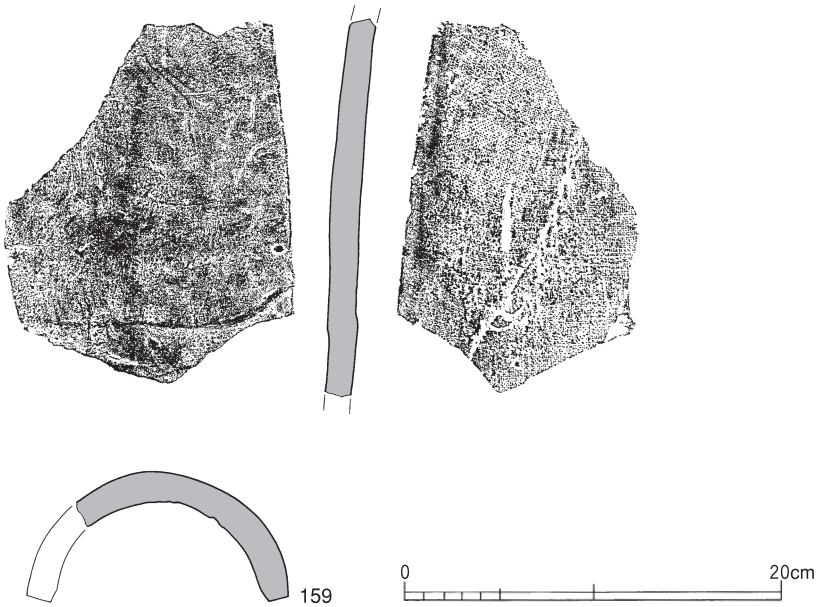


瓦集積　丸瓦⑦（153～155）S6類

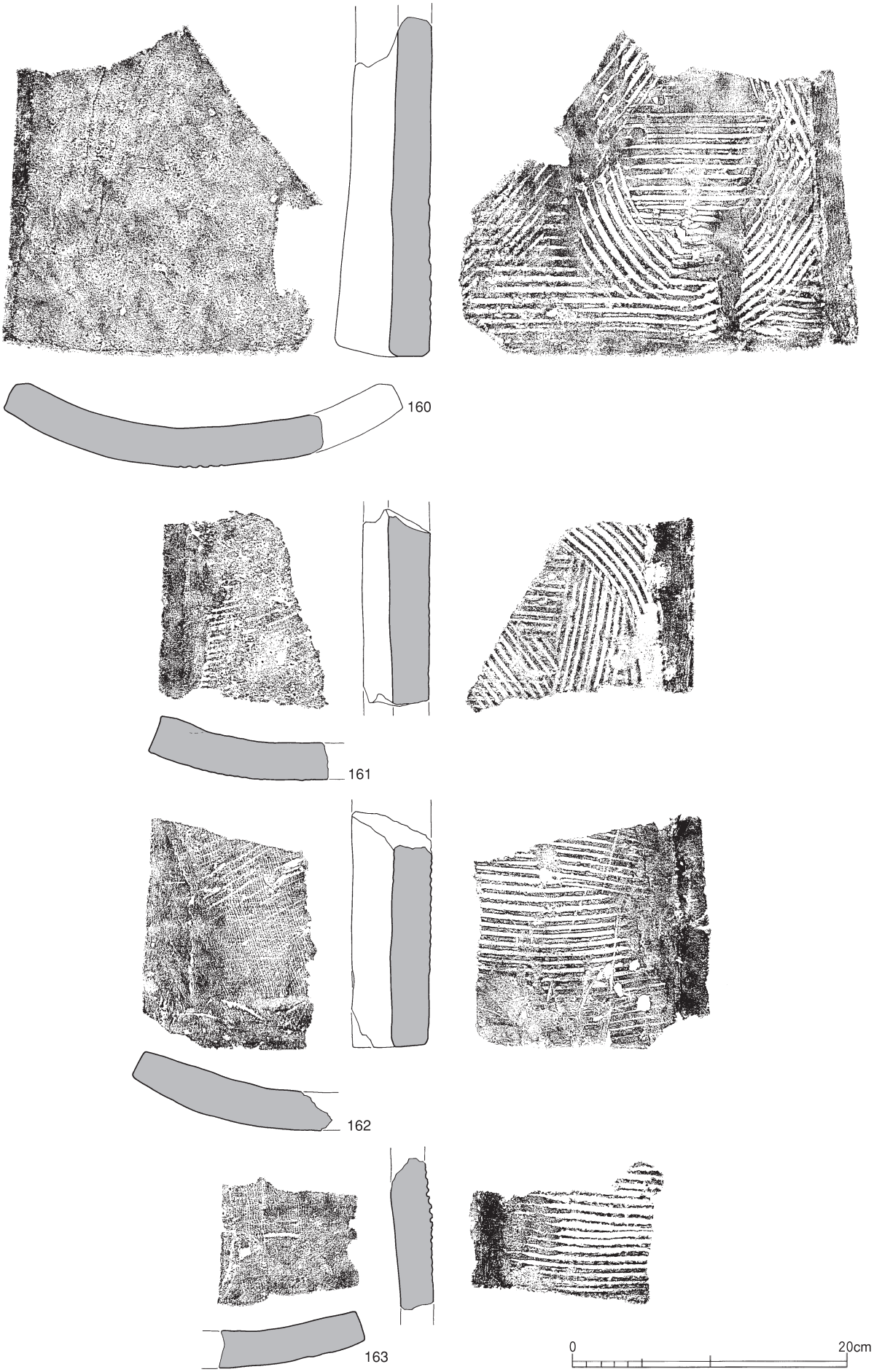


瓦集積　丸瓦⑧（156・157）S6類

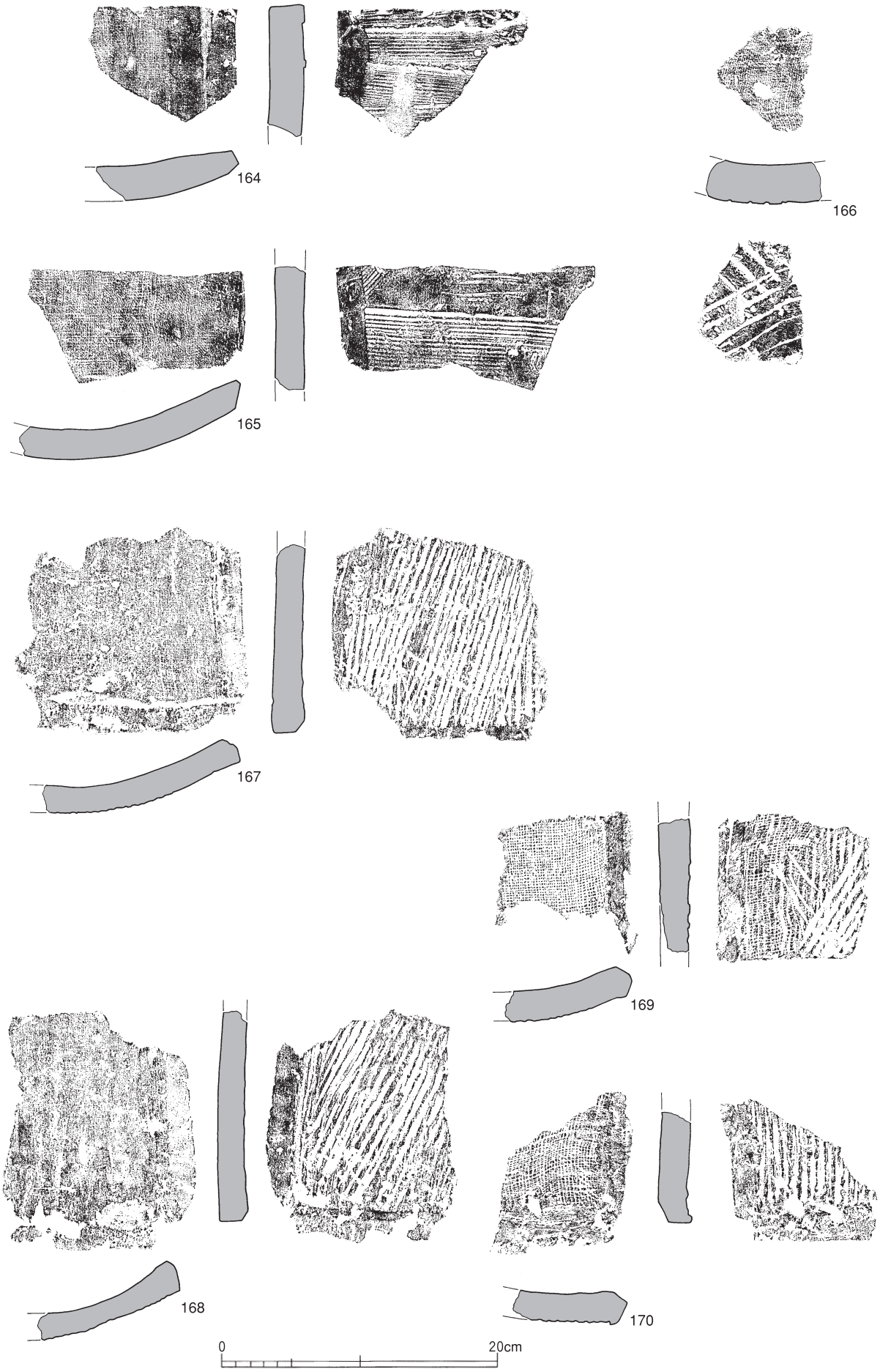




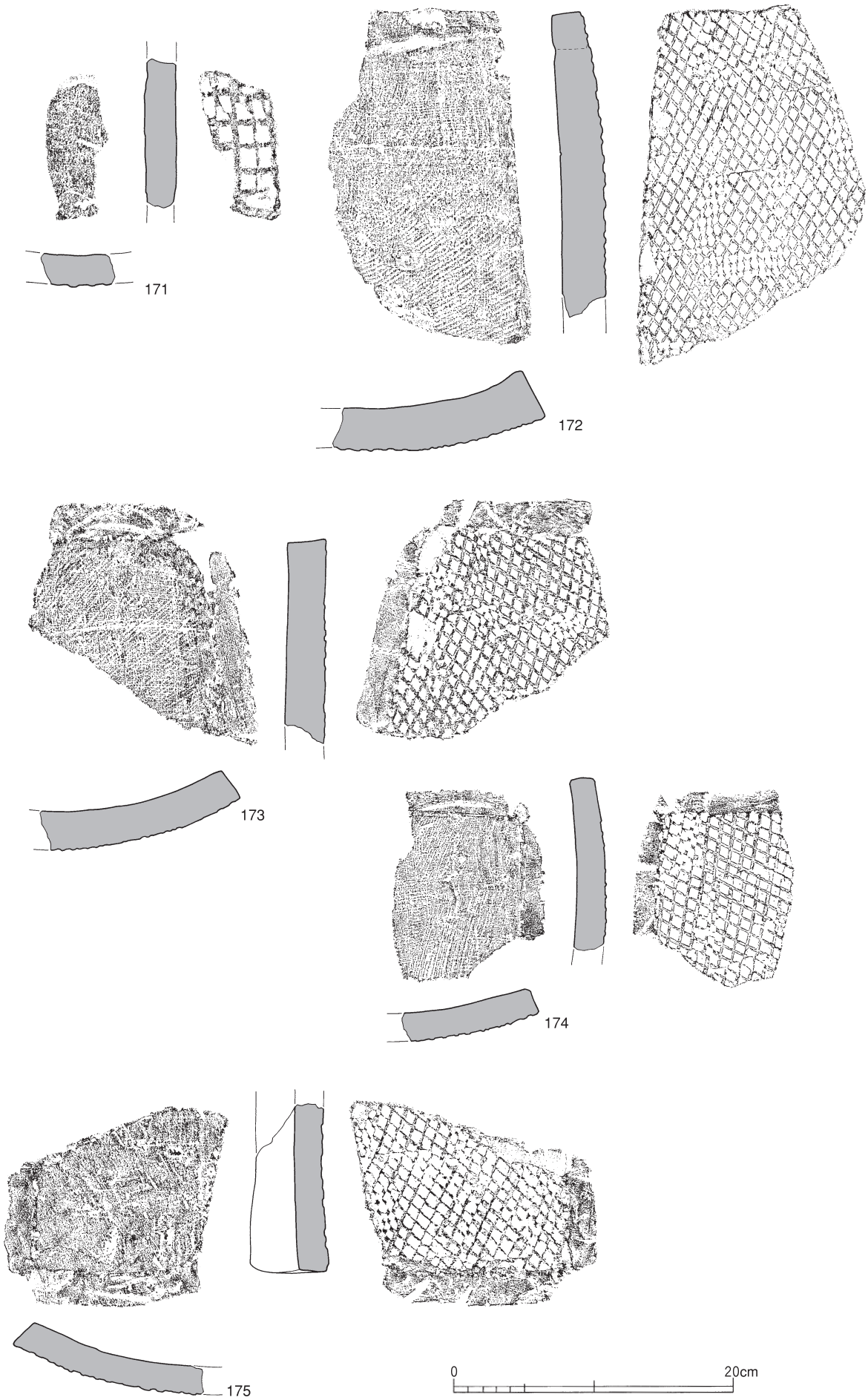
瓦集積　丸瓦⑨（158・159）S6類



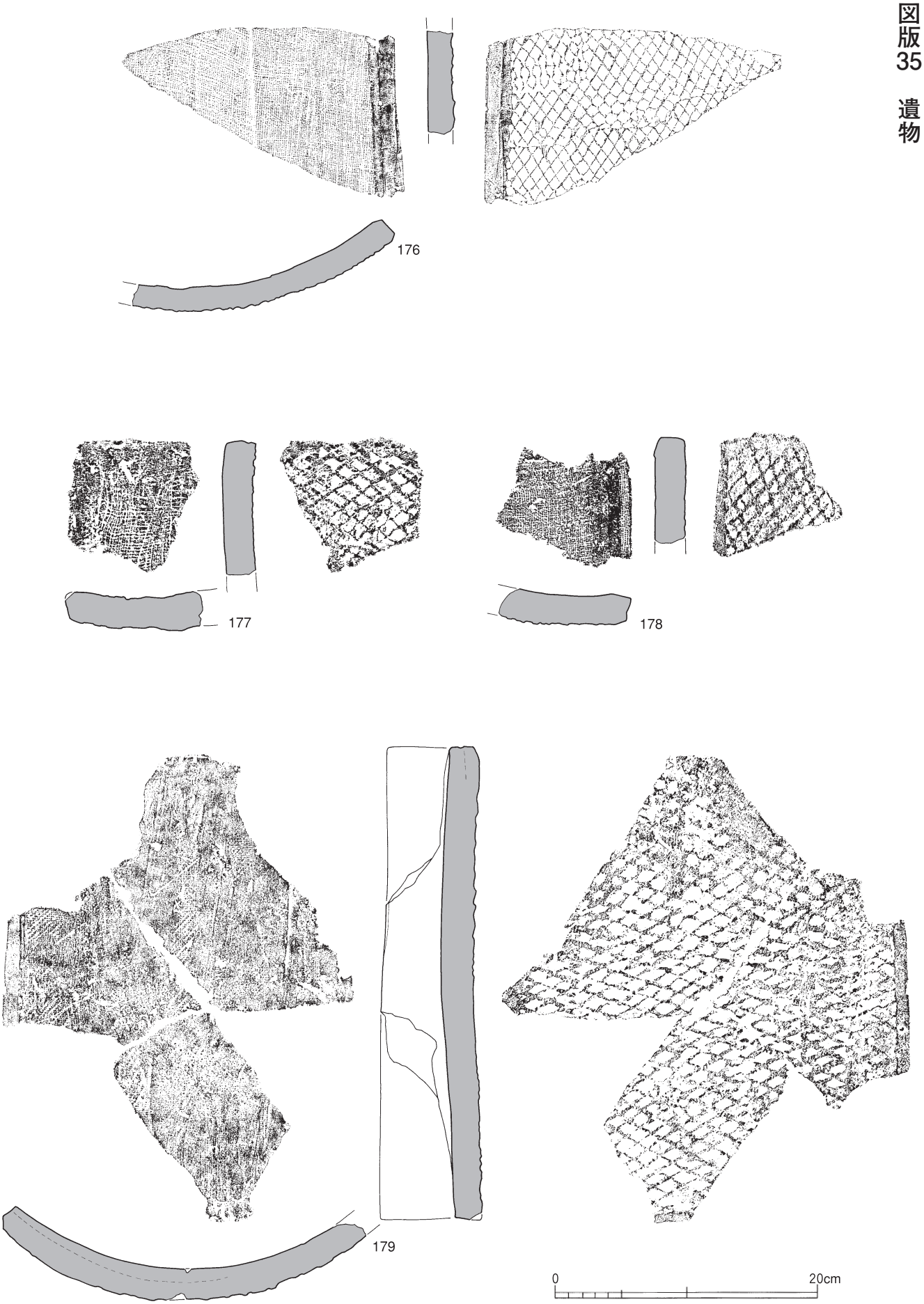
瓦集積　平瓦①（160～163）J1類



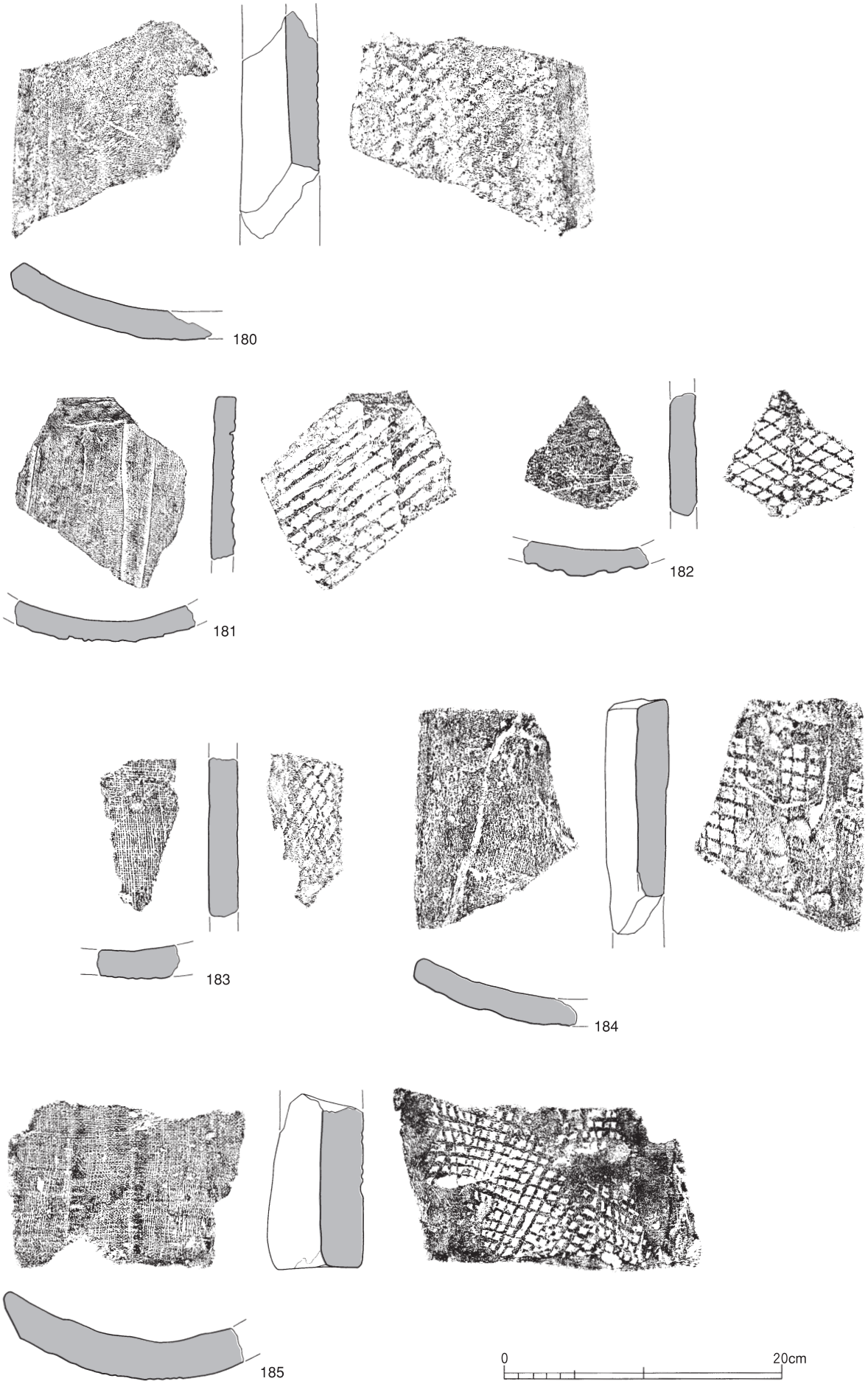
瓦集積　平瓦②（164～170）J2・J3・L1・L2類



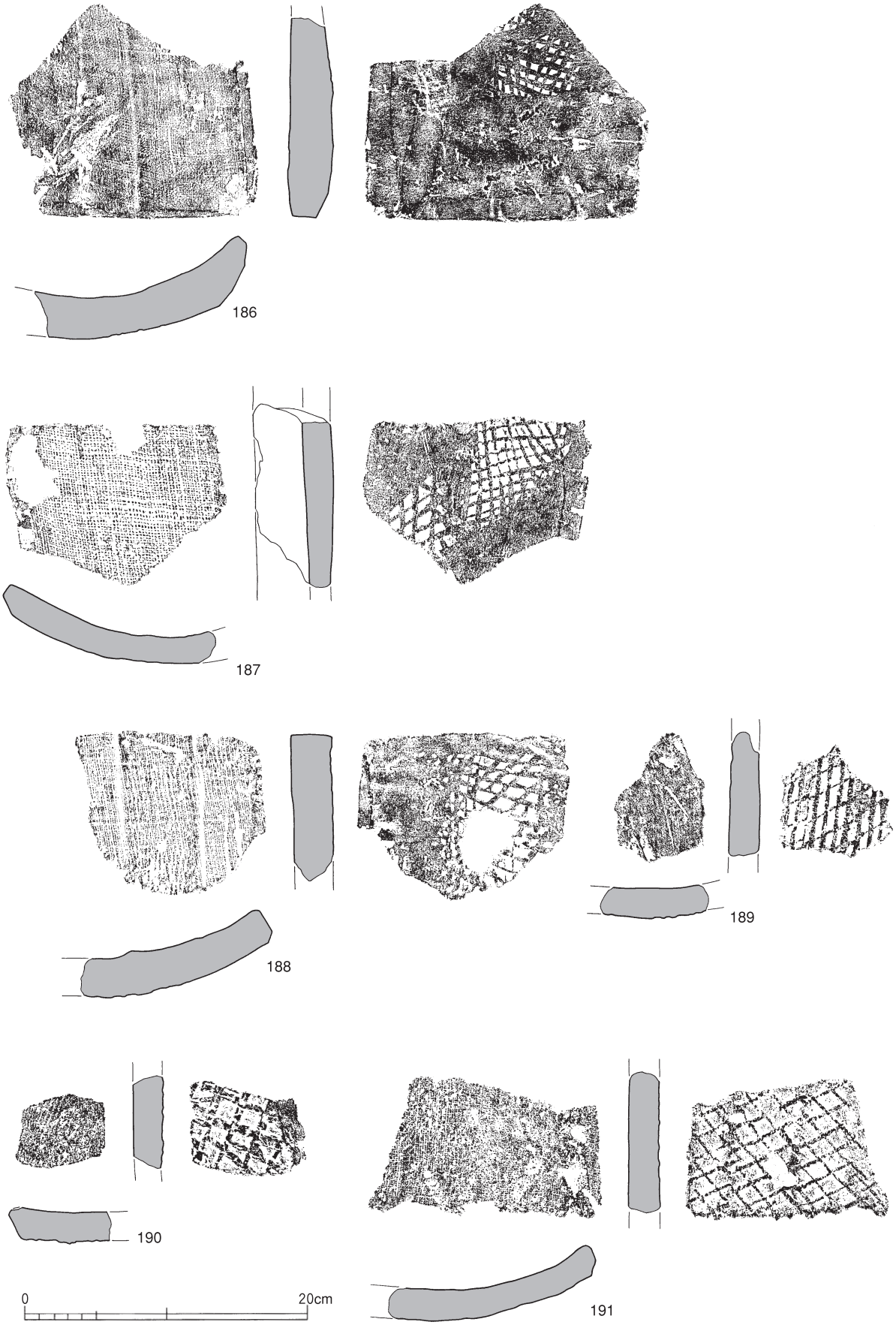
瓦集積　平瓦③（171～175）K1・K2類



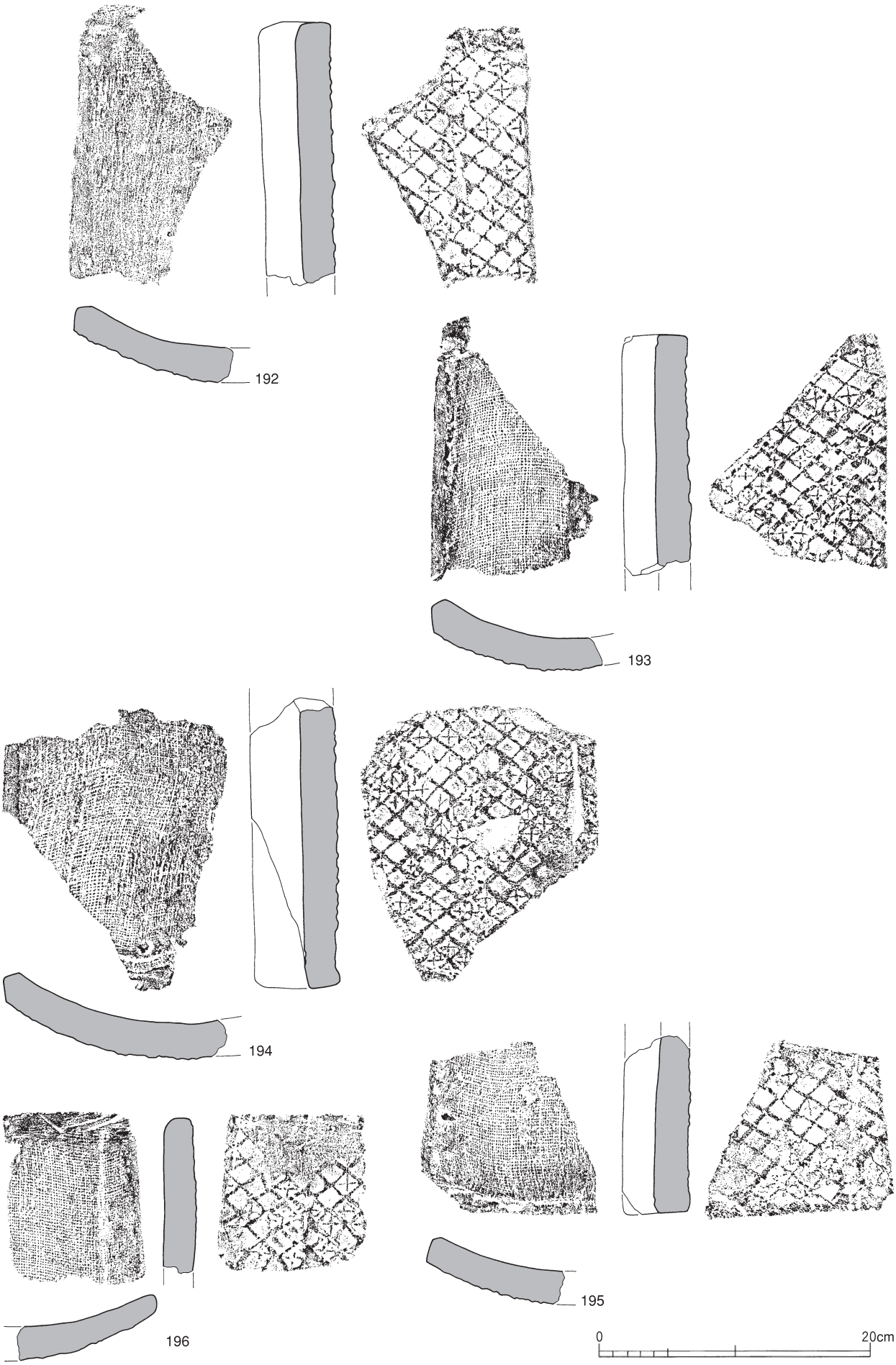
瓦集積　平瓦④（176～179）K2・K3・K4・K5類



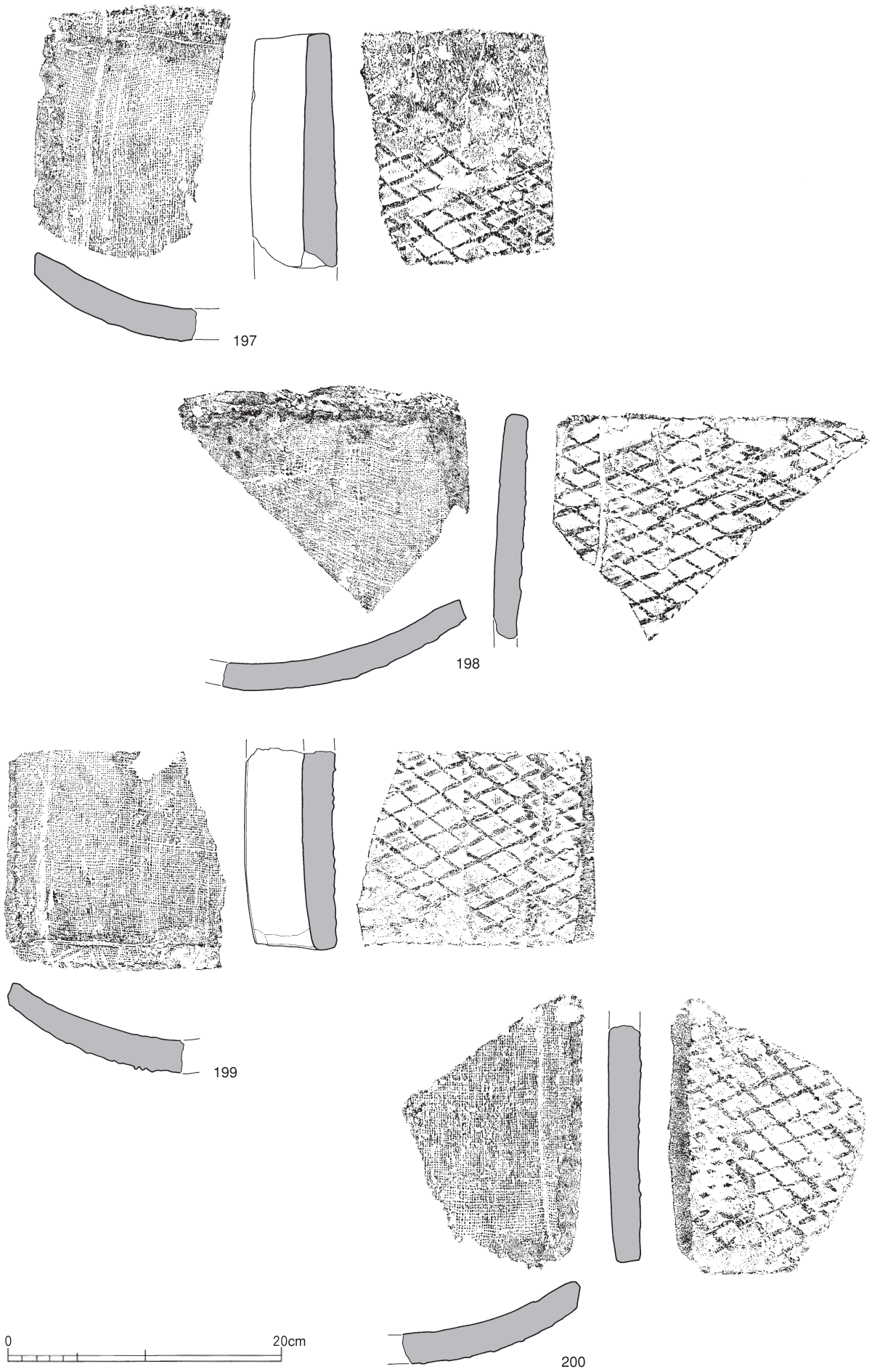
瓦集積　平瓦⑤（180～185）K5・K6・K7・K8・K9類



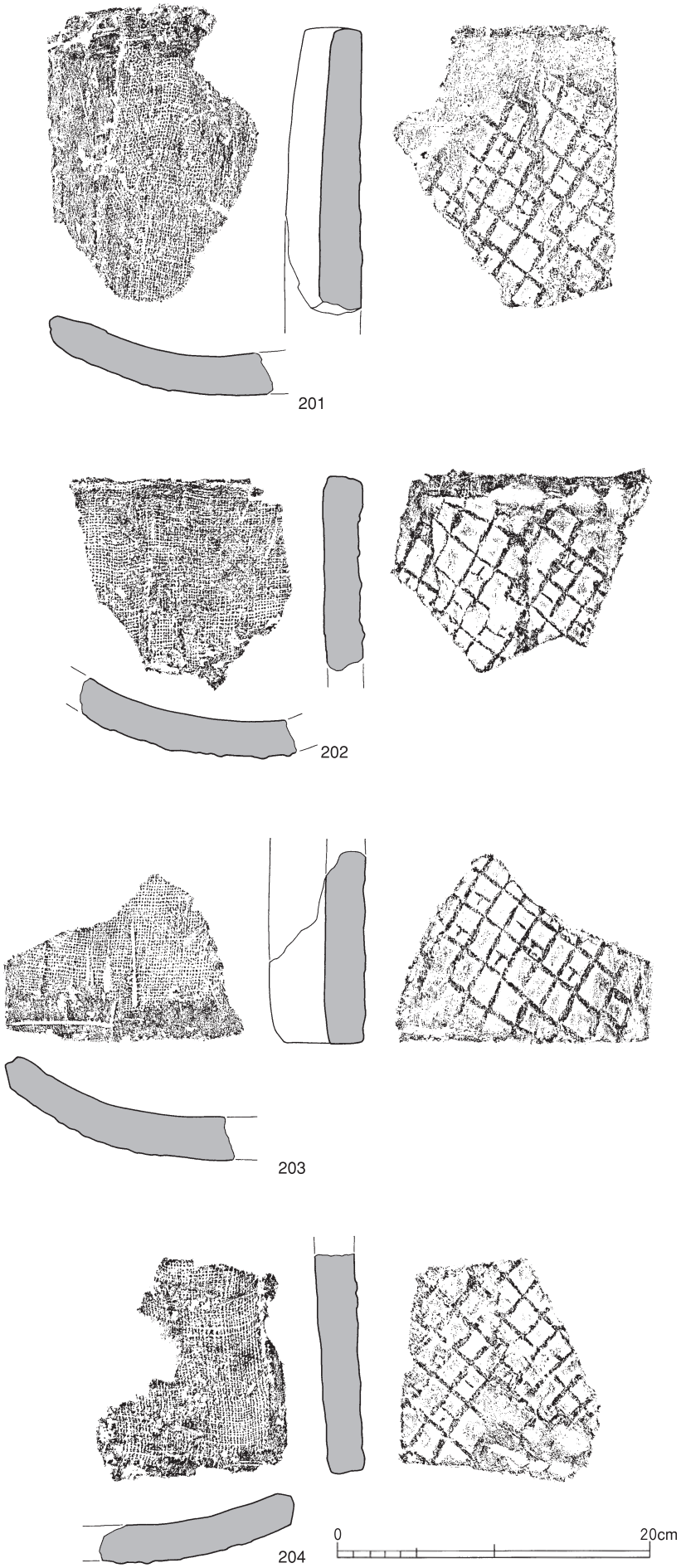
瓦集積　平瓦⑥（186～191）K9・K10・K11・K12類



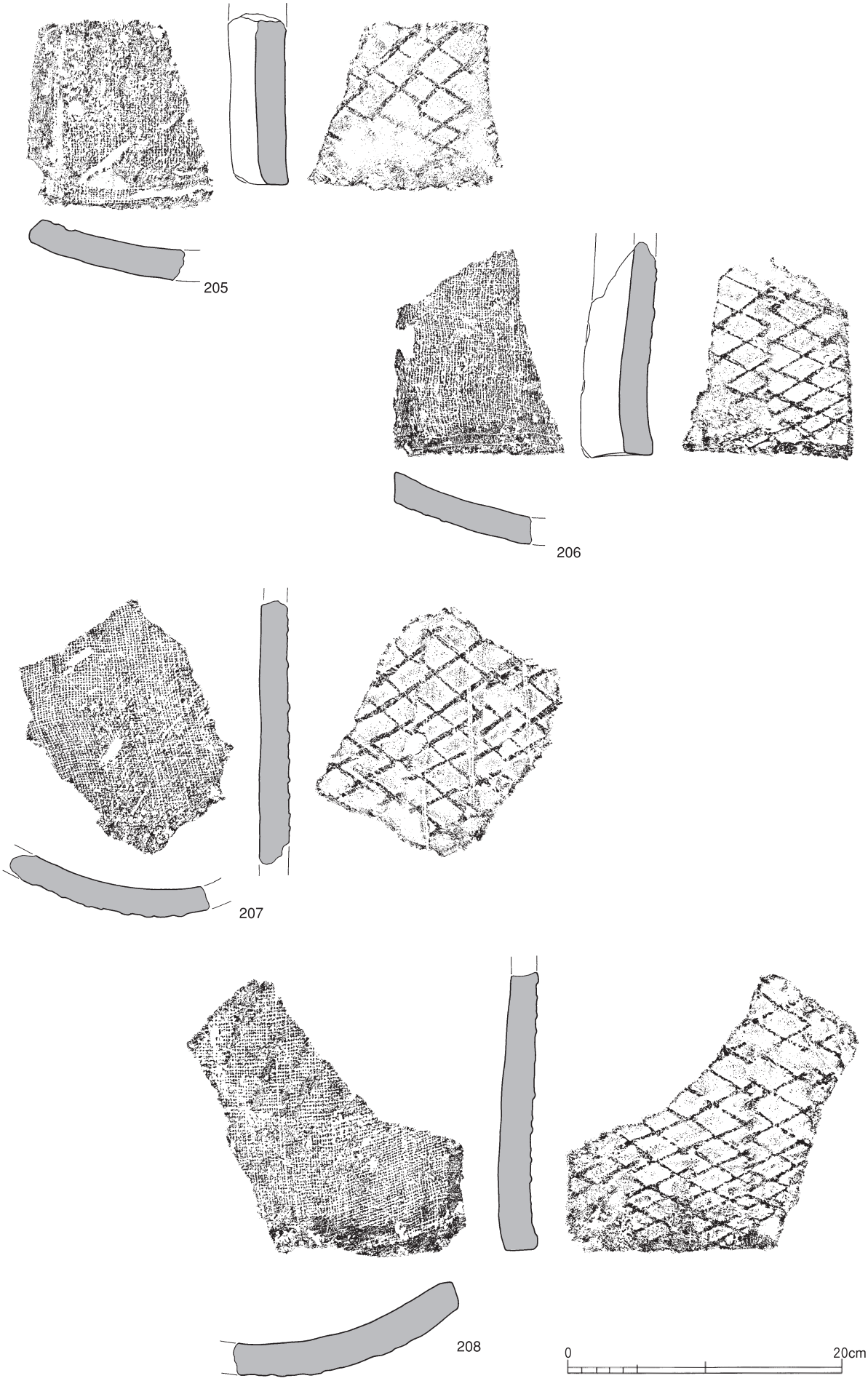
瓦集積　平瓦⑦（192～196）K13類



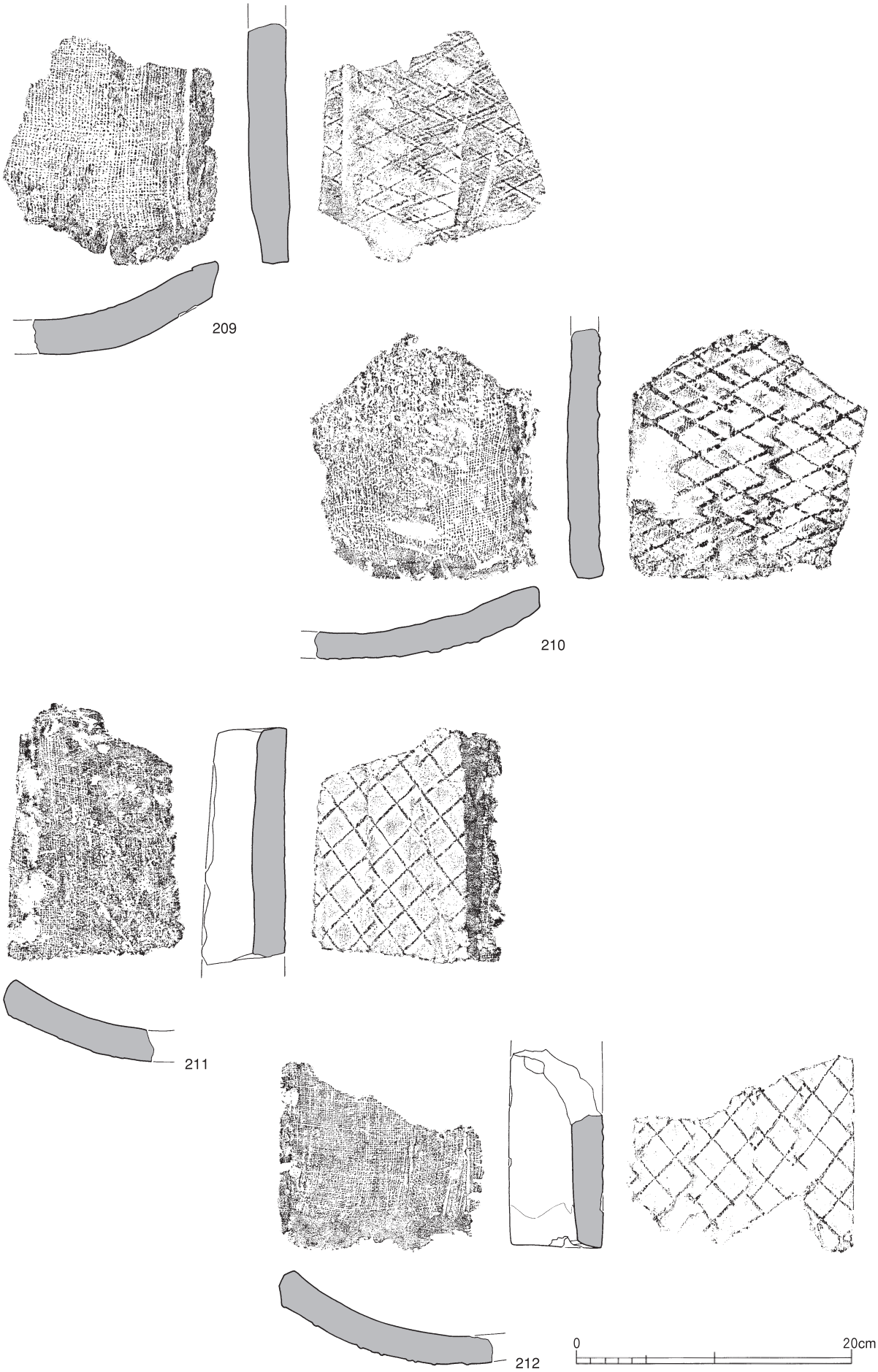
瓦集積　平瓦⑧（197～200）K14類



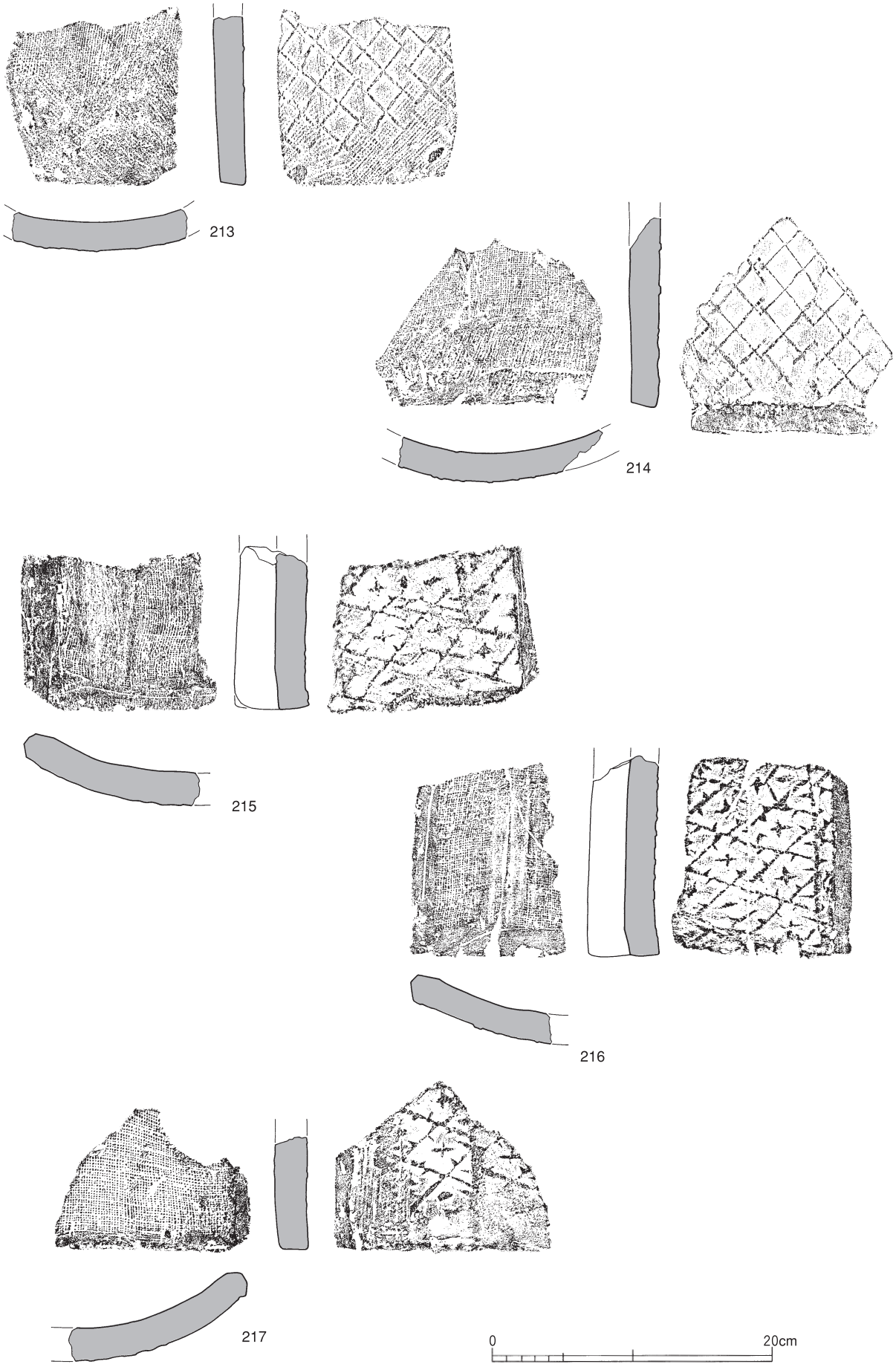
瓦集積　平瓦⑨（201～204）K15類



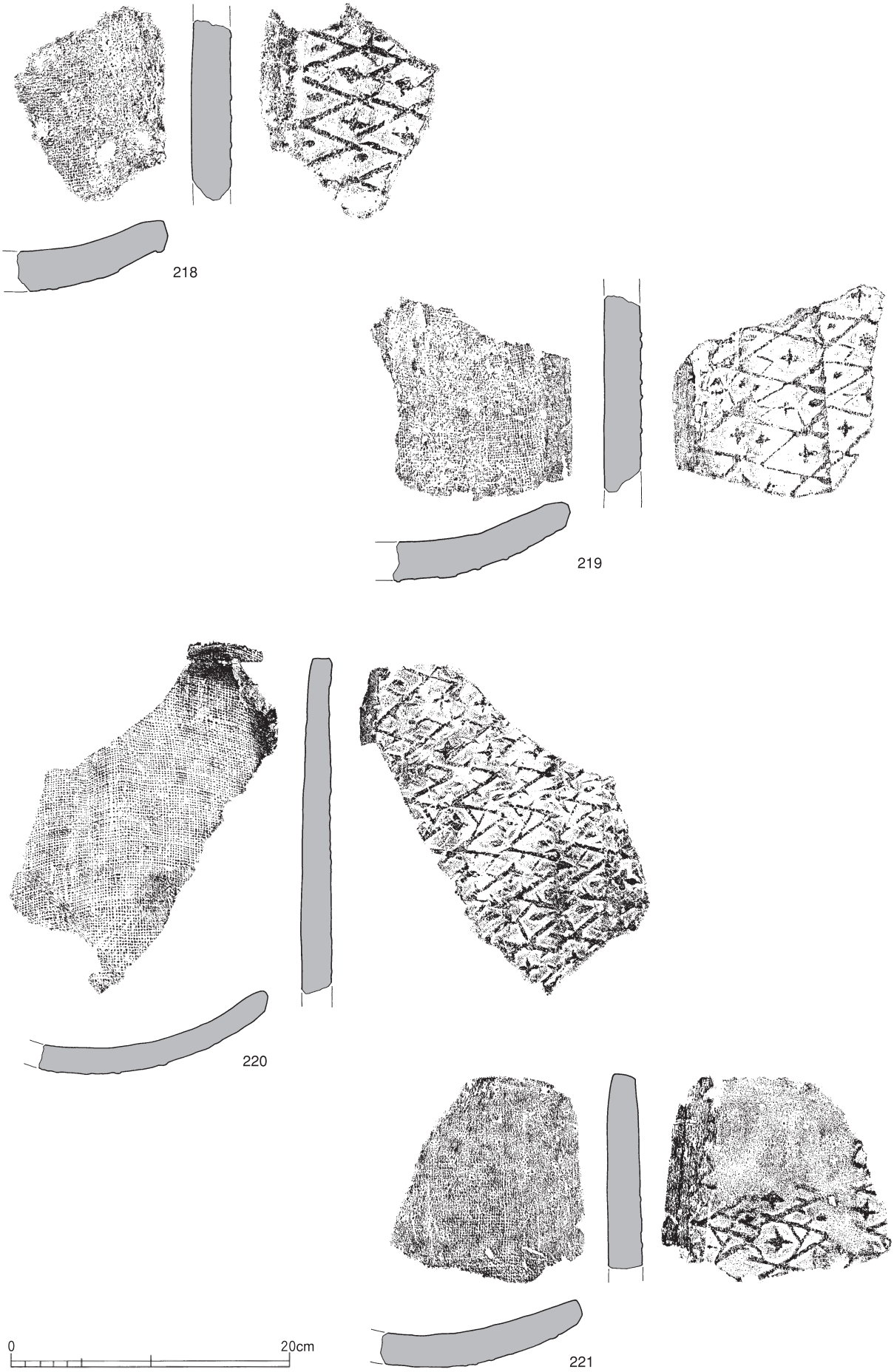
瓦集積　平瓦⑩（205～208）K16類



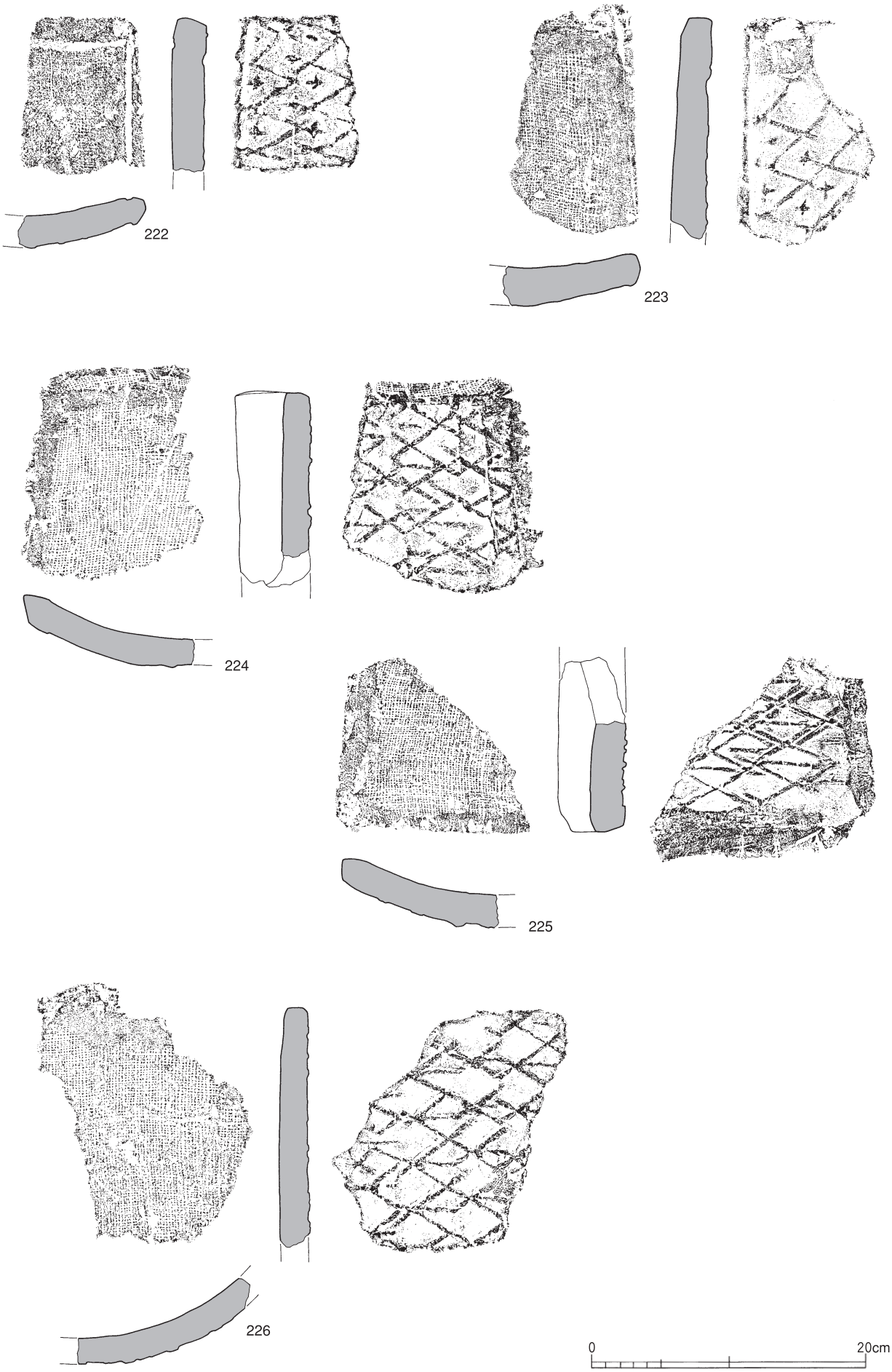
瓦集積　平瓦⑪（209～212）K16・K17類



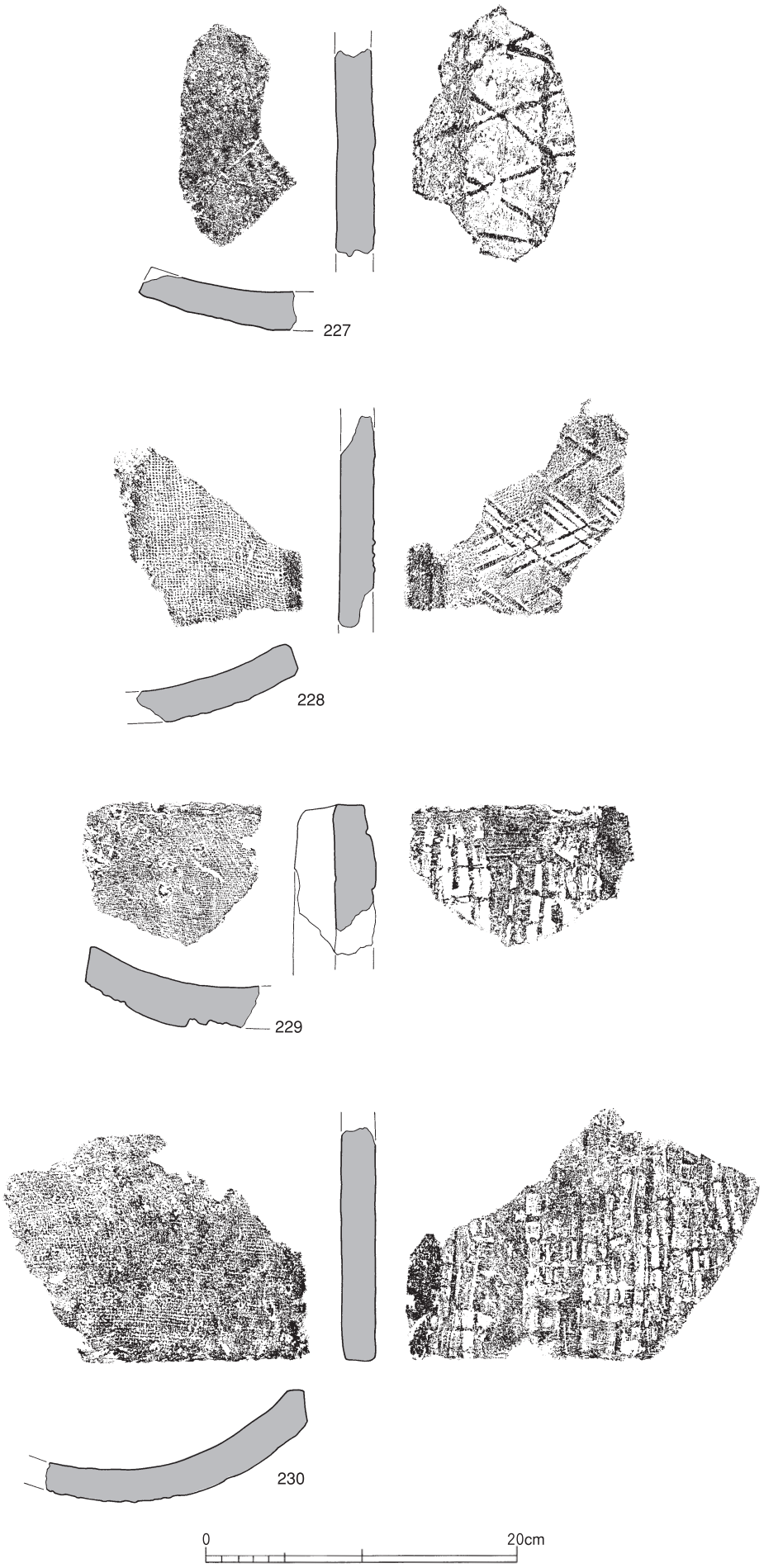
瓦集積　平瓦⑫（213～217）K17・K18類



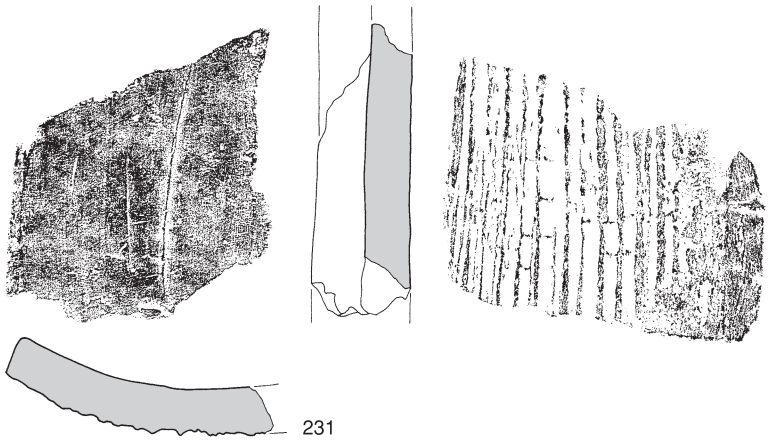
瓦集積　平瓦⑬（218～221）K18・K19類

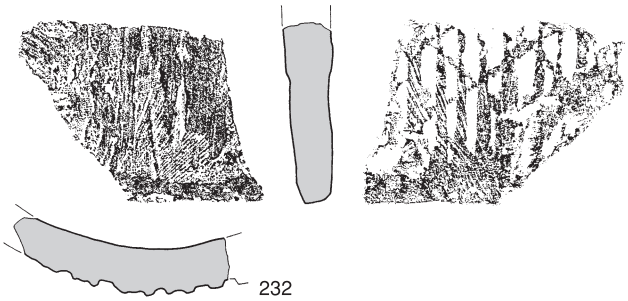


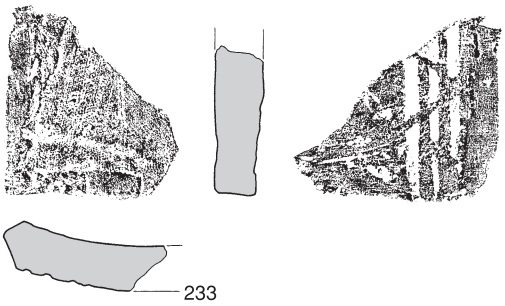
瓦集積　平瓦⑭（222～226）K20・K21類

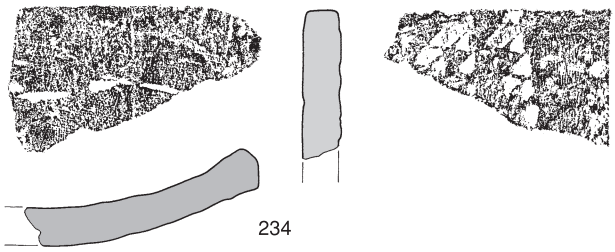


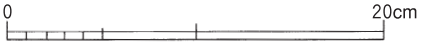
瓦集積　平瓦⑮（227～230）K22・K23・K24類



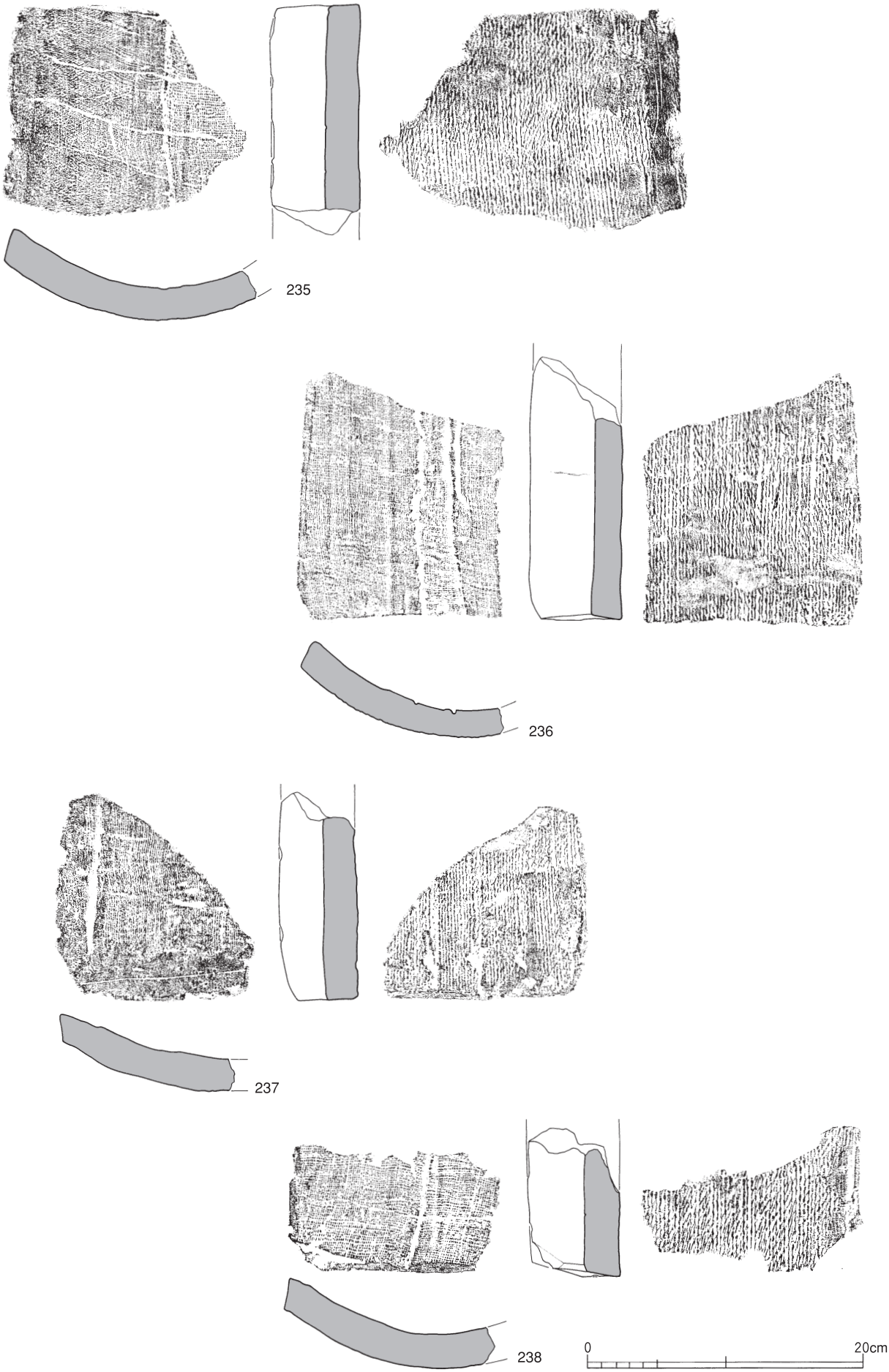




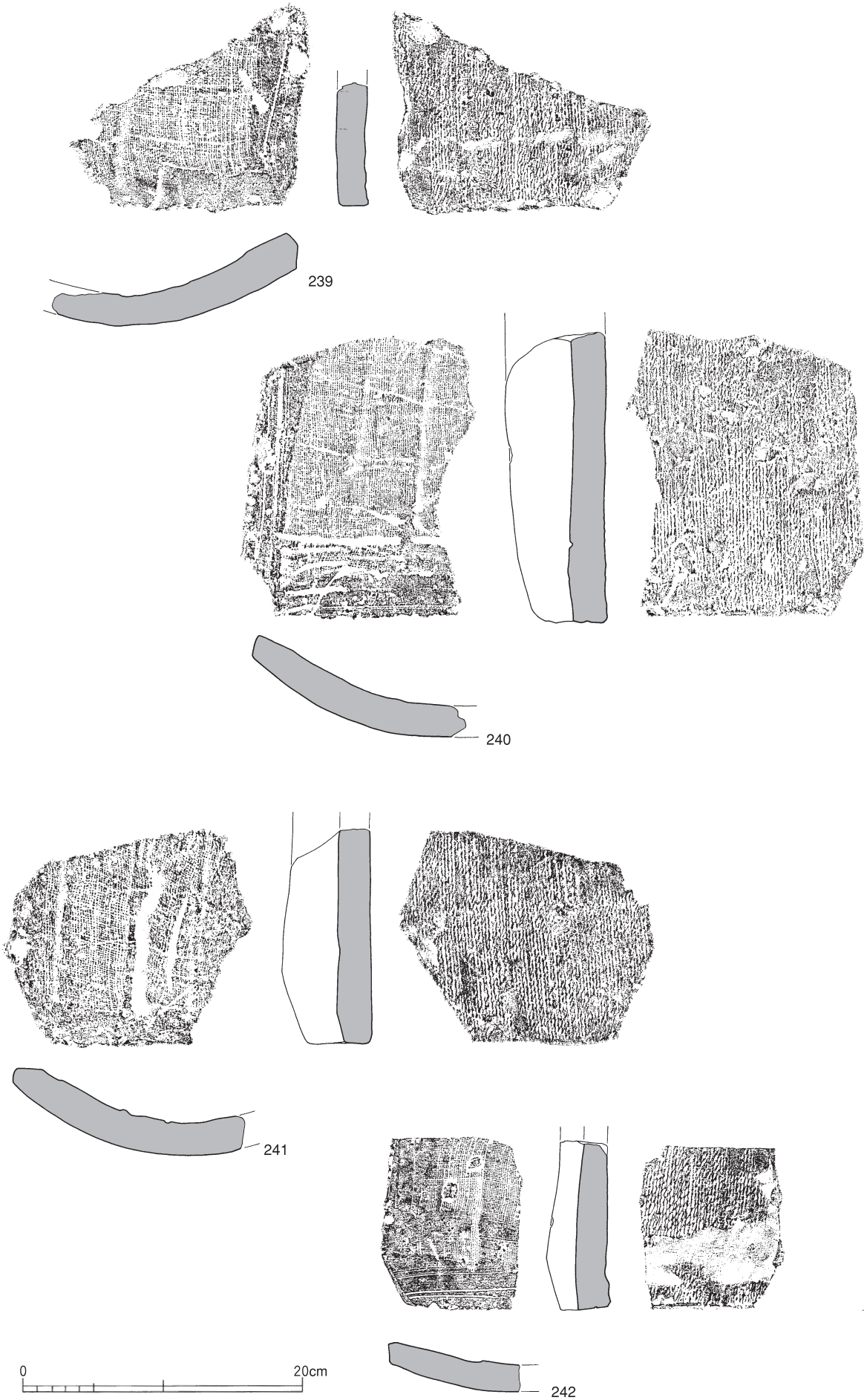




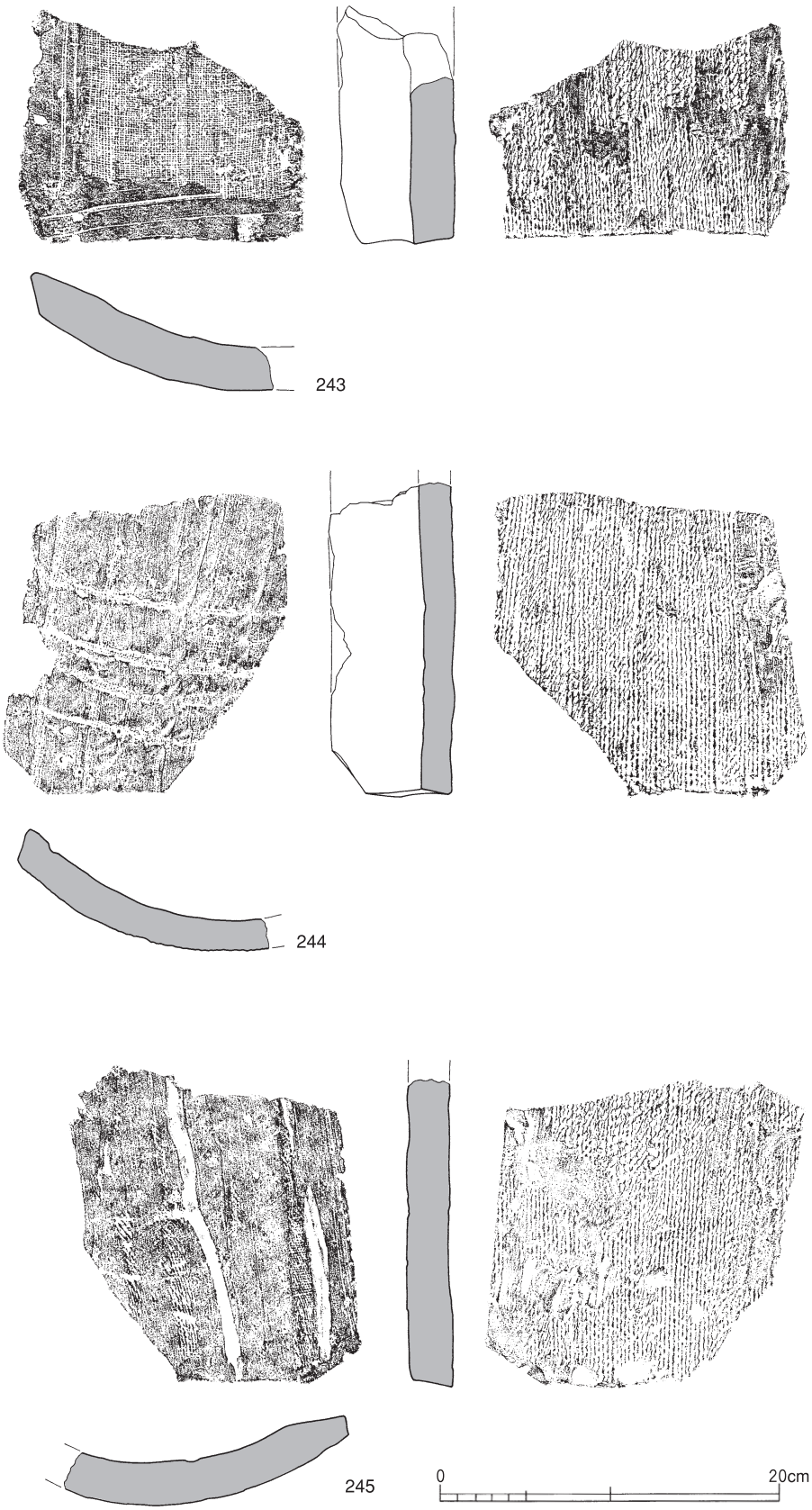
瓦集積　平瓦⑯（231～234）K24・K25・K26類



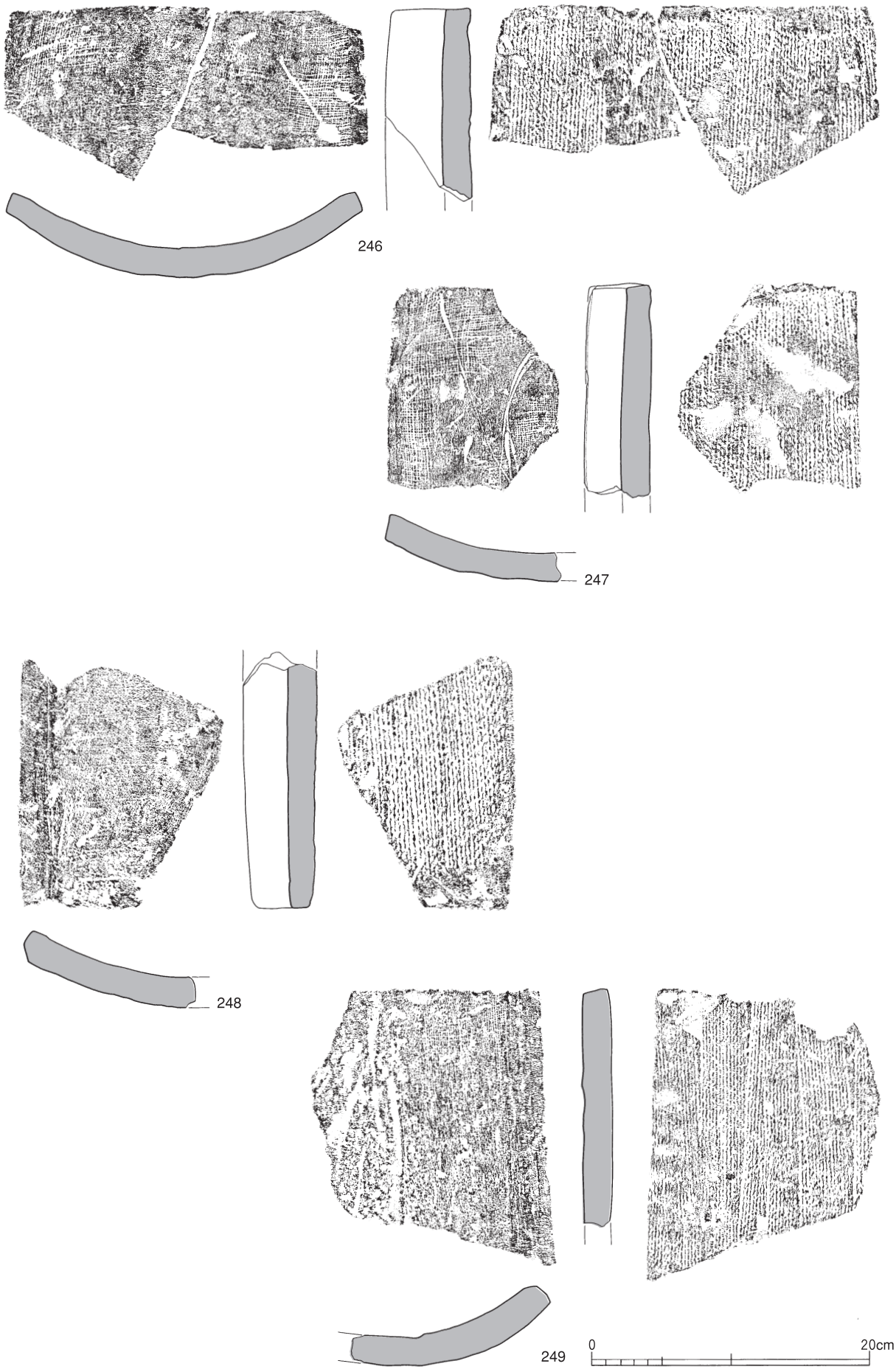
瓦集積　平瓦⑰（235～238）N1類



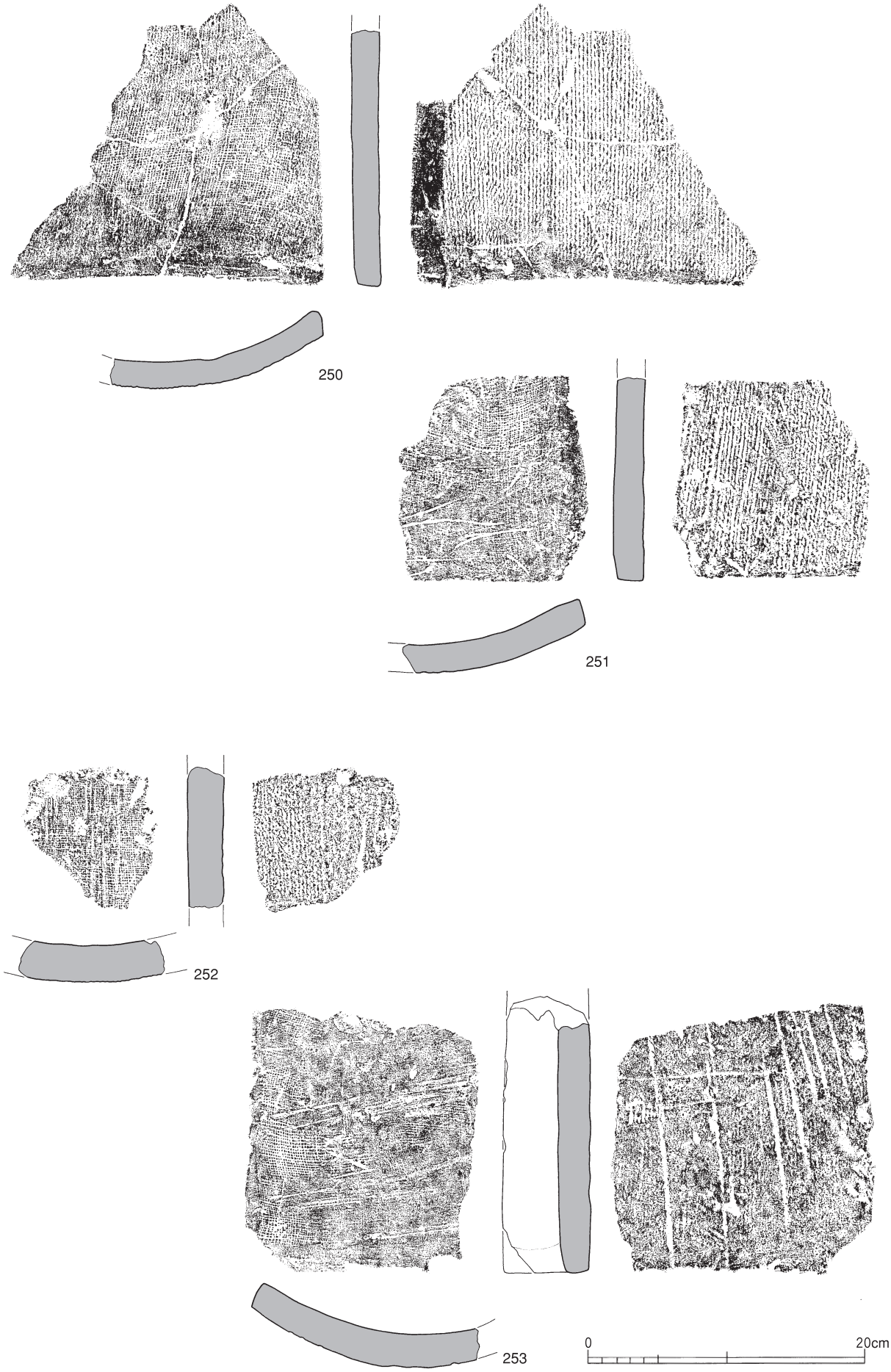
瓦集積　平瓦⑱（239～242）N1・N2類



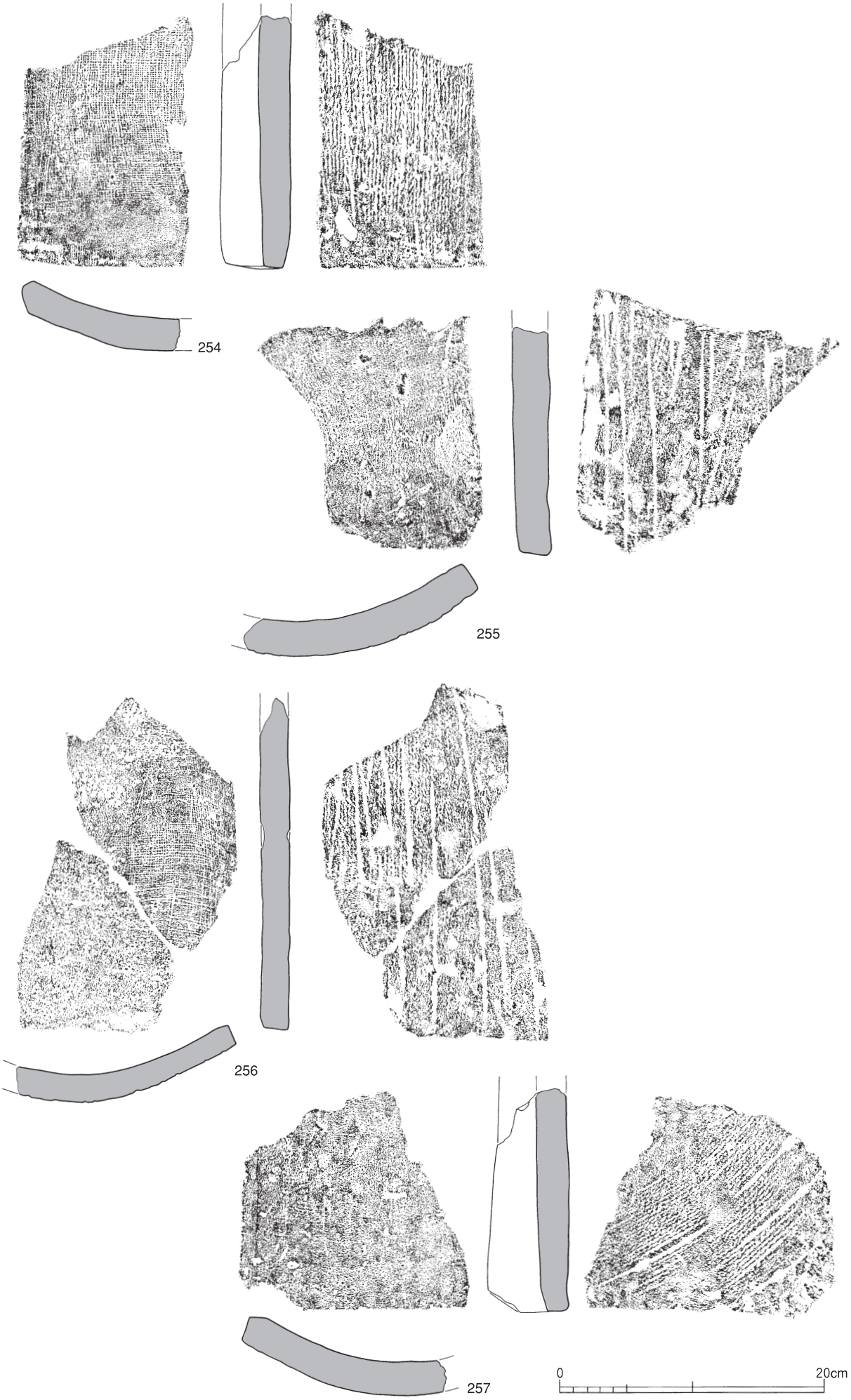
瓦集積　平瓦⑲（243～245）N2類



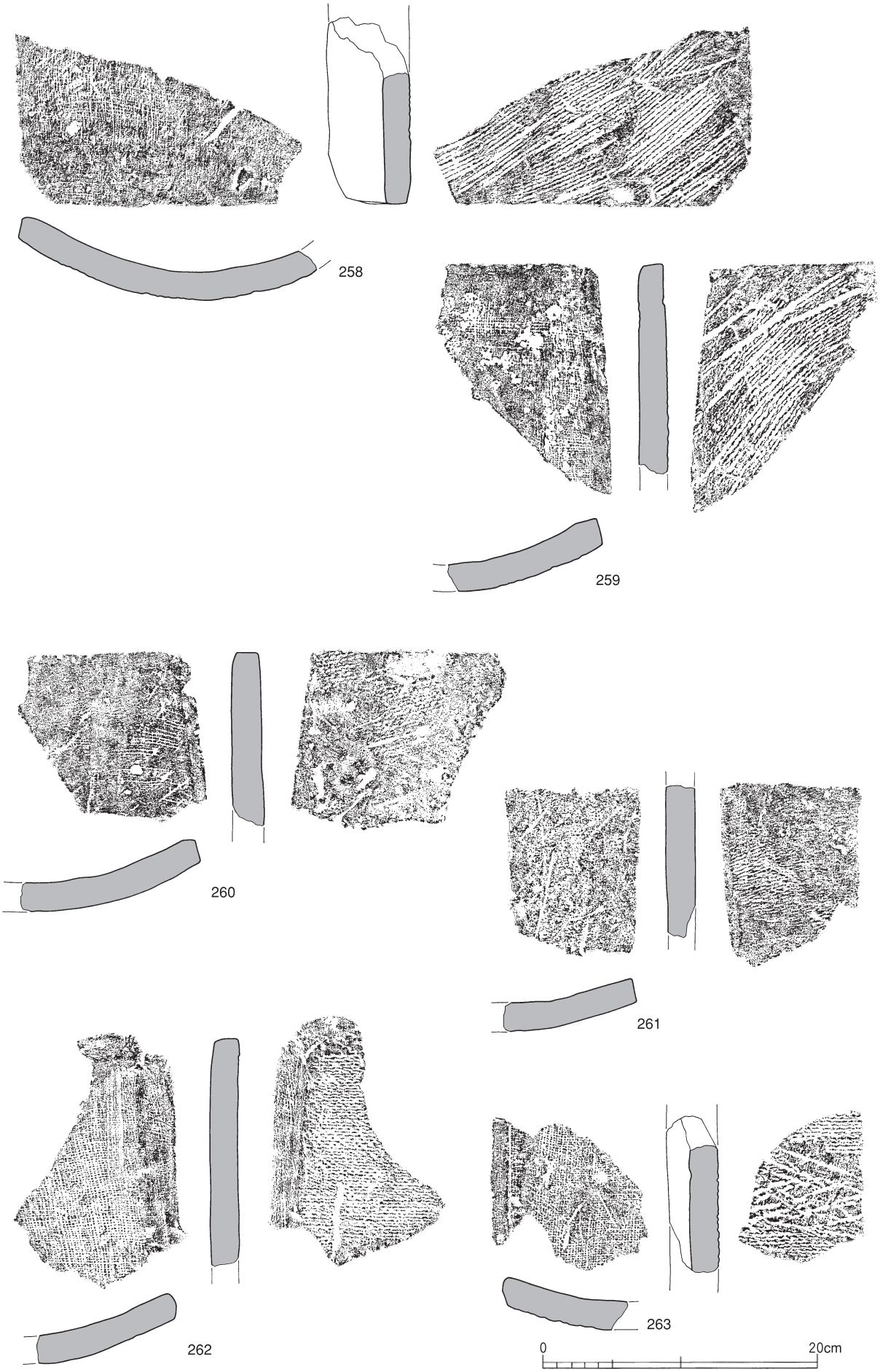
瓦集積　平瓦⑳（246～249）N3類



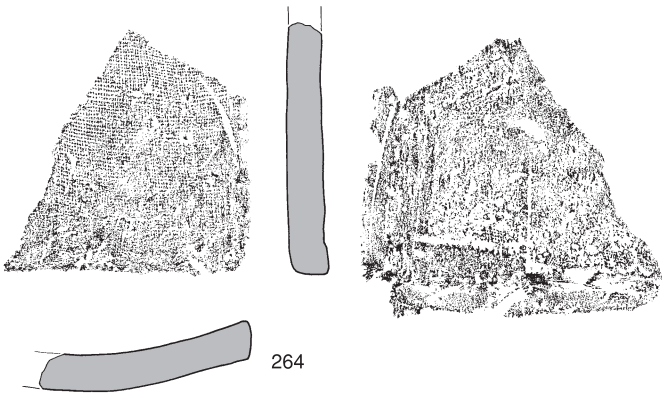
瓦集積　平瓦㉑（250～253）N3・N4類

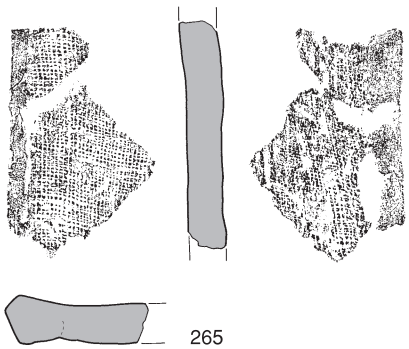


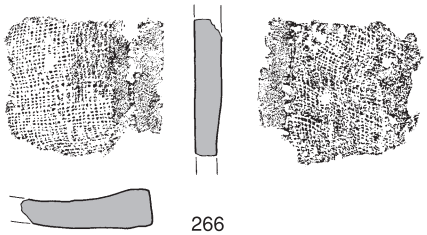
瓦集積　平瓦㉒（254～257）N4・N5類

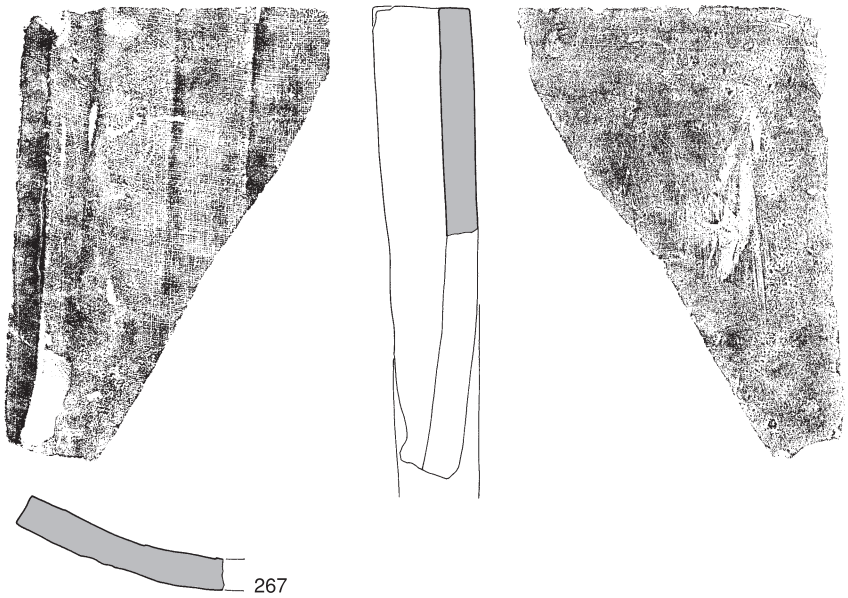


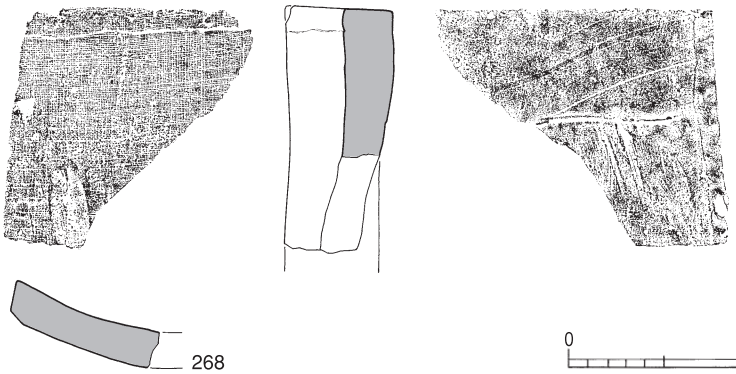
瓦集積　平瓦㉓（258～263）N5・N6・N7類



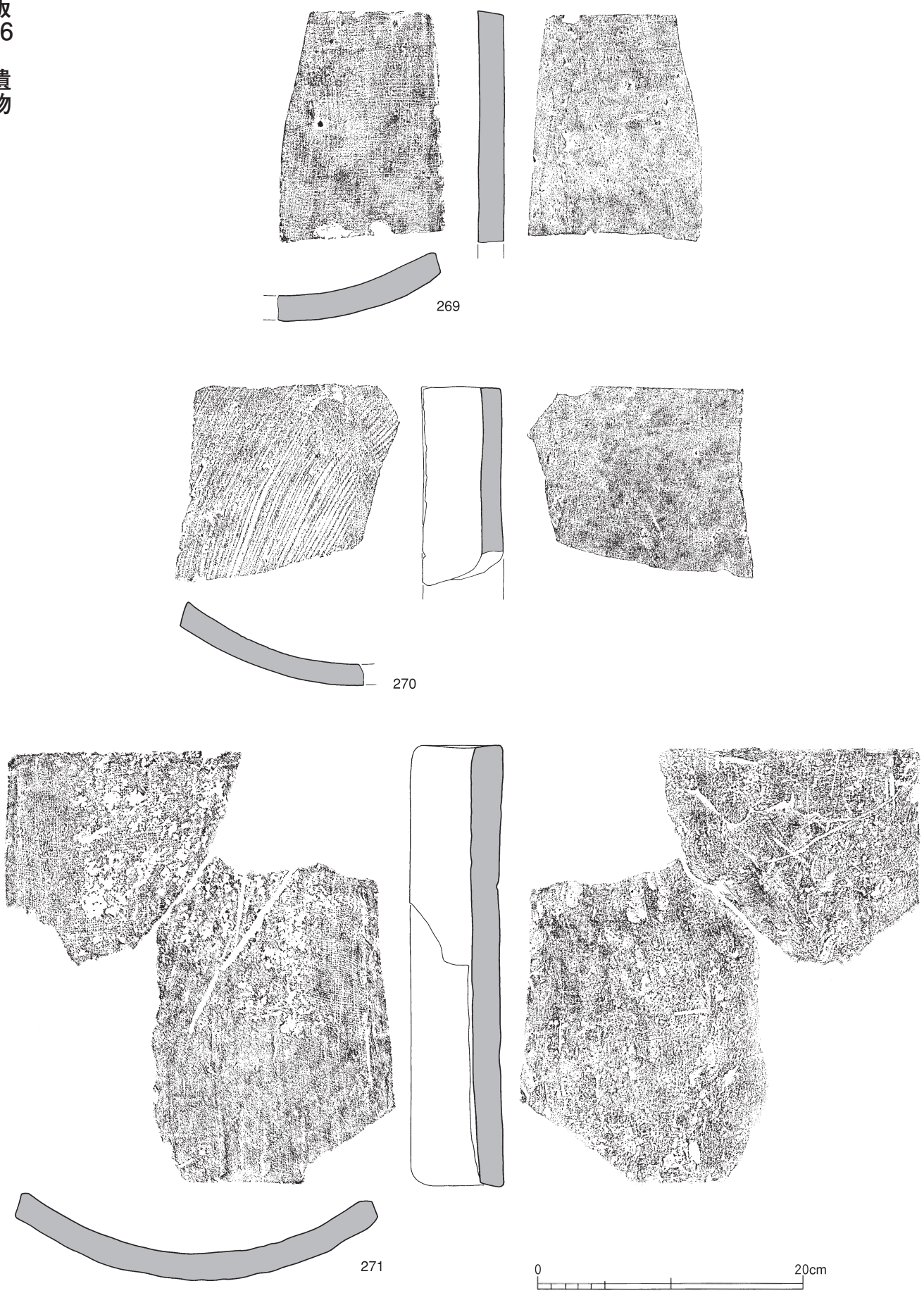




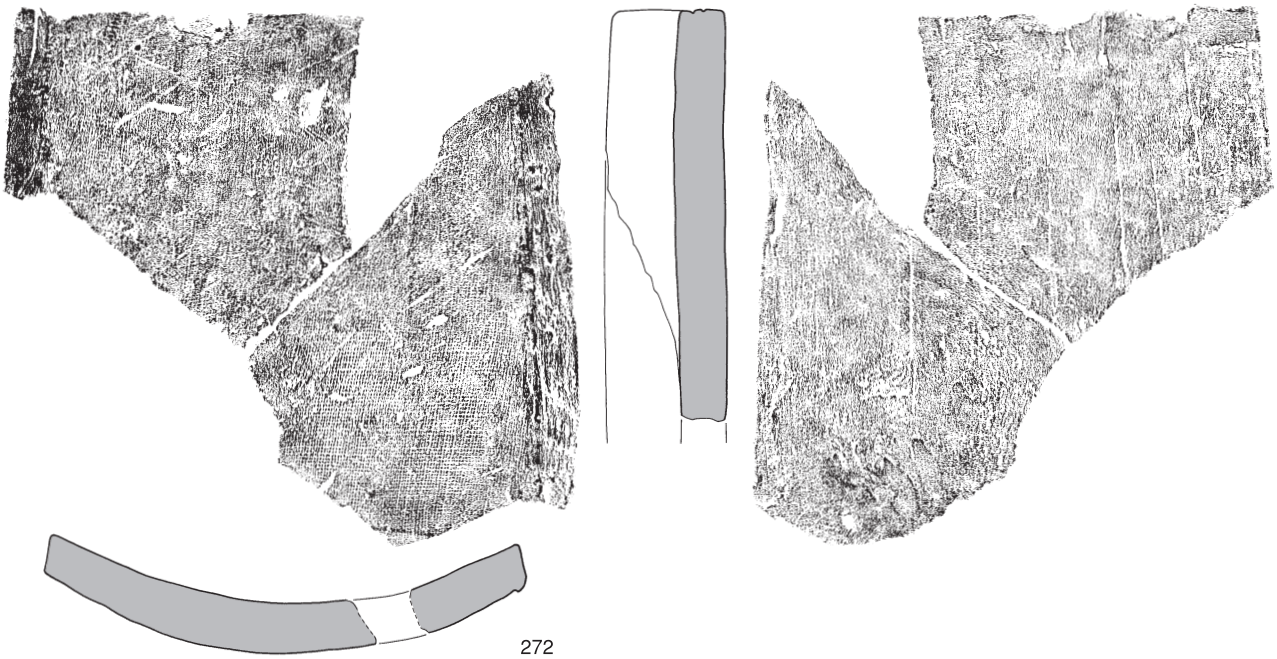




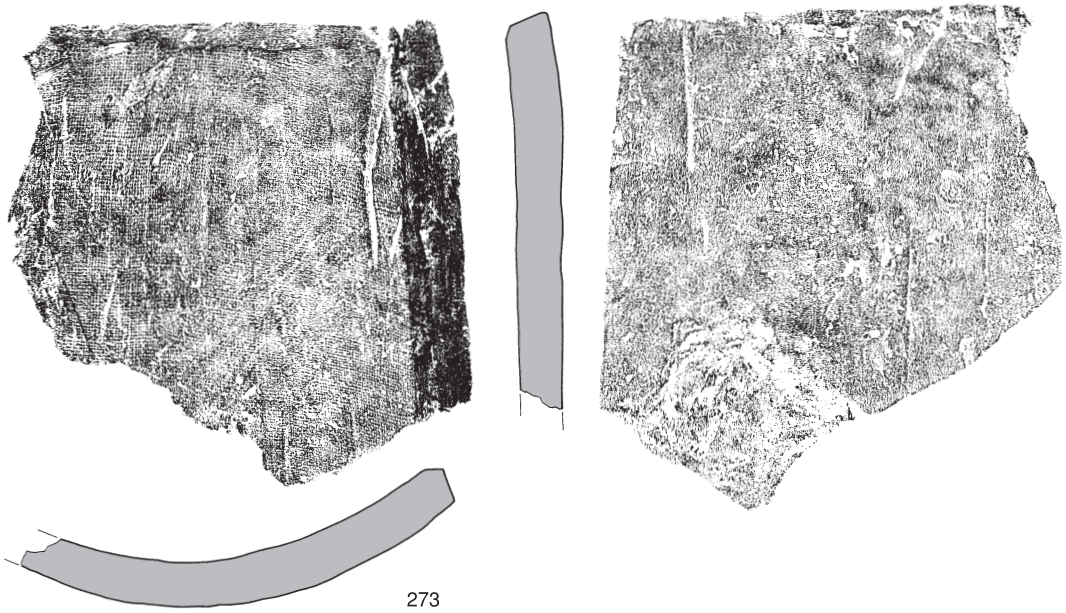
瓦集積　平瓦㉔（264～268）W1・W2・W3類



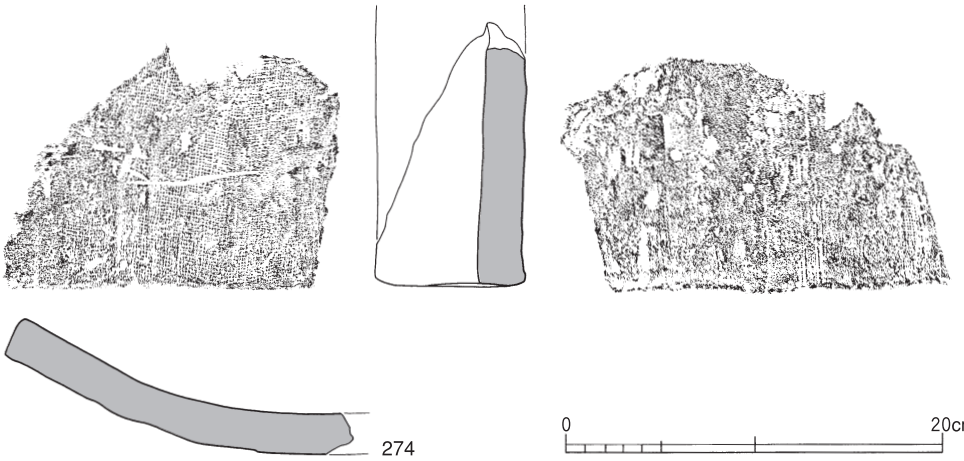
瓦集積　平瓦㉕（269～271）W1・W3類



272

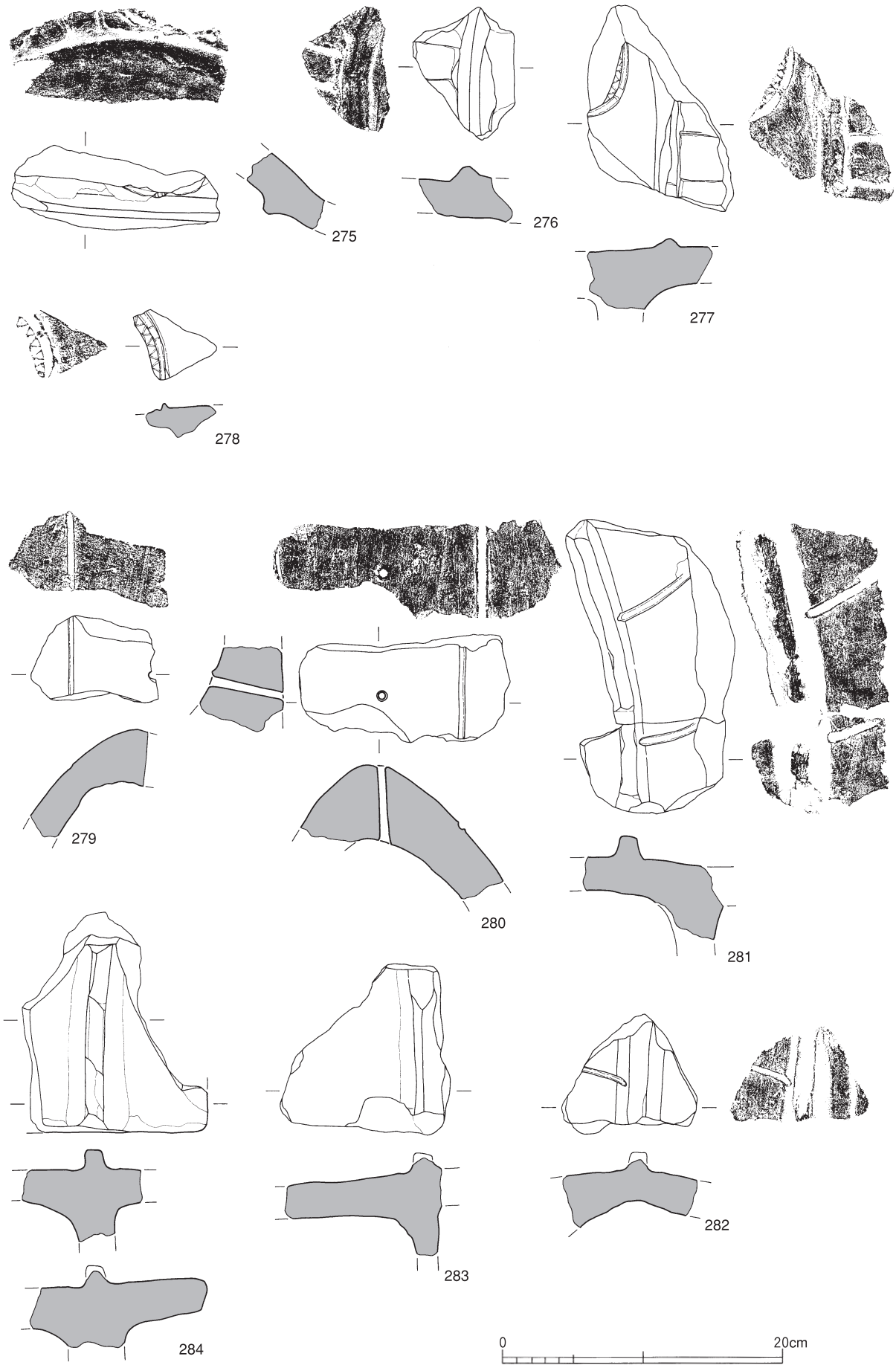


273

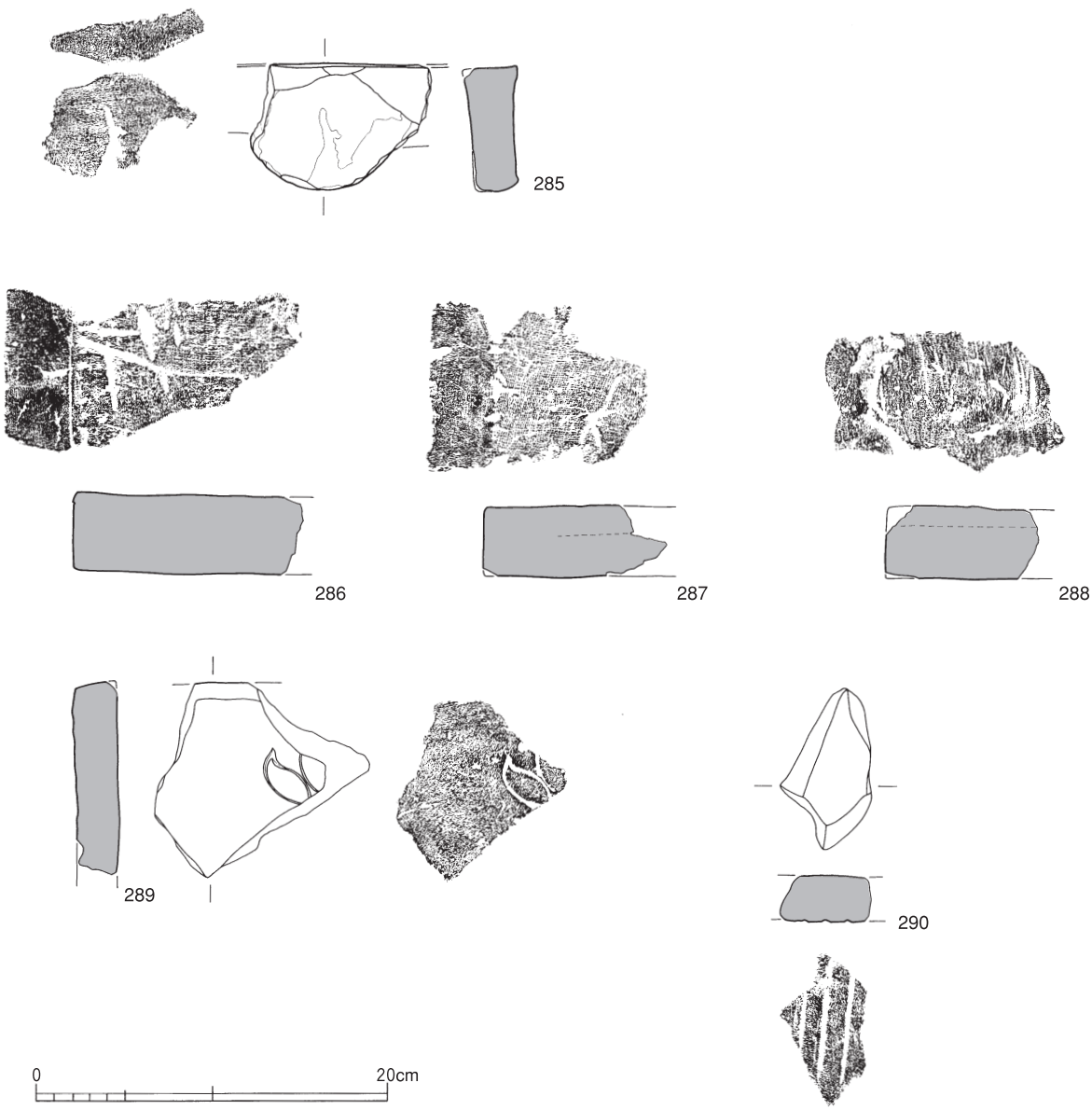


274

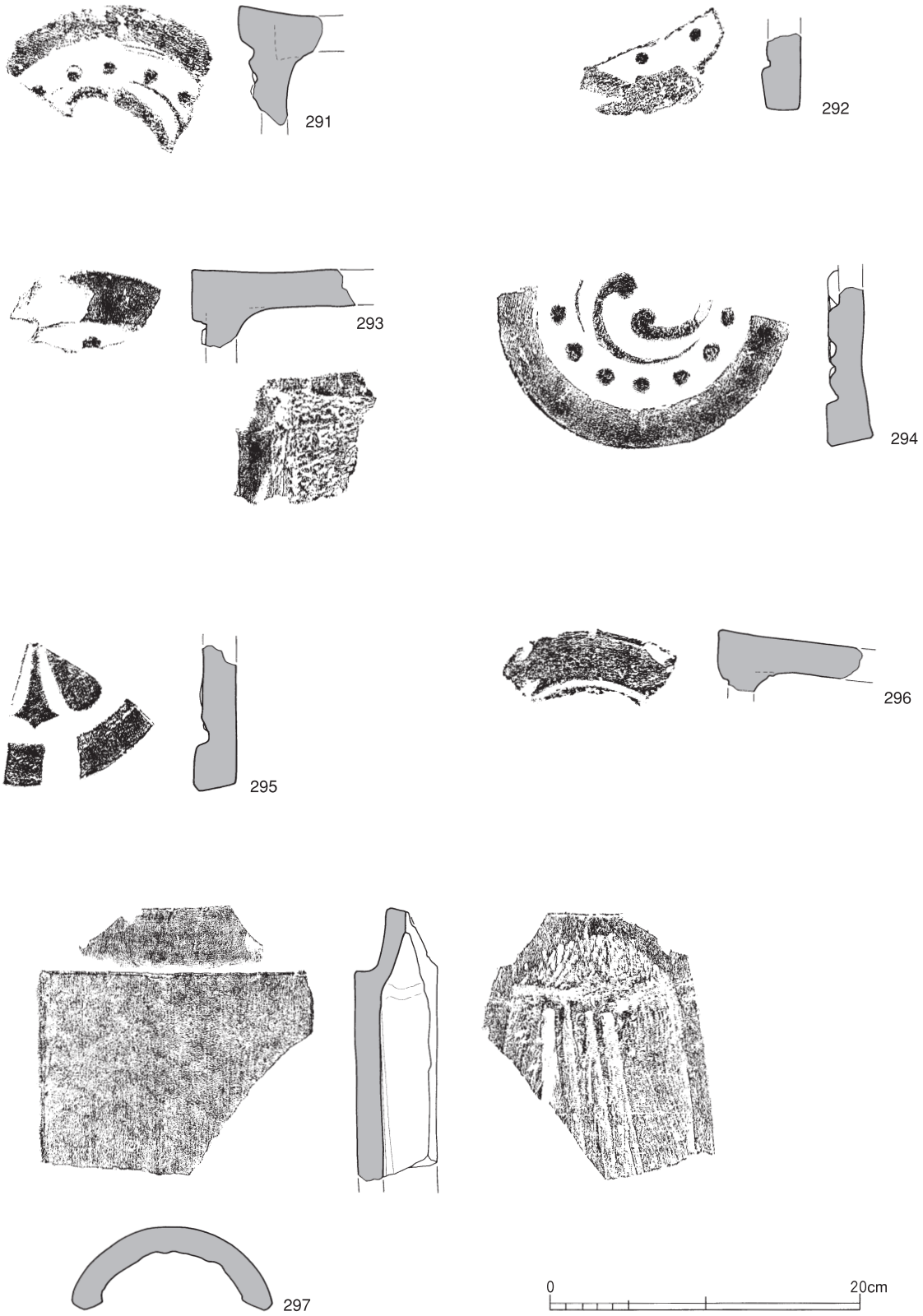
瓦集積　平瓦㉖（272～274）W1類



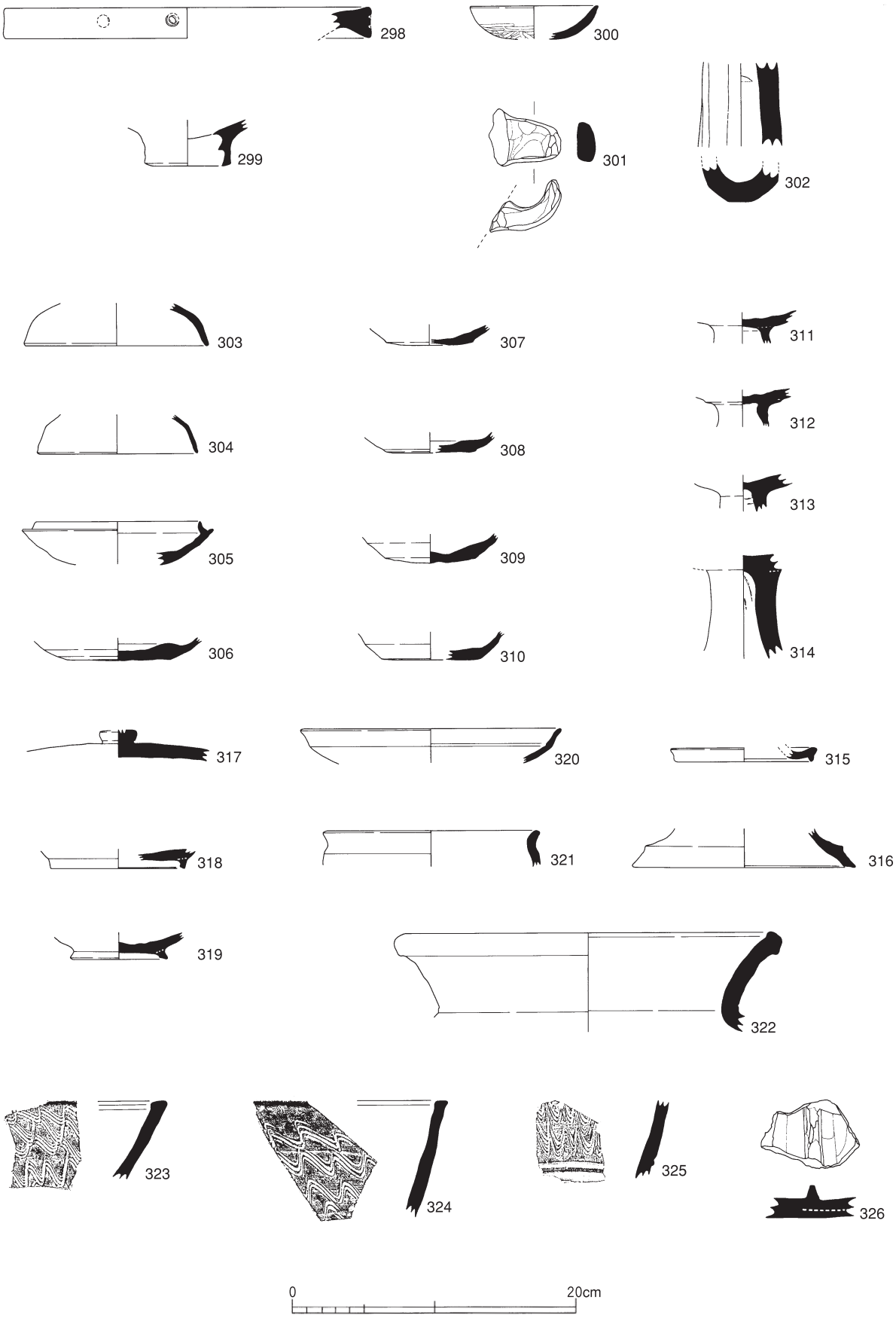
瓦集積　鴟尾（275～284）A類・B類



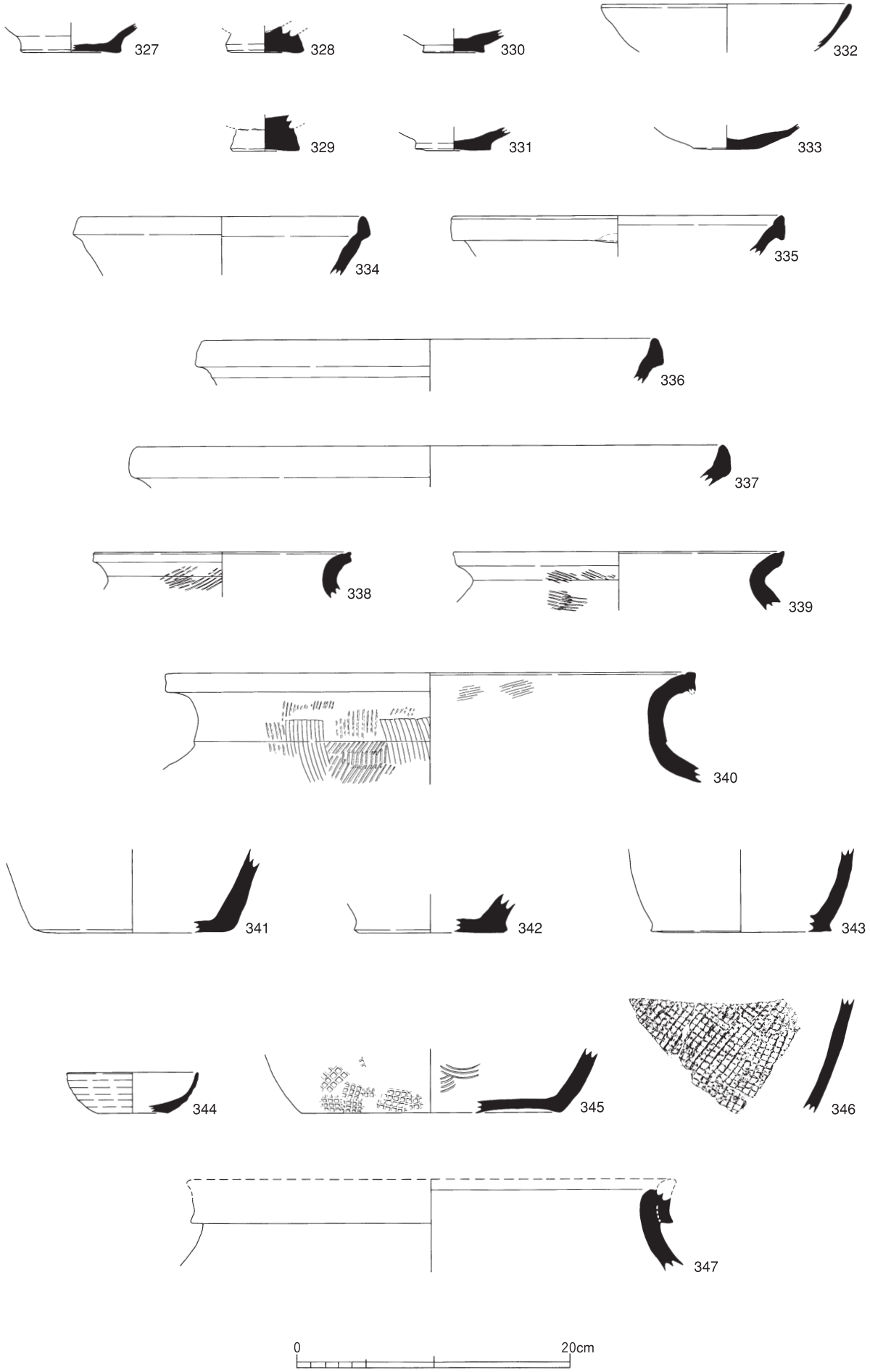
瓦集積　面戸瓦・塼ほか（285～290）E・G類



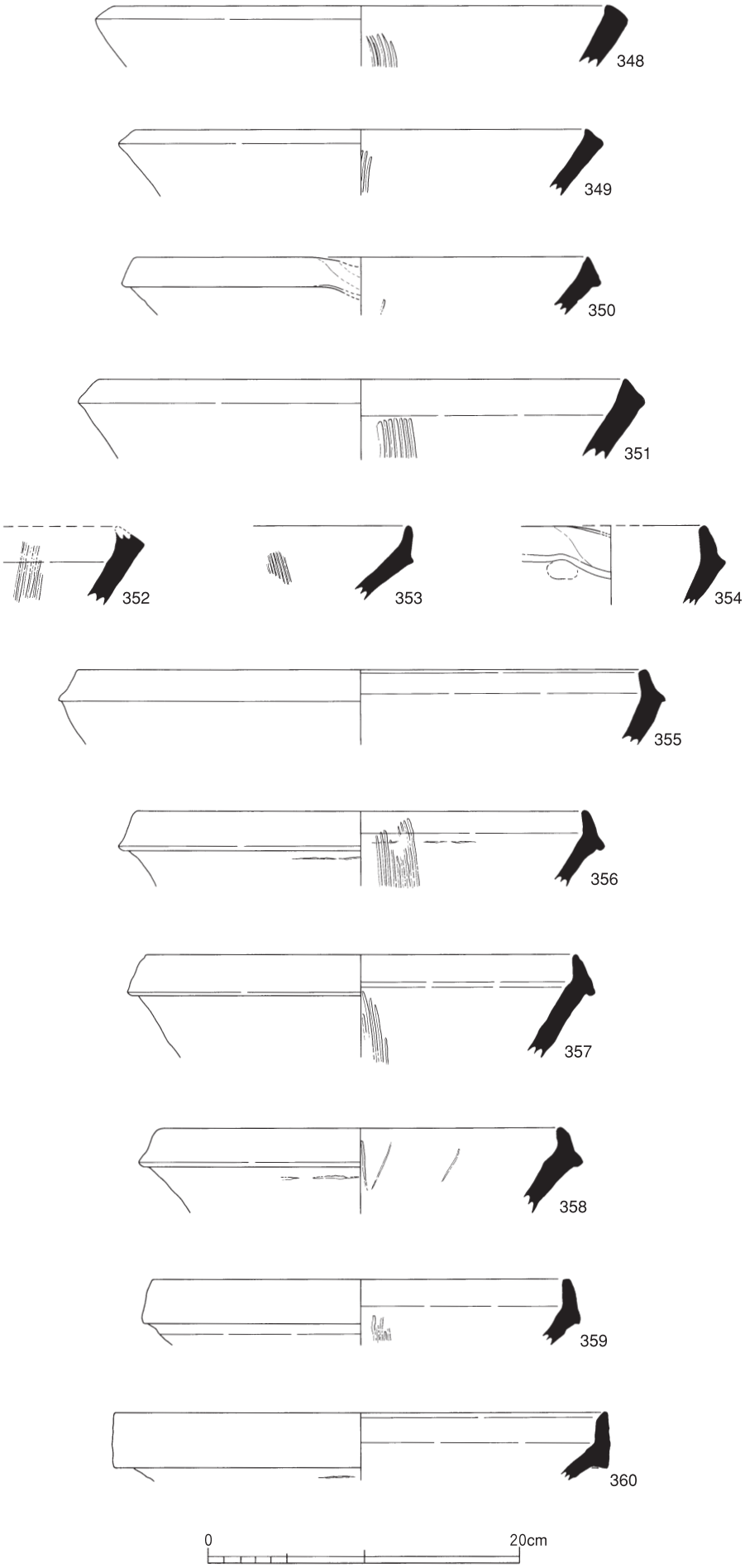
瓦集積　近世瓦（291～297）



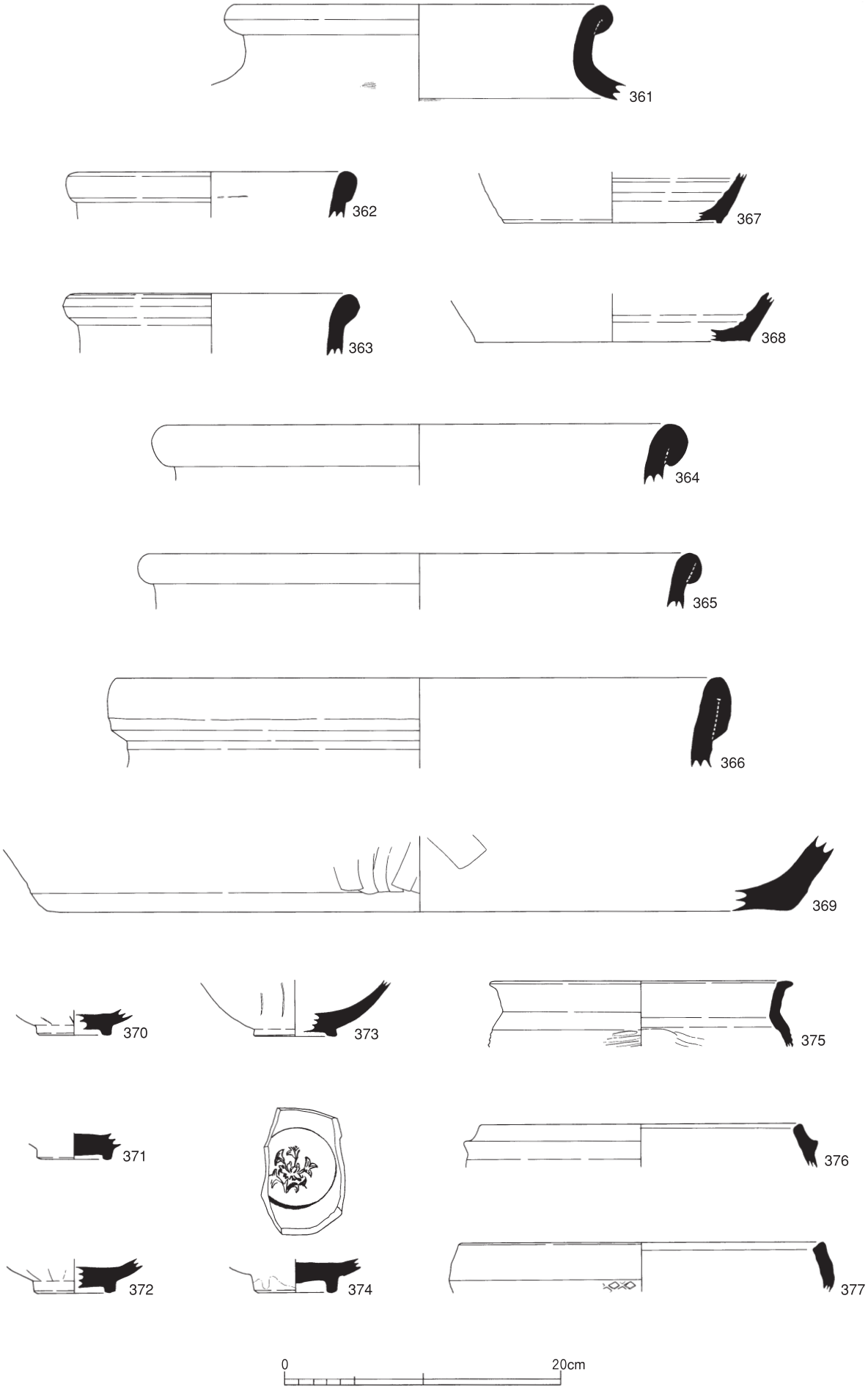
瓦集積　土器類①（298～326）



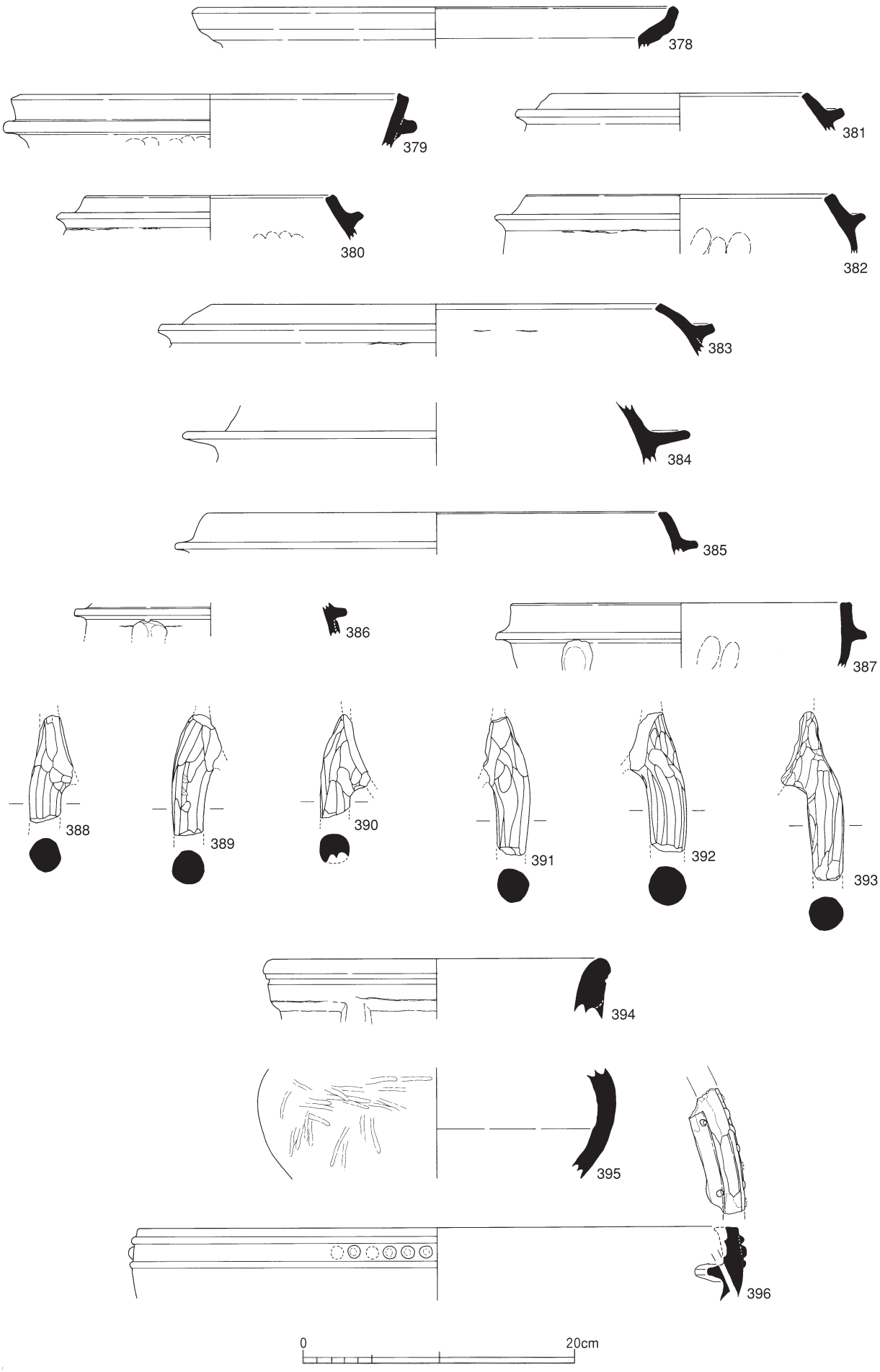
瓦集積　土器類②（327～347）



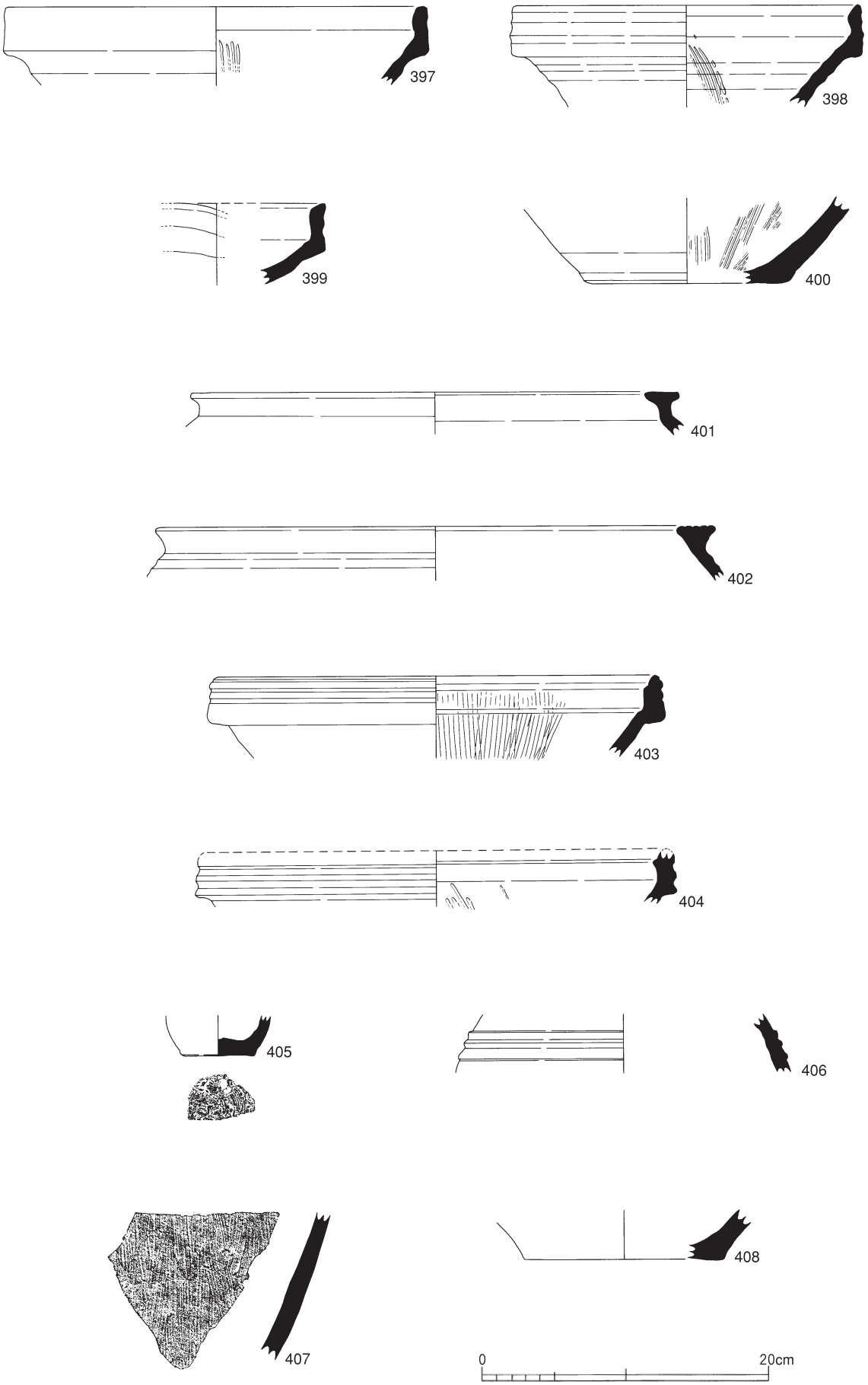
瓦集積　土器類③（348～360）



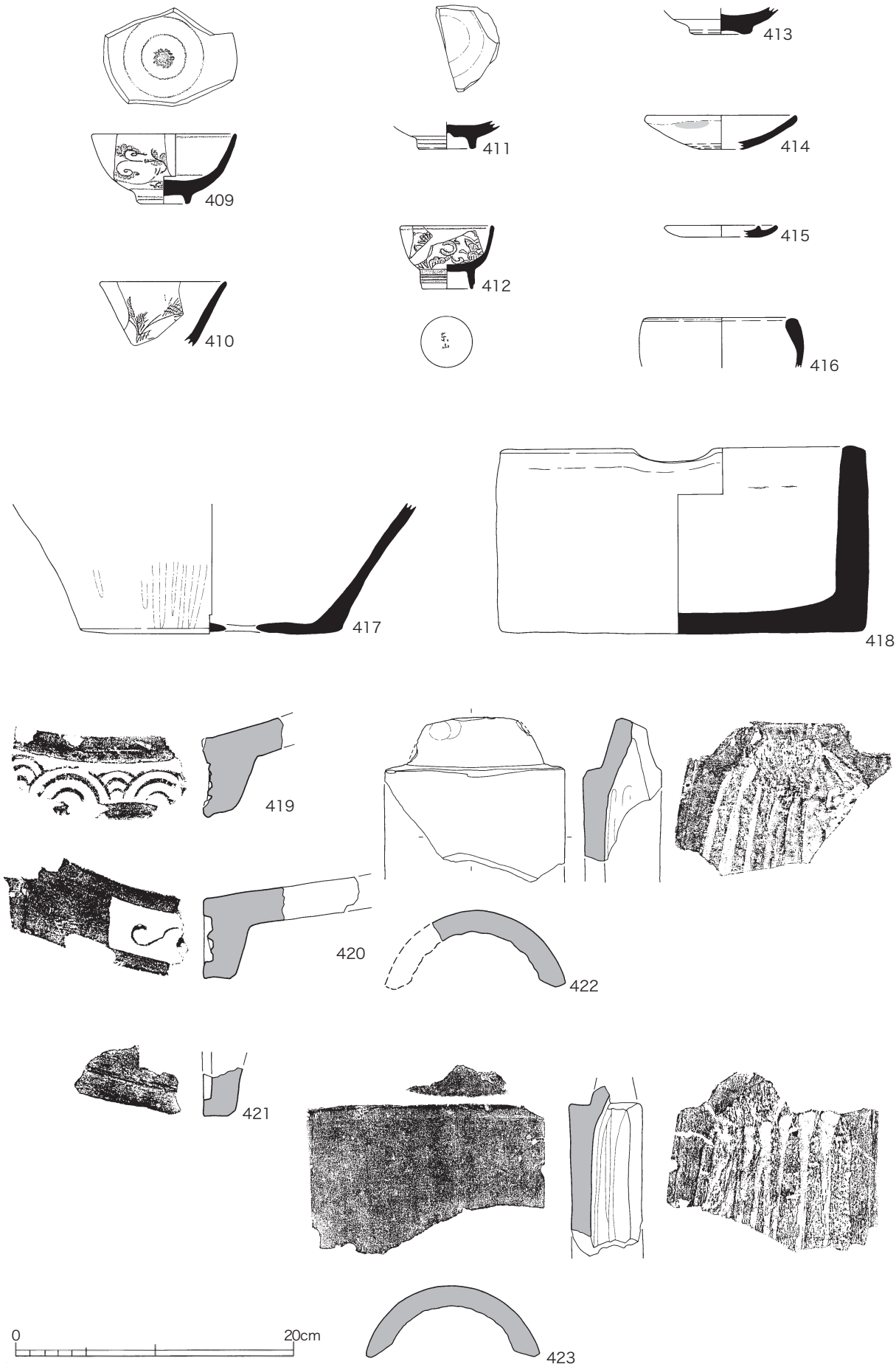
瓦集積　土器類④（361～377）



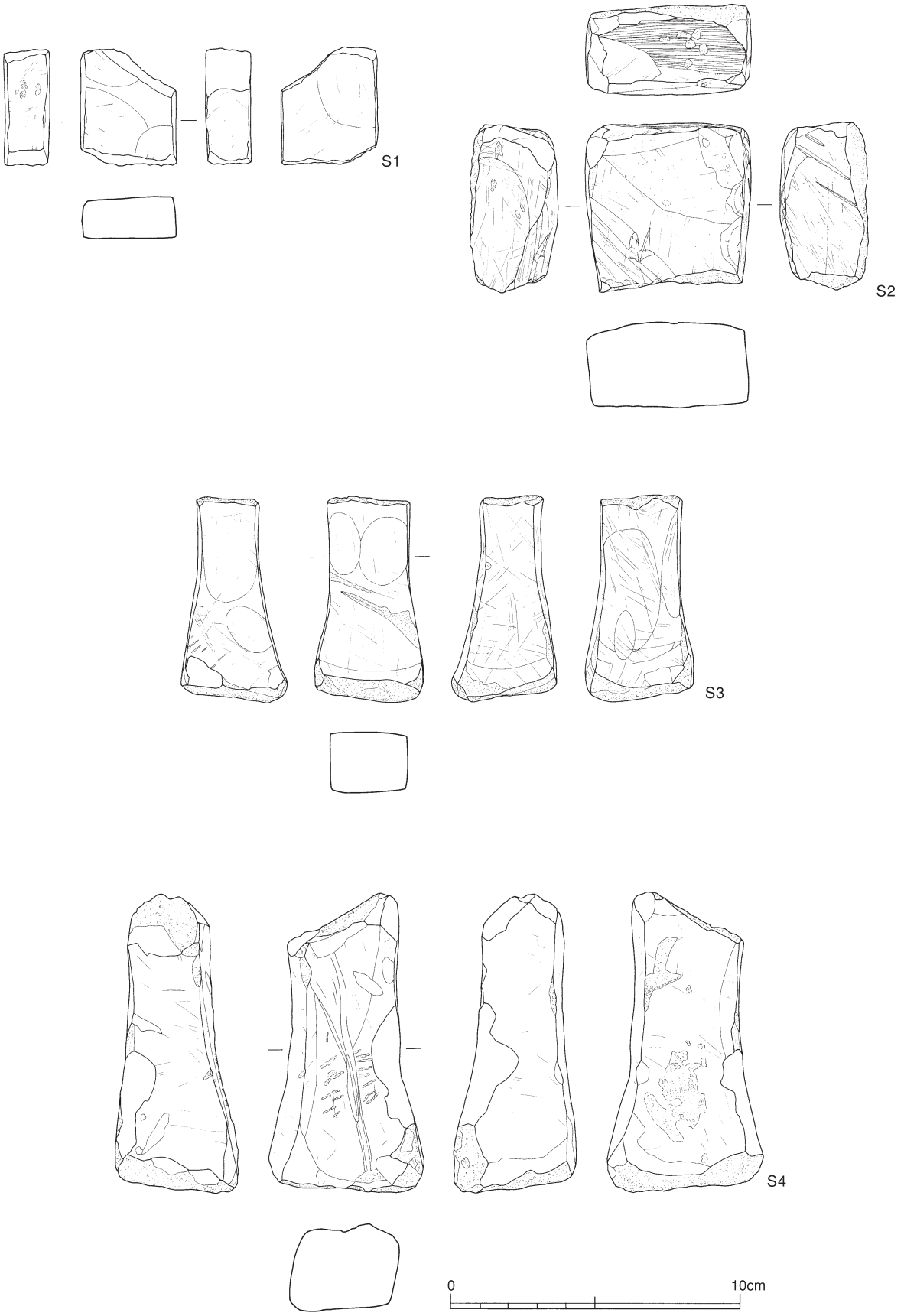
瓦集積　土器類⑤（378～396）



瓦集積　土器類⑥（397～408）



瓦集積　土器類⑦（409～416）・SK01（417～423）



瓦集積　石器（S1～S4）

写真図版

1 今宿遺跡 遠景（南西から）

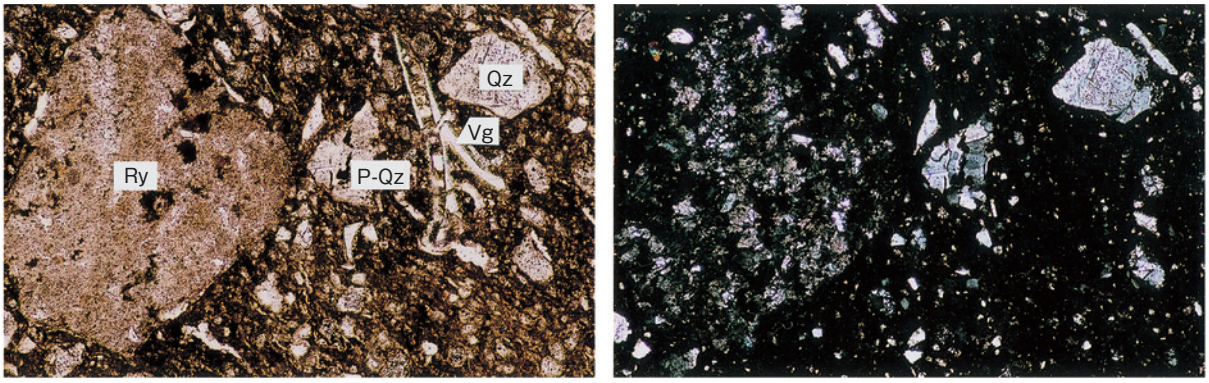
2 今宿遺跡 近景（南西から）

3 今宿遺跡調査地 全景（南西から）

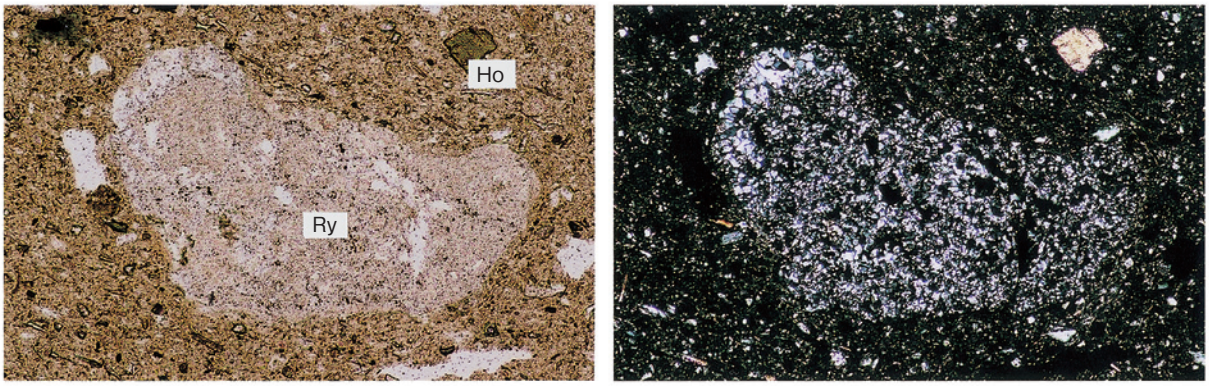
4 瓦堆積 断面（西から）

軒瓦・軒平瓦付着赤色顔料

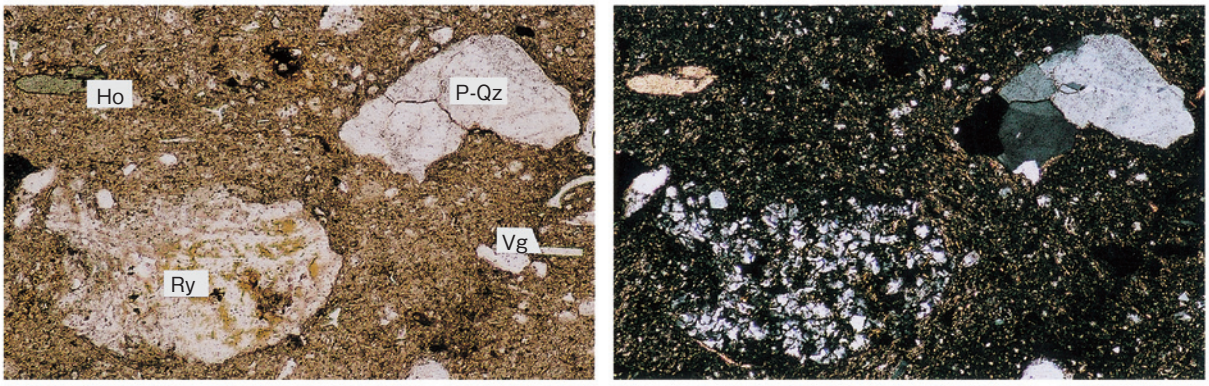
鴟尾



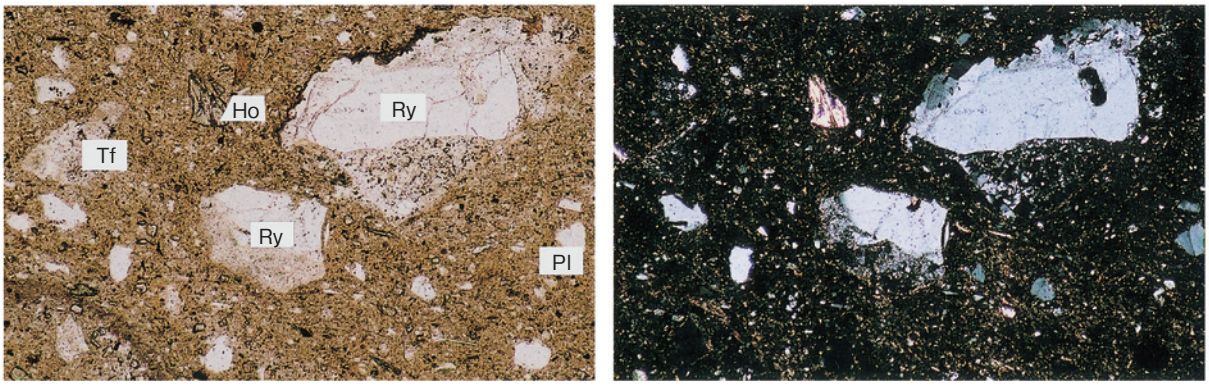
1. 資料 No.1（平瓦　J1 類　平行条線）



2. 資料 No.2（平瓦　K9 類　格子叩き目）



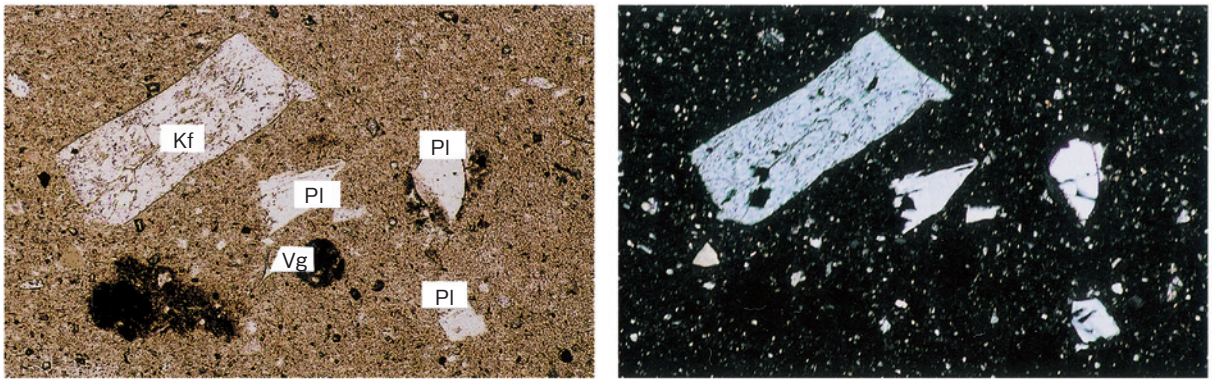
3. 資料 No.3（平瓦　K16 類　格子叩き目）



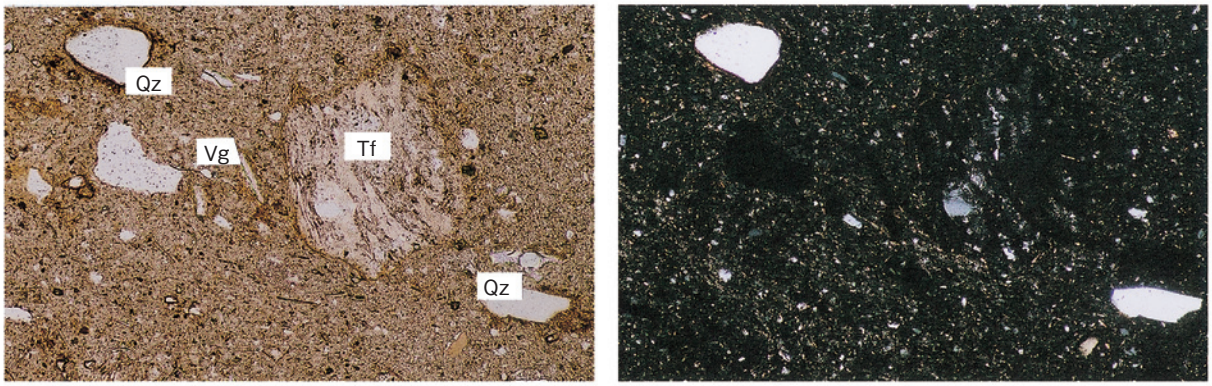
4. 資料 No.4（平瓦　K15 類　格子叩き目）

Qz：石英　Pl：斜長石　Ho：角閃石　Ry：流紋岩　Tf：凝灰岩　P-Qz：多結晶石英
Vg：火山ガラス
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

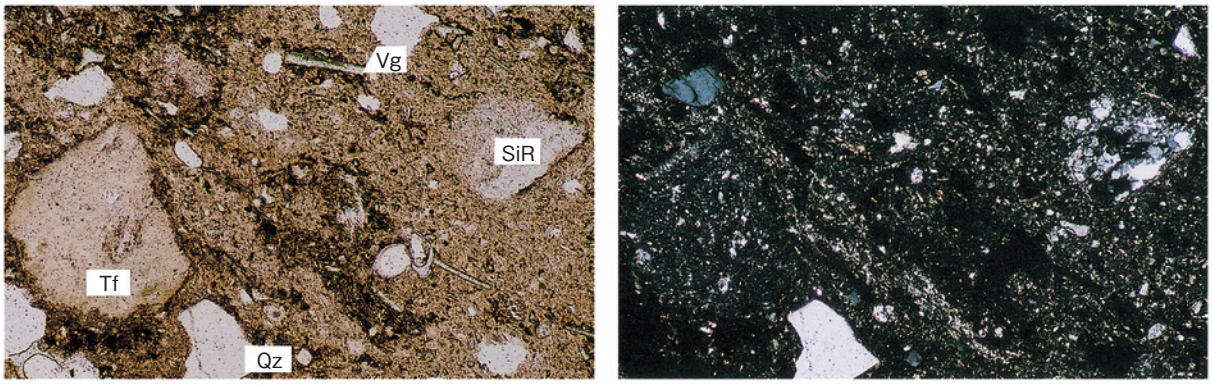
0.5 ㎜



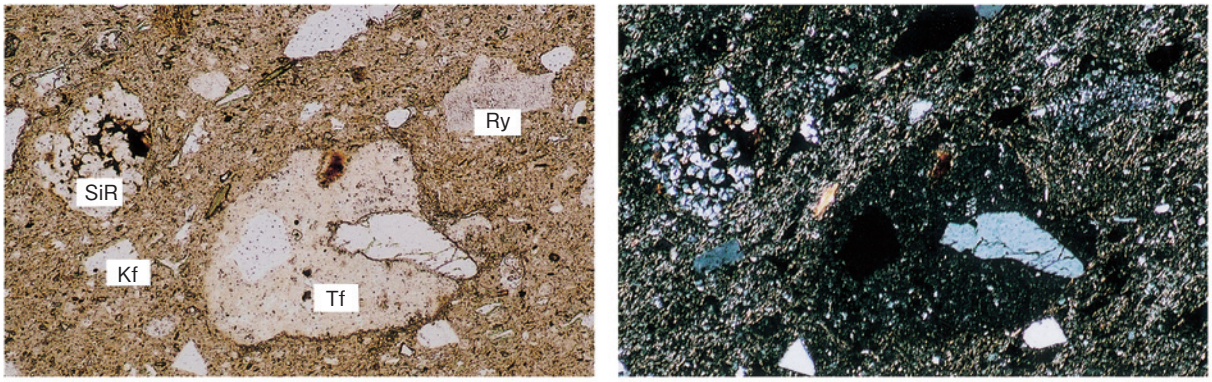
5. 資料 No.5（平瓦　K19 類　格子叩き目）



6. 資料 No.6（平瓦　N5 類　縄叩き目）



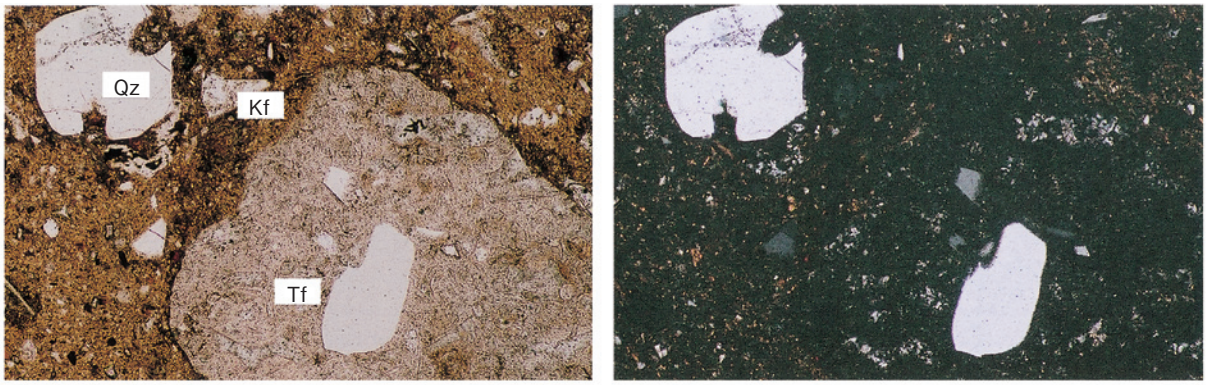
7. 資料 No.7（平瓦　N2 類　縄叩き目）



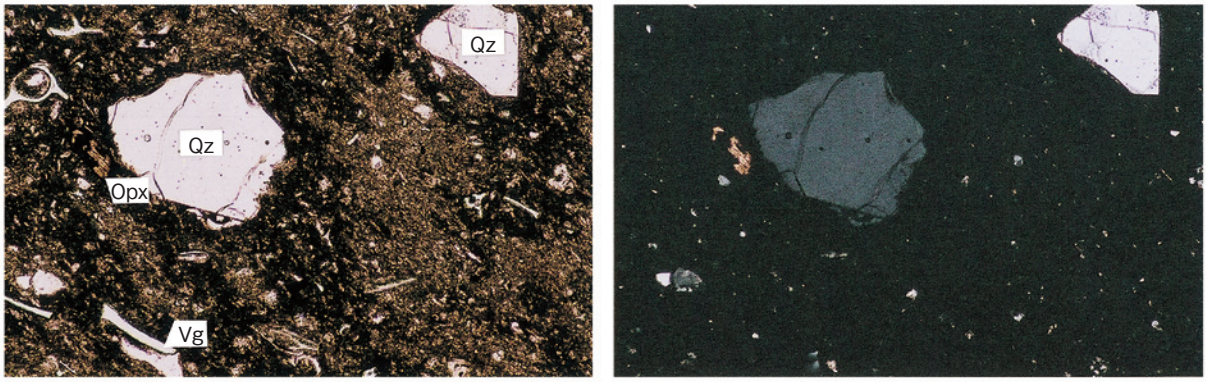
8. 資料 No.8（平瓦　K18 類　格子叩き目）

Qz：石英　Pl：斜長石　Kf：カリ長石　Ry：流紋岩　Tf：凝灰岩　SiR：珪化岩
Vg：火山ガラス
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

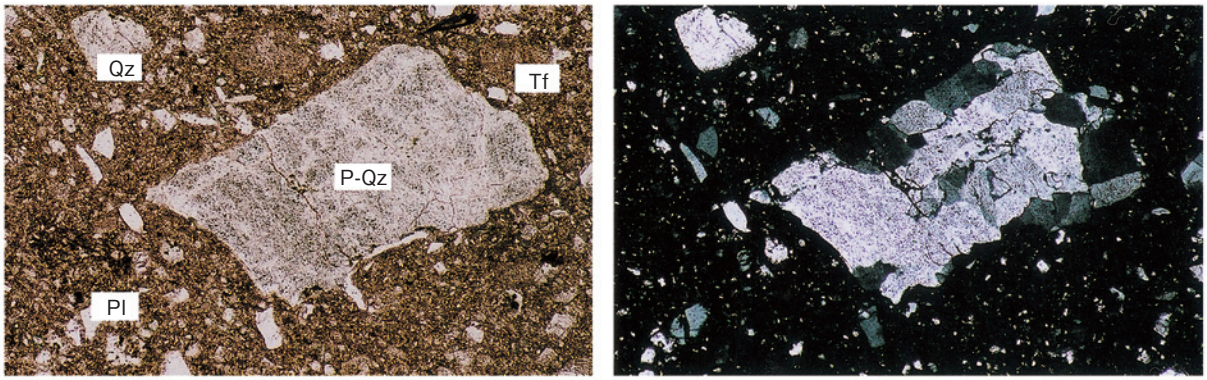
0.5 ㎜



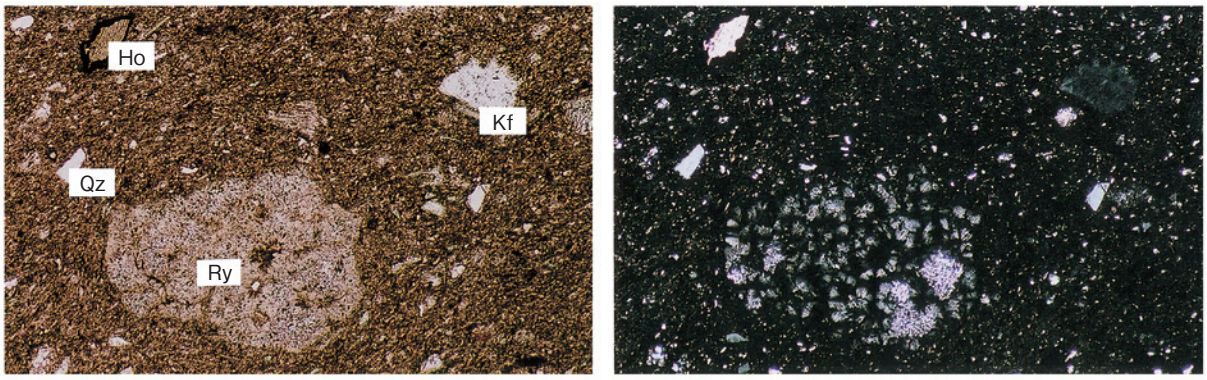
9. 資料 No.9（平瓦　K21 類　格子叩き目）



10. 資料 No.10（平瓦　L2 類　格子叩き目）



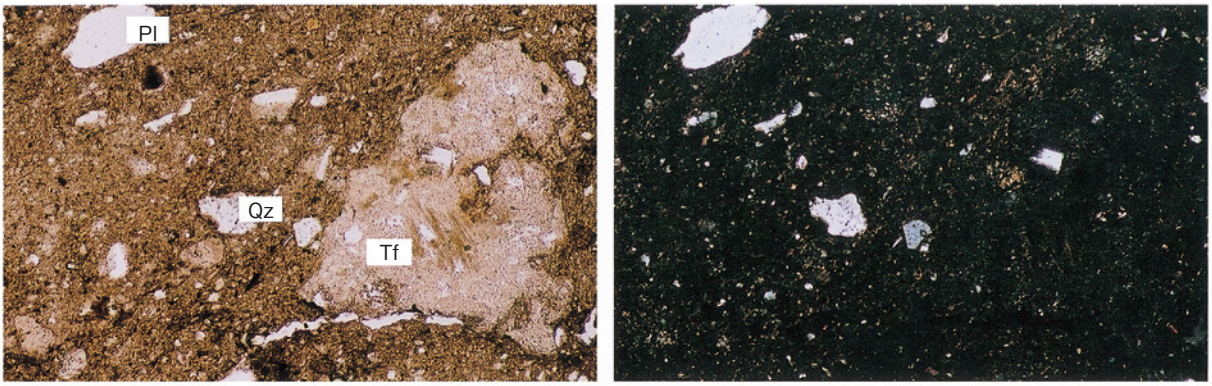
11. 資料 No.11（平瓦　K2 類　格子叩き目）



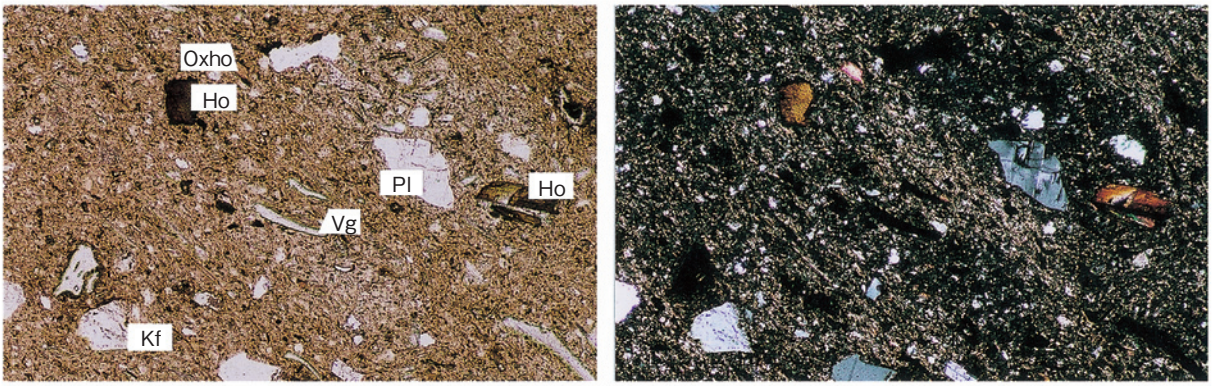
12. 資料 No.12（平瓦　K16 類　格子叩き目）

Qz：石英　Pl：斜長石　Kf：カリ長石　Opx：斜方輝石　Ho：角閃石　Ry：流紋岩
Tf：凝灰岩　P-Qz：多結晶石英　Vg：火山ガラス
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

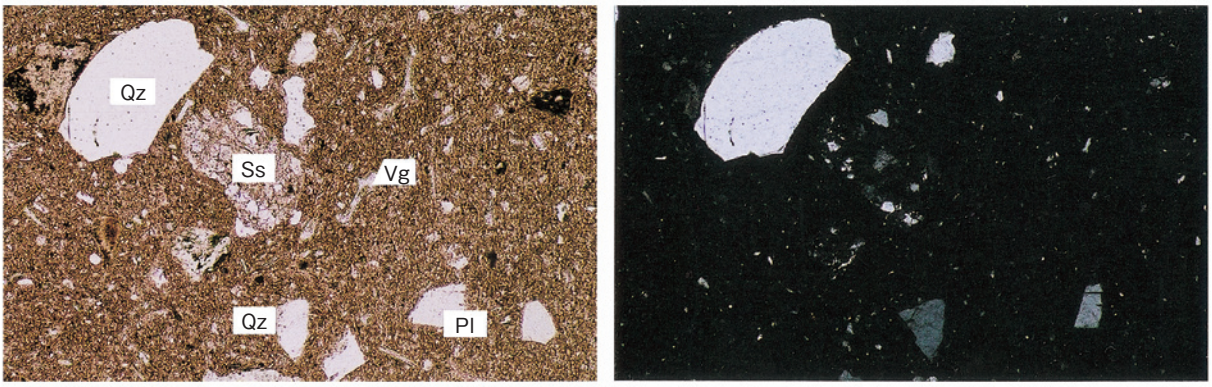
0.5 ㎜



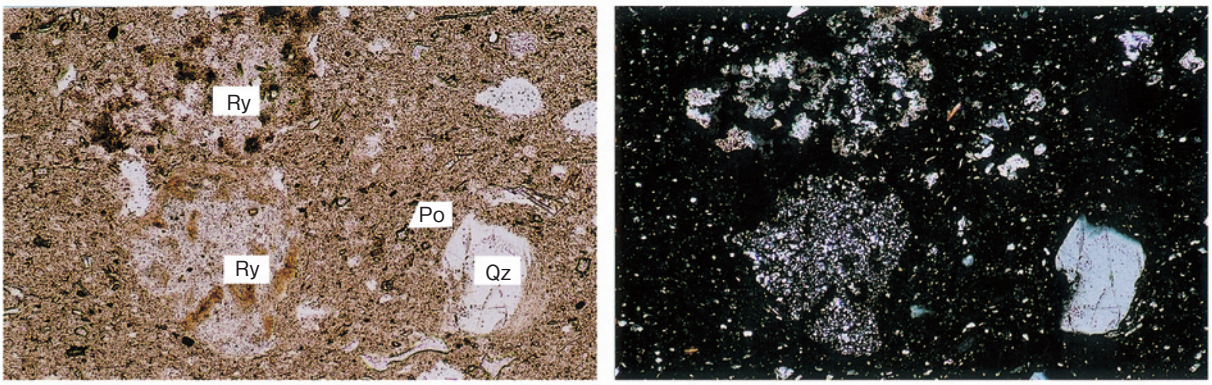
13. 資料 No.13（平瓦　K13 類　格子叩き目）



14. 資料 No.14（平瓦　N4 類　縄叩き目）



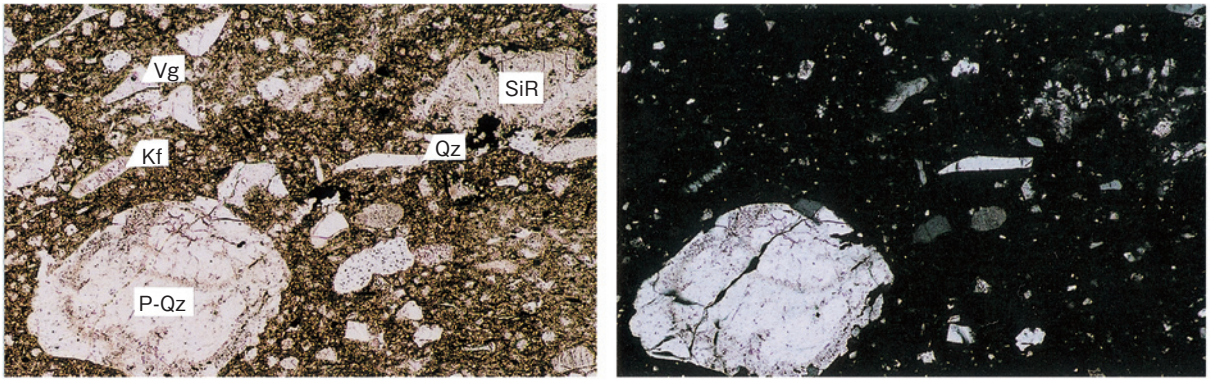
15. 資料 No.15（平瓦　W3 類　無文叩き）



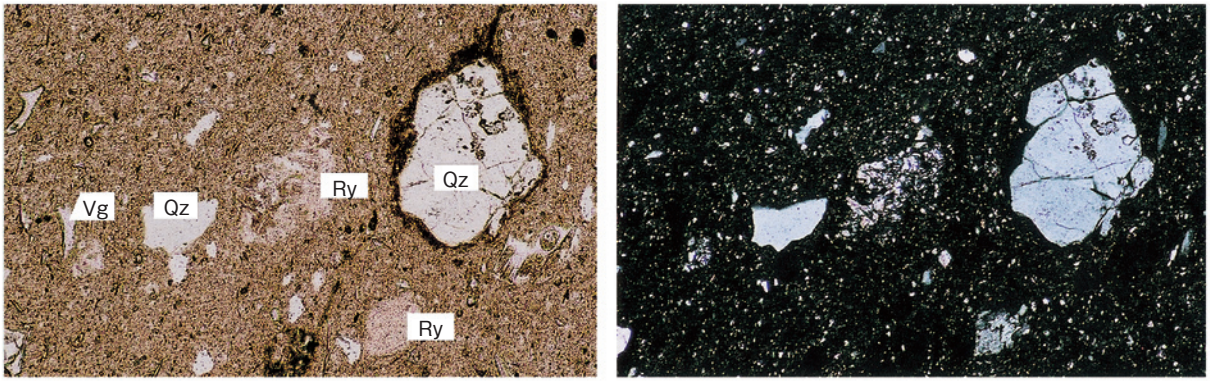
16. 資料 No.16（平瓦　W3 類　無文叩き）

Qz：石英　Pl：斜長石　Kf：カリ長石　Ho：角閃石　Oxho：酸化角閃石
Ry：流紋岩　Tf：凝灰岩　Ss：砂岩　Vg：火山ガラス　Po：植物珪酸体
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

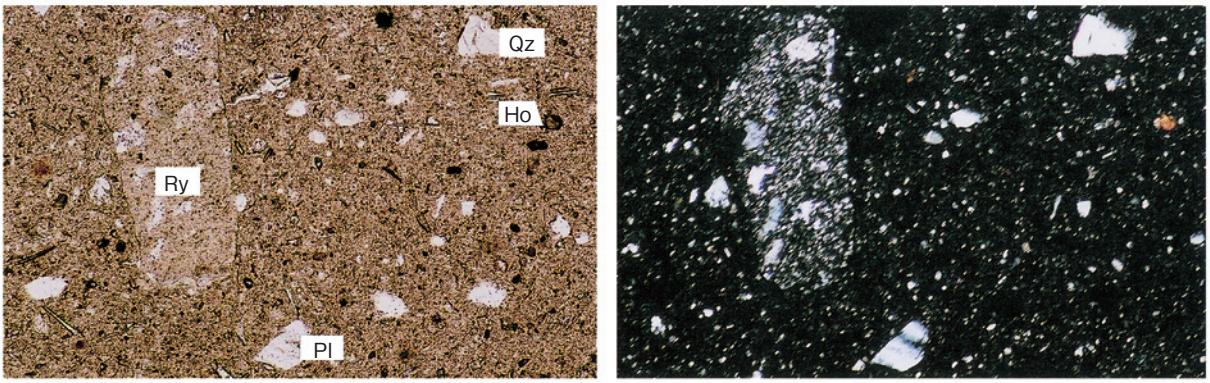
0.5 mm



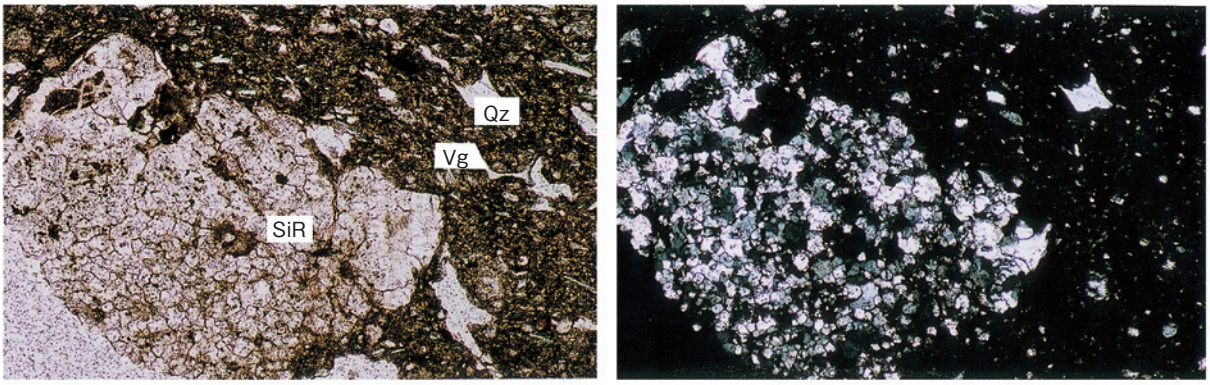
17. 資料 No.17（平瓦　W3 類　無文叩き）



18. 資料 No.18（丸瓦　S3 類　縄叩き目）



19. 資料 No.19（丸瓦　S6 類　ナデ）



20. 資料 No.20（丸瓦　S1 類）

Qz：石英　Pl：斜長石　Kf：カリ長石　Ho：角閃石　Ry：流紋岩　SiR：珪化岩
P-Qz：多結晶石英　Vg：火山ガラス
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5 ㎜

5 調査前 全景（南から）

6 調査地 全景（南から）

7 調査地 全景（北東から）

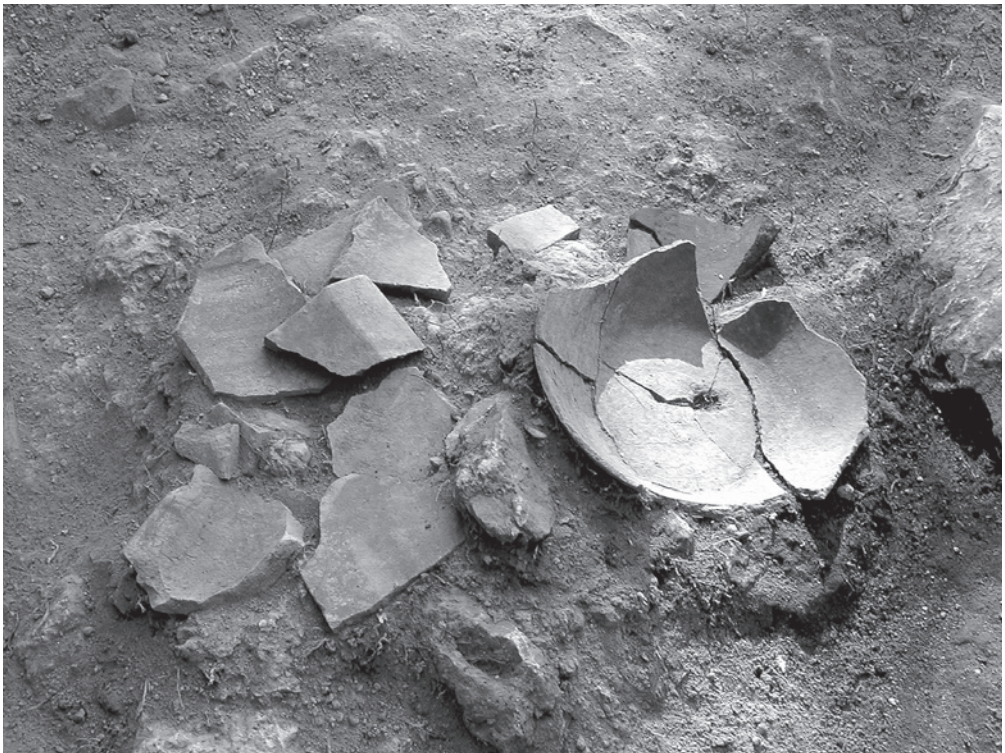
8 瓦堆積 断面（西から）

9 瓦堆積状況（北西から）

10 瓦堆積状況（北西から）

11 調査地 全景（北から）

12 土坑SK01（東から）



13 土坑SK01（北から）

14 作業状況

15 作業状況

16 作業状況

17 作業状況

18 作業状況

19 作業状況

20 作業状況

21 作業状況

22 トレンチ2完掘状況（北から）

23 トレンチ5完掘状況（南から）

24 トレンチ4完掘状況（南から）

25 トレンチ7完掘状況（南東から）

26 トレンチ6南端完掘状況（北西から）

27 トレンチ8完掘状況（東から）

28 トレンチ10完掘状況（西から）

29 トレンチ8西側壁の瓦堆積状況（東から）

軒丸瓦① M1・M2類

軒丸瓦② M5類

1

3

2

4

5

7

8

軒丸瓦③ M1・M2類

6

9

16

12

10

11

17

13

14

15

18

21

軒丸瓦④ M2・M3・M4・M5・M6・M8類

19

20

24

23

22

28

34

35

37

36

軒丸瓦⑤ M4・M5・M7類

軒丸瓦⑥ M5・M9・M10・M11類

50

54

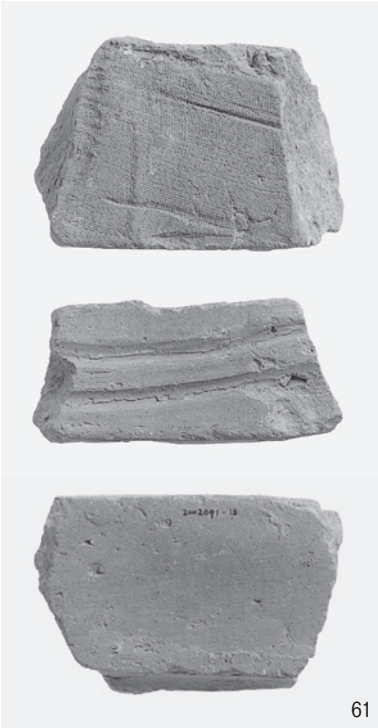
51

58

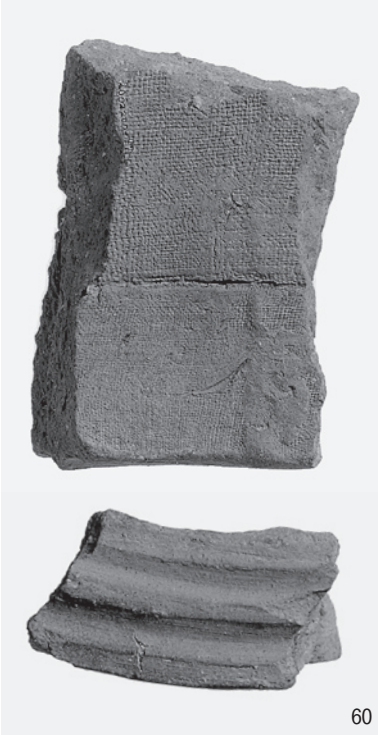
軒平瓦① H1・H2・M3類

52

62


61

59


60

64

53

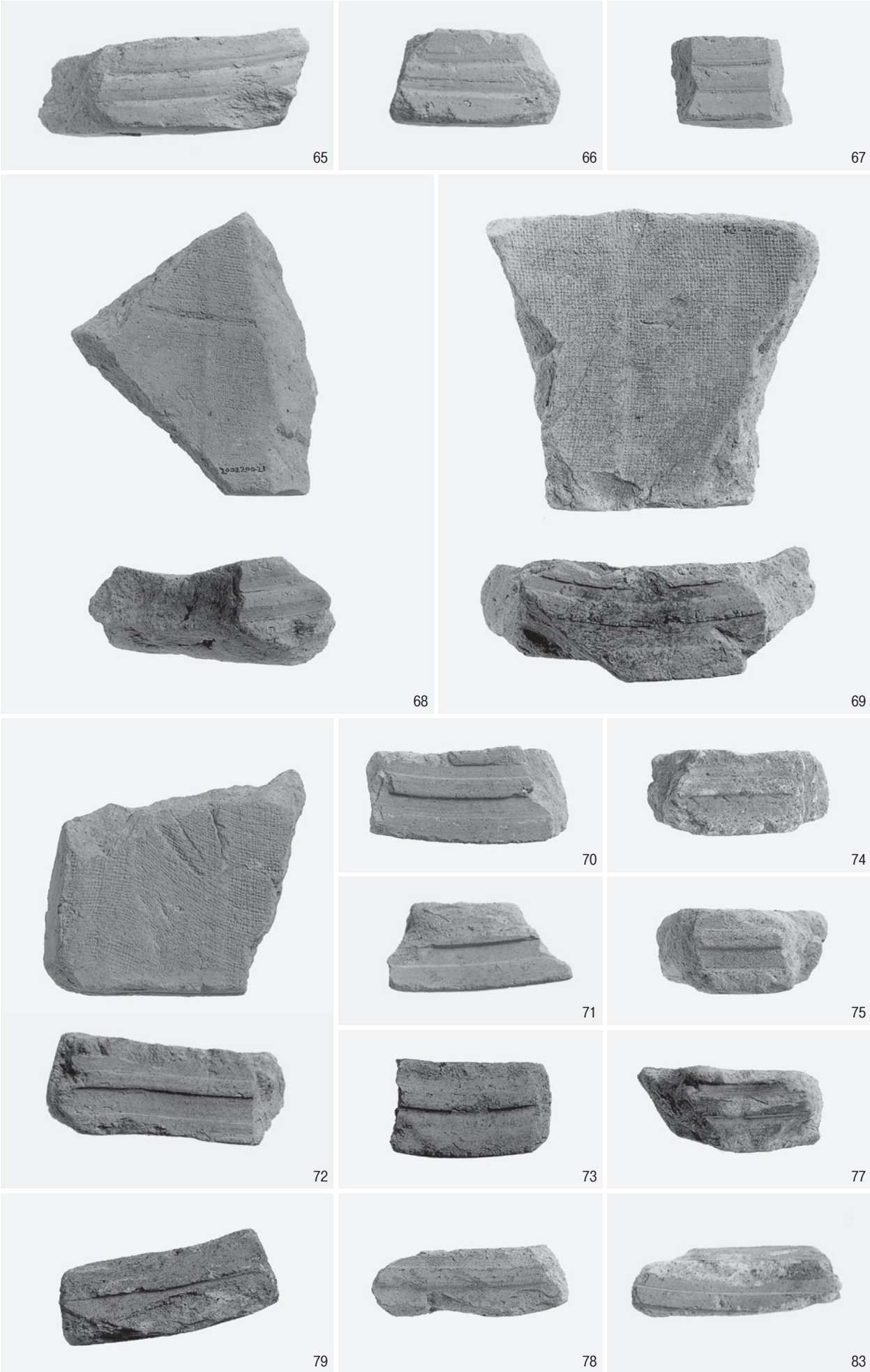
56

55

57

63

軒平瓦② H1・H3・H4・H5類



軒平瓦③ H4・H5・H6・H7・H8・H9類

76

81

80

82

84

85

90

86

87

88

89

軒平瓦④ H8・H9・H10・H11・H12類

軒平瓦⑤ H12・H14類

94

97

98

99

100

101

103

104

102

104

105

軒平瓦⑥ H12・H13・H14・H15・H16・H17・H18・H19類

107

109

110

108

111

112

113

軒平瓦⑦ H20・H21・H22・H23・H24類

120

119

115

121

124

123

114

116

118

117

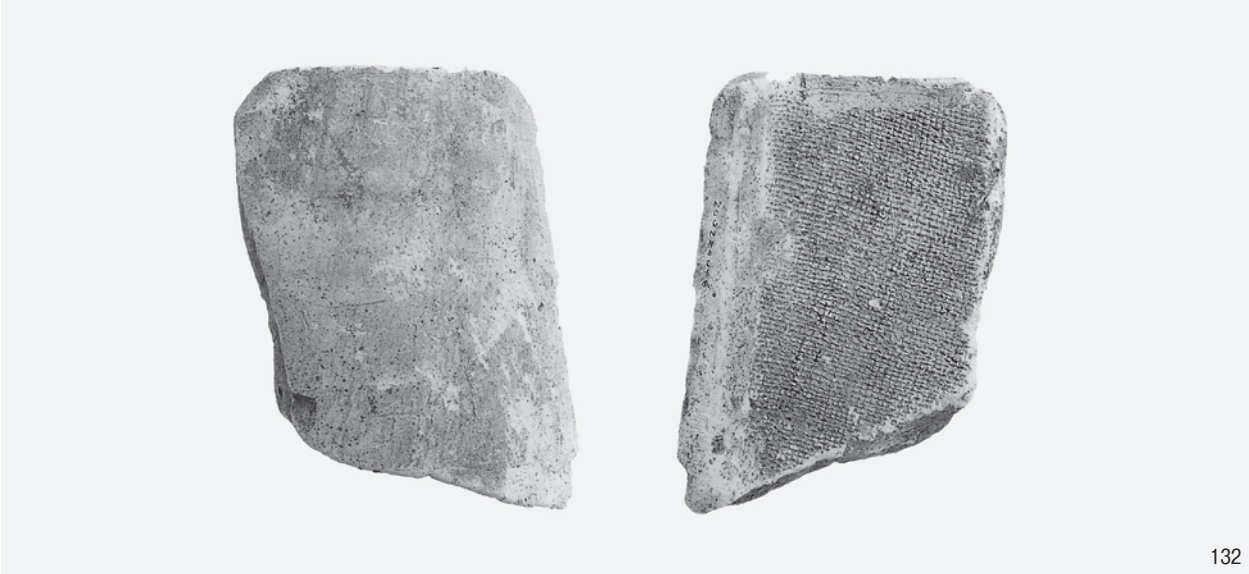
122

125

軒平瓦⑧　H25・H26・H27・H28・H29・H30・H31・H32類

丸瓦① G1・G2類

130



132

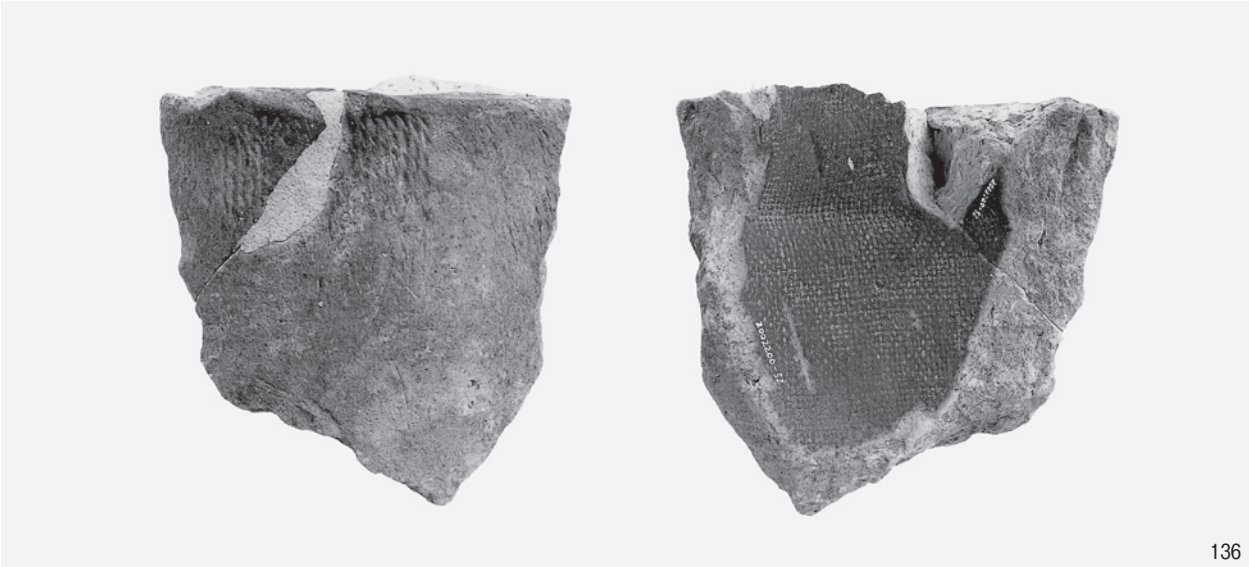
133

丸瓦② G2類

134

135

138



136

丸瓦③ T1・T2類

137

140

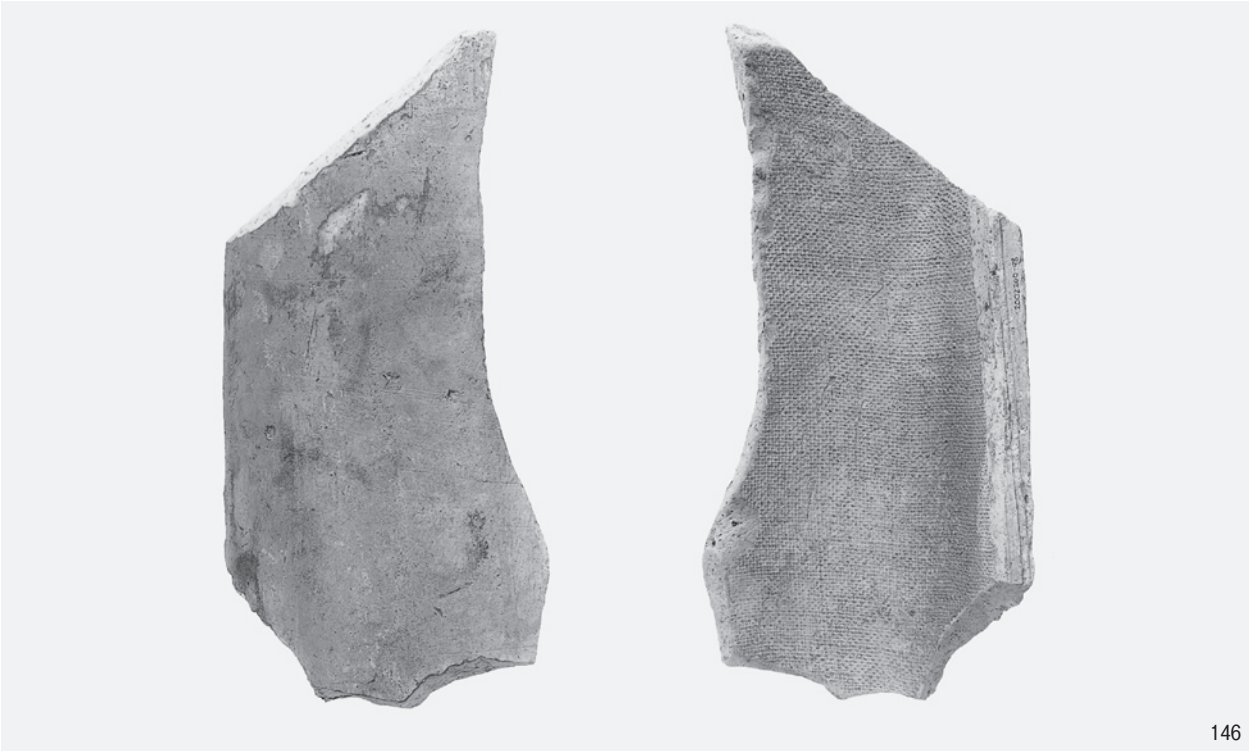
141

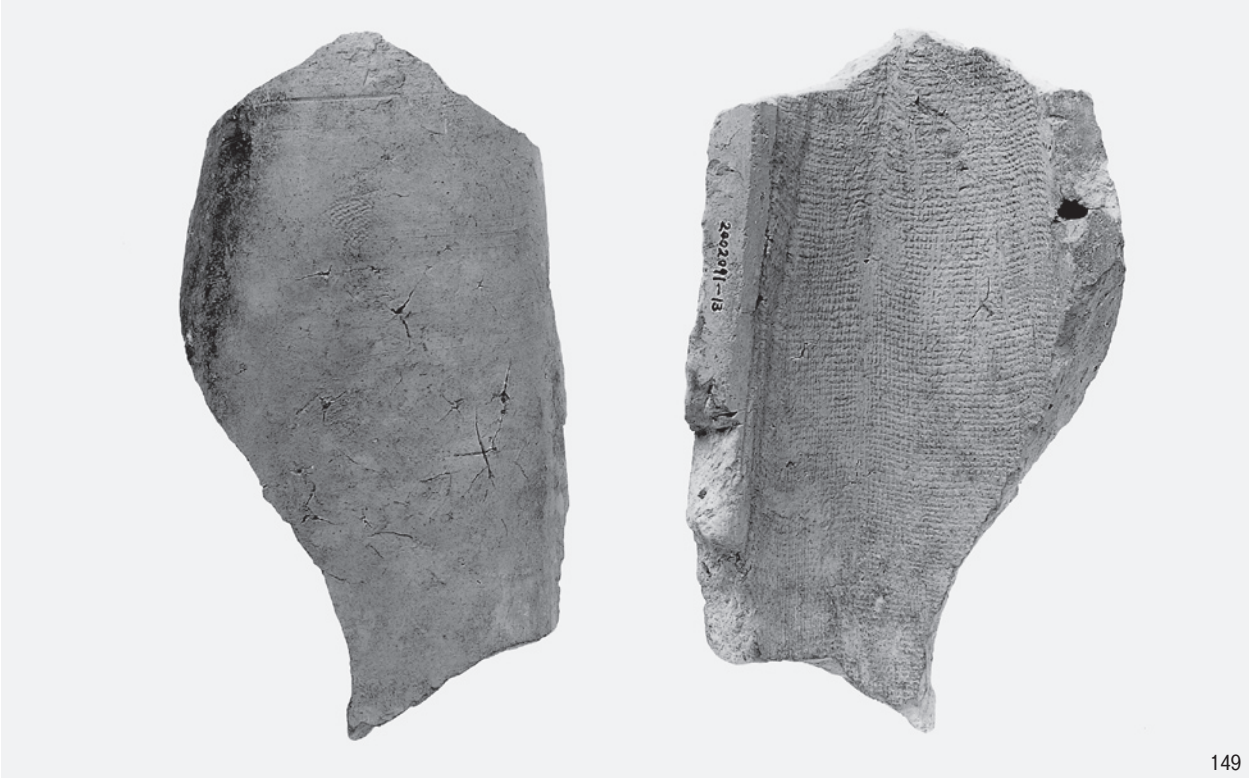
145

142

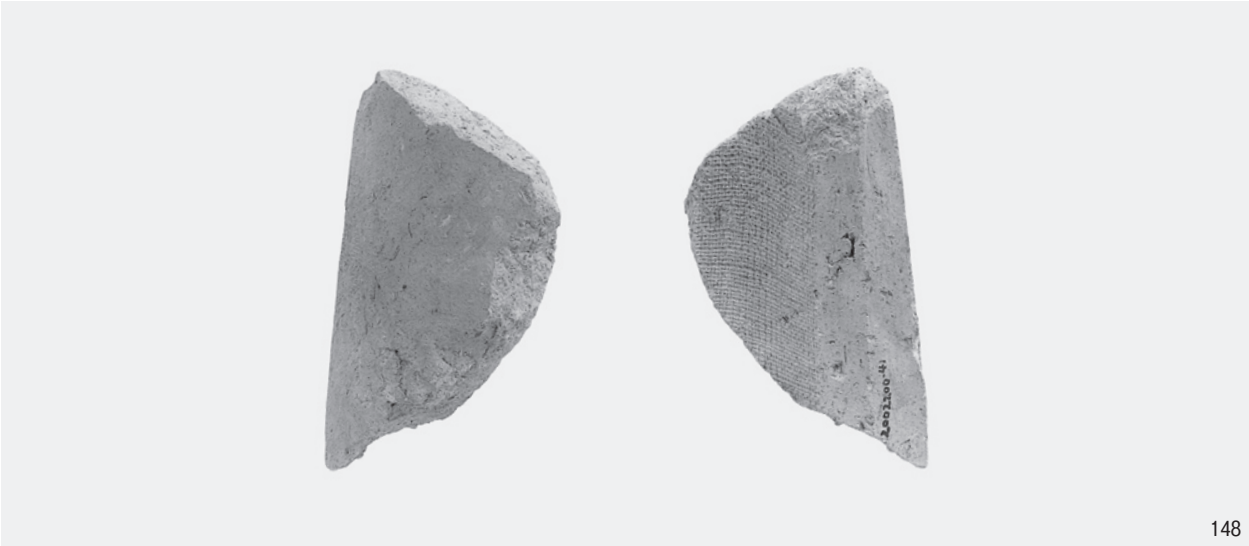
143

丸瓦④ T2・S1・S3類

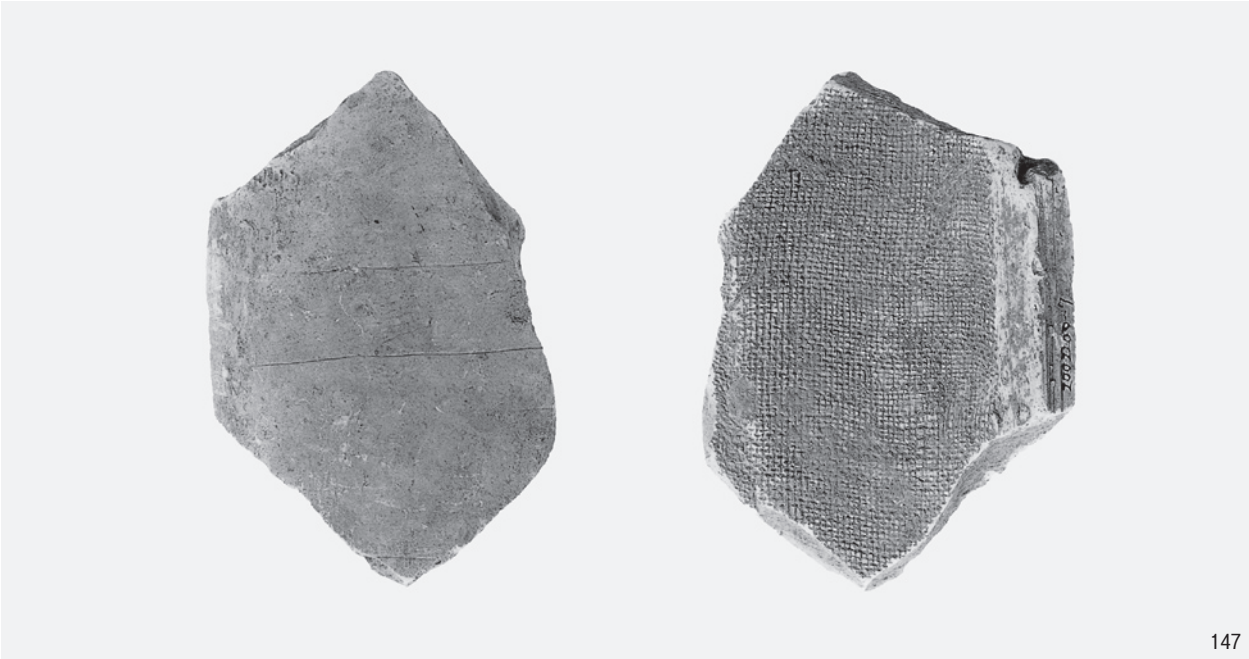




丸瓦⑤ S2・S3・S5類



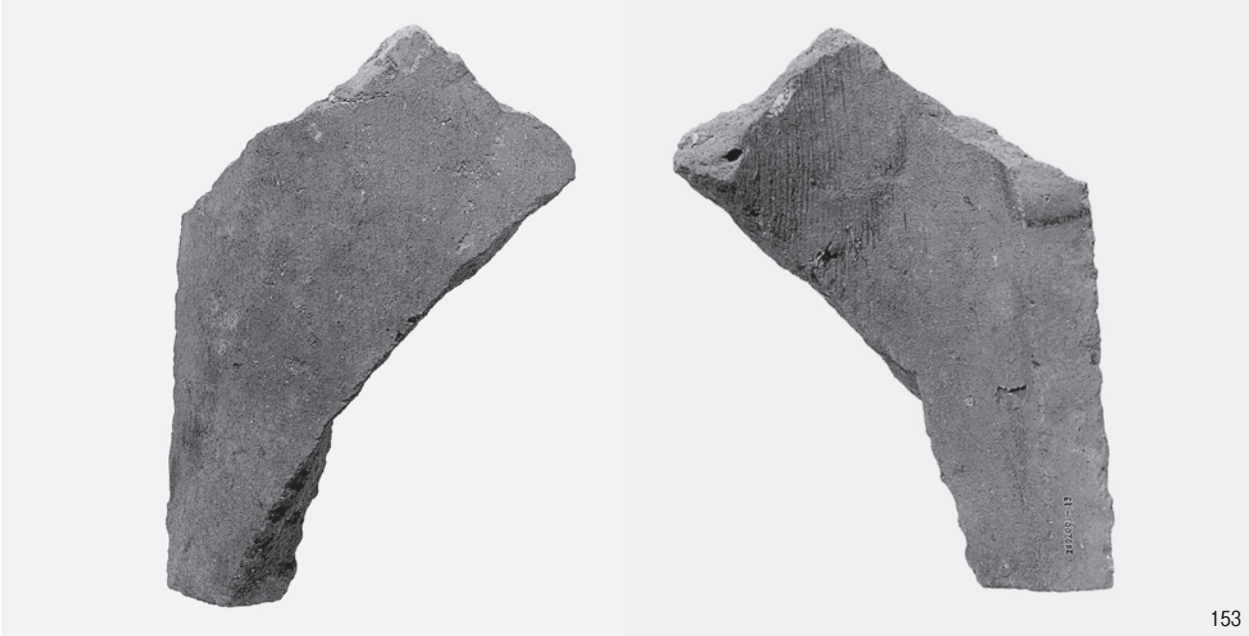
148



147

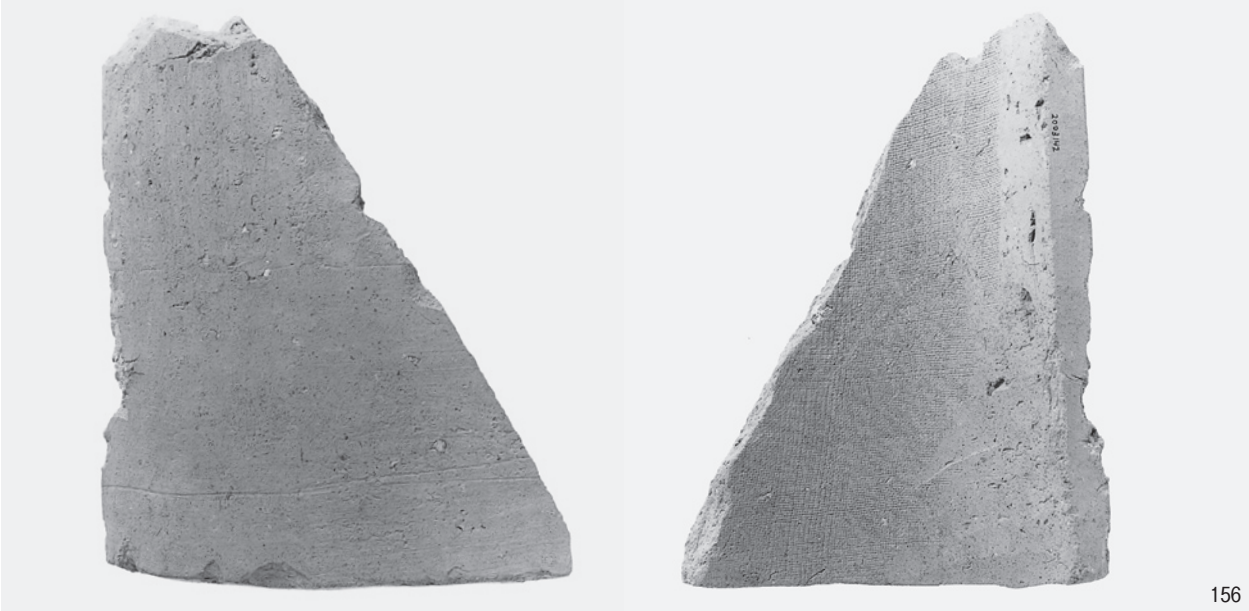
158

丸瓦⑥ S3・S4・S5類



丸瓦⑦ S6類

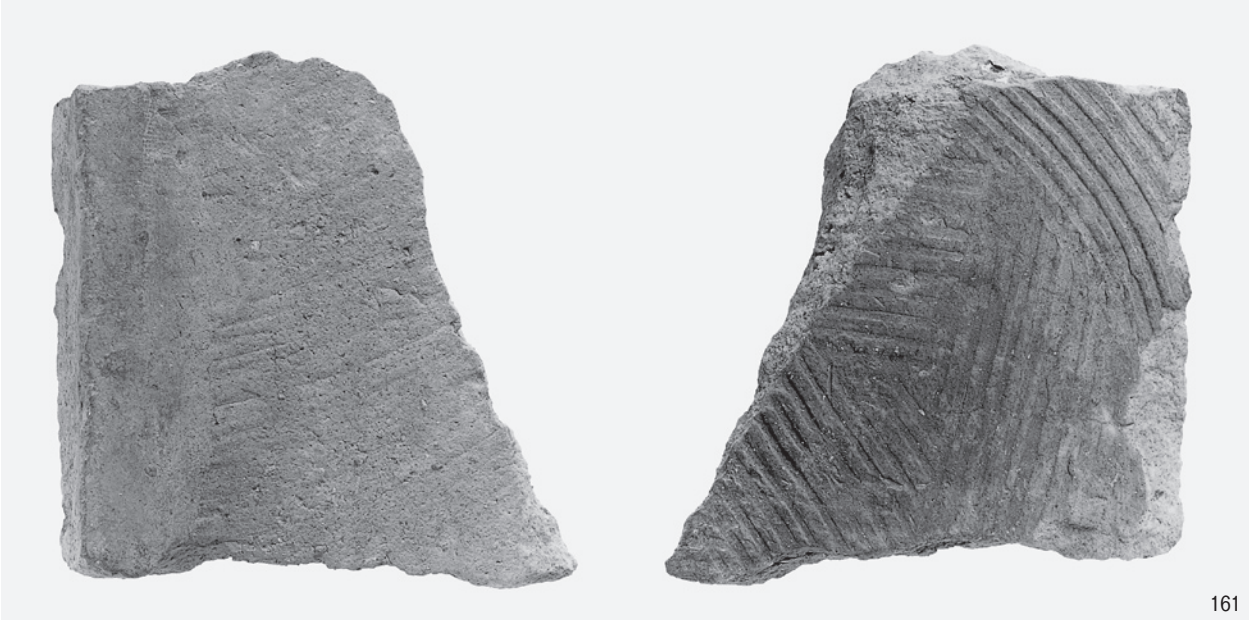
155


156

159

丸瓦⑧ S6類

160

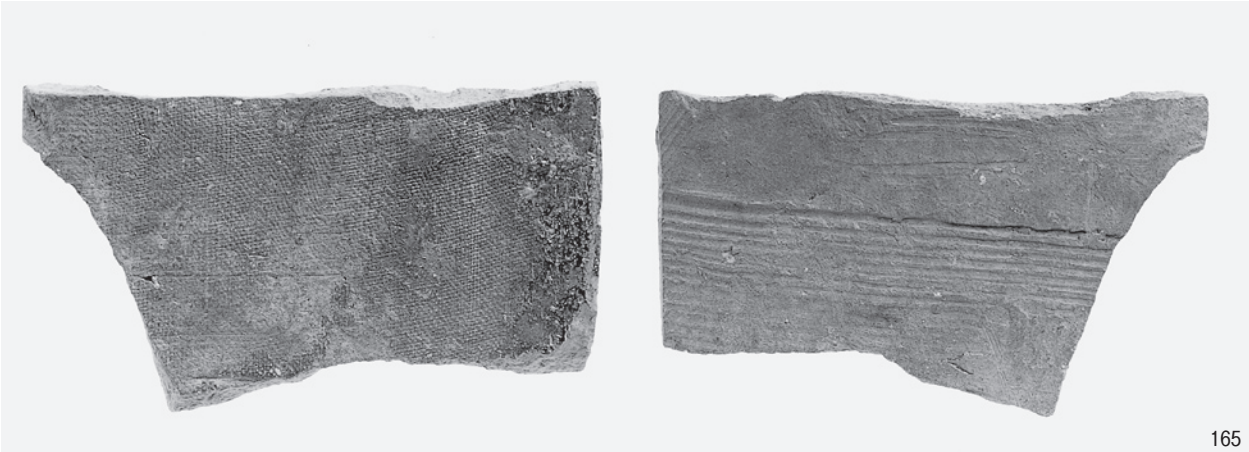

161

162

平瓦① J1類

163

164


165

166

平瓦② J1・J2・J3類

167

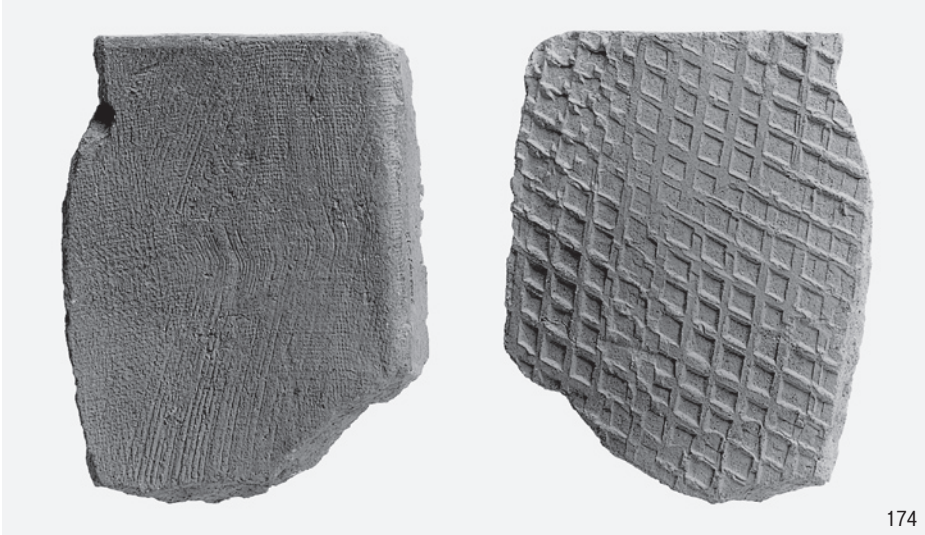
168

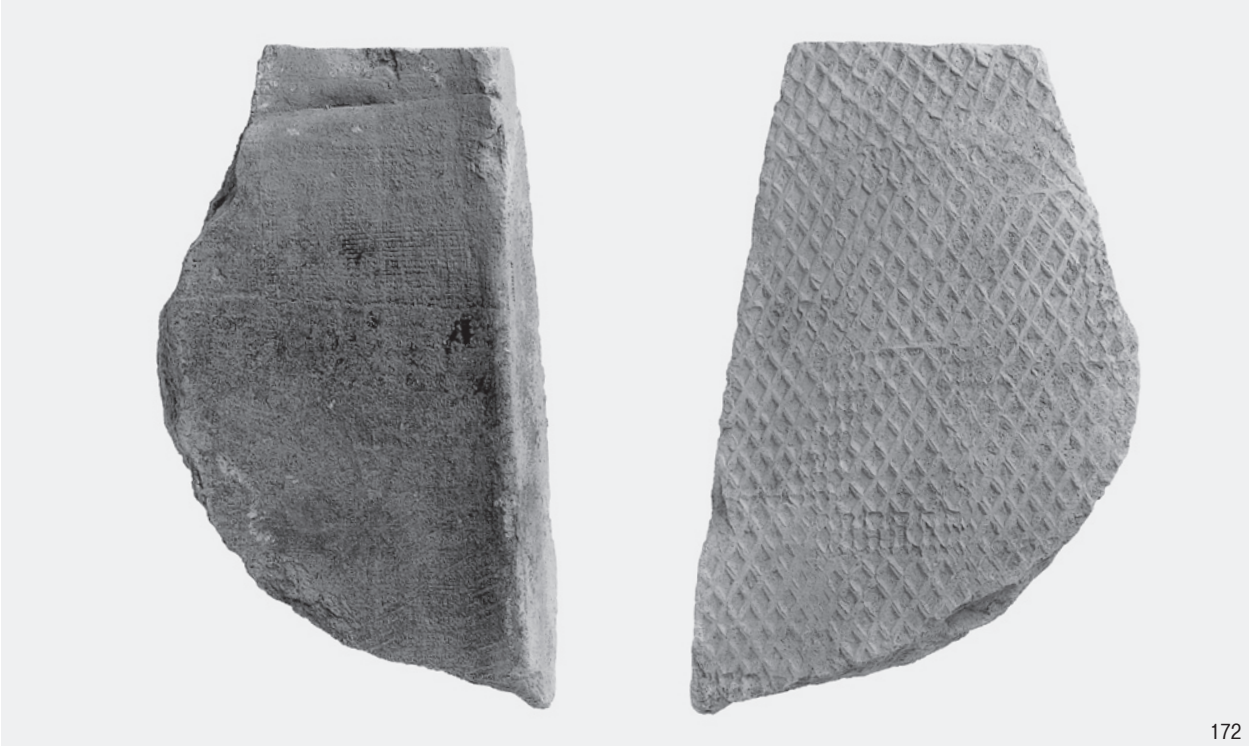
169

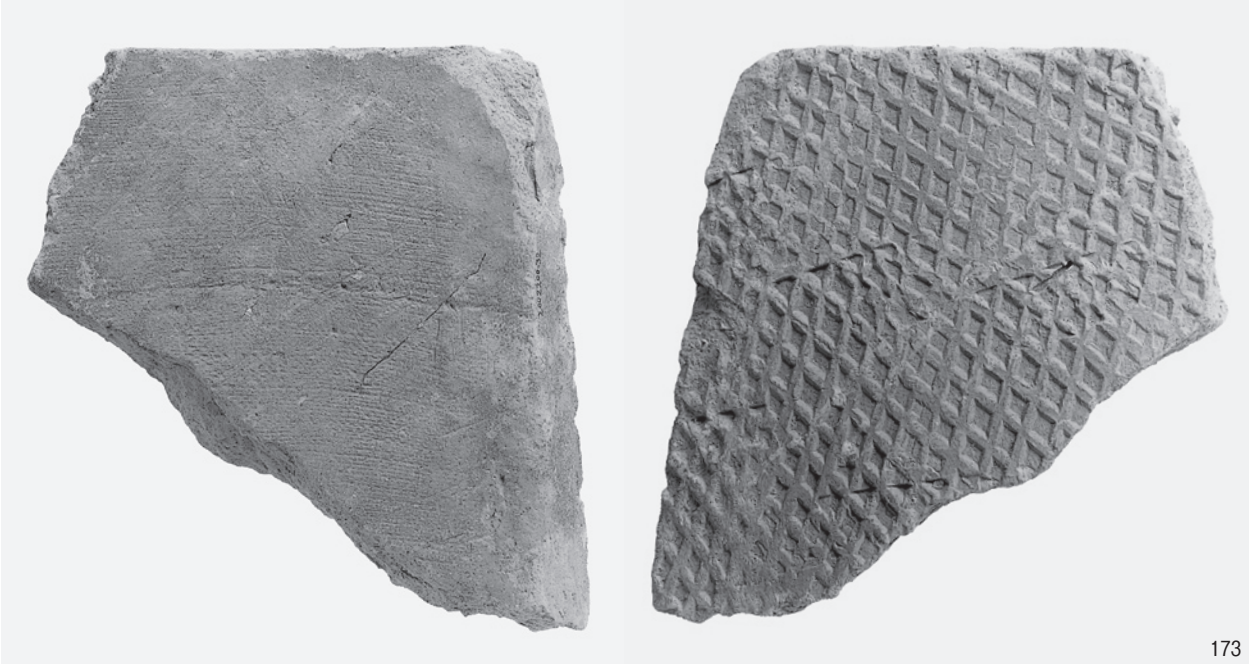
170

平瓦③ L1・L2類

171

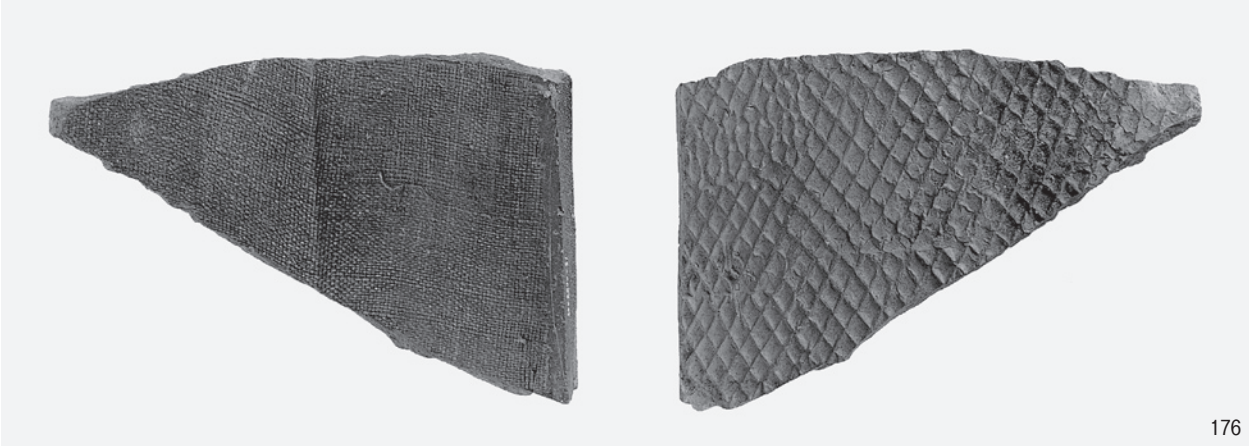

174


172


173

平瓦④ K1・K2類

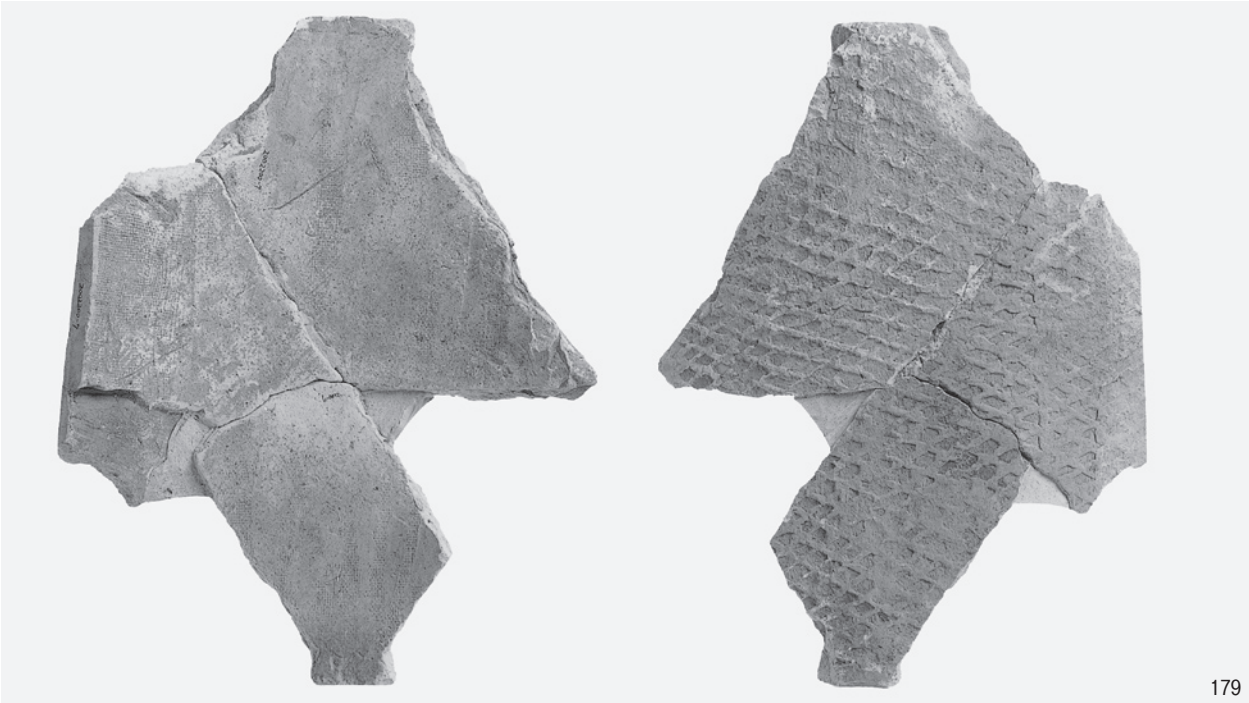
175


176

177

178

平瓦⑤ K2・K3・K4類

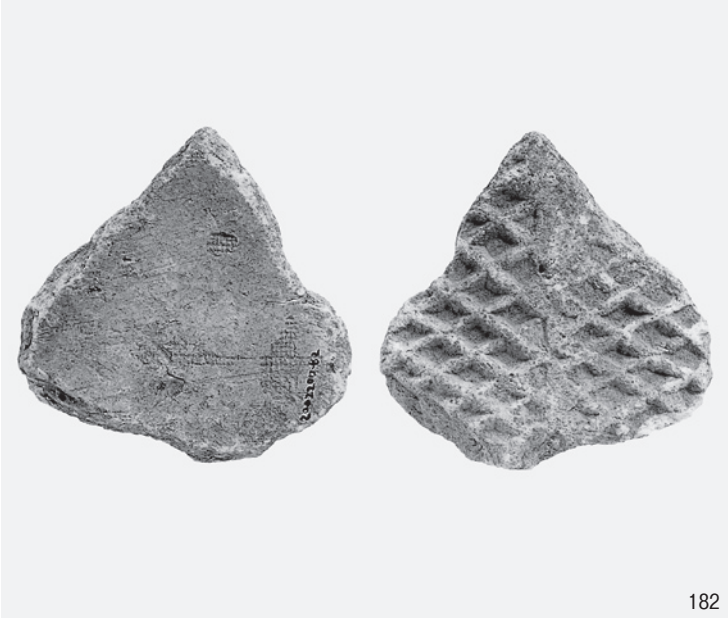


179

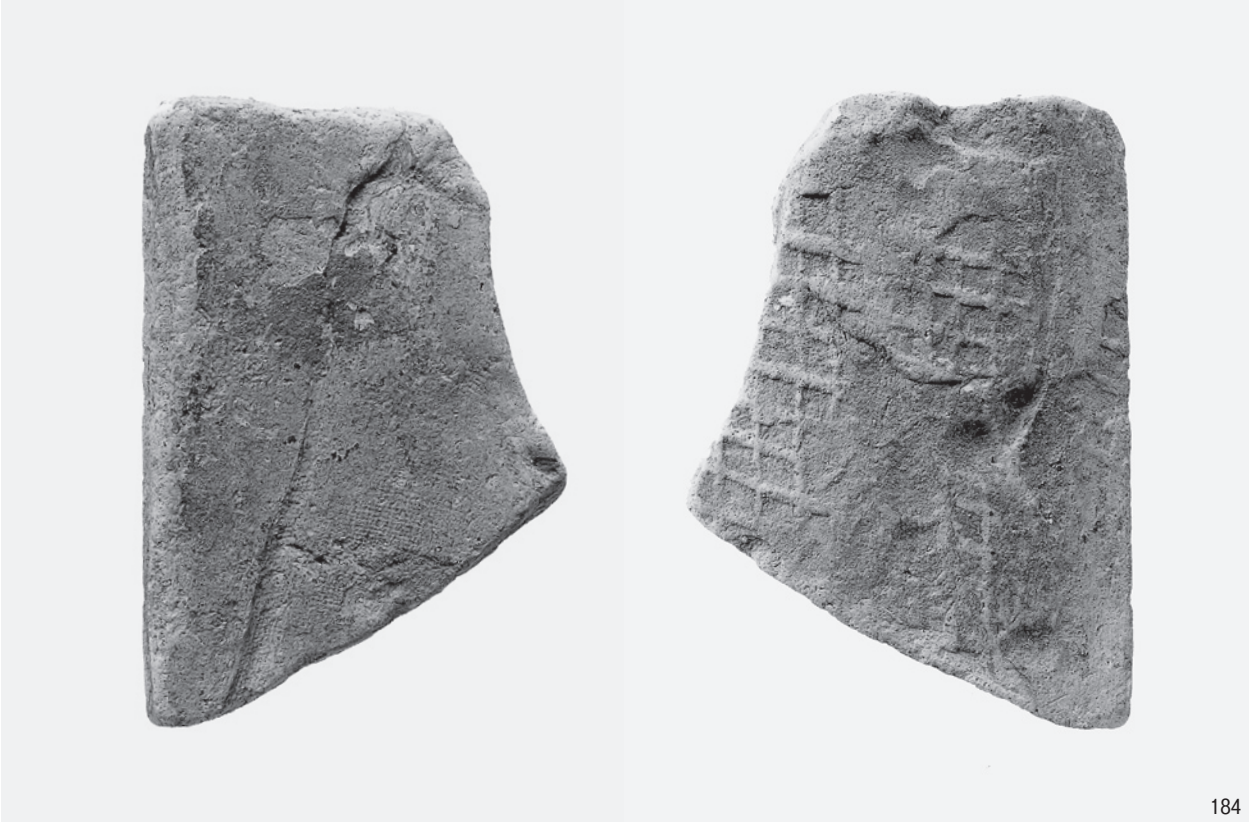
180

181

平瓦⑥ K5類


182

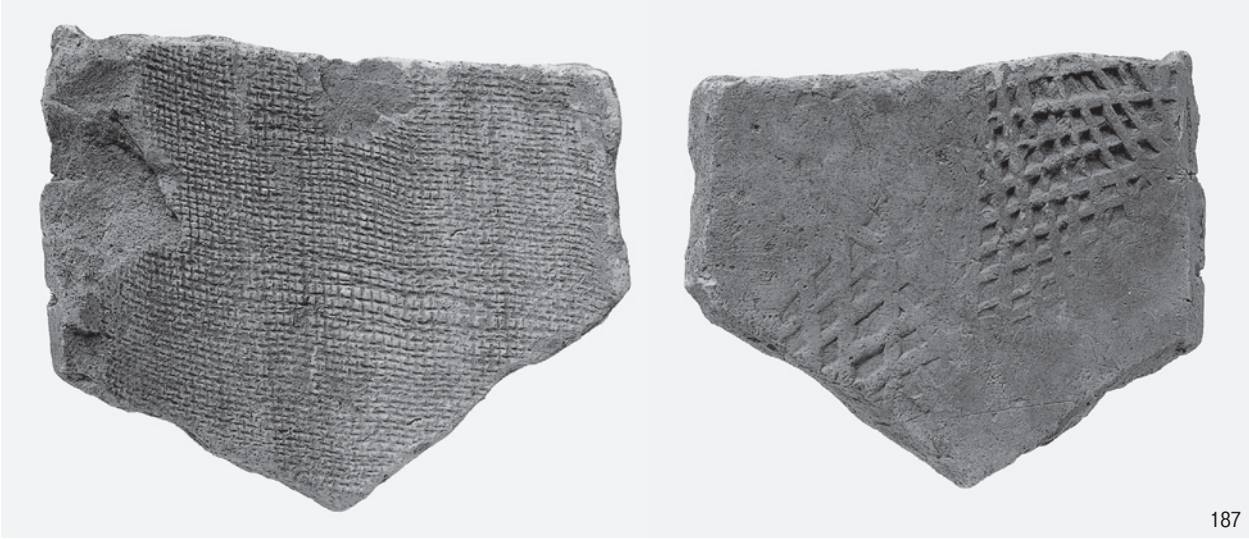
183


184

185

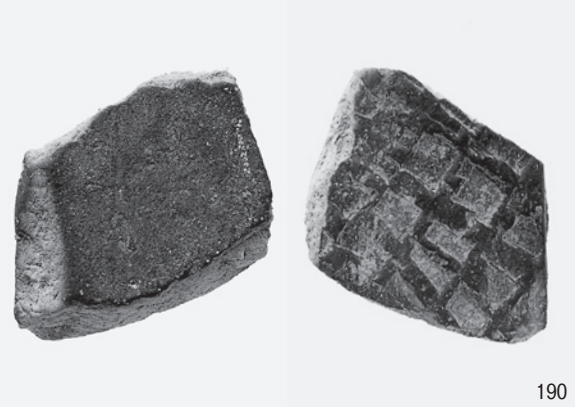
平瓦⑦ K6・K7・K8・K9類

186

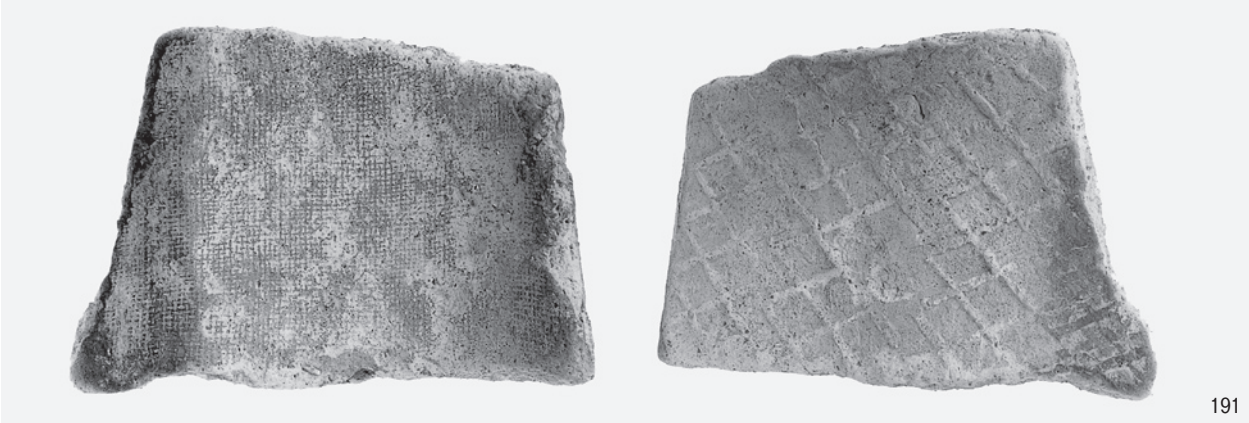

187

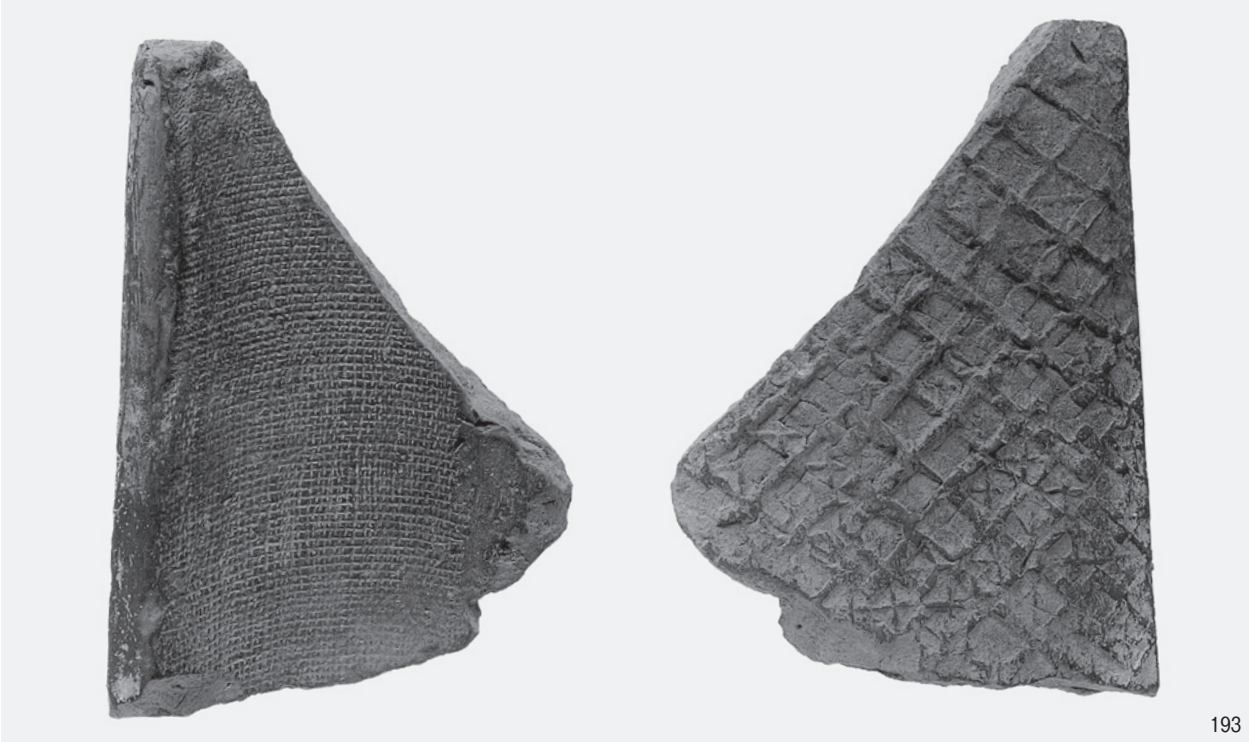
188

189


190

平瓦⑧ K9・K10・K11類

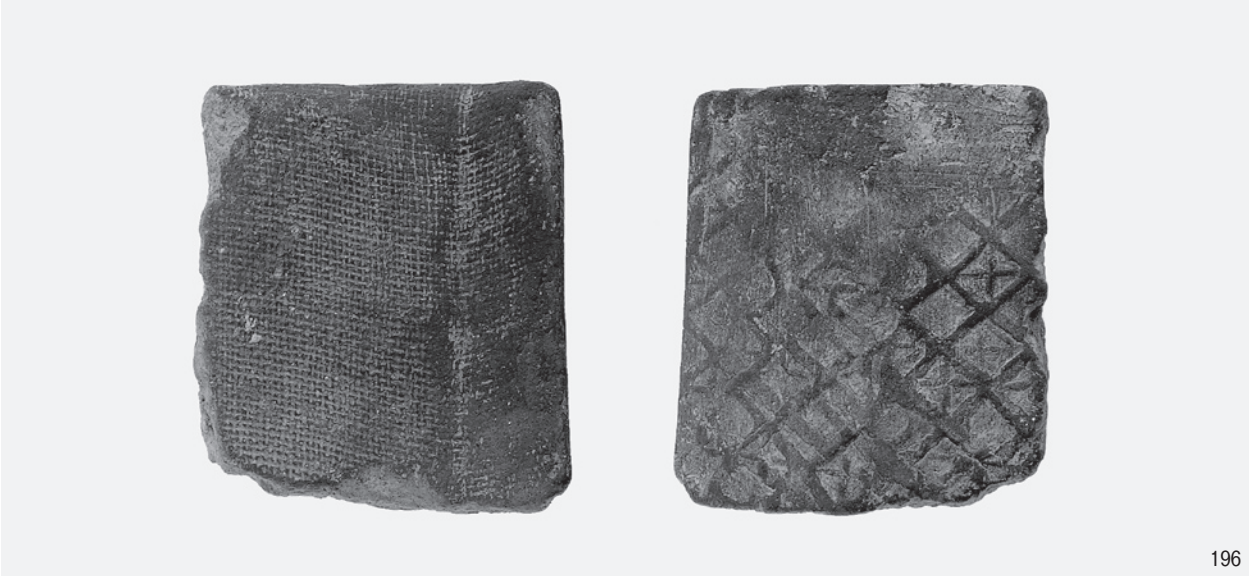




平瓦⑨ K12・K13類

194

195



196

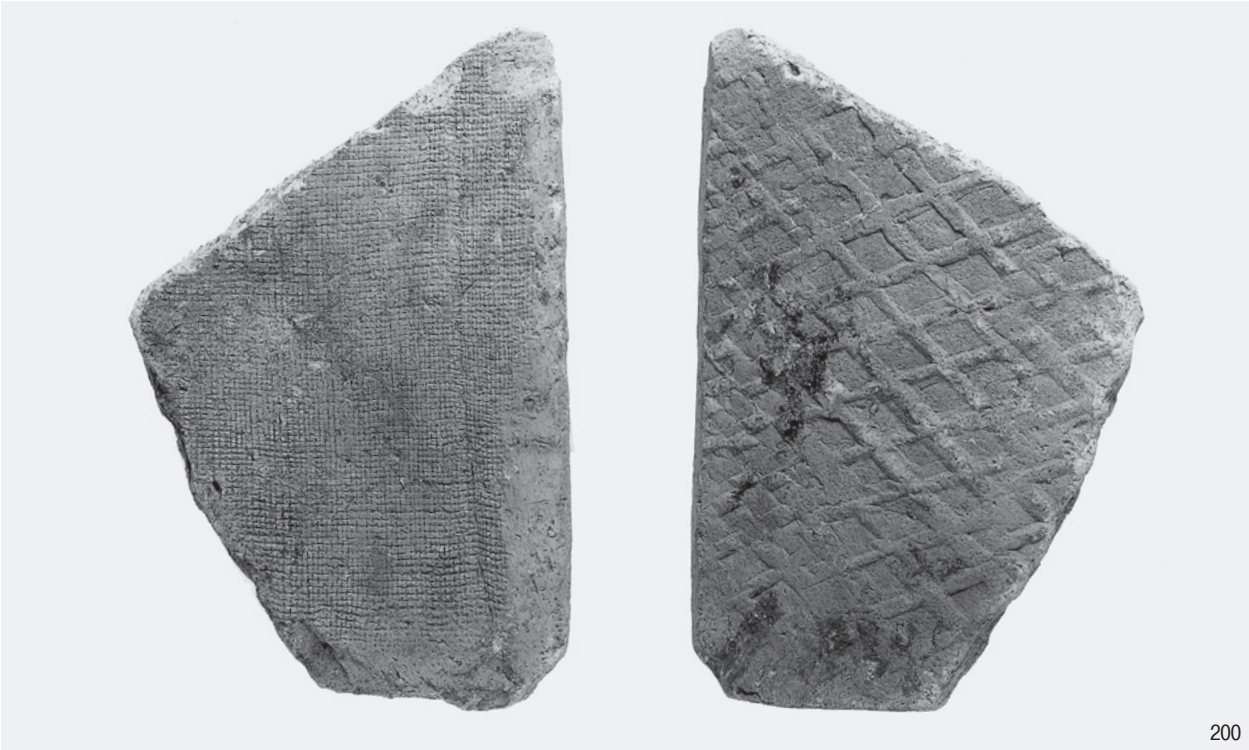
平瓦⑩ K13類

197

198

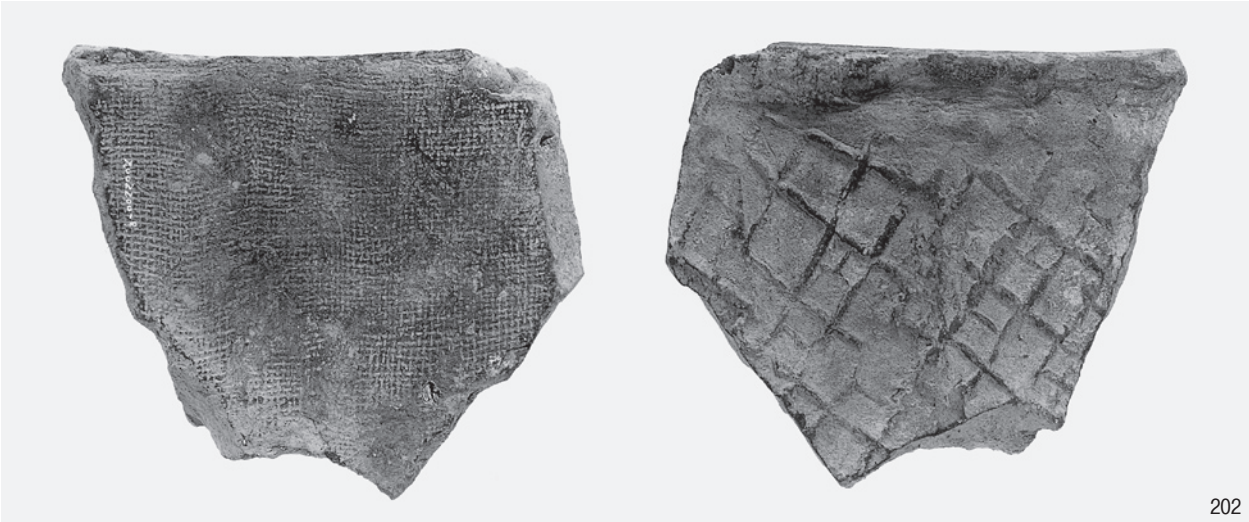
199

平瓦⑪ K14類



200

201



202

平瓦⑫ K14・K15類

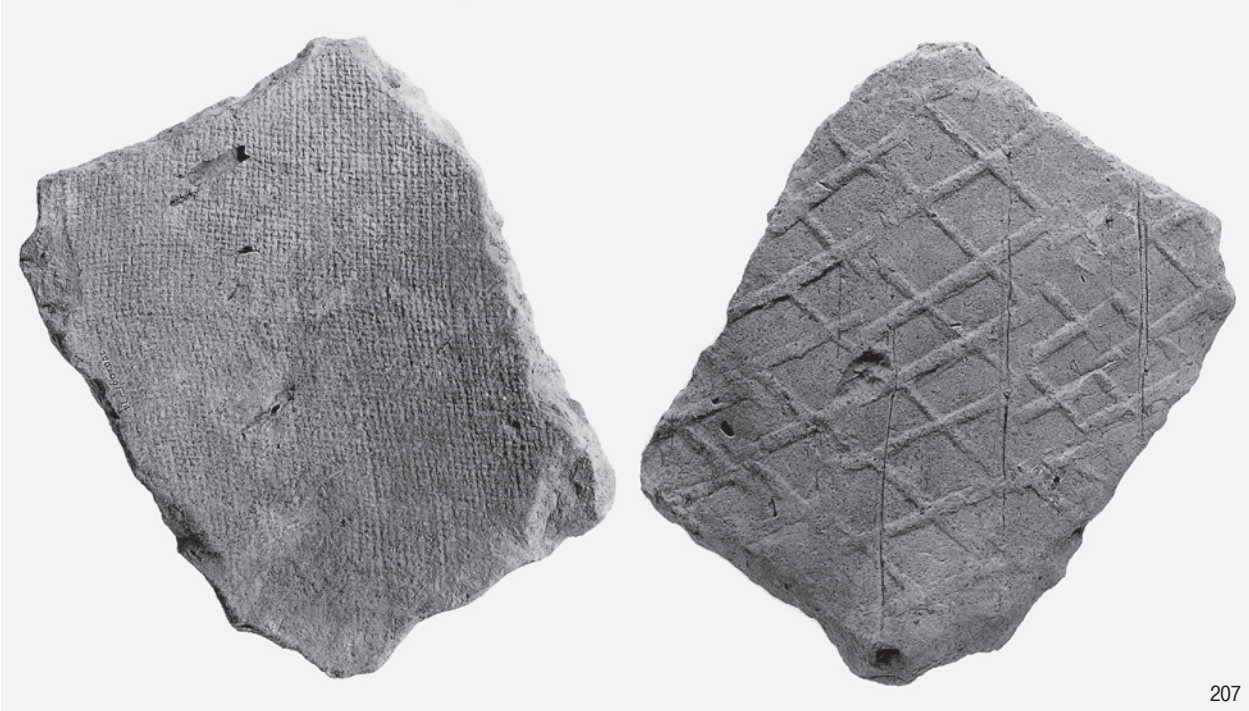
203

204

205

平瓦⑬ K15・K16類

206



207

208

平瓦⑭ K16類

209

210

211

平瓦⑮ K16・K17類

212

213

214

平瓦⑯　K17類

215

216

217

平瓦⑰ K18類

218

219

221

平瓦⑱ K18・K19類

220

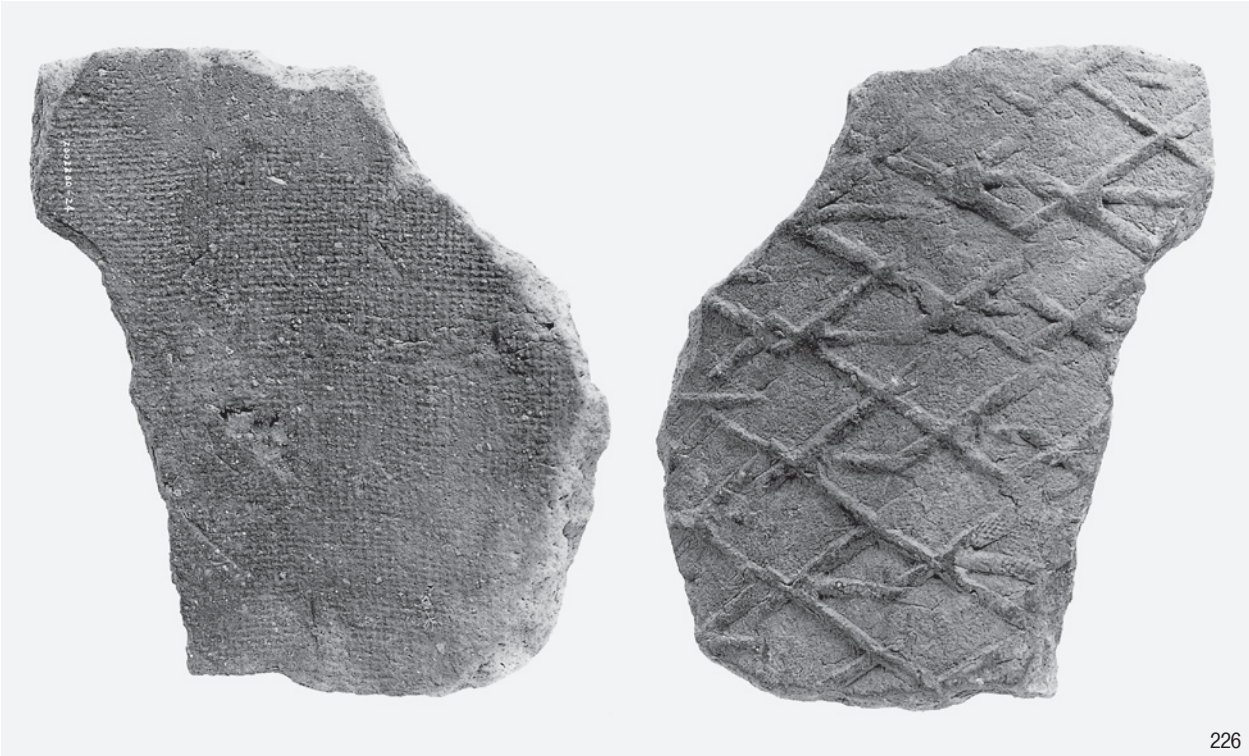
222

223

平瓦⑲ K19・K20類

224

225



226

平瓦⑳ K21類

227

228

230

平瓦㉑ K22・K23・K24類

229

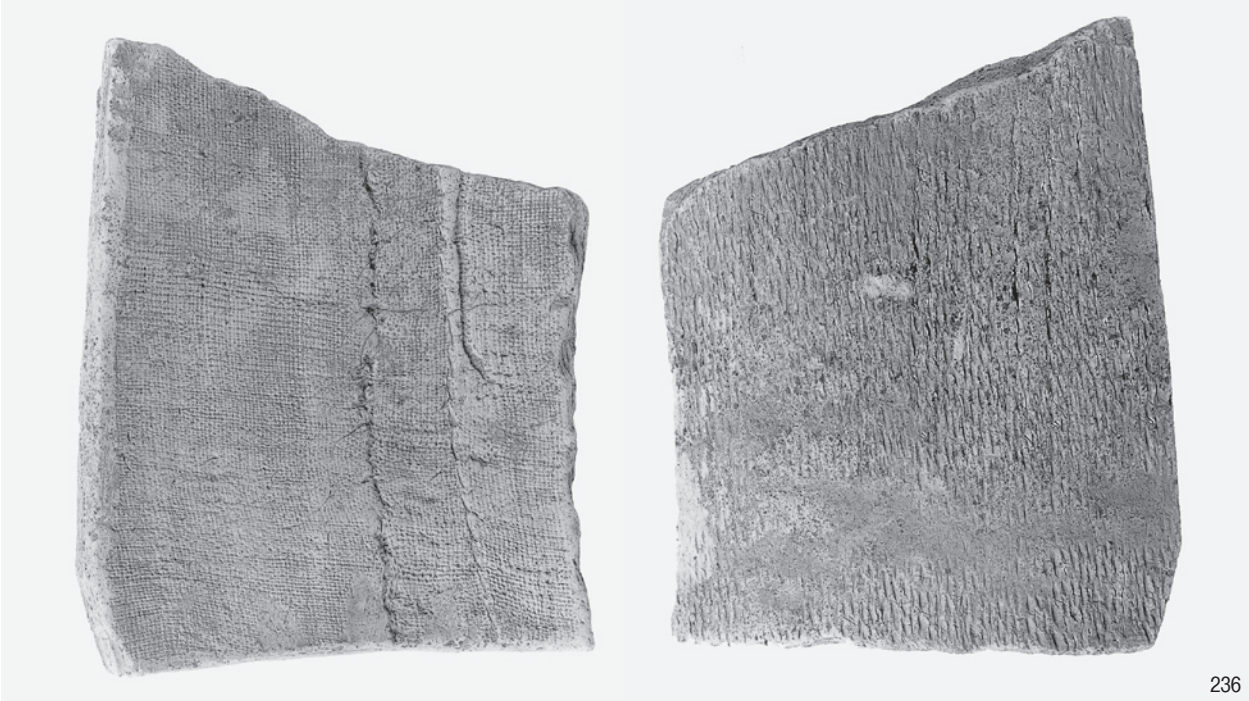
231

232

233

平瓦㉒ K24・K25類

235



236

237

平瓦㉓ N1類

238

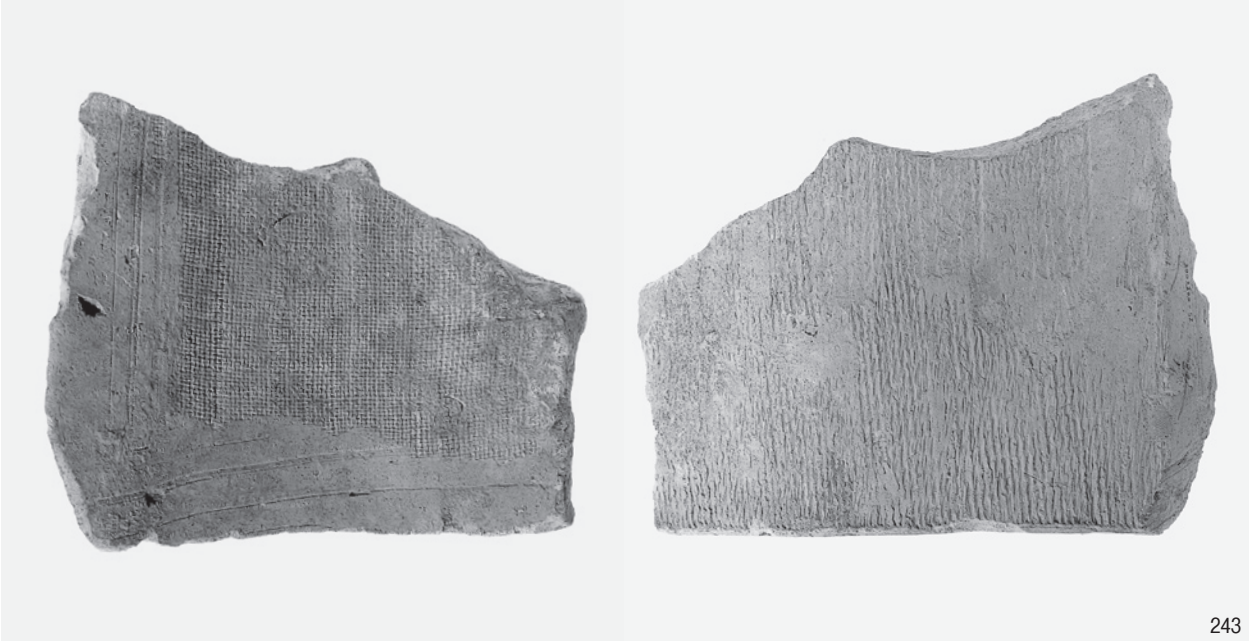
239

240

平瓦㉔ N1類

241

242



243

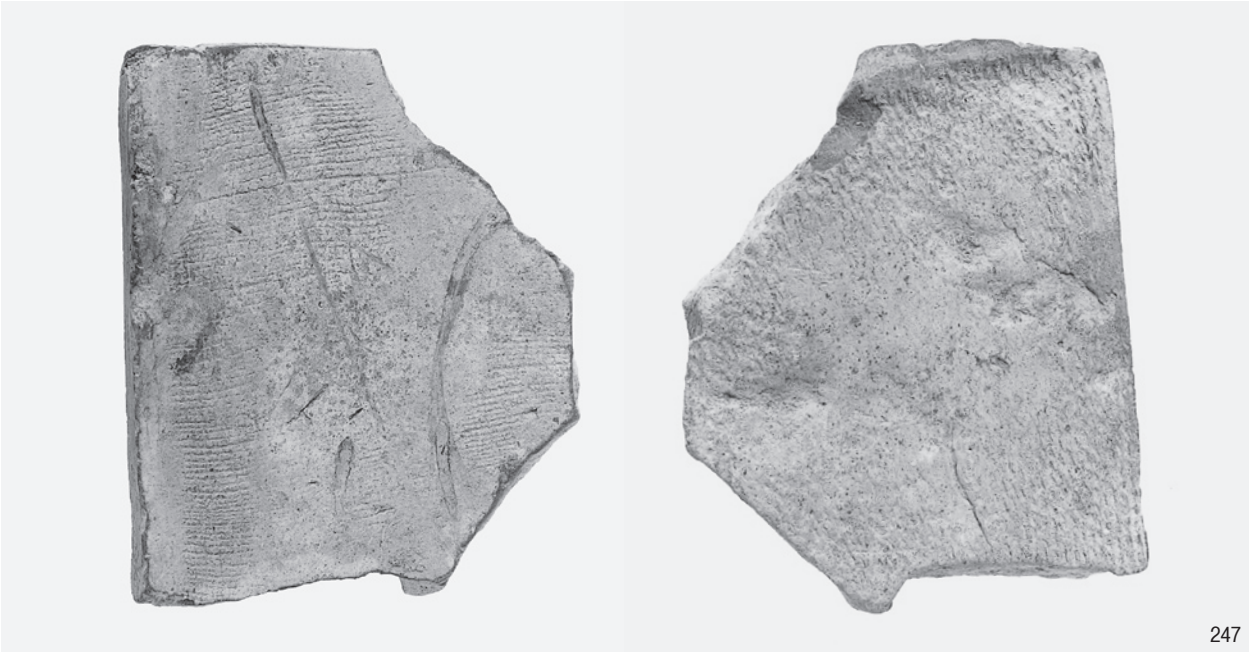
平瓦㉕ N1・N2類

244

245

246

平瓦㉖ N2・N3類



247

248

249

平瓦㉗ N3類

250

251

252

平瓦㉘ N3類

253

254

255

平瓦㉙ N4類

256

257

258

平瓦㉚ N4・N5類

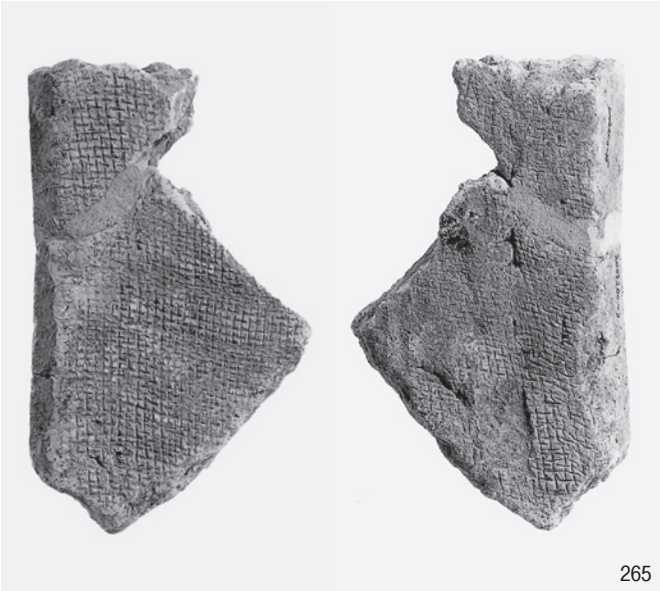
平瓦㉛ N5・N6類

262

263

264

平瓦㉜ N6・N7・W1類

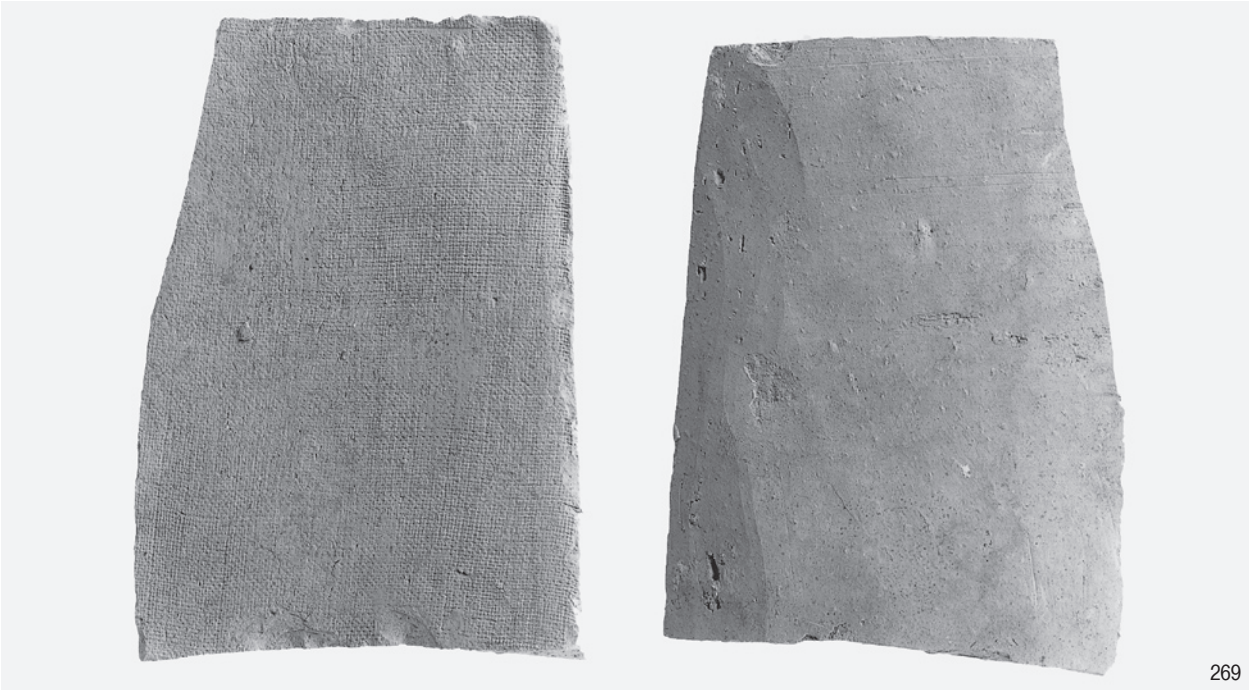

265

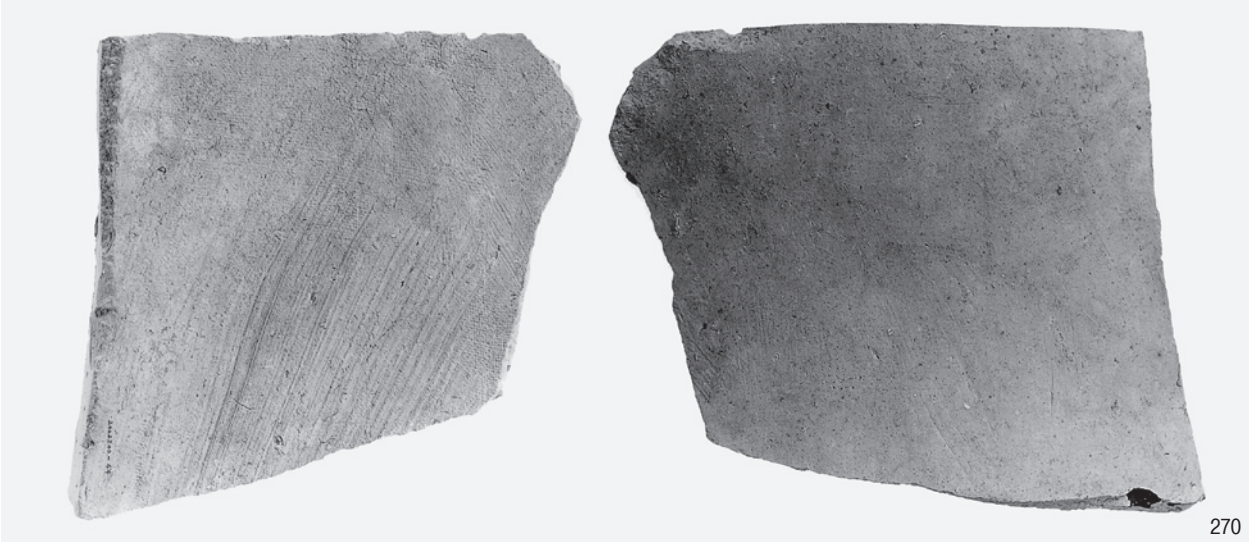
266

267

268

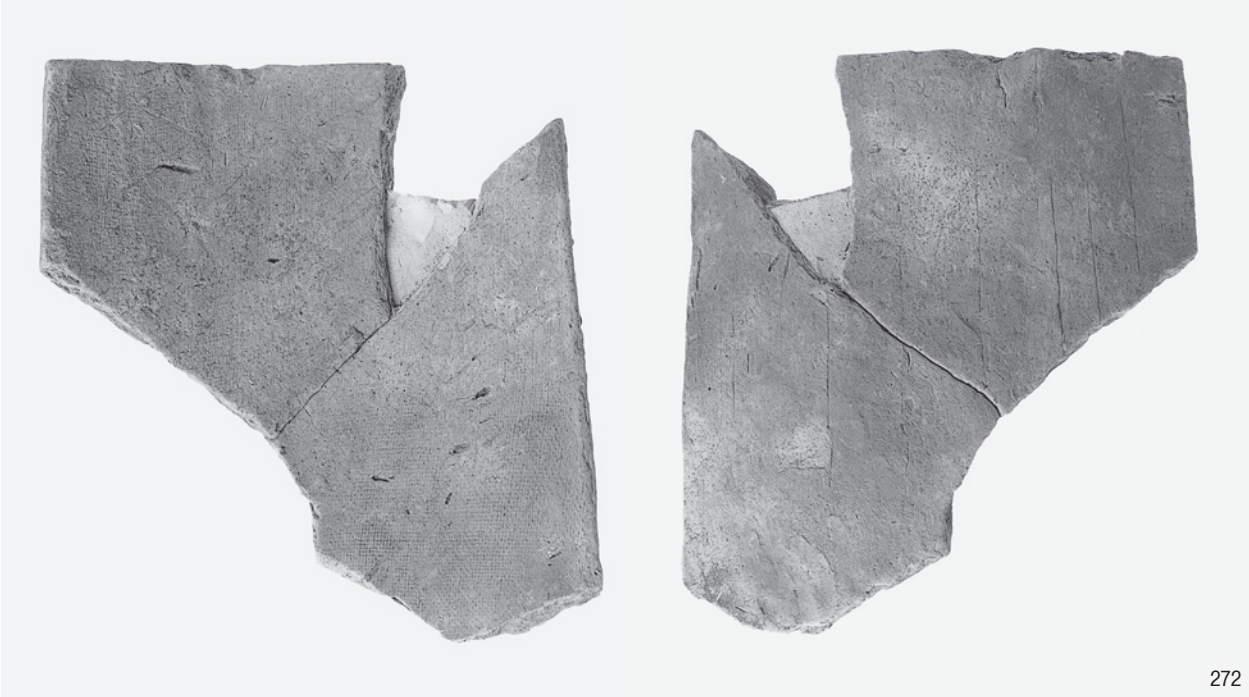
平瓦㉝ W2・W3類





平瓦㉞ W1・W3類

271



272

274

平瓦㉟ W1類

275

278

276

277

鴟尾① A類

279

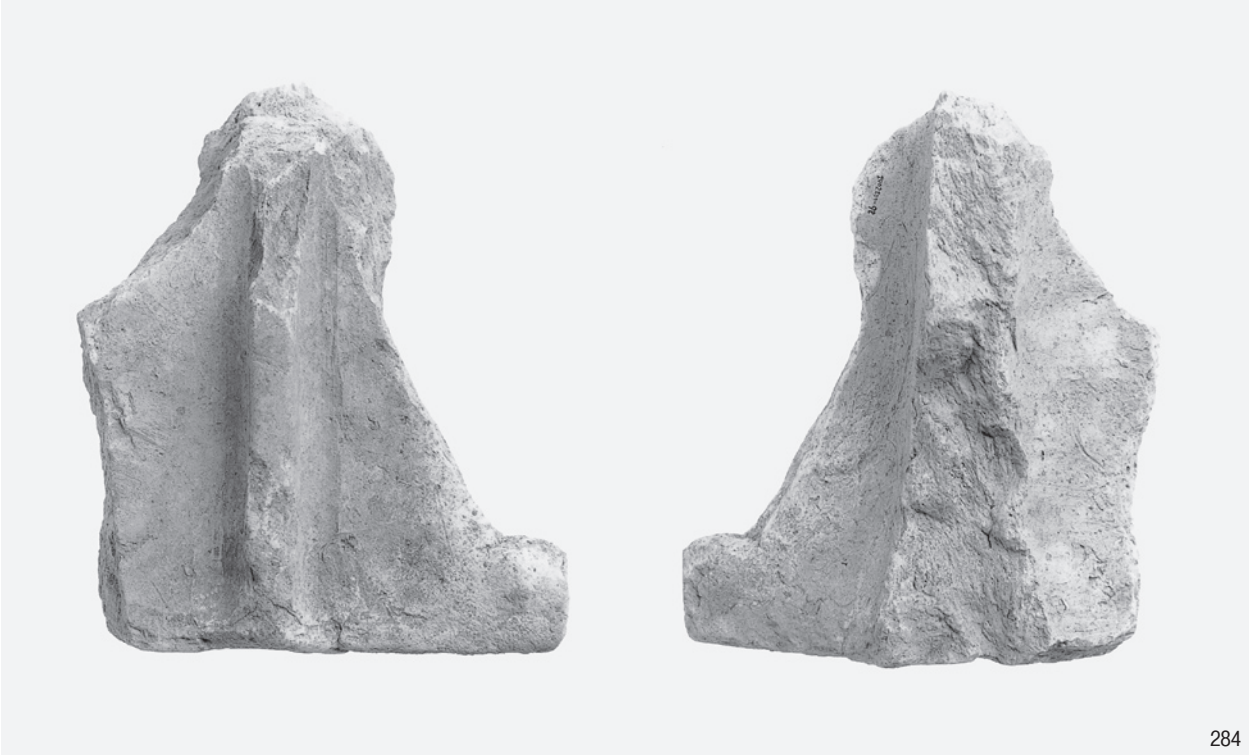
280

281

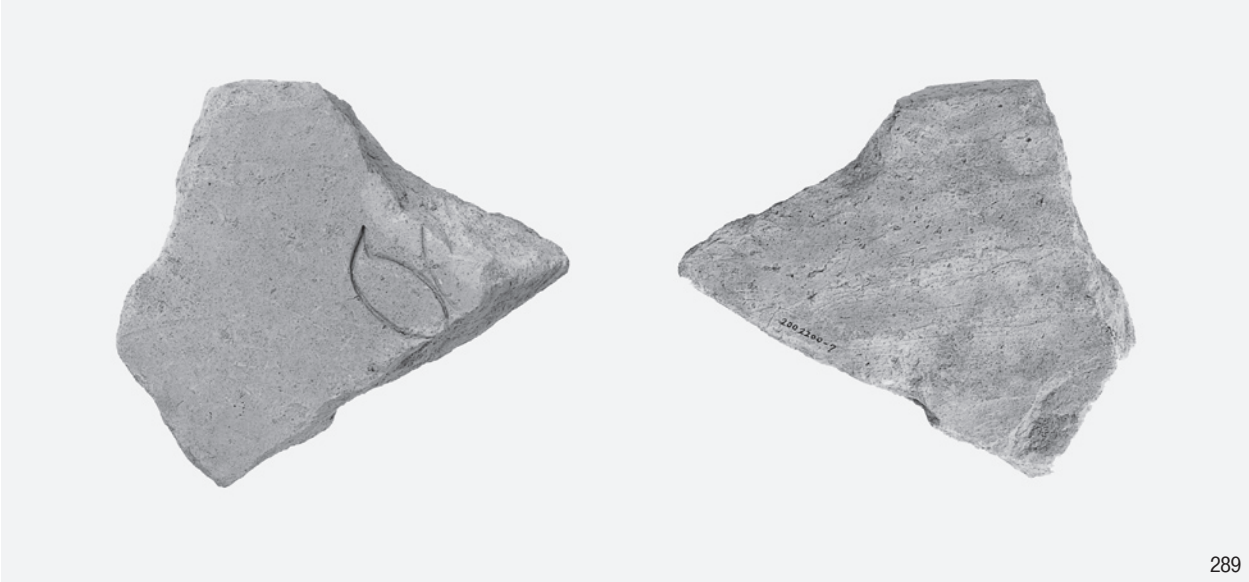
282

鴟尾② B類

283



284



289

鴟尾③ B類他

面戸瓦・塼

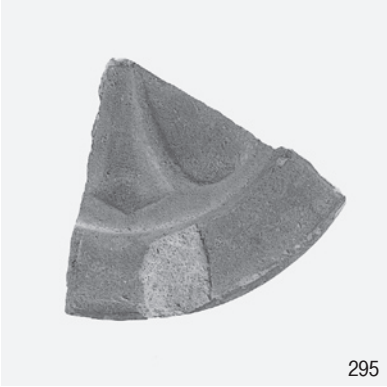
291

294

292

293

296

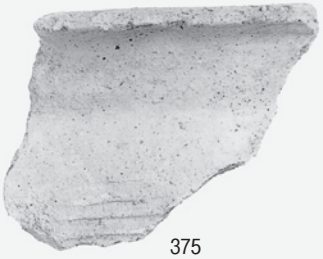

295

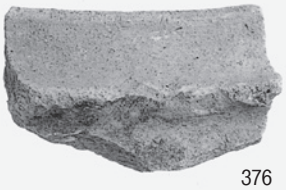
297

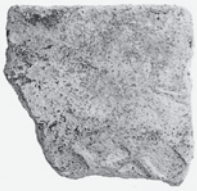
近世瓦

298

299


375


376


377

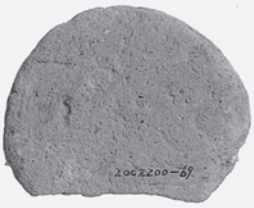
300

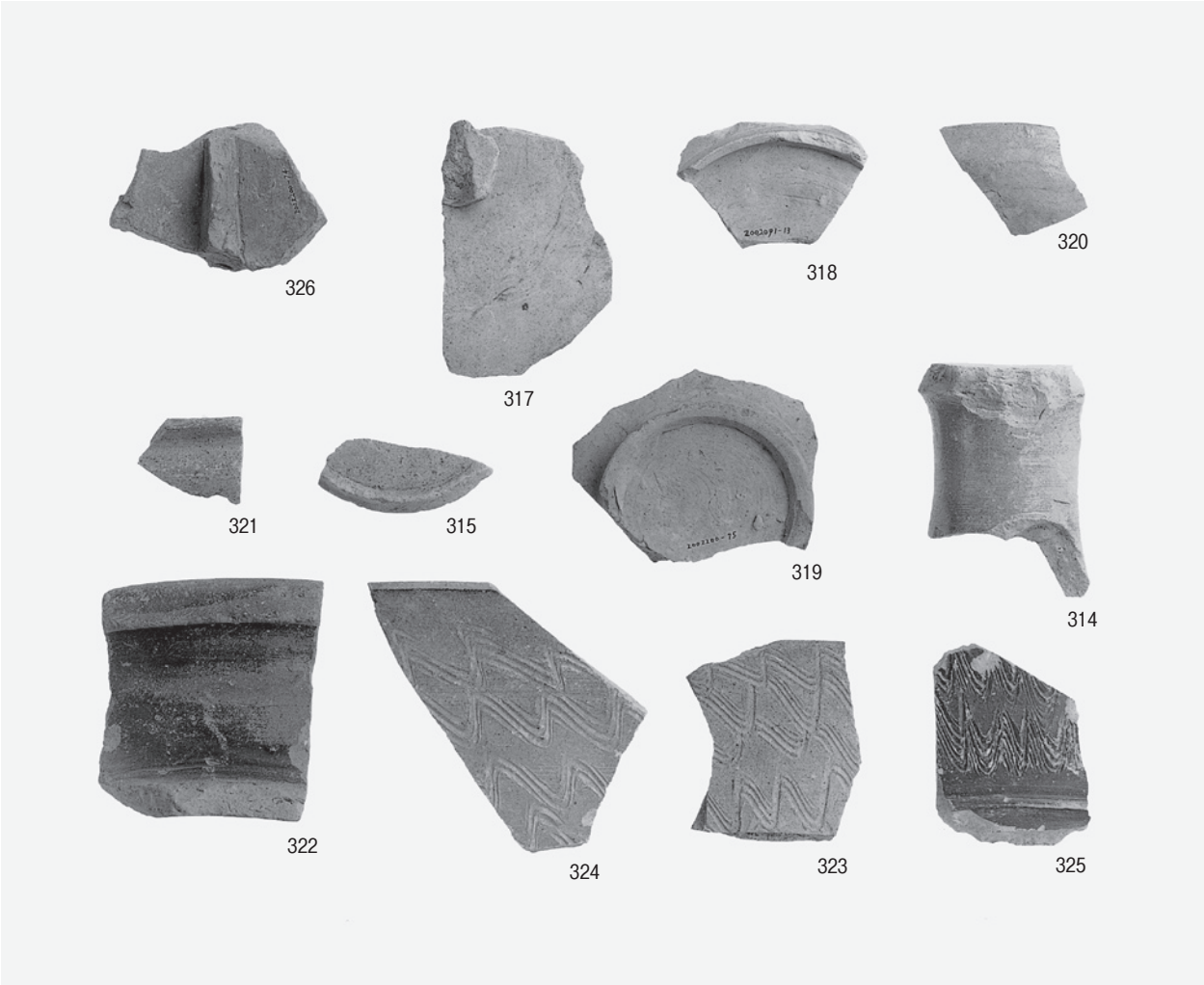
302

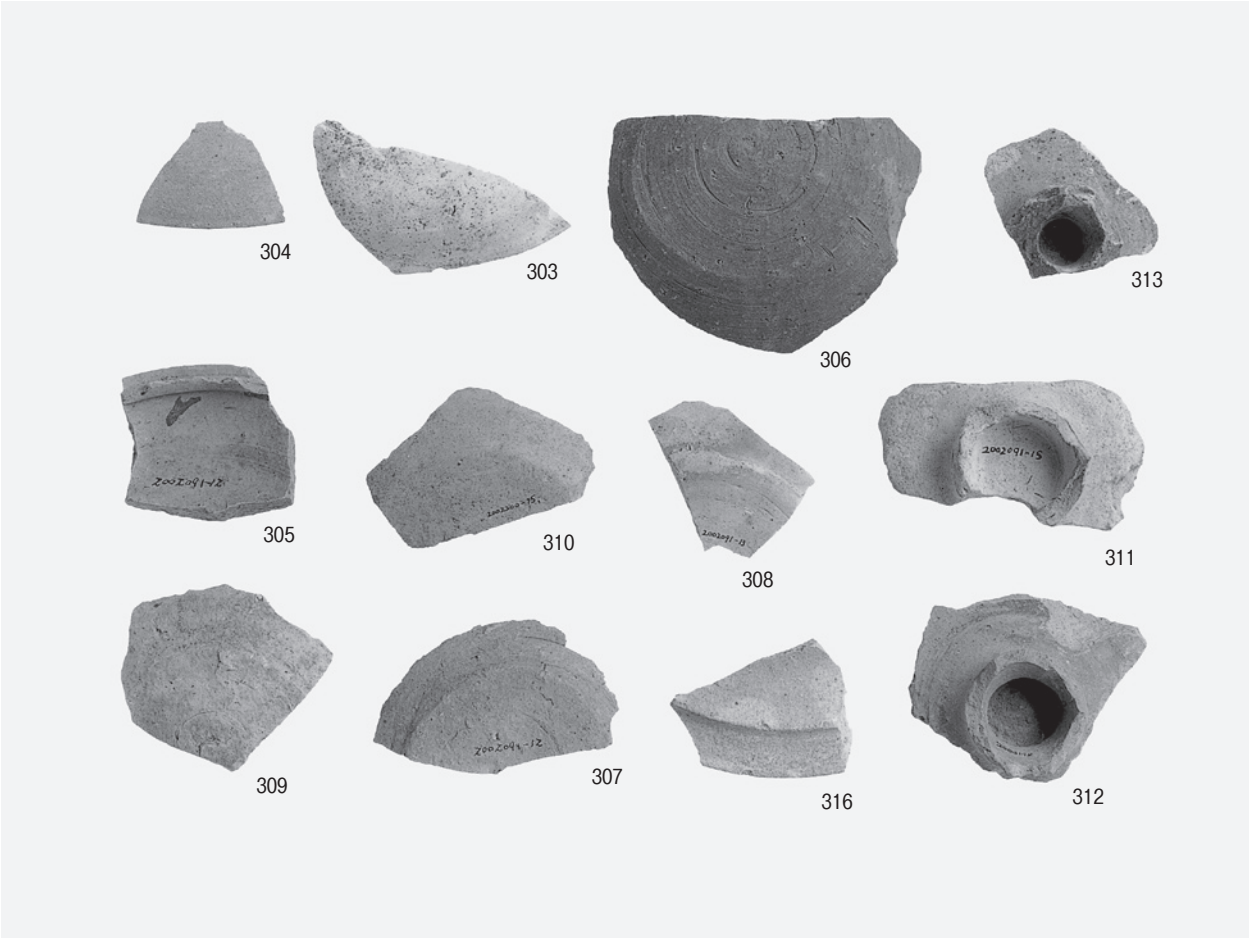
301

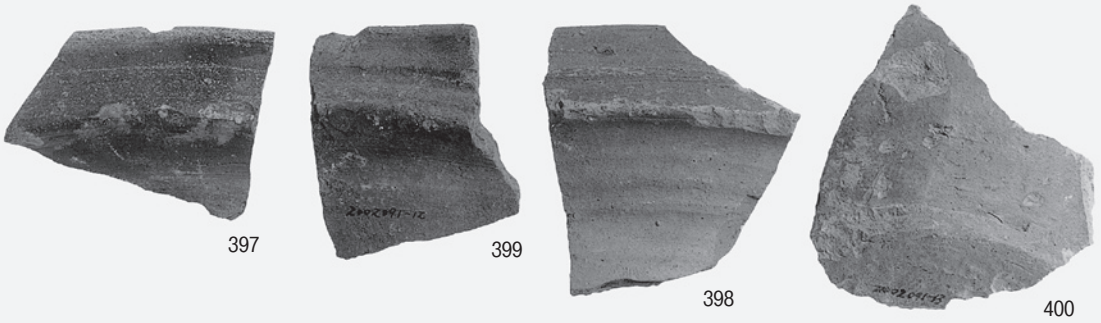
327

328

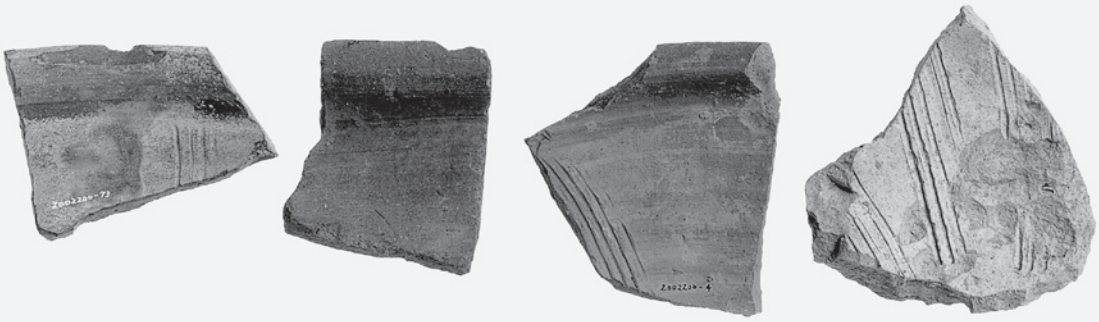

329


326
317
318
320
321
315
319
314
322
324
323
325


304
303
306
313
305
310
308
311
309
307
316
312

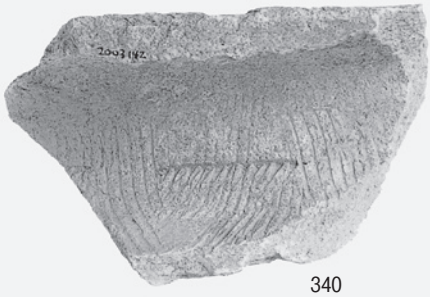


397　399　398　400

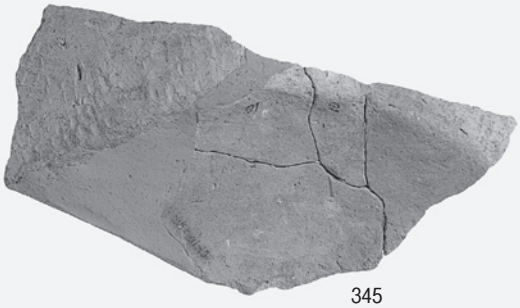


344

346

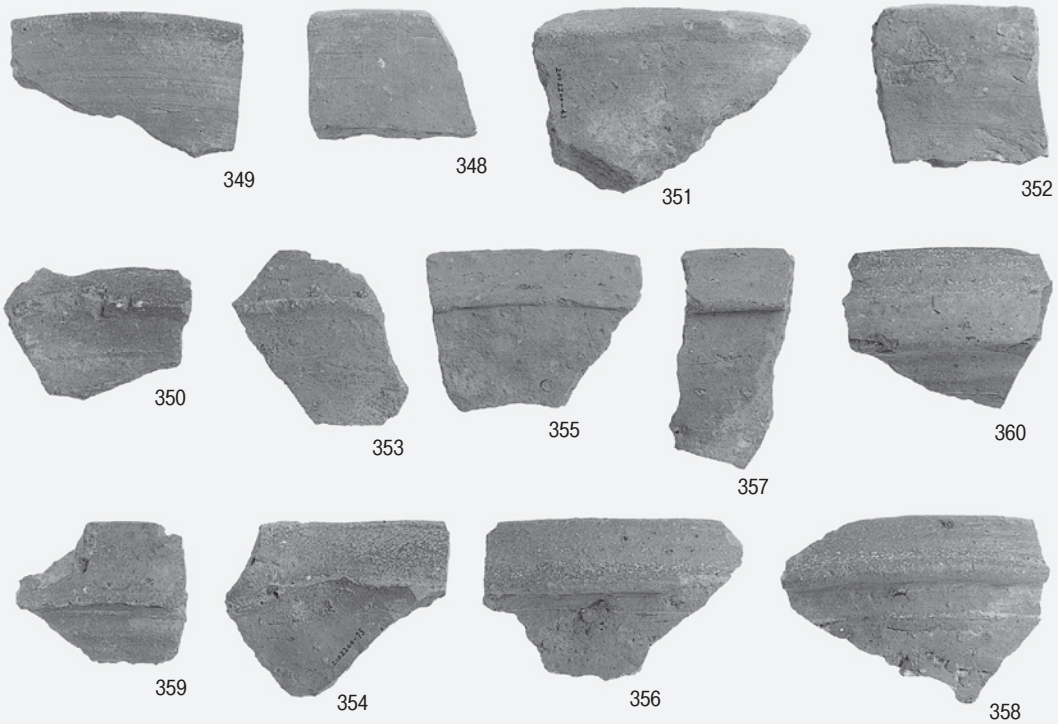


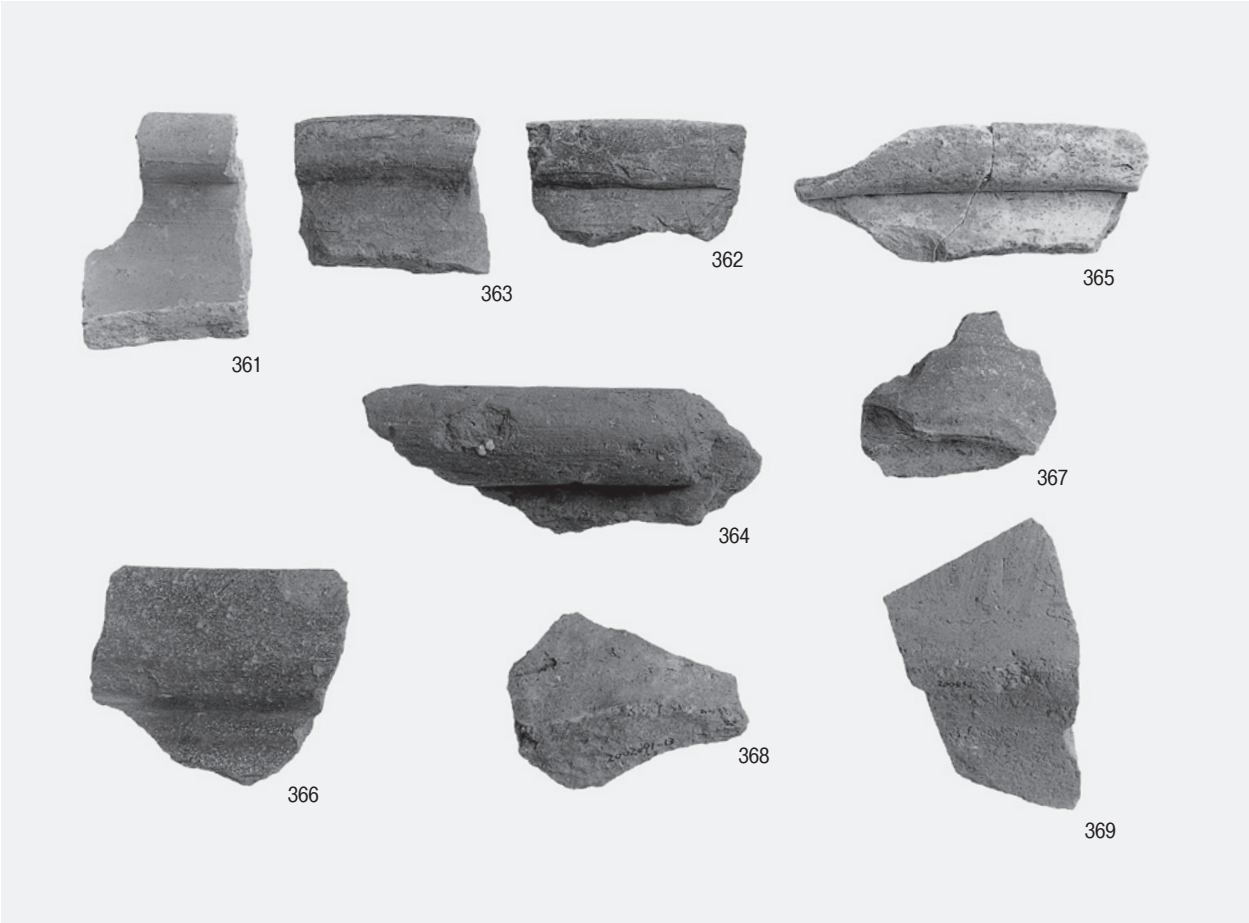
340

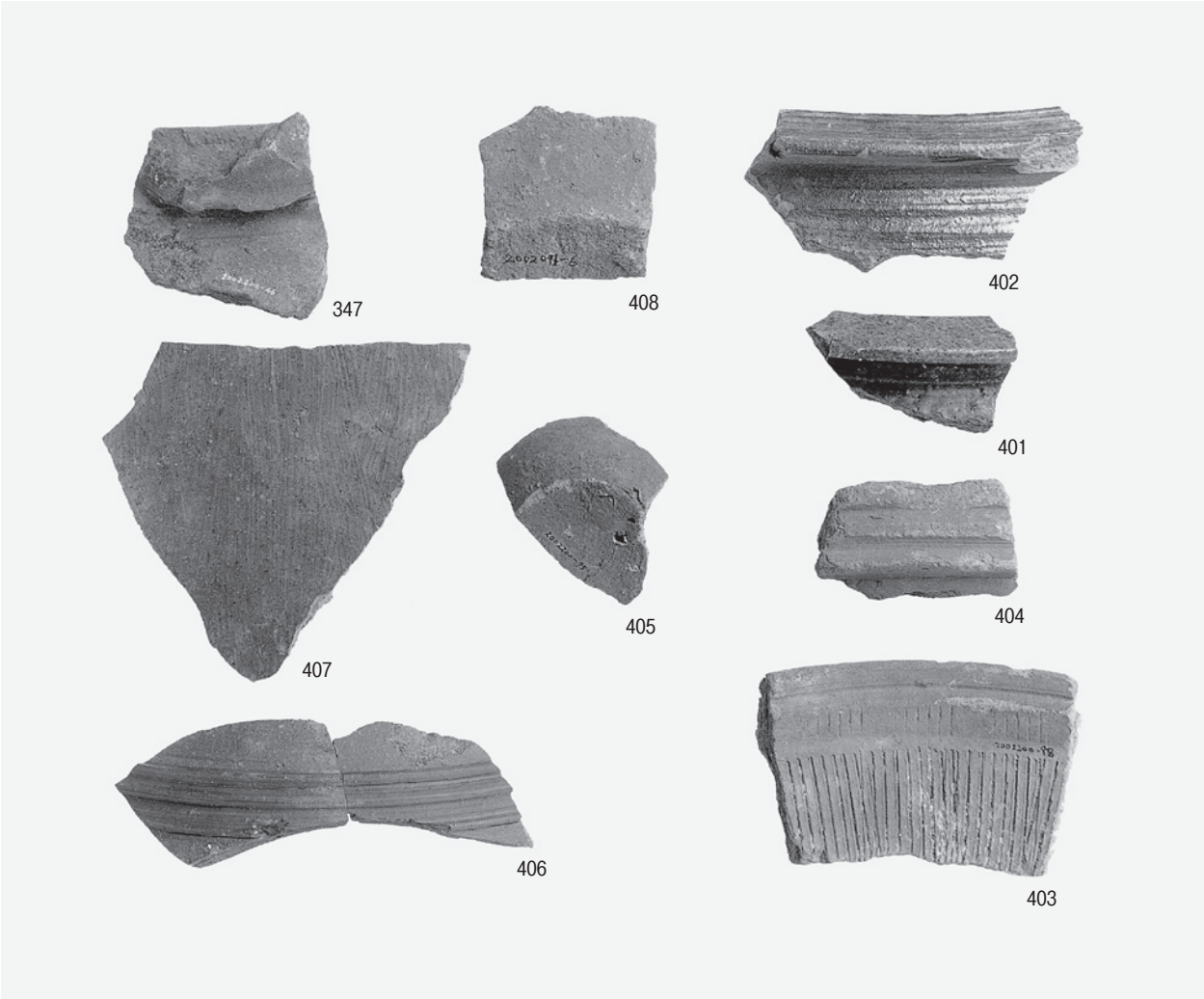


345

土器③


349
348
351
352
350
353
355
357
360
359
354
356
358


361
363
362
365
364
367
366
368
369

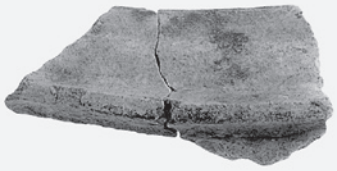

347
408
402
401
407
405
404
406
403

土器⑤

396

394

395


383

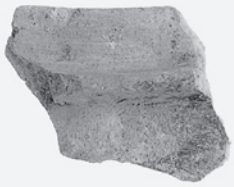
384

385

382

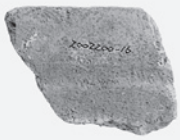
380

381


387

386

379


378

388

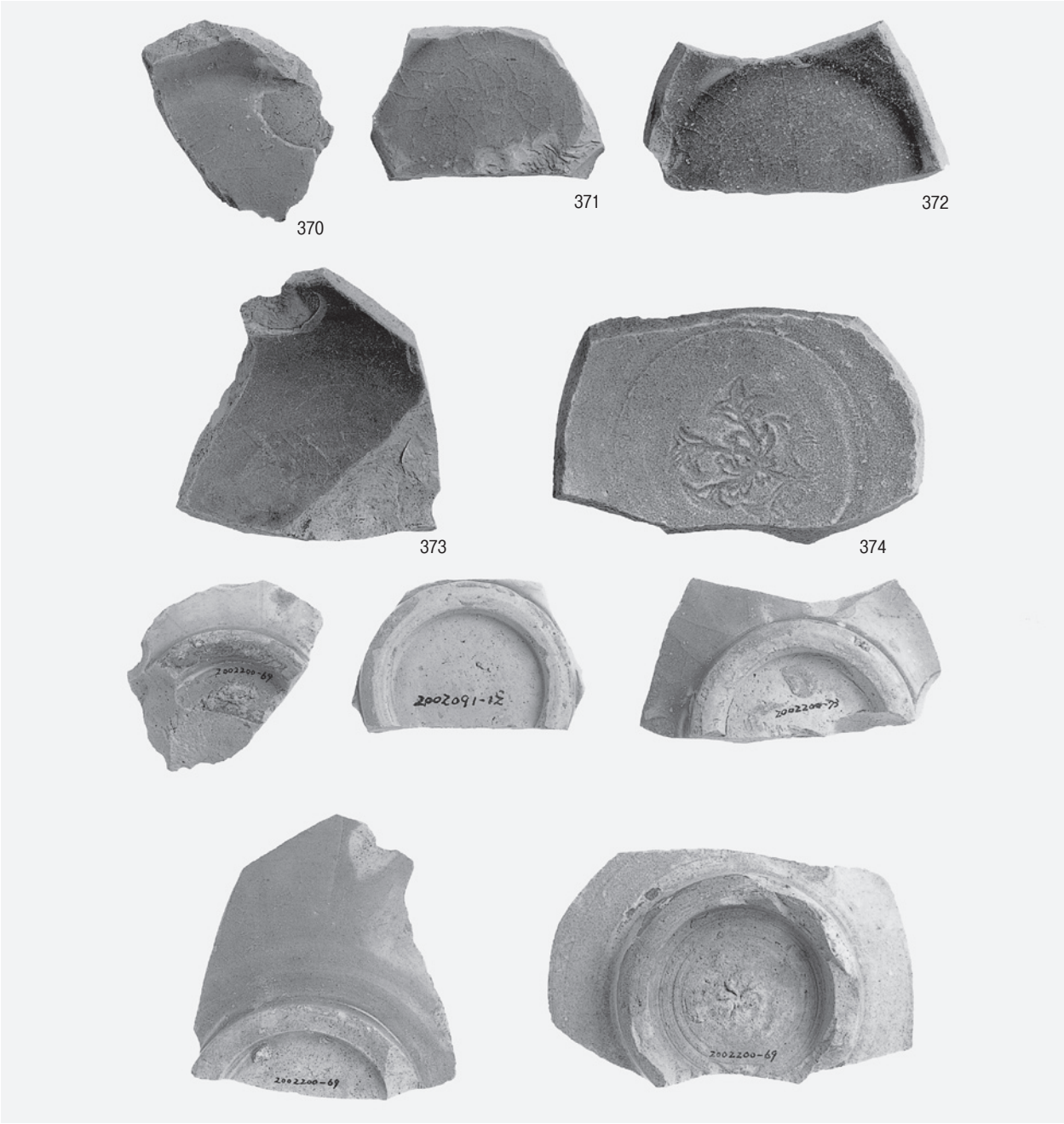
390

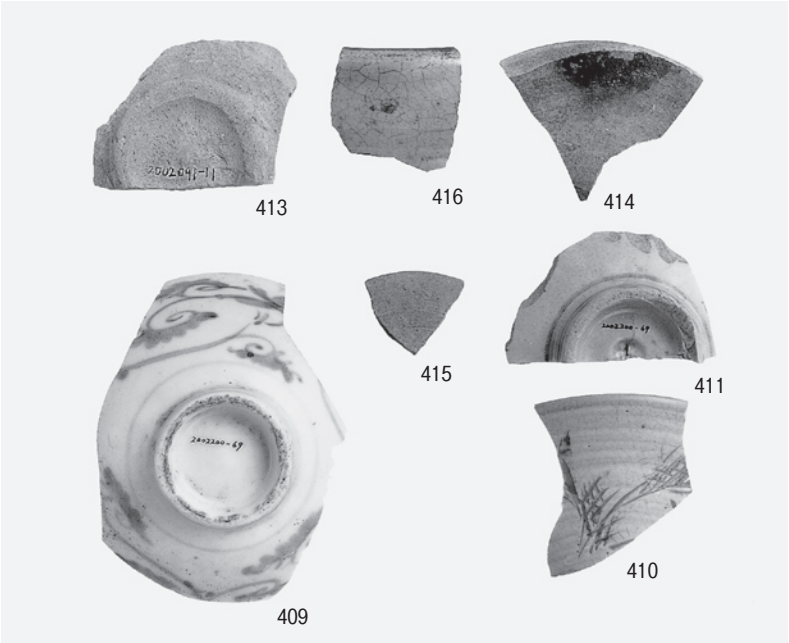
389

393

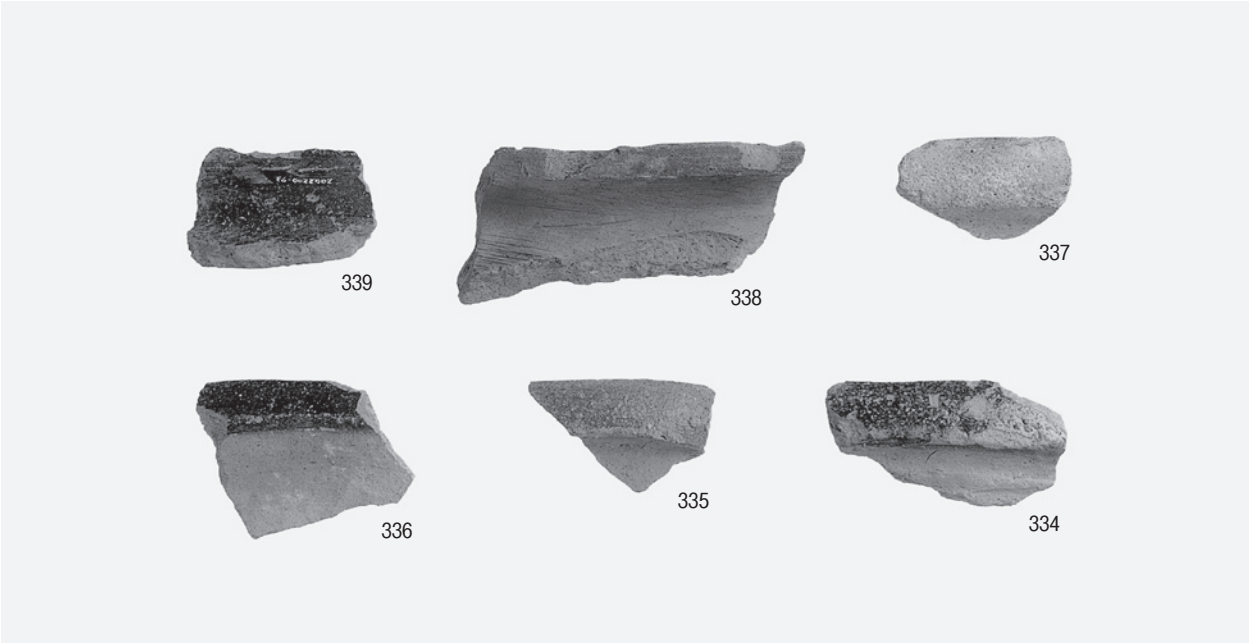
392

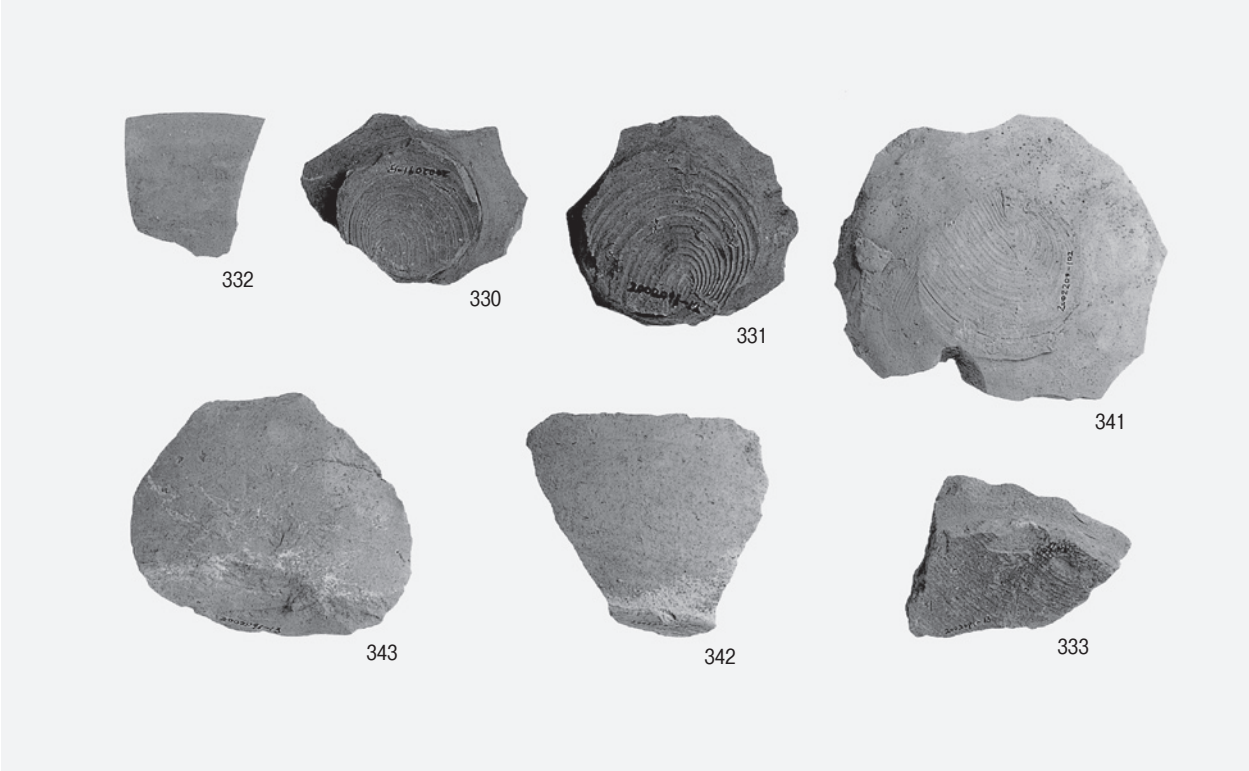
391





土器⑦



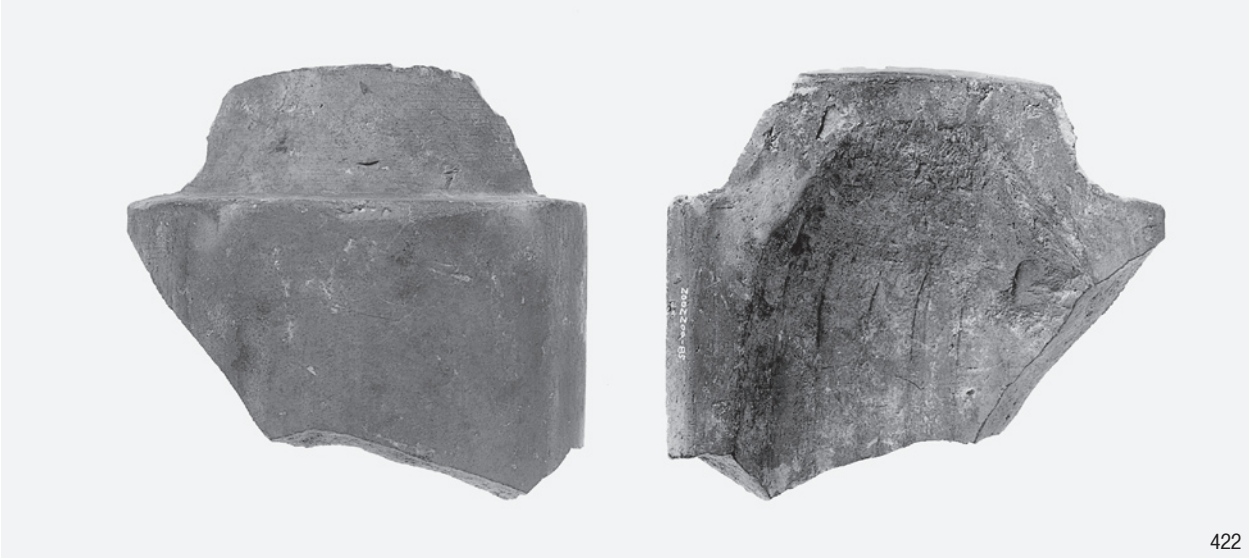


土器⑧・SK01出土遺物

419

420

421


422

423

SK01出土遺物

S2

S1

S3

S4

報　告　書　抄　録

ふりがな	いまじゅくいせき
書名	今宿遺跡Ⅰ
副書名	緊急街路整備事業山吹線に伴う発掘調査報告１
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第333冊
編著者名	篠宮　正・三辻利一・パリノ･サーヴェイ株式会社
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500番地　TEL　079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　TEL　078-341-7711
発行年月日	2008(平成20)年３月18日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
今宿遺跡（いまじゅくいせき）	兵庫県姫路市西今宿５丁目（ひょうごけん ひめじし にしいまじゅく ちょうめ）	28225	020161	34度50分44秒	134度39分44秒	確認調査2002091 2002年５月17日～６月５日	178㎡	緊急街路整備事業山吹線
						本発掘調査2002200 2003年１月31日～３月11日	238㎡	
						本発掘調査2003142 2003年12月17日	2.2㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今宿遺跡	散布地	古代	瓦集積	複弁八葉蓮華文軒丸瓦 重弧文軒平瓦 蓮華文帯鴟尾 播磨国府系瓦 塼 須恵器・土師器 弥生土器・陶器・磁器 砥石	
		江戸時代	土坑	瓦・陶器	

※緯度・経度は平成14年４月１日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告　第333冊

今宿遺跡 I

緊急街路整備事業山吹線に伴う発掘調査報告書 1

2008(平成20)年３月18日　発行

編　集　兵庫県立考古博物館

〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500番地
TEL 079-437-5589

発　行　兵庫県教育委員会

〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39